高松市埋蔵文化財調査報告第83集

共同住宅建設(コトデン片原町パーキング跡地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高松城跡（東町奉行所跡）

2005年3月

高松市教育委員会

高松琴平電気鉄道株式会社

例　言

1　本書は，共同住宅建設(コトデン片原町パーキング跡地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市鶴屋町に所在する高松城跡(東町奉行所跡)の調査報告を収録した。

2　発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。

3　発掘調査から報告書刊行に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。(五十音順，敬称略)

香川県教育委員会，香川県歴史博物館，鎌田共済会郷土博物館，国立公文所館，讃岐文化遺産研究会

片桐孝浩・森格也・森下友子(香川県埋蔵文化財センター)

佐藤亜聖(財団法人　元興寺文化財研究所)，乗松真也(香川県歴史博物館)，

松田朝由(大川地区広域行政振興整備組合)，松本和彦(香川県教育委員会)

4　高松城跡(東町奉行所跡)の調査は，小川賢(文化振興課文化財専門員)，中西克也(讃岐文化遺産研究会)が行い，大朝利和の補佐を得た。

5　以下の発掘調査に係る業務を委託で行った。

遺跡の測量及び図化：株式会社四国コンサルタント

遺物実測及び整理作業：片桐節子

木製品及び漆器保存処理：株式会社吉田生物研究所

遺物写真撮影：杉本和樹(西大寺フォト)

6　本書の執筆は，第1章第1節及び第2章を川畑聰(文化振興課文化財専門員)，その他は小川が行った。編集は小川，片桐で行った。

7　本文の挿図として，高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。

8　発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。

9　本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は世界測地系の北を表す。

10　土壌及び土器観察の色調表現は，新版　標準土色帖(農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修)による。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果

第１節　主要遺構と基本層序 …… 6
第２節　遺構・遺物 ……15
１．中世以前の遺構・遺物 ……15
２．中世の遺構・遺物 ……20
３．近世の遺構・遺物 ……51
４．近世・近代の遺構・遺物……102

第４章　調査のまとめ

第１節　遺構の変遷……118
第２節　絵地図・文献資料からみた東町奉行所跡……127

表紙　　「高松城下図屏風」　香川県歴史博物館所蔵

付図

第１図　高松城跡（東町奉行所跡）第１遺構面上層遺構全体図（1/100）
第２図　高松城跡（東町奉行所跡）第１遺構面下層遺構全体図（1/100）
第３図　高松城跡（東町奉行所跡）第２遺構面遺構全体図（1/100）
第４図　高松城跡（東町奉行所跡）SX3001遺構図（1/100）
第５図　高松城跡（東町奉行所跡）第３遺構面遺構全体図（1/100）

表

第１表　SR3001出土遺物産地・器種組成
第４表　遺構観察表
第５表　遺物観察表

挿図目次

第１図　調査範囲図(1/25,000)
第２図　遺跡位置図(上段1/600,000，下段1/50,000)
第３図　高松城跡周辺主要調査地位置図(1/5,000)
第４図　第１遺構面上層部　主要遺構配置図(1/200)
第５図　第１遺構面下層部　主要遺構配置図(1/200)
第６図　第２遺構面　主要遺構配置図(1/200)
第７図　第３遺構面　主要遺構配置図(1/200)
第８図　調査地基本土層図(縦1/80，横1/160)
第９図　調査地土層図①(1/40)
第10図　調査地土層図②(1/40)
第11図　第１トレンチ土層図(1/80)
第12図　トレンチ下層部出土遺物(1/3)
第13図　トレンチ上層部出土遺物①(1/3)
第14図　トレンチ上層部出土遺物②(1/3)
第15図　トレンチ上層部出土遺物③(1/4)
第16図　SR3001平・断面図(1/150)
第17図　SR3001出土遺物①(1/3)
第18図　SR3001出土遺物②(1/3)
第19図　SR3001出土遺物③(1/3)
第20図　SR3001出土遺物④(1/3)
第21図　SR3001出土遺物⑤(1/3)
第22図　SR3001出土遺物⑥(1/3)
第23図　SR3001出土遺物⑦(1/3)
第24図　SR3001出土遺物⑧(土器・木製遺物1/3，石製遺物2/3)
第25図　SB3001平・断面図(1/80)
第26図　SB3001出土遺物(1/3)
第27図　SB3002平・断面図(1/80)
第28図　SB3002出土遺物(1/3)
第29図　SB3003平・断面図(1/80)
第30図　SB3004平・断面図(1/80)
第31図　SP3030・3052・3026・3032平・断面図(1/20)及び出土遺物(1/3)
第32図　SP3011・3015・3021・3025・3028・3031・3033・3036・3055・3074平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第33図　SK3003平・断面図(1/80)及び出土遺物(1/3)
第34図　SK3013・3015平・断面図(1/80)及び出土遺物(1/3)
第35図　SK3016平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第36図　SK3005・3007・3019・3022平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第37図　SK3004・3006・3014・3011・3012平・断面図(1/40)
第38図　SD3001・3002平・断面図(1/40)
第39図　SD3003平・断面図(1/100)
第40図　SD3003・SD3003直上包含層出土遺物(1/3)
第41図　SX3001平・断面図(1/80)
第42図　SX3001出土遺物①(1/3)
第43図　SX3001出土遺物②(1/3)
第44図　SX3001出土遺物③(1/4)
第45図　SX3001出土遺物④(1/3)
第46図　SX3001出土遺物⑤(1/3)
第47図　SX3001出土遺物⑥(1/3)
第48図　SX3001出土遺物⑦(1/3)
第49図　SX3001出土遺物⑧(1/3)
第50図　SX3001出土遺物⑨(1/4)
第51図　SX3001出土遺物⑩(1/2・1/4)
第52図　SX3001出土遺物⑪(1/4)
第53図　SX3001出土遺物⑫(1/4)
第54図　SK3001平・断面図(1/40)及び出土遺物①(1/3)
第55図　SK3001出土遺物②(1/8)
第56図　SK2101・2103平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3・2/3)
第57図　SK2102平・断面図(1/40)
第58図　SK2102出土遺物①(1/4)
第59図　SK2102出土遺物②(1/3)
第60図　SK2104・2105平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第61図　SD2101平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第62図　SD2102平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第63図　SX2102平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第64図　SB1101平・断面図(1/40)
第65図　SB1101出土遺物(1/3)
第66図　SB1102－１・２平・断面図(1/80)
第67図　SB1102－３平・断面図(1/80)
第68図　SB1102出土遺物(1/3)
第69図　SK1103平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)
第70図　SD1100平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第71図　SD1101平・断面図(1/100)
第72図　SD1110平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第73図　SD1101出土遺物①(1/3)
第74図　SD1101出土遺物②(1/3)
第75図　SX1103平・断面図(1/100)

第76図　SX1103出土遺物①(1/3)
第77図　SX1103出土遺物②(1/3・2/3)
第78図　SX1103出土遺物③(1/3)
第79図　SX1103出土遺物④(1/3・2/3)
第80図　SX1103出土遺物⑤(1/3)
第81図　SX1103出土遺物⑥(1/3)
第82図　SX1103出土遺物⑦(1/3)
第83図　SX1103出土遺物⑧(1/4)
第84図　SX1103出土遺物⑨(1/4)
第85図　SX1103出土遺物⑩(1/4)
第86図　SX1100平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第87図　SK1002平・断面図(1/40)
第88図　SK1006・1007平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第89図　SD1002平・断面図(1/100)及び出土遺物①(1/4)
第90図　SD1002出土遺物②(1/3)
第91図　SD1002出土遺物③(1/3)
第92図　SD1002出土遺物④(1/3)
第93図　SD1002出土遺物⑤(1/3)
第94図　SX1003・1004平・断面図(1/100)
第95図　SX1003・1004出土遺物(1/3・2/3)
第96図　SX1005・竈跡平・断面図(1/100・1/40)及び出土遺物(1/3)
第97図　SX1014平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第98図　SX1007平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第99図　SX1011平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)
第100図　SX1010・1013平・断面図(1/100)
第101図　SX1010・1013出土遺物(1/3)
第102図　SK1010・SP1079・1080平・断面図(1/20)
第103図　遺構外出土遺物(1/3)
第104図　遺構変遷図①(1/400)
第105図　遺構変遷図②(1/400)
第106図　「高松城下図」　享保年間(調査地付近)
第107図　「讃州高松地図－国立公文書館所蔵－」(調査地付近)
第108図　「寛政元年巳酉年５月高松之図－鎌田共済会郷土博物館所蔵－」(調査地付近)
第109図　「高松城下絵図」(調査地付近)
第110図　「高松市街古図」文化年間(調査地付近)
第111図　「天保15年高松之図－鎌田共済会郷土博物館所蔵－」(調査地付近)
第112図　「東讃高松絵図－香川県立歴史博物館所蔵－」(調査地付近)
第113図　「安政４未年高松之図－鎌田共済会郷土博物館所蔵－」(調査地付近)
第114図　「讃岐高松市街細目新図」明治15年(調査地付近)
第115図　「高松市街明細全図」明治28年(調査地付近)

図　版　目　次

図版１　第１遺構面下層遺構全景
図版２　第３遺構面遺構全景
図版３　第１遺構面下層全景(南側より)
第１遺構面下層全景(北側より)
第２遺構面全景(北側より)
図版４　第３遺構面全景(北側より)
第３遺構面全景(北側より)
第３遺構面全景(南側より)
図版５　第１トレンチ(東側から)
第１トレンチ北壁
第２トレンチ
調査地南壁
調査地東壁(北端部)
調査地西壁(中央)
調査地西壁(中央)
調査地南壁
図版６　調査地東壁(中央)
調査地西壁(中央)
SD3003(東側より)
SD3003(西側より)
SD3003土層(東側より)
SD3003土層(東側より)
SK3016(南側より)
SK3016土層
図版７　SR3001西岸ピット群(西側より)
SR3001西岸ピット群(西側より)
SR3001東岸部(南側より)
SR3001東壁ピット(北側より)
SP3026遺物出土状況
SP3032遺物出土状況
SP3030遺物出土状況
SP3052遺物出土状況
図版８　SR3001東岸部(東側より)
SK3013土層(東側より)
SK3012・3013(東側より)
SK3012土層(北側より)

SK3004
SK3004土層
SK3003(西側より)
SK3003土層
図版９　SK3005土層
SX3001完掘(東側より)
SX3001完掘(西側より)
SX3001土層
SX3001漆器出土状況
第３面北端部完掘状況(西側より)
SX1103(東側より)
SX1103下層遺物出土状況
図版10　SK3001完掘(西側より)
SK3001完掘(東側より)
SD2101(東側より)
SX2101
SK2102
SB1101(東側より)
SB1102(西側より)
SD1111(南側より)
図版11　第１遺構面SX1010・1013(西側より)
SX1010・1013
SD1101(南西側より)
SD1102(西側より)
SD1102東壁土層
第１遺構面上層遺構(北側より)
第１遺構面上層遺構(南側より)
第１遺構面上層遺構(北側より)
図版12　SR3001出土遺物
SR3001出土遺物
図版13　SR3001出土遺物
SR3001出土遺物
図版14　SR3001出土遺物
SR3001出土遺物
図版15　SR3001出土遺物
SB3002出土遺物
図版16　SD3003出土遺物
SK2102出土遺物
図版17　SR3001出土遺物
SX3001出土遺物
図版18　SD1002出土遺物
SD1002出土遺物
図版19　SK2102，SX1010・1013出土遺物
SX1103出土遺物
SD1002出土遺物
図版20　SX3001出土遺物
SX3001出土遺物
図版21　SX1103出土遺物
SX1103出土遺物
図版22　SX1103・SD1002出土遺物
SX3001・SD1101出土遺物
図版23　SX1007・1013・1103・SD2102・SX3001出土焼塩壷
SX3001・SK2101出土遺物
図版24　SD1101出土遺物
SD1002出土遺物
図版25　トレンチ出土遺物
トレンチ出土遺物
図版26　SB3003出土遺物
SD3003上層出土遺物
SB3001出土遺物
SP3028出土遺物
図版27　SR3001出土遺物
SK3003・3005出土遺物
SK3016出土遺物
図版28　SK3001出土遺物
SB1101出土遺物
SD1002出土遺物
SD2102出土遺物
図版29　SD1100出土遺物
SX3001出土遺物
SD2101出土遺物
図版30　出土遺物
図版31　出土遺物
図版32　SX3001出土遺物
SX3001出土遺物
SX3001出土遺物
SX1103出土遺物
図版33　出土遺物
図版34　出土遺物
図版35　出土漆器
図版36　出土木製品
出土木製品
図版37　出土木製品
出土木製品
図版38　讃州高松絵図　国立公文書館所蔵
図版39　寛政元年巳酉５月高松之図　鎌田共済会郷土博物館所蔵
図版40　天保15年高松之図　鎌田共済会郷土博物館所蔵
図版41　安政４未年高松之図　鎌田共済会郷土博物館所蔵

第１章　調査の経緯と経過

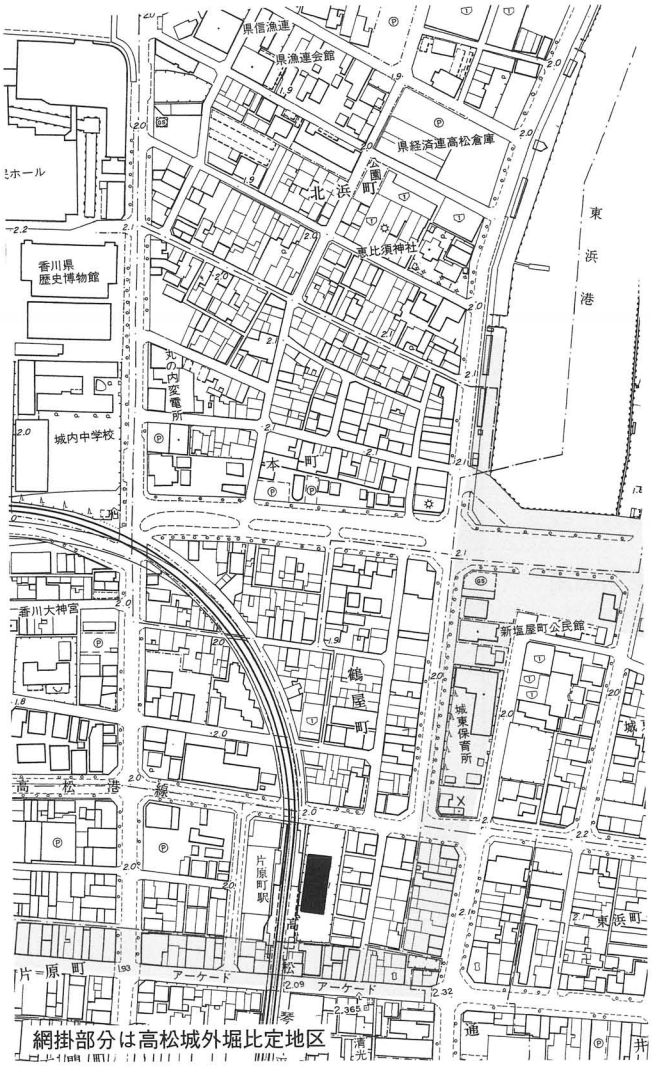
第１節　調査の経緯（第１図参照）

高松琴平電気鉄道株式会社は，片原町駅東側に隣接する所有地（鶴屋町）を共同住宅建設を計画する開発業者に譲渡することになった。当該地は，高松城外堀内側の南東隅にあたり，絵図によれば東町奉行所に相当することから，高松市教育委員会（以下「市教委」と略称で記す。）と高松琴平電気鉄道株式会社（以下「琴電」と略称で記す。），および開発業者の３者で協議を行った。その結果，「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，高松城跡に関係する遺構が存在する可能性が高く，工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に重大な影響を及ぼす可能性もあるため，試掘調査により，遺跡の有無を確認し，存在した場合は，土地引渡し前に琴電が主体となって発掘調査を実施する。」ということで合意に達した。

これに基づき，琴電から市教委に対し埋蔵文化財確認調査の依頼があり，平成15年10月８・９日に市教委が試掘調査を実施した。共同住宅建設予定地の四隅にトレンチを設定したところ，北側トレンチを中心に，中世の遺構面１面と近世の遺構面２面と遺構・遺物が確認された。市教委は，試掘調査結果を香川県教育委員会に報告し，当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地となった。そこで，琴電は，平成15年10月29日に香川県教育委員会へ「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出」を提出し，事前に発掘調査を実施するよう指示を受けた。

その後ただちに，市教委と琴電とで協議を行い，共同住宅建設予定地のうち北側３／４にあたる約511㎡について工事着手前に発掘調査を実施することで合意した。そこで，平成15年12月１日に両者の間で埋蔵文化財調査協定を締結した。業務名は「共同住宅建設（コトデン片原町パーキング跡地）に伴う埋蔵文化財調査管理業務」とし，市教委は発掘調査・整理作業の実務を行い，その費用負担および契約・支払事務については琴電が行うこととした。

発掘調査は，平成15年12月８日から開始し平成16年３月15日に予定どおり終了した。その後，整理作業を平成16年４月１日～平成17年３月31日に市教委文化振興課円座整理事務所で実施した。



第１図　調査範囲図(1/25,000)

第２節　調査の経過

発掘調査の実施状況は，下記の調査日誌抄のとおりである。

調　査　日　誌　抄

12/８（月）～12/13（土）重機による掘削作業。
12/16（火）～12/26（金）側溝の掘削作業，遺構検出作業。
１/５（月）第1遺構面検出状況写真撮影。
１/８（木）SD1002遺構掘削，遺物が多量に出土。
１/27（火）第１遺構面上層部完掘写真撮影，下層部まで焼土層の掘り下げ開始。
２/４（水）焼土を掘り下げ，礎石を確認。
２/６（金）第１回目の航空測量。
２/12（木）第２遺構面上層部確認。
２/16（月）第２遺構面遺構調査。
２/23（月）第２遺構面完掘写真撮影，平面図作成。
２/26（木）第３遺構面までを機械掘削。
３/１（月）SX3001検出・遺構掘削。
３/４（木）SX1103遺構掘削，SX3001完掘写真撮影。
３/10（水）SR3001遺構掘削。
３/12（金）第２回目の航空測量。
３/15（月）トレンチ調査，撤収作業。

整理作業については，委託業務を含め下記の工程で行なった。

［整理作業工程表］

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
接合・復元												
遺物実測												
遺物トレース												
遺構トレース												
図版レイアウト												
遺物写真撮影												
原稿執筆												
編集												
校正												
遺物収納												

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境（第２図参照）

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km，南北16kmの範囲に及んでいる。また，この平野は，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて，高松城の城下町として発展した高松市街地は，香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。このため，城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は，現在，石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが，17世紀初頭，高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第２節　歴史的環境（第３図参照）

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは，弥生時代後期である。高松城内南の武家屋敷跡で行われた発掘調査（新ヨンデンビル別館）では，ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し，付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では，平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し，人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時，この地域は篦原郷（のはら）と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は，白河院の勅使田が応徳年間頃(11世紀末葉)に立券荘号されたものである。康治２年(1143) ８月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから，土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

さらに時代が下ると，荘園としての機能以外にも，文安２年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから，中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが，高松城跡西の丸地区の発掘調査では，11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。浜ノ町遺跡では，白磁四耳壺を埋納していた13世紀末から15世紀末の集落跡が確認されている。無量寿院跡では，16世紀の文字瓦が出土し，寺伝どおり寺が存在したことが判明した。

一方，高松城跡東の丸地区に目を転じると，16世紀後半以前の漁民の墓群と考えられる墓が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては，15～16世紀に属するＬ字形の大溝を検出しており，これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

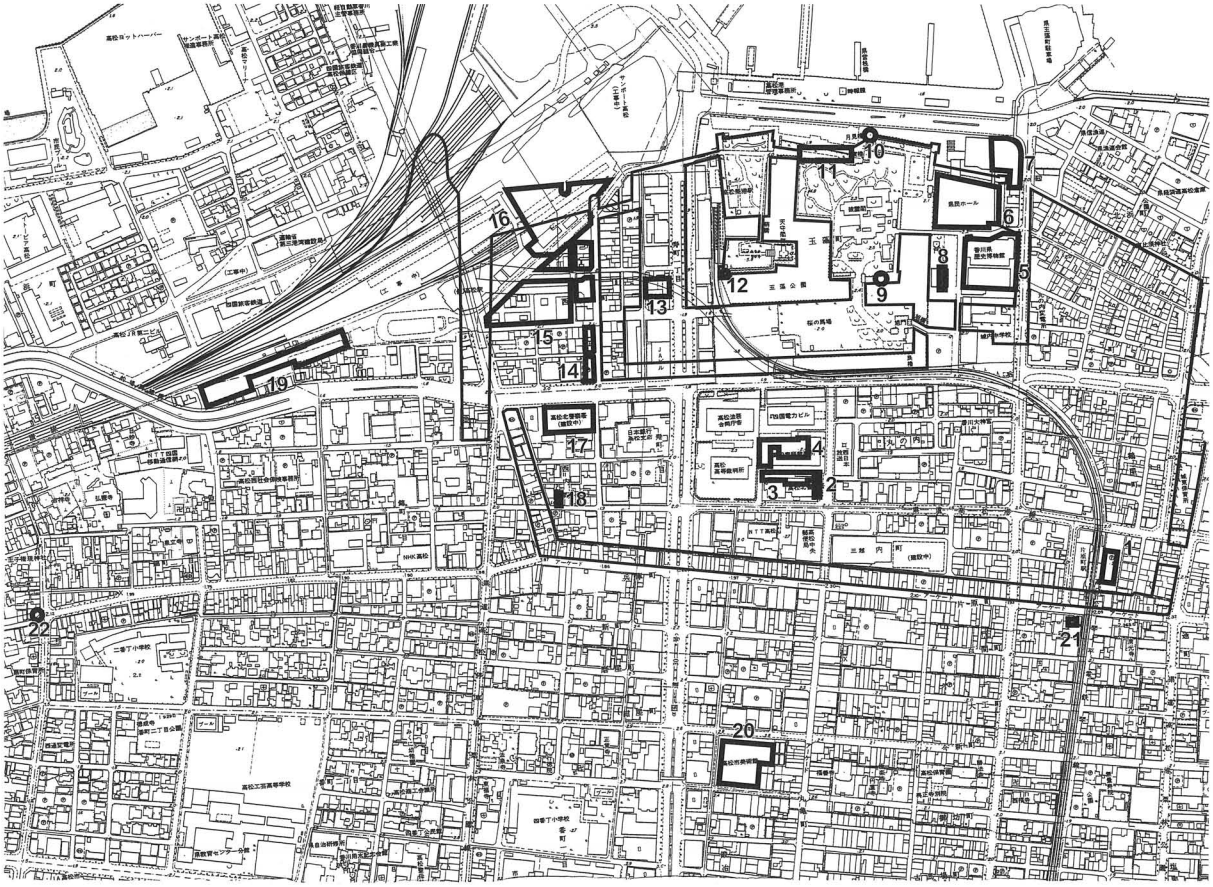
このように，高松市街地下において，古代末から中世の集落等が確認され，文献からもうかがえるように，かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は，博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり，これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに，高松城がこの地に築かれ，城下町が整備されたと考えられる。

さて，この高松城および城下町を造ったのが，豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国征伐により，天正13年（1585）長宗我部元親が降伏し，讃岐国は仙石秀久・十河

第２図　遺跡位置図（上段1/600,000，下段1/50,000）

存保に与えられ，その後尾藤知宣の領国となったが，天正15年（1587）生駒親正が入封し，讃岐17万６千石を領した。高松城は，生駒親正の居城として，翌天正16年から築城され，数ヵ年を要して完成された水城である。水城と呼ばれる由縁は，北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく，堀には海水が導かれているからである。また，南方には大手（旧太鼓門）を構え，城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は，内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし，内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は，さらに堀によって他の曲輪と独立しており，本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。本丸には，天守閣と地久櫓が設けられている。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり，寛永19年に代わって松平頼重が高松城主となり，東讃岐12万石を領した。松平頼重は，城の改修を度々行っているが，寛文11年（1671）頃の大規模な改修では，東ノ丸を造成するとともに，月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り，北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようにしている。その後，松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され，翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに，史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかしながら，明治17年（1884）に天守閣が取り壊されるとともに，都市化の波によりしだいに堀は埋め立てられ，本丸近くまで市街化が進んでいる。



1．東町奉行所跡　2．松平大膳家中屋敷跡　3．丸の内地区　4．松平大膳家上屋敷跡　5．歴博地点
6．県民ホール地点　7．アクトホール地点　8．東の丸（作事丸）　9．三の丸(多目的トイレ)　10．水の手御門
11．三の丸　12．地久櫓　13．無量寿院跡　14．西の丸Ａ地区　15．西の丸Ｂ地区
16．西の丸C地区　17．高松北署地区　18県高等学校PTA会館地点　19．浜ノ町遺跡　20．紺屋町遺跡
21．片原町遺跡　22．扇町一丁目遺跡

第３図　高松城跡周辺主要調査地位置図(1/5,000)

第３章　調査の成果

第１節　主要遺構と基本層序（第４～10図参照）

調査地点は，大概すると近世～近代に北半が微高地，南半部が低地となり，中世では南西から北東部へ下る地形を呈し，これに沿って各層がほぼ水平状に見られる。調査では原則，作業の効率を図る目的で機械掘削を用い，試掘結果により明確となった中・近世の３面で遺構確認を行なったが，各面の上・下層部等の確認状況や多量に遺物を包含する遺構等から，近代のものを含め８つの時期に亘る遺構が存在したことがうかがわれる。以下，各期の確認状況と主要遺構について報告する。

第１面上層部（第４図参照）

２層直下で，主に４層上面で確認した。層序からは４時期の遺構が想定されるが，平面的には以下の２時期に分類される。

Ⅷ期：撹乱層直下より認められるもので，往時の尋常小学校とみられる建物基礎部分が，調査地のほぼ全面で確認されている。基礎には捨杭や，人頭大の割石を詰め底面に礎石大の根石を敷いた壺堀（礎石の据付痕）や布堀の痕等があり，西部に広がる校舎とそれに付随した廂（廊下部分）が復元される。遺物の取り上げは行っていないが，高松空襲時と考えられる焼土層が被覆することや，下位の遺構との関係から19世紀末～20世紀半ばの時期が考えられる。

Ⅶ期：２層より切り込む遺構，４層より切り込む遺構がある。区画溝とみられる調査地北端部のSD1002は，２層より切り込むもので19世紀後半とみられる遺物を多量に含む。同様相のものに，SK1006・1007（廃棄土坑），SK1002（井戸）等があり廃絶時期を示すと考えられる。一方，４層より切り込む遺構として，SX1003・1006・1008・1010・1013（埋土に焼土粒を含む整地痕）が考えられる。出土遺物は４層直下（第１面下層）のものと大差ないが，若干量明治期と推定されるものを含む。しかし確認できた遺構には明確なものに欠け，平面的にも２層上面との変化を考えにくい。よって下位面との関係から19世紀後半内のものと一括して考える。なお，調査地の北部に４層が存在せず下位の３層が２層直下となっているが，当面（第１面上層部）で遺構は確認されていない。

第１面下層部（第５図参照）

４層直下で，３層の上位面で確認した。４層，３層は共に多量の焼土・炭を含み，当地周辺からの出火として記録に残る1857年及び1808年の火災との関連がうかがわれる。当遺構面は，出土遺物から1857年の火災で被災したものと考えられる。

Ⅵ期：後出のSD1002に重複し，奉行所の堀跡と推定される大形遺構SX1103や礎石建物２棟（SB1101，SB1102）の他，南半部で低地部や溝状遺構が確認されている。出土遺物は，瀬戸・美濃系磁器端反碗や京・信楽系陶器灯明皿，屋島焼等が含まれることから19世紀前半のものと考えられる。なおSX1103については，調査の工程上，当遺構面では検出作業のみを行い，遺構掘削は第３遺構面で行っている。

第２遺構面（第６図参照）

調査では上層部，下層部の２面で遺構確認を行った。上層部の遺構（SP2001～2026，SK2001・2002）については，調査地東半部で散漫に確認されたのみで出土遺物も極少量に過ぎない。下層部及び上位の遺構面から19世紀前葉の所属時期が想定されるが，遺構・遺物にまとまりを欠くことから段階を想定しにくいため，下層部のみを対象にⅤ期とした。

Ⅴ期：下層部は15層を基盤にした遺構で，南半部を中心に溝状遺構や土坑が確認されている。北半部で遺構は希薄であり，削平された状態が考えられる。下位遺構（SX3001）との関係から18世紀中葉以降で，遺構面全体の出土遺物で少量ながら肥前系磁器広東碗や京・信楽系陶器端反碗が認められることから，18世紀末～19世紀初頭までの時期が考えられる。被覆する３層（焼土を多量に含む）からすれば，1808年の火災で廃絶した遺構面と想定される。

第３遺構面（第７図参照）

中世の遺構面とした砂堆上面で遺構確認を行なったが，以下の確認状況により４時期に分類される。なお南部で本遺構を切る方形の掘り込みは，第３遺構面までの機械掘削中に生じた撹乱坑であり，北部では認められた砂層の堆積が南部で希薄となり極度に不安定な土質が現れたため，重機が埋没し脱出のため一部遺構面を壊す事態が生じてしまったものである。

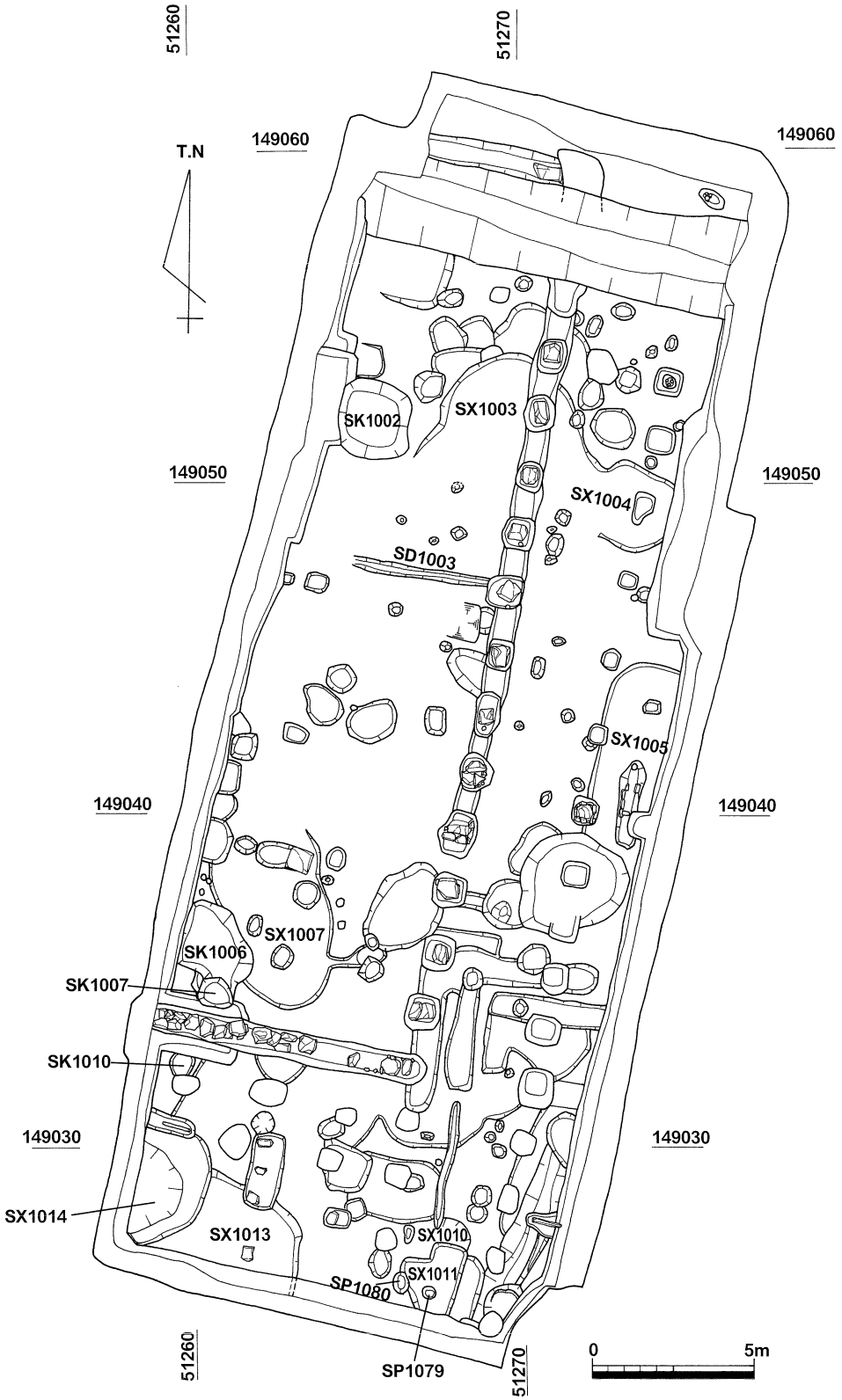
Ⅳ期：調査地の中央部において，15層直下に近世の性格不明遺構SX3001を確認した。当期で確認された遺構はこれのみだが，調査区中央部一帯に広がる大型の遺構で18世紀中葉までとみられる多量の陶磁器や漆器等の木製品等が出土している。

Ⅲ期：砂堆は調査地南西部を微高地として，北東部へと下り漸次形成されたとみられ，北東部一帯に15世紀代の遺物を包含する19層が存在し，これを基盤にSK3002～3006，3008～3010が確認されている。16世紀代の遺物に加え，鉄滓や獣骨を含む廃棄土坑SK3003，3005，3006や井戸跡とみられるSK3004が北東端で直線上に並び認められる。一方，西の微高地上では井戸跡SK3016があるが，他に当期のもので明確なものはなく削平された状態が考えられる。

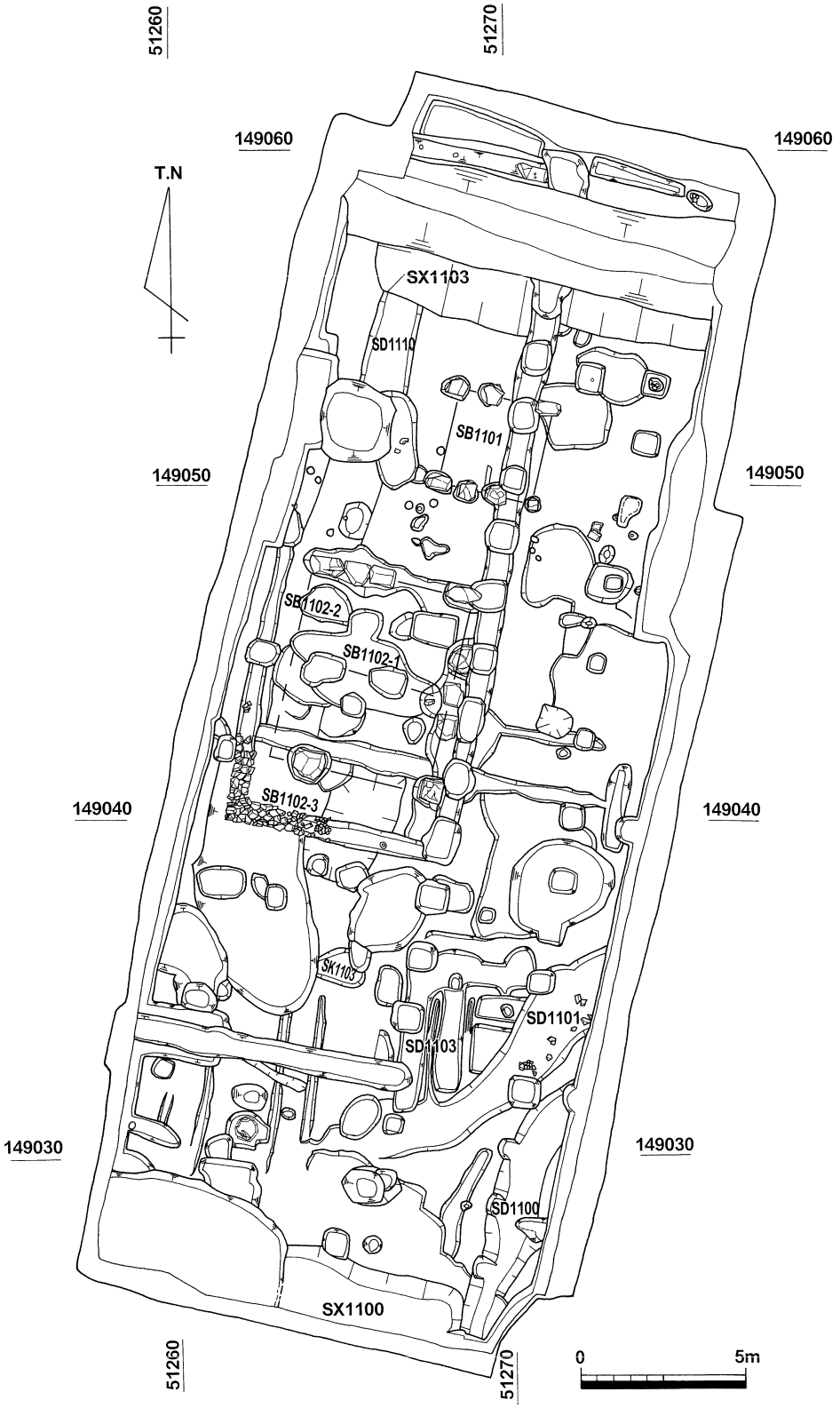
Ⅱ期：19層の下位に存在するSD3003があり，14世紀代の遺物が認められる。また長方形を呈する土坑SK3012～3015が南東部を占めるが，いずれも遺物量は少ない。西部の微高地上では当期と推定される柱穴は希薄になっており，SD3003が西部でかなり浅くなることから，微高地上では削平された状態も推定される。

Ⅰ期：不安定な砂質土に加え，赤色に風化した板石を含む特徴的な埋土をもつ流路状の遺構SR3001があり，畿内産の瓦器をはじめ12世紀～13世紀初頭の遺物が多量に出土している。この赤色の板石はSR3001の両岸部にも散在し，柱穴・土坑類内でも認められる。柱穴は南西部の微高地上で多数見られ，また南東隅にも広がるもので，掘立柱建物（SB3001～3004）として図上で復元を行なった。

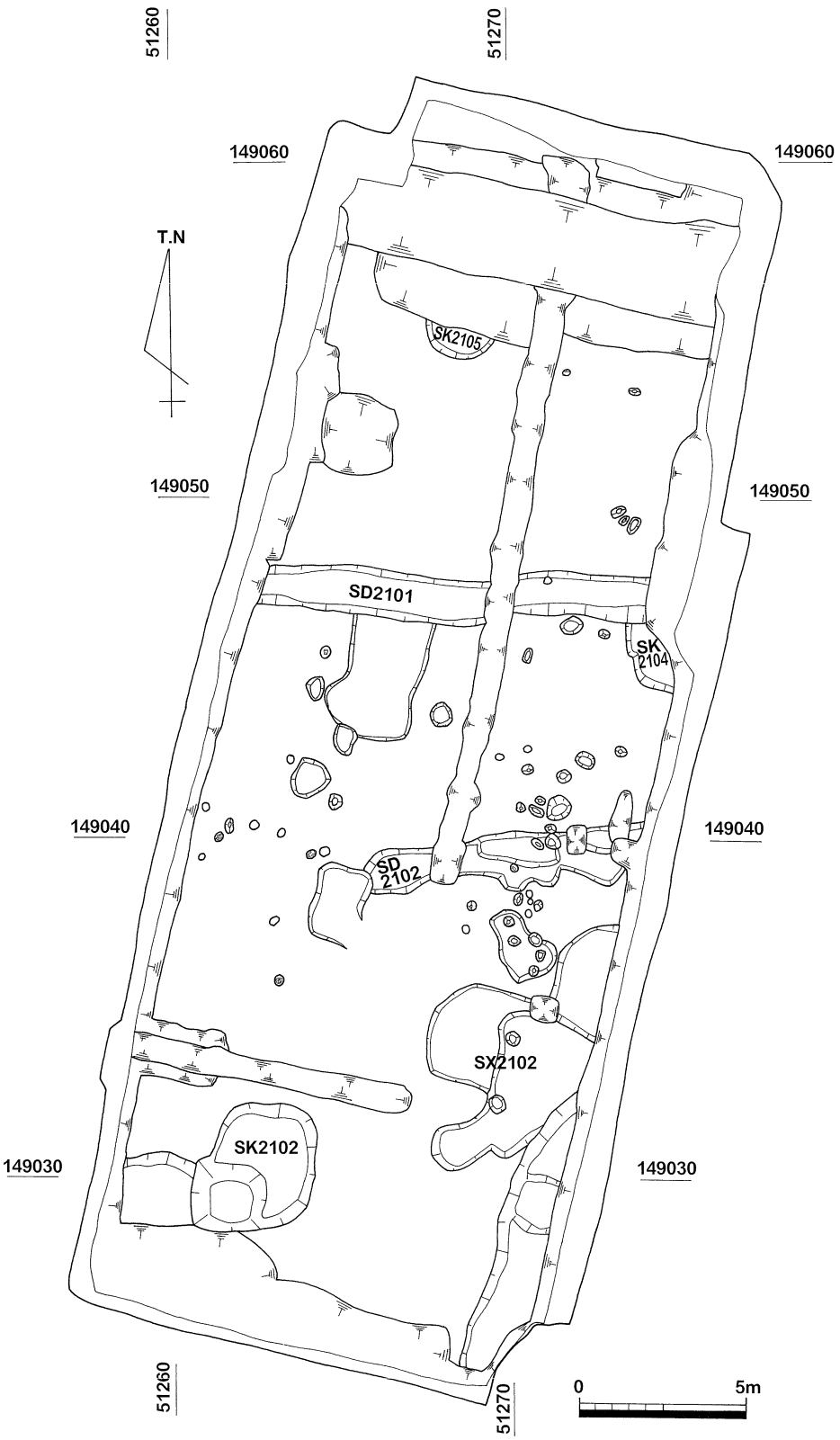
この他，南西部の微高地上では83層を基盤に遺構が認められるが，83層は北東方向へ下り上部に砂堆が認められる。SD3003以北については19層上面までで平面確認を行なっているが，19層より下位については調査地の北壁や東壁の観察により，海抜高付近までの砂堆で明確な遺構が存在しないことを確認した。また83層については，南部に設定したトレンチ調査で中世以前の遺物を含んだ堆積層であることが判明している。



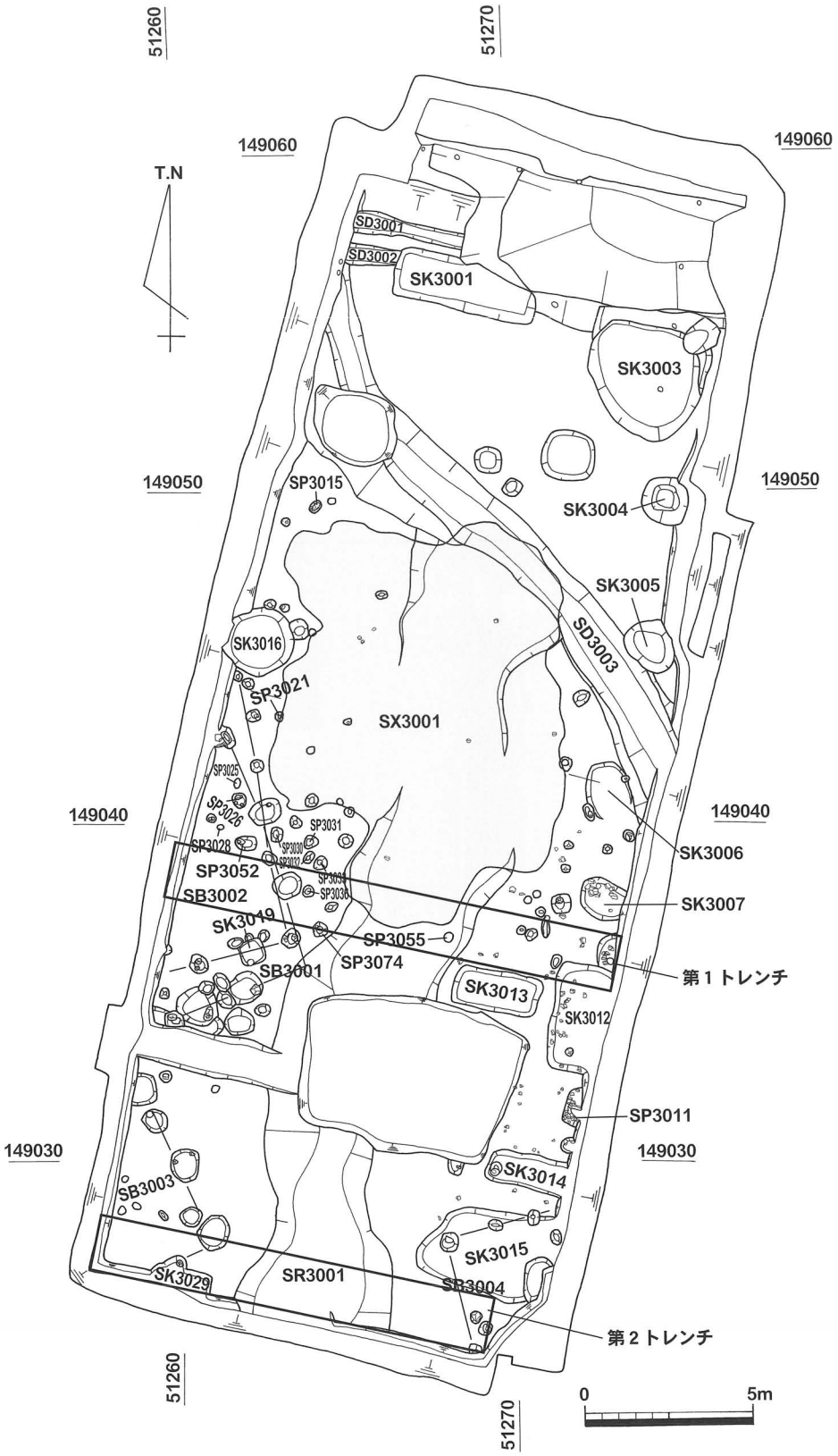
第４図　第１遺構面上層部　主要遺構配置図(1/200)



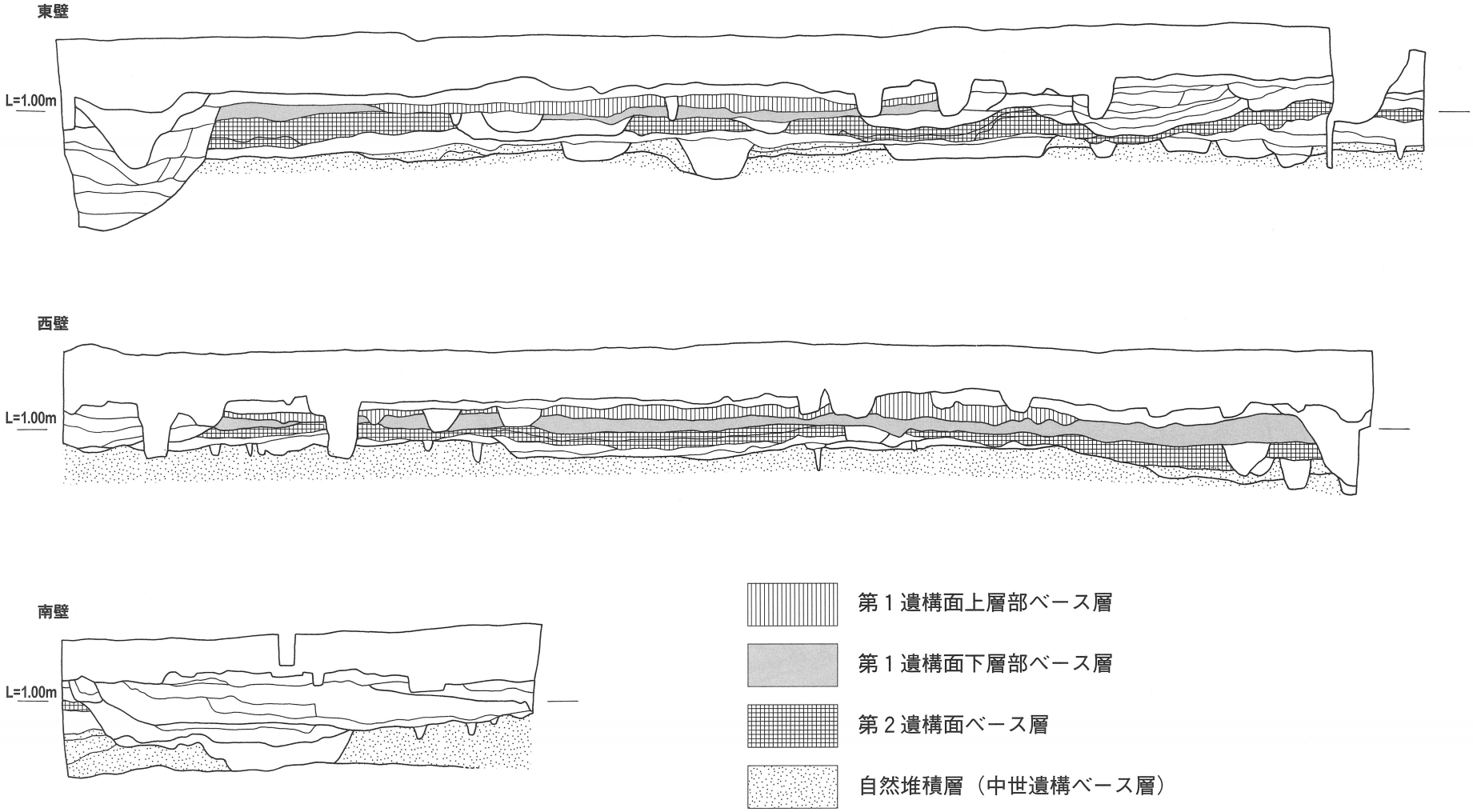
第５図　第１遺構面下層部　主要遺構配置図(1/200)



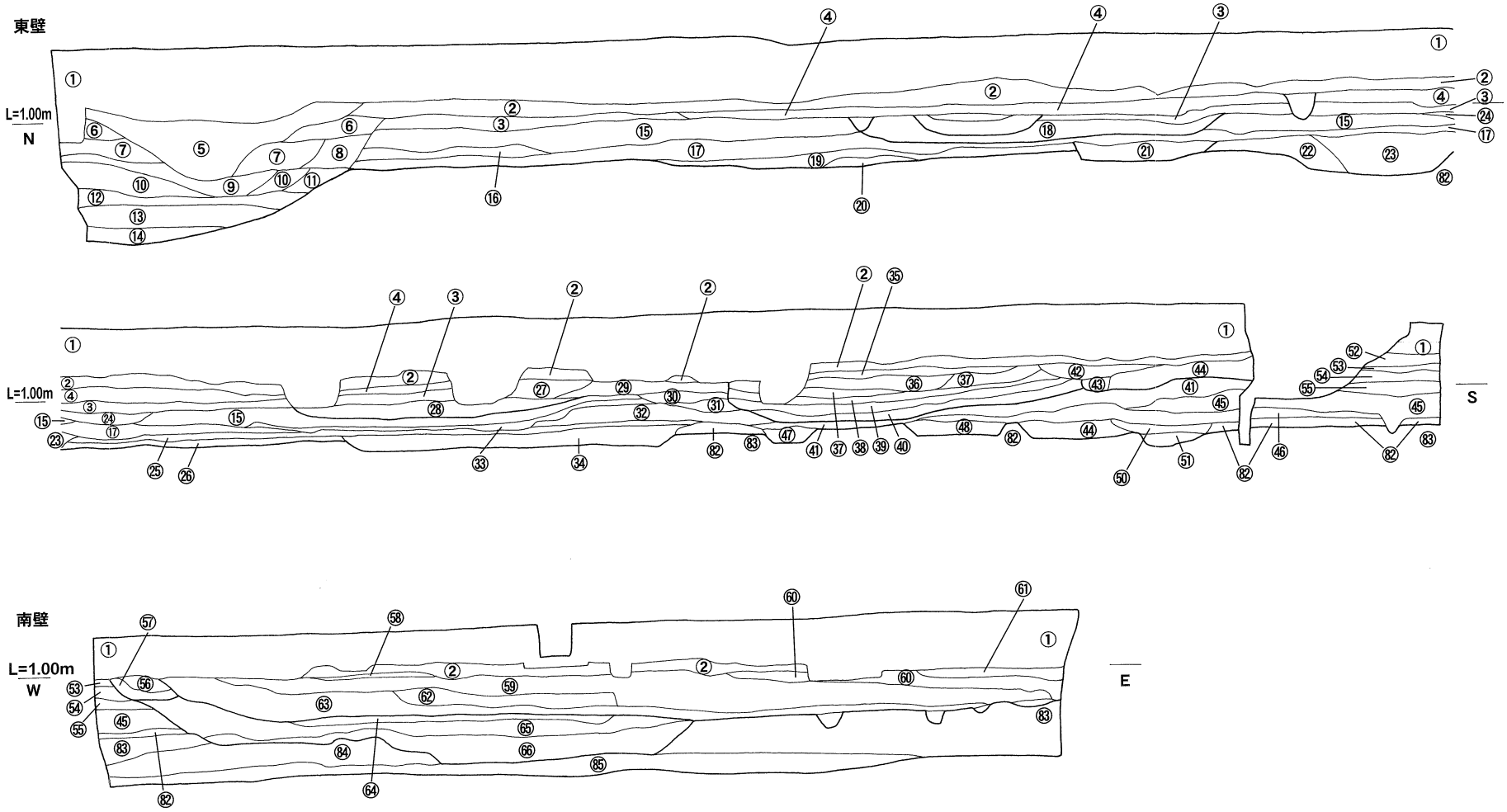
第６図　第２遺構面　主要遺構配置図(1/200)



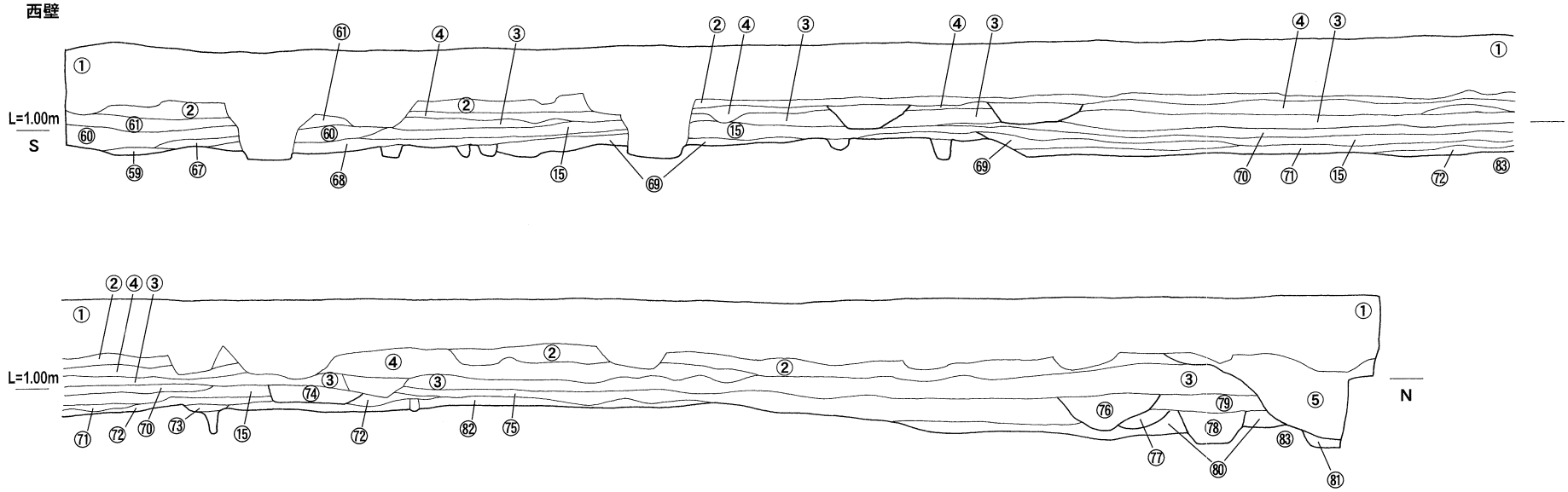
第7図　第3遺構面　主要遺構配置図(1/200)



第８図　調査地基本土層図(縦1/80，横1/160)



第９図　調査地土層図①(1/40)



1　埋立
2　にぶい黄色シルト質極細砂（2.5Y6/3）
3　にぶい黄色シルト質極細砂（2.5Y6/3　焼土・炭を含む）
4　灰黄褐色シルト質極細砂（焼土・炭を多く含む）
5　灰色シルト質細砂（5Y6/1　土器・瓦・漆喰多量に含む）SD1002埋土
6　黄褐色十浅黄色シルト質細砂（2.5Y5/3+5Y7/3）
7　暗灰黄色シルト質細砂（2.5Y5/2　瓦・土器を多量に含む）
8　暗灰黄色シルト質細砂（2.5Y5/2）
9　褐灰色シルト質極細砂（10YR6/1）
10　褐灰色シルト質極細砂十灰白色細砂（10YR5/1+5Y8/2　灰黄色シルト質極細砂を若干含む）
11　灰黄褐色シルト質細砂（10YR4/2）
12　褐灰色シルト質極細砂（10YR5/1　粒子が細かく粘性有り）
13　黒褐色シルト質極細砂（7.5YR3/2　植物遺体を含み、泥炭化する）
14　灰色シルト質極細砂（5Y5/1　粒子が細かい）
15　オリーブ黄色シルト質極細砂（5Y6/3　焼土・炭を若干含み、粘性ある）
16　オリーブ黄色シルト質極細砂十砂礫層（5Y6/3　焼土・炭を若干含み、粘性強い）
17　灰白色細砂十にぶい黄橙色シルト質極細砂（2.5Y8/2+10YR6/3）
18　明黄褐色十にぶい黄褐色シルト質細砂（10YR6/4+10YR5/3　瓦を含む）
19　にぶい黄褐色十灰白色シルト質極細砂（10YR4/3+2.5Y8/2）
20　淡黄色シルト質細～粗砂（5Y8/4）十にぶい黄褐色シルト質極細砂（10YR4/3）
21　褐灰色シルト質極細砂十浅黄色シルト質細砂（10YR5/1+2.5Y7/3　炭含む）
22　にぶい黄褐色十灰白色シルト質細砂（10YR5/3+2.5Y8/2）
23　にぶい黄橙色十灰白色シルト質極細砂（10YR6/3+2.5Y8/2 灰白色細砂を含み，Feが若干ある）
24　灰黄色シルト質極細砂（10YR5/2　焼土・炭を含む）
25　灰白色細砂（2.5Y8/2）
26　にぶい黄褐色十灰白色シルト質極細砂（10YR4/3+2.5Y8/2）
27　灰黄十浅黄シルト質細砂（2.5Y6/2+7/2）
28　オリーブ黄色シルト質極細砂（5Y6/3　Fe・炭を含み，粘性有り　褐鉄鉱が認められる）
29　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR4/2　Feを含む）
30　灰黄色シルト質極細砂（2.5Y6/2　Fe多量）
31　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR4/2　Feを若干含む）
32　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR4/2）
33　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR4/2　焼土・炭・Feを含む）
34　にぶい黄色十灰黄色シルト質細砂（2.5Y6/3+10YR5/2　塊状の灰白色シルト質細砂を含む）SK3013埋土
35　にぶい黄褐色シルト質極細砂（10YR5/3　焼土粒子を若干含む）
36　にぶい黄褐色十灰黄色シルト質極細砂（10YR5/3+2.5Y7/2）
37　淡黄色十灰黄色シルト質細砂（2.5Y8/3+8/2+6/2）
38　淡黄色細砂十黄灰色シルト質極細砂（2.5Y8/3+6/1）
39　黄褐色十浅黄色シルト質極細砂（2.5Y5/3）
40　にぶい黄褐色シルト質細砂（10YR5/4）
41　灰白色十灰黄色シルト質極細砂（7.5Y8/2+2.5Y6/2 黒褐色シルト質極細砂をブロック状に含む）
42　灰白色シルト質細砂（7.5Y8/2+5Y7/1）
43　にぶい黄褐色シルト質細砂（10YR6/4　焼土を若干含む）
44　灰白色シルト質極細砂（7.5Y8/2+5Y7/1）
45　明灰黄色十にぶい黄褐色シルト質細砂（2.5Y5/2+10YR4/3）
46　灰白色細砂十灰黄褐色十黄褐色シルト質極細砂（2.5Y8/3+10YR5/2+2.5Y5/3）
47　にぶい褐色十灰白色シルト質極細砂（7.5YR5/3+10YR7/1）
48　にぶい黄色十灰黄褐色シルト質細砂（2.5Y6/3+10YR5/2　灰白色シルト質細砂をブロック状に含む）SK3014埋土
49　にぶい黄色十灰黄褐色シルト質細砂（2.5Y6/3+10YR5/2　灰白色シルト質細砂をブロック状に含む）SK3015埋土
50　灰白色シルト質細砂十灰オリーブ色シルト質細砂（5Y8/2+5Y6/2 ブロック状であり，固くしまる）
51　灰オリーブ色シルト質細砂十灰白色シルト質
52　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR5/2　焼土・炭を多く含む）
53　淡黄色細砂十灰黄色シルト質細砂（5Y8/3+2.5Y6/2）
54　淡黄色細砂（5Y8/3）
55　淡黄色十明黄褐色細砂（5Y8/3+2.5Y7/6　しまっている）
56　灰黄色シルト質細砂（2.5Y6/2）
57　暗灰黄色シルト質細砂（2.5Y5/2）
58　淡黄色シルト（2.5Y8/3）
59　黒褐色シルト質極細砂（7.5YR3/2　焼土・炭・瓦・土器含む）
60　浅黄色シルト質極細砂（5Y7/3　粘性有り）
61　灰オリーブ色シルト質極細砂（瓦・礫を含み、若干粘性有り）
62　浅黄色シルト質極細砂（2.5Y7/3　粘性強い）
63　褐灰色シルト質極細砂（10YR5/1　粘性有り）
64　灰白色細砂十暗灰黄色シルト質細砂（5Y7/1+2.5Y5/2）
65　灰白色細砂十灰黄色シルト質細砂（7.5Y6/1+2.5Y6/2）
66　灰白色シルト質細砂十灰黄色シルト質細～粗砂（7.5Y6/1+2.5Y6/2　グライ化）
67　灰黄色シルト質細砂（2.5YR6/2　瓦・土器を多く含む）
68　灰オリーブ十灰黄色シルト質極細砂（5Y6/2+2.5Y6/2　粘性有り）
69　にぶい黄褐色シルト質極細砂（10YR5/3　しまりない）
70　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR5/2）
71　褐灰色シルト質極細砂（10YR4/1　粘性有り）
72　褐灰色シルト質極細砂（10YR4/1　粘性有り）
73　にぶい橙色細～粗砂（7.5YR6/4）
74　SD2101埋土
75　にぶい黄褐色シルト質極細砂（10YR4/5）
76　暗灰黄色シルト質極細砂（2.5Y5/2）
77　灰黄褐色シルト質極細砂十黄灰色シルト質極細砂（10YR4/2+2.5Y6/1 粘性有り）SD3002埋土
78　灰黄褐色シルト質極細砂（10YR4/2）SD3001埋土
79　灰黄色シルト質極細砂（2.5Y7/2+6/2）
80　灰白色十黄灰色シルト質極細砂（5Y7/2+2.5Y6/2）
81　灰色シルト質極細砂（5Y4/1　粒子細かい）
82　淡黄色細砂十にぶい褐色細砂（5Y8/3+7.5YR5/4　交互に堆積し、ラミナ状である）
83　淡黄色シルト質細十粗砂（5Y8/4）
84　灰オリーブ十浅黄色シルト質細～粗砂（5Y6/2+7/3　グライ化　灰黄色シルト質細砂を含む）
85　砂礫層

第10図　調査地土層図②（1/40）

第２節　遺構・遺物

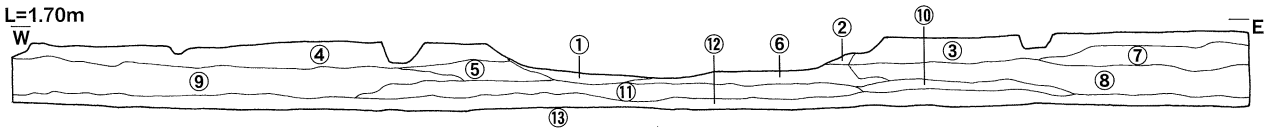
１，中世以前の遺構・遺物

トレンチ調査（第７・11図参照）

第３遺構面までの調査結果や，南半部を中心に弥生時代～古代の土器片が一定量見られたことから，当地点で中世遺構の基盤とした砂堆（83層）以下をトレンチ調査によって確認した。トレンチは，調査地を横断する東西方向のものを調査地中央部と南端部の２箇所に設定した。

堆積状況は，詳細に分層を行った調査地中央部の第１トレンチについてみると，SR3001両岸部の基盤層に浅黄色細砂層があり，これより下位で砂質土が東側の低地へと流入する堆積が海抜付近まで認められる。これ以下では円礫を多量に含んだ20cm程の砂礫層があり，再び砂堆が確認された。掘削はこの砂堆の上面までとし，この間までで遺構が存在しないことを確認した。調査地の南端部に設定した第２トレンチでも遺構は確認されず，堆積状況も第１トレンチとほぼ同様であるが，調査地内で最も高いと考えられる南西隅においては，海抜付近の砂礫層が存在せず東側の低地での堆積が認められる。

出土遺物は両トレンチ合わせてコンテナ１箱程度で，取り上げは砂礫層より上部のものと砂礫層中のものとに分別した。なお上層部の断面観察では，SR3001両岸部や底面を中心に第３遺構面より落ち込む足跡や杭坑，植物痕や巣穴の様な細く斜行する穴が認められた。このためトレンチ上層部の出土遺物については，木製遺物を中心に混入した可能性がある。



① にぶい黄橙色(10YR7/4)細砂(5BG6/1青灰色シルト極細砂混る)
② 青灰色(5BG6/1)シルト質極細砂
③ 浅黄色(2.5Y7/3)細砂(拳～人頭大の角礫・安山岩を含む)中世遺物多い
④ 浅黄色(5Y7/3)細砂(　〃　)
⑤ 灰オリーブ色(5Y6/2)砂質シルト
⑥ 緑灰色(10G6/1)シルト(炭化物を含む)
⑦ にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質細砂(炭化物を含む)
⑧ 灰オリーブ色(5Y6/2)砂質シルト質細砂
⑨ 灰色(5Y6/1)粗砂混シルト質細砂
⑩ 浅黄色(5Y7/3)極細砂
⑪ 灰色(5Y6/1)粗砂(２cm大の円礫をまばらに含む)
⑫ 黄灰色(2.5Y6/1)砂礫(２～５cm大の円礫を多量に含む)トレンチ下層遺物
⑬ 灰白色(2.5Y7/1)砂

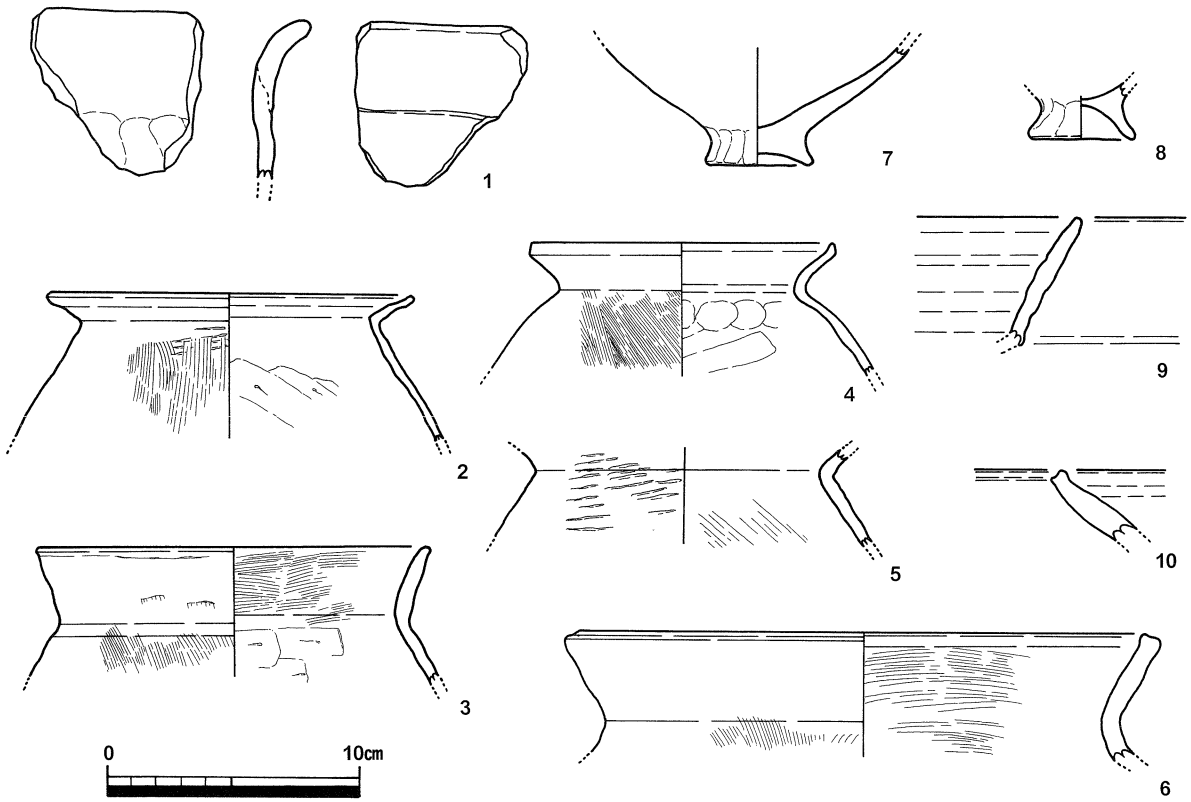
0　2m

第11図　第１トレンチ土層図(1/80)

トレンチ下層部出土遺物（第12図参照）

弥生時代～古墳時代とみられる土器片が占めるが，全体的にはローリングを受けたものが多くみられ，洪水等により南西部方向から流入してきたものと考えられる。

１は弥生土器甕。体部上端に段と如意状の口縁部をもち，前期の所産と考えられる。２も弥生土器甕。口縁部に連続する横ナデ，体部には叩き成形の後，刷毛を施す。胎土中に角閃石を含む在地産のもので，後期末のものとみられる。３は土師器壺。直立気味の口縁部で端部を小さく摘み出す。口縁部内面及び体部外面に刷毛調整を行う。４は土師器甕。口縁端部を摘み上げている。５は弥生土器で叩き甕。６は土師器甕。口縁端部は強くナデられ，凹面となっている。口縁部内面及び体部外面に刷毛を施す。７は弥生土器台付鉢。８は製塩土器の脚部。９は弥生土器高坏。長く伸びる口縁部に連続する横ナデが認められる。胎土中に角閃石を含む在地産のもので，後期末のものとみられる。10は須恵器（壺）の口縁部である。

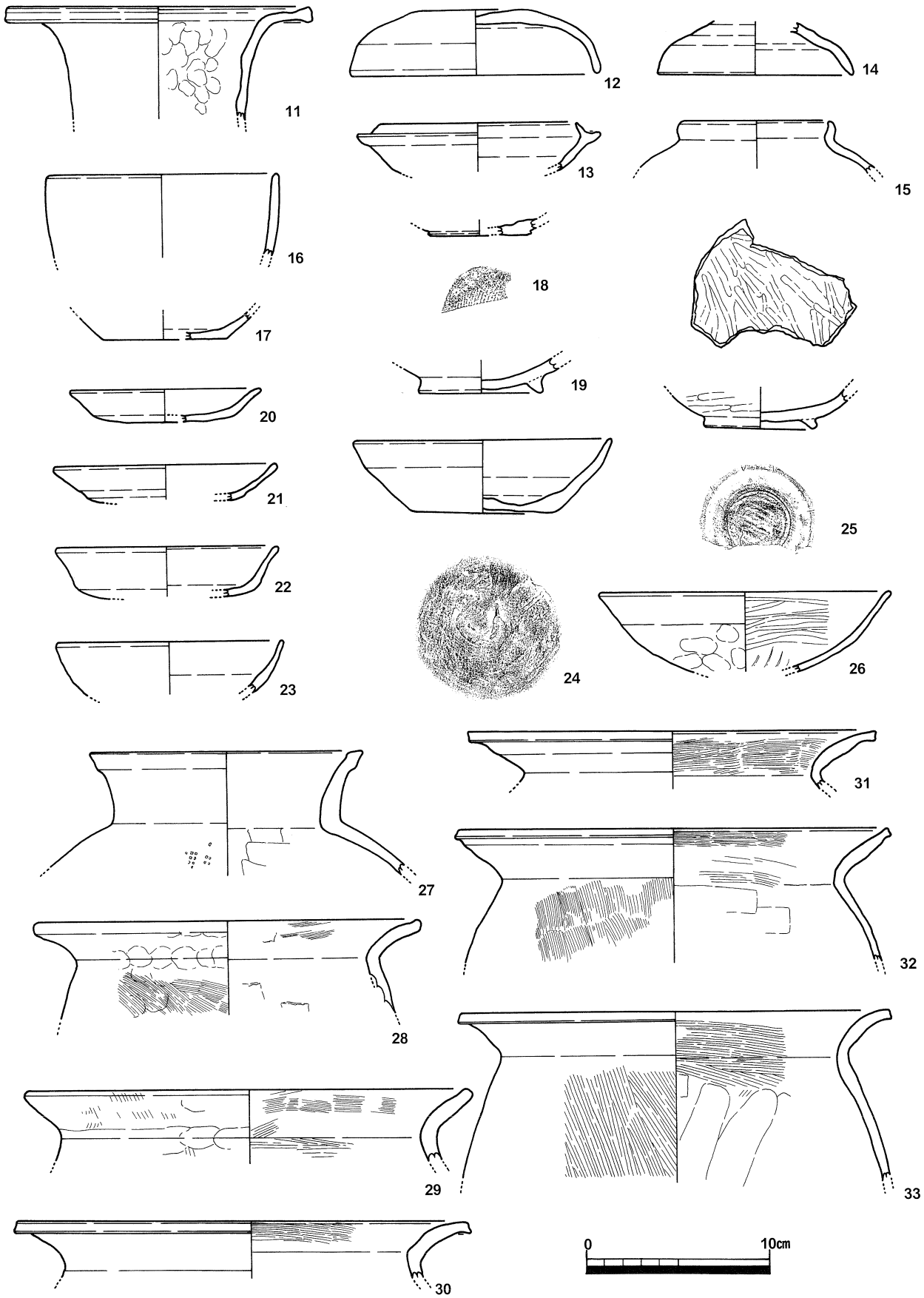


第12図　トレンチ下層部出土遺物(1/3)

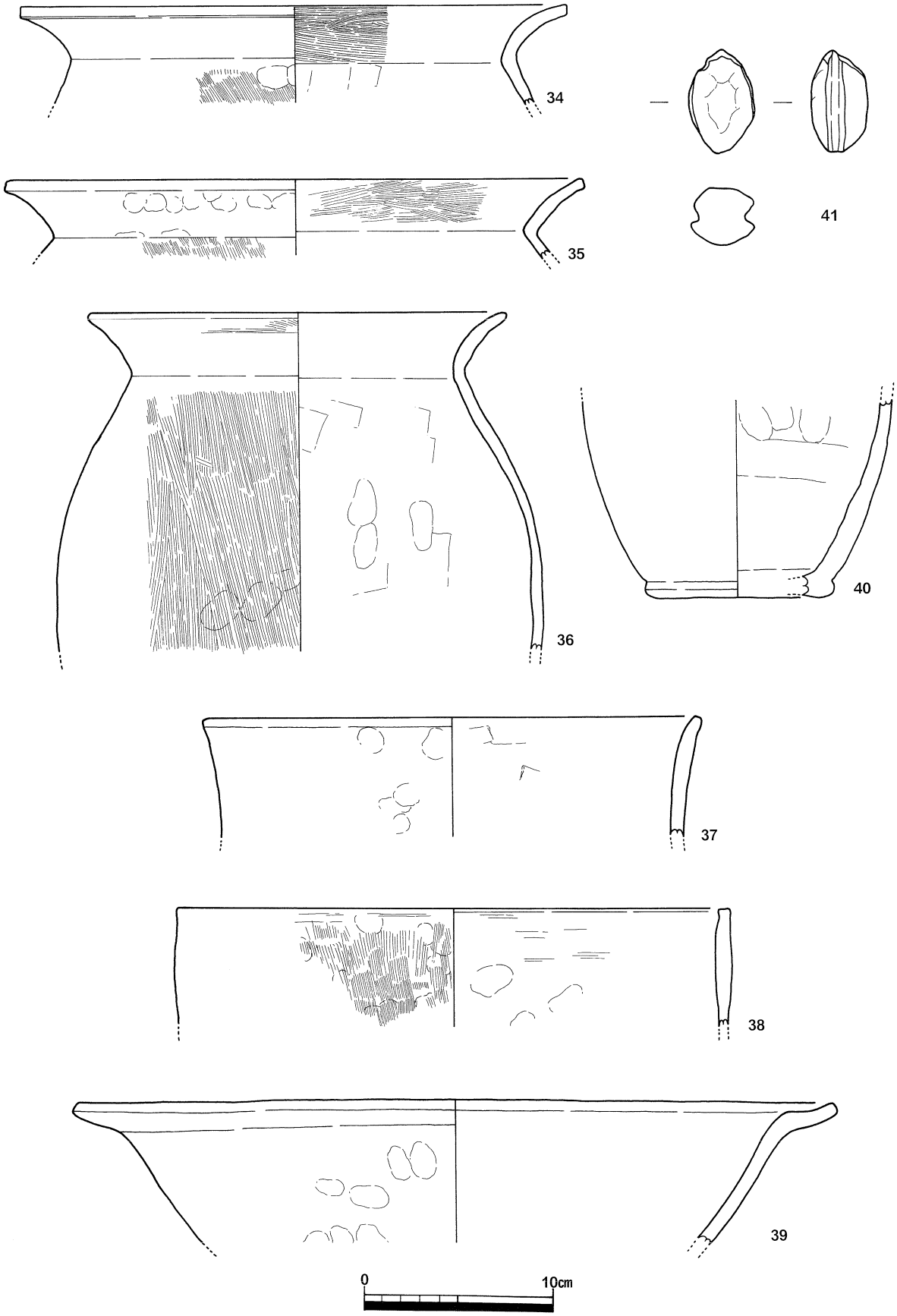
トレンチ上層部出土遺物（第13～15図参照）

７世紀及び12世紀代を中心とする土器片や木製遺物がみられる。上層部の出土遺物についてはローリングの度合いは少なく，大半は当地周辺のものと考えられる。

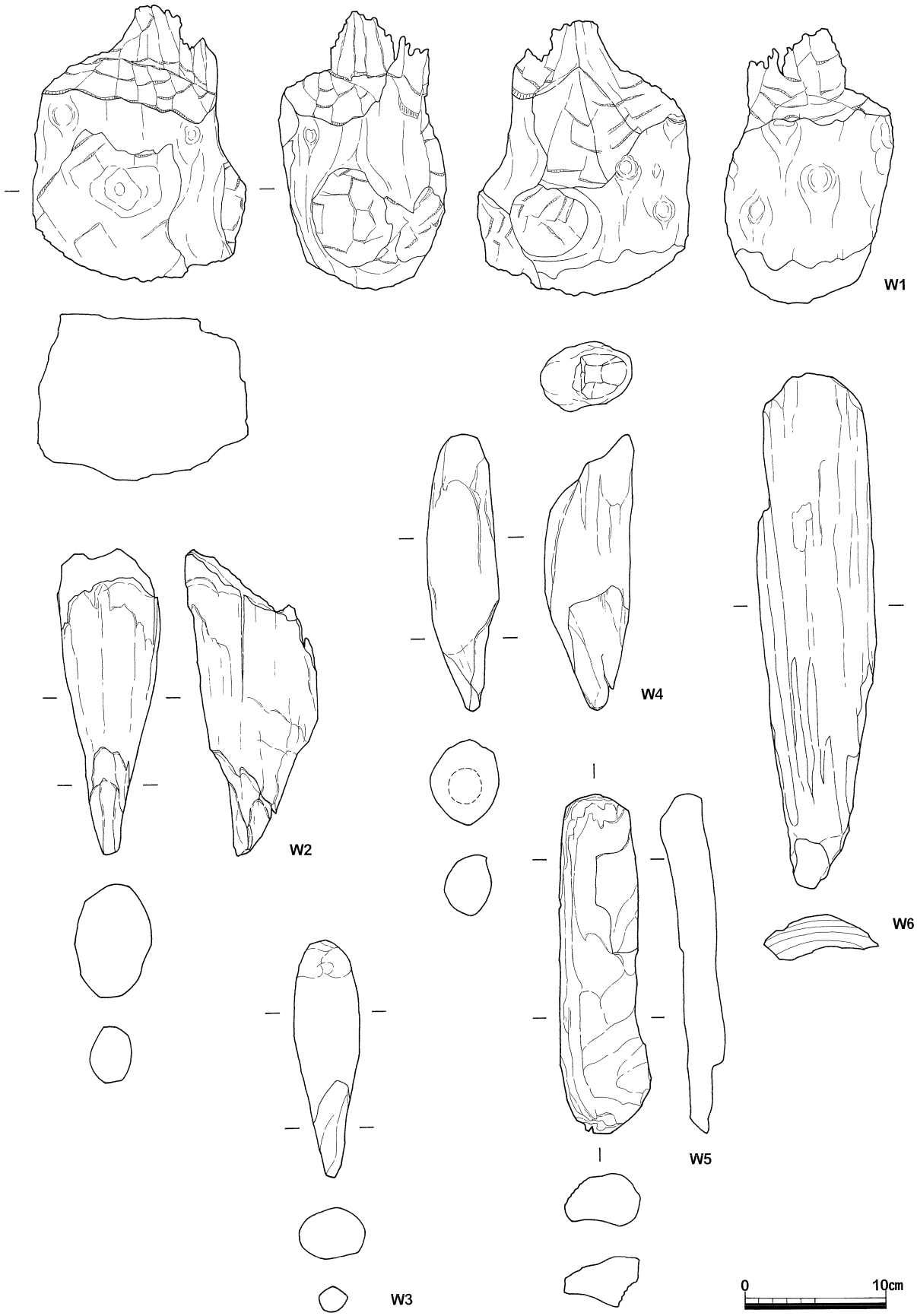
11は弥生土器の壺である。12～14は須恵器坏身（13）・坏蓋（12・14）である。15は須恵器壺である。16は鉢形の須恵器口縁部。17は須恵器の坏底部。18は土師質土器坏底部。平高台のもので，底部の切り離しは（回転？）糸切りとみられる。19は土師質土器椀の底部。20～24は，土師質土器坏・皿類。20は外傾する長い口縁部をもつ小皿で，口径10cm前後を測る。底面はナデのため，切り離し法は不明である。24の坏は底部に回転ヘラ切りの痕が認められ，口径は14cm程である。25は黒色土器椀のＢ類で，高台内に静止ヘラ切り痕が残る。26は和泉型の瓦器椀である。27は須恵器壺で，体部外面に格子目状の叩き痕が認められる。28～36は土師器甕である。口縁部内面及び体部外面に刷毛調整が認められる。長胴タイプのものとみられるが，口縁端部に面をもつもの（30～34）と丸く納めるもの（29・36等）がある。37は土師質土器の口縁部で，壺或は鉢形のものと考えられる。38も土師器の口縁部で，外面には縦方向の刷毛調整が認められる。砂礫を多く含む胎土が用いられ，鉢形の煮沸具或は竈の類が考えられる。39は須恵質焼成の甕で，器高は浅く洗面器状の体部をもつ。40は土師質土器の体部～底部片だが，蛸壺の可能性も考えられる。41は小形の有溝土錘である。Ｗ１～６は木質の遺物で，加工痕は不明瞭なものが多い。Ｗ１は枝を払い断面で長方形に成形された柱材状のものだが，上端部は折れではなく加工が施されている。Ｗ２～４は杭状，Ｗ５・６は板状の形態を呈するが，加工により成形されたものか腐食によるものか不明である。



第13図　トレンチ上層部出土遺物①(1/3)



第14図　トレンチ上層部出土遺物②(1/3)

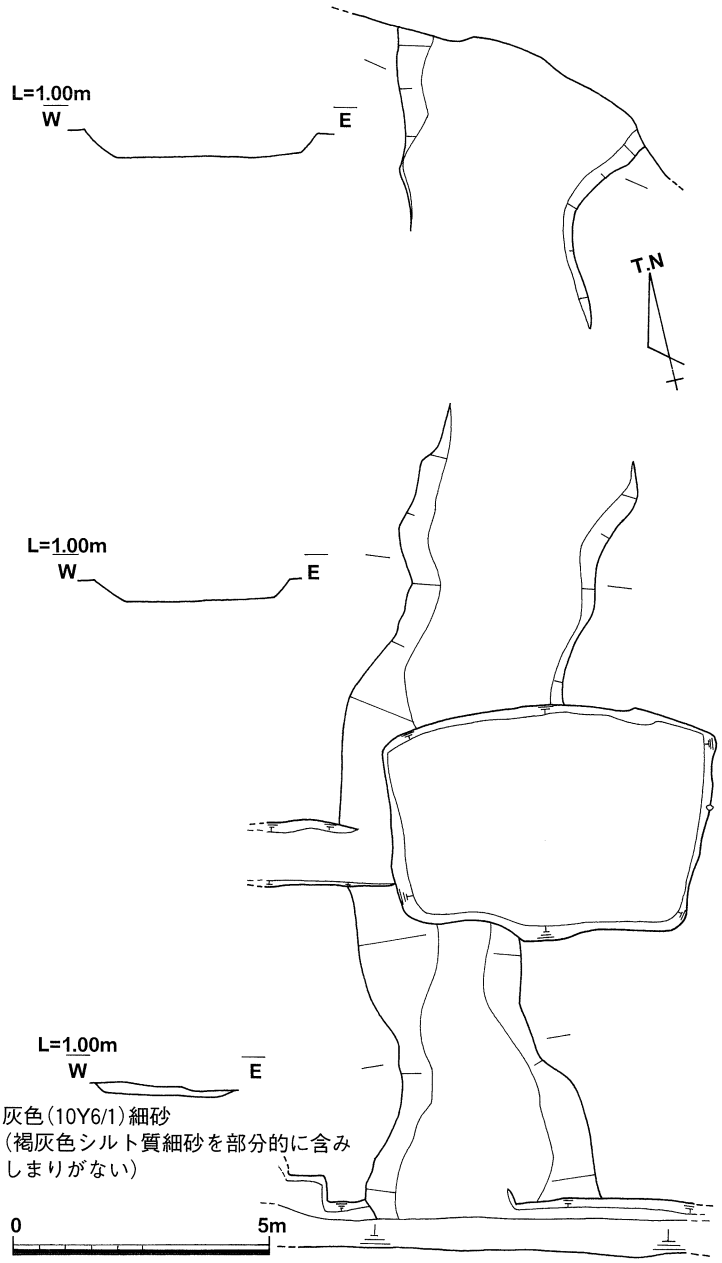


第15図　トレンチ出土遺物③(1/4)

2，中世の遺構・遺物

SR3001（第16図参照）

第３遺構面で確認した流路状の遺構である。幅３～4.6ｍ前後で，総延長約23ｍ分を確認した。検出した標高は0.22～0.62ｍで，地形に沿い東岸部がやや低く，底面は－0.07～0.17ｍを測り緩やかに北部へ下る。遺構断面は両岸より緩やかに窪む船底形を呈するが，東肩部がやや不鮮明になっている。埋土は極度にグライ化した不安定な砂質土で，多量の土器や赤色に風化した板状の石が認められる。SX3001に大きく壊され不明瞭となった北部での検出状況は，SX3001及びSD3003の壁面の観察等からSD3003に先行することを確認した。以北については一帯にグライ化した砂層が広がるが，上記した埋土の特徴をもつ堆積物は認められずSD3003に取り付く形で途切れるものと判断した。掘削時の状況では，板石が多量に認められることから護岸用の板石の可能性も考えたが，平面及び確認レベルで規則性はなく埋土として掘削を行った。遺物はコンテナ約５箱分あり，搬入品である畿内産の瓦器等及び，在地産の中世土器等で12世紀～13世紀初頭のものが占める。遺構自体の所属は当時期（Ⅰ期）と考えられるが，図化したように後出する中世土器も少量ながら認められる。混入の可能性もあるが検出時の状態や後出する遺構の分布からすれば，大部分が埋没した後も不安定な窪地として残り，近世の城下整備まで解消されなかった状況が考えられる。

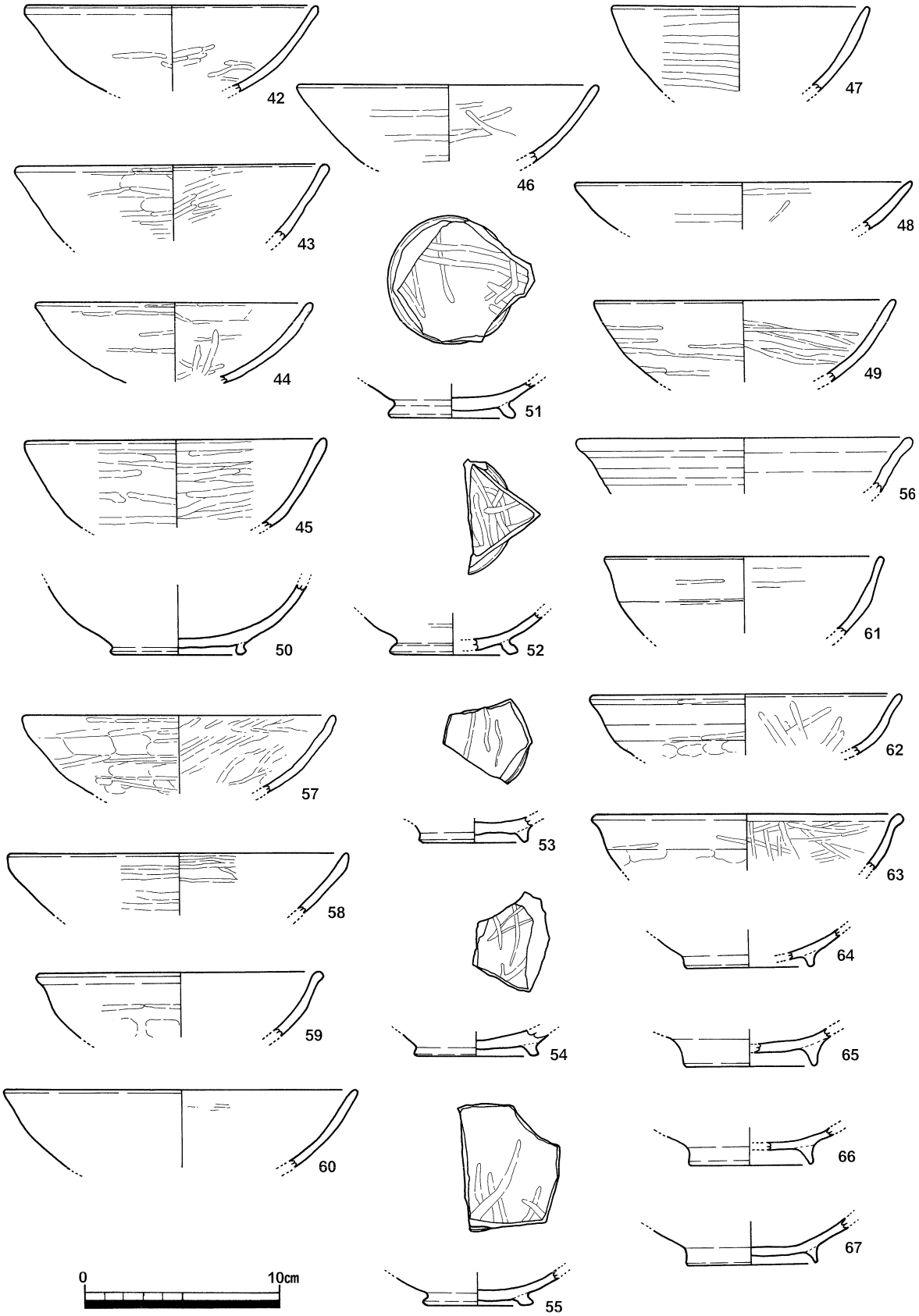


第16図　SR3001平・断面図(1/150)

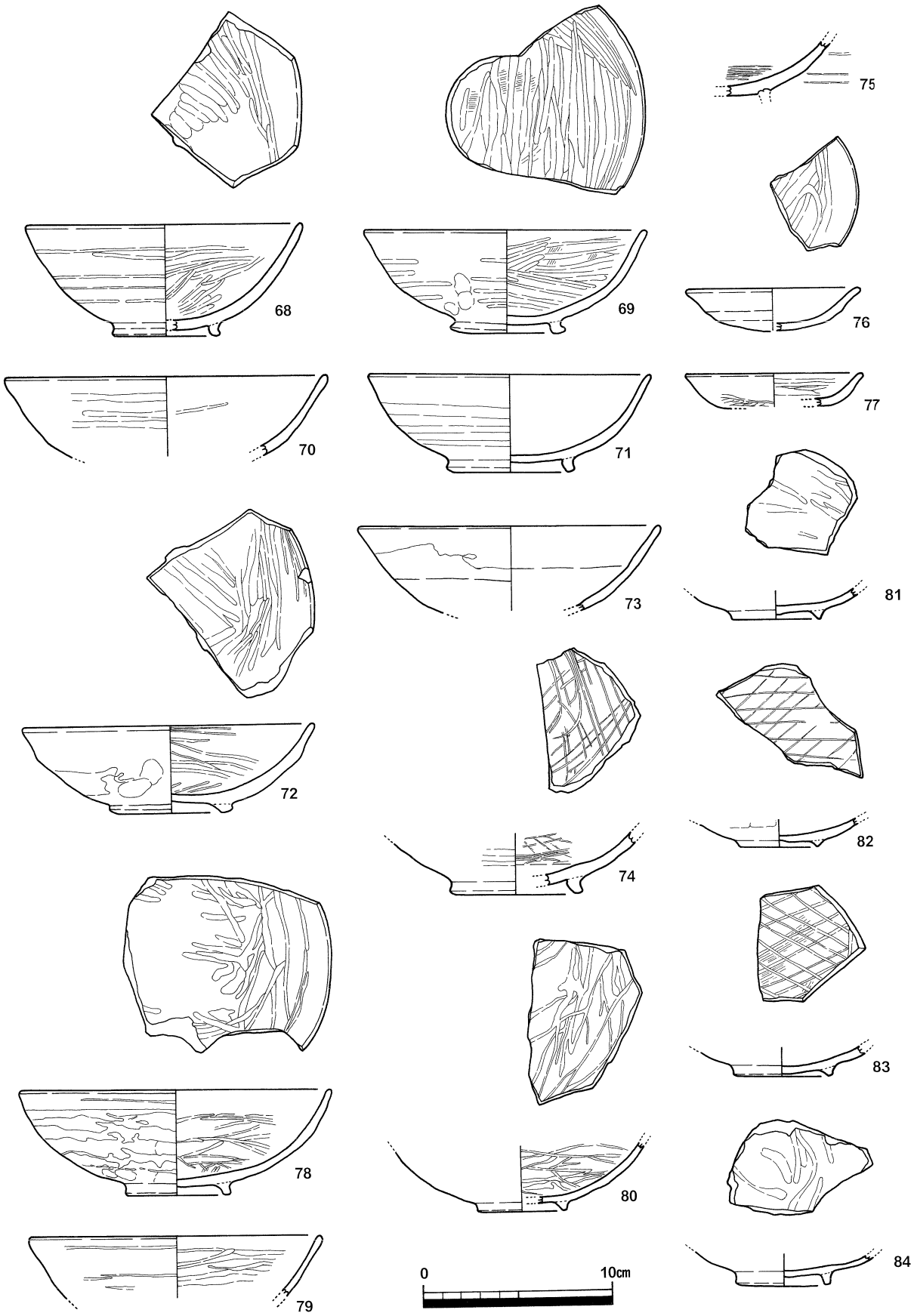
SR3001出土遺物（第17～24図参照）

42～55は，須恵器椀である。42は産地不明。43～55は十瓶山窯産で，器壁の薄い深椀タイプは見られず，緩く体部から口縁へと開き体部外面に均等幅の並行する回転磨きを加えるものが主体であることから，佐藤編年（佐藤2000）の椀ＡⅡ－６形式（12世紀後半）を中心に考えられる。56は，在地産の土師質土器（坏）口縁部。57～67は土師質土器椀である。57・59は産地

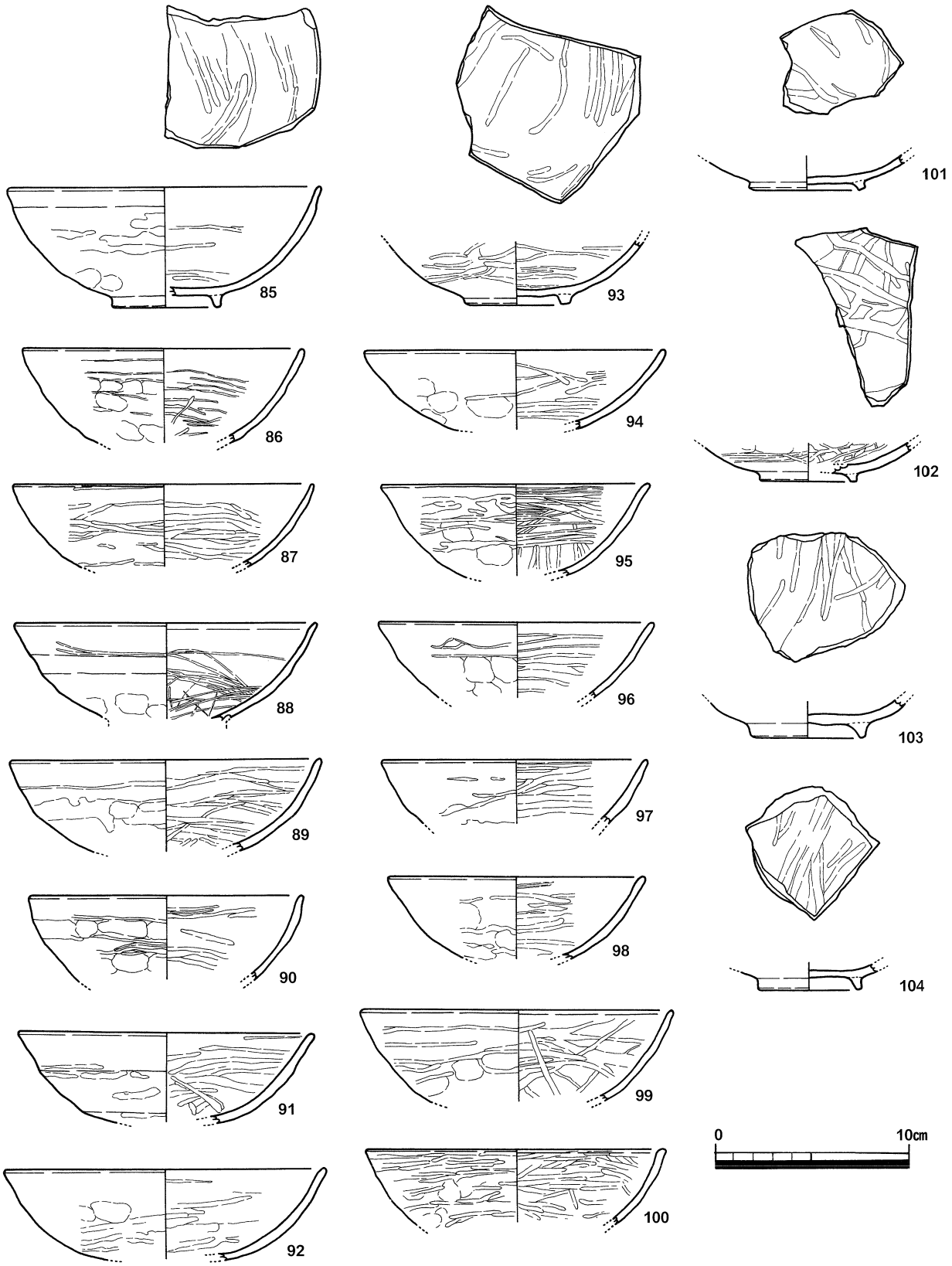
不明。58は十瓶山窯産。60～67は吉備系土師器椀で，胎土は浅黄色～白色を呈し若干の砂粒を含むが精良なものを用いている。底部見込み（65・67）や口縁部（60）には，桃～橙色の重ね焼痕が認められる。山本分類（山本1992）でのＡ類（62・63），Ｂ類（59），Ｃ類（60）があり，Ａ類（62・63）は器高がやや浅く，磨き調整もやや粗雑になることからＡ３類（Ｉ－３期）に想定される。一方，Ｃ類（60）は，口径が大きくＣ１類（Ⅲ－１期）に相当する。底部（65～67）は，高台断面が細くシャープな三角形を呈しＩ－３～Ⅲ－１期に推定される。以上から吉備系土師器椀は，12世紀前葉～13世紀初頭と考えられる。68～75は十瓶山窯産黒色土器椀で，全て内黒（Ａ類）。器壁の薄い深椀タイプはないことから，佐藤編年の椀ＡⅡ－４形式（12世紀前半）以降の所産と考えられる。76・77は和泉型瓦器皿，78～117・119～128は和泉型瓦器椀。形式では，器壁が厚いやや深手で比較的磨きが入念なもの（127等）から，浅椀形を呈し磨きが散漫なもの（120等）までみられ，尾上編年（尾上1983）のⅡ－１期（12世紀前葉）～Ⅲ－１期（12世紀末）に相当する。また81・93・94・109・115・125等，被熱したとみられるものが多数確認できる。118は，産地不明の瓦器。小片だが内外面に炭素吸着処理が見られず，外方向に小さく折れる口縁部内面に凹線状の窪みをもち，和泉型とはやや異なった印象がある。129～138は中国産磁器である。出土量では白磁が主体で，青磁は数点に過ぎない。129～133・135・136は，白磁碗。129は器壁が薄く小さな玉縁で横田・森田分類（横田・森田1978）の碗Ⅱ類，器壁が厚く幅広の玉縁をもつ130・132・133や底部135・136は碗Ⅳ類とみられる。134は龍泉窯系青磁で，鎬連弁文様の碗。137・138は，龍泉窯系青磁皿。見込みに櫛描き文様が施され，横田・森田分類の皿Ｉ－２類に相当する。139～165は，在地産の土師質土器皿・坏で，回転ヘラ切のものが主体である。皿（146～165）は短く外傾する口縁で口径８～９㎝を測り，佐藤編年の皿Ⅲ－２形式（11世紀末～13世紀初頭）に相当する。器壁が厚く，大振りの坏底部（140・144・145）は皿と同時期の所産と考えられるが，141～143は小振りで器壁が薄く後出するもので，佐藤編年の坏ＤⅡ－７・８形式及び乗松編年（乗松2004）の１a・１b（13世紀末～14世紀前葉）に相当する。166・167・170・172は，須恵質土器鉢。167は，十瓶山窯産。瓦質焼成のもので内外面を磨く。168・169・171は，須恵器甕。168・169は十瓶山窯産で，168は直立する長い頸部をもち，口縁端部が垂下する。体部外面に格子目状の叩き痕が認められ，佐藤編年の甕Ｃ－１形式に該当する。173・176・177は，土師質土器足釜。173は在地産とみられ，鍔部が上方へ突出気味であり端部に平坦面をもたないことから，佐藤編年の足釜ＢⅡ類（14世紀前葉）に該当する。174は，竈或は鉢形土器の口縁部。175・178～187は，土師器甕及び土師質土器鍋。178・186は吉備系土師質土器鍋。口縁部内面には，幅広で鋭い刷毛調整が認められる。器壁が薄く器高の浅い鍋タイプの器形で，12世紀末～13世紀初頭の所産と推定される。179・182～185・187は在地産で，佐藤編年の甕Ｅ形式（12世紀前半）に該当する。184・185等，口縁端部がやや窪むＥⅡ－１形式と182のように口縁端部に丸みを帯びるＥⅡ－２形式がある。191は器種不明の土師質土器で，脚上部は，極度に媒化している。192は，竈の焚口部片。193は，板状の砥石。上面8.1×3.8㎝の長方形で，側面に切断痕とみられる線状痕が残る。規格性が推定され，京都産の可能性が考えられる。194は，瓦片。凹面に布目，凸面に縄目状の叩き痕が認められる。188～190は，備前焼。鉢口縁部或は脚部（188），底部（189），擂鉢（190）があり，16世紀代以降のものとみられる。195～197は弥生土器。高坏（195），甕（196・197）で，後期のものである。198は，土師器甕。Ｗ７は，木質の遺物。明瞭な加工を認めず，トレンチ上層部のものと同様な状況を呈する。



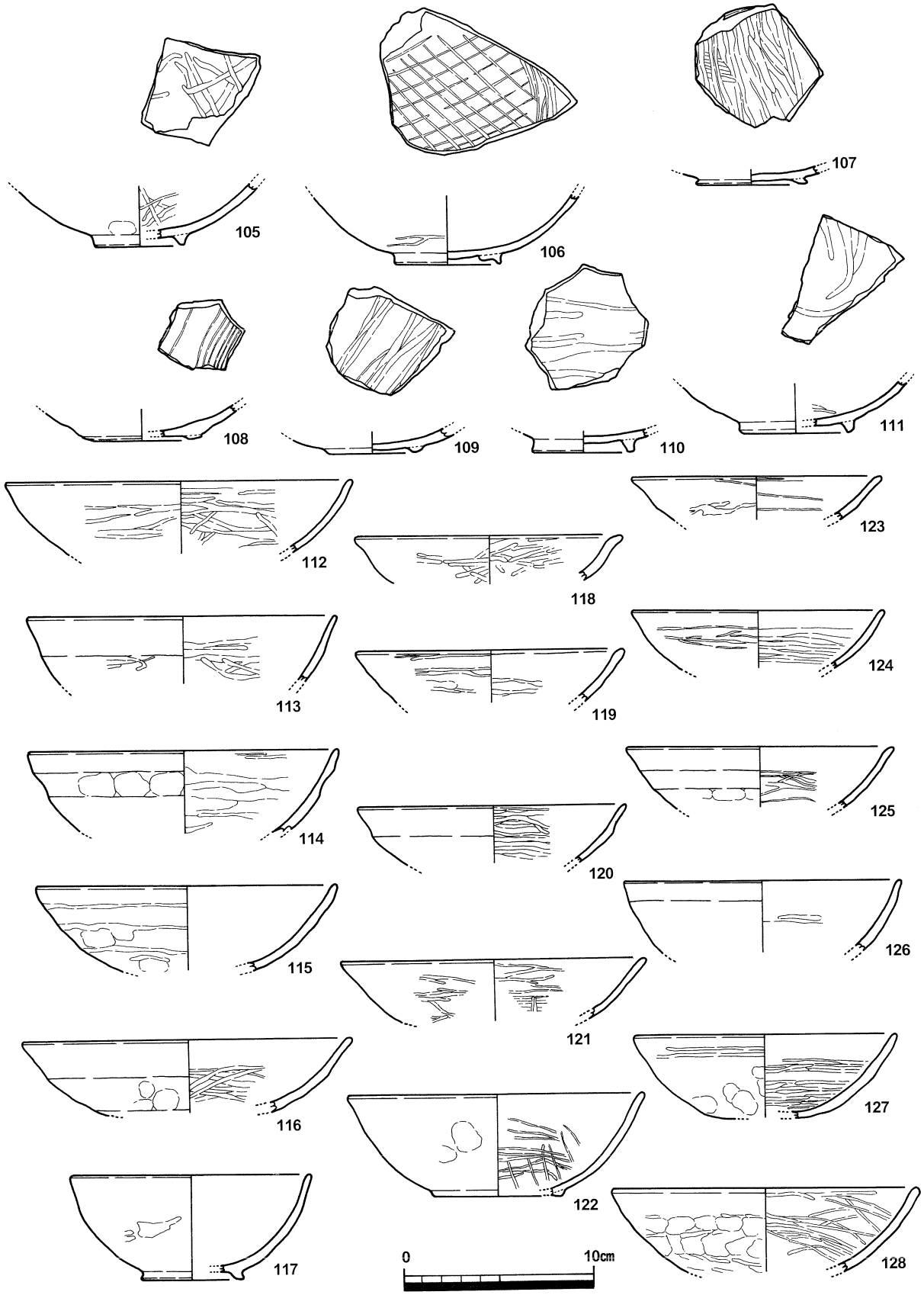
第17図　SR3001出土遺物①(1/3)



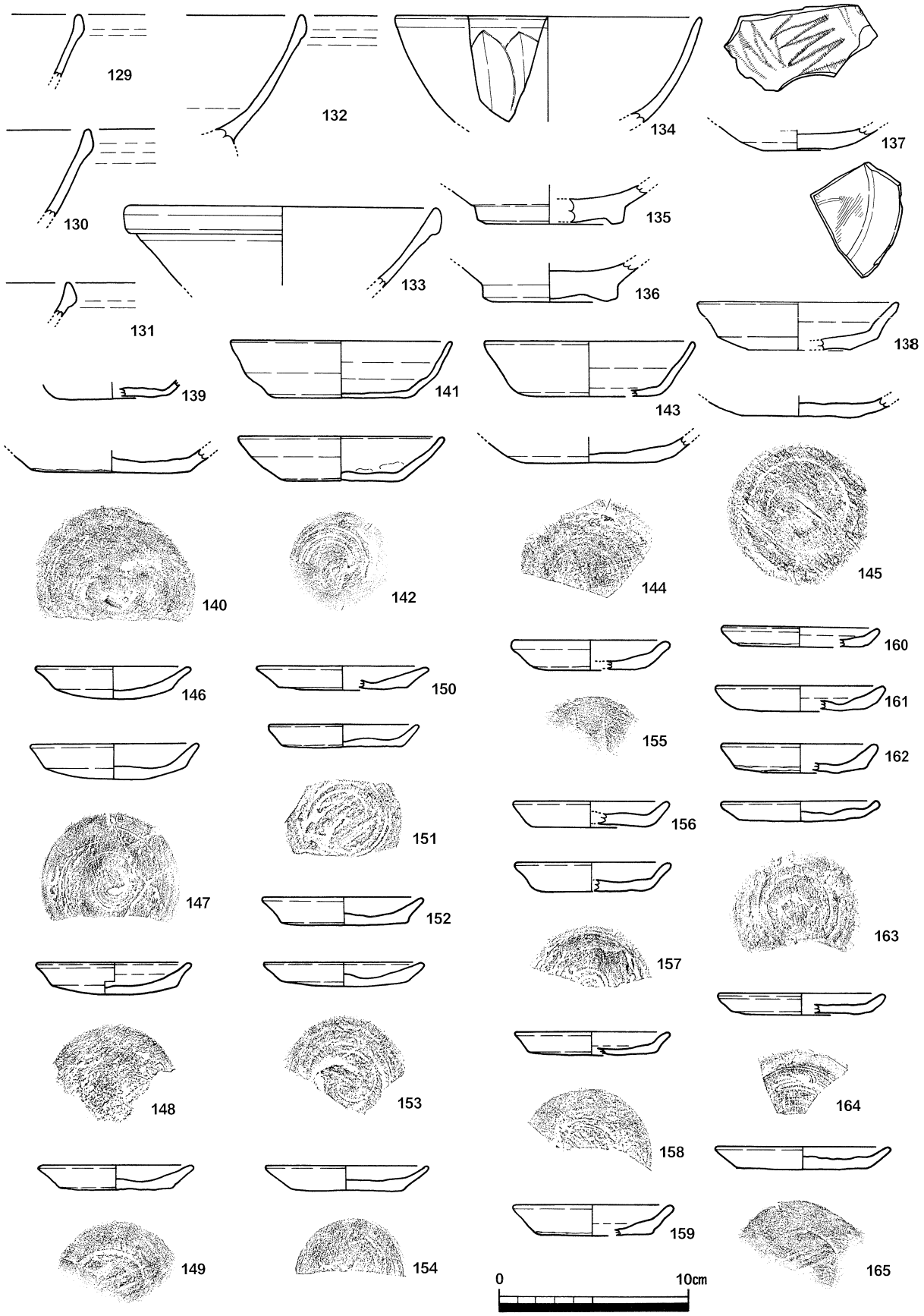
第18図　SR3001出土遺物②(1/3)



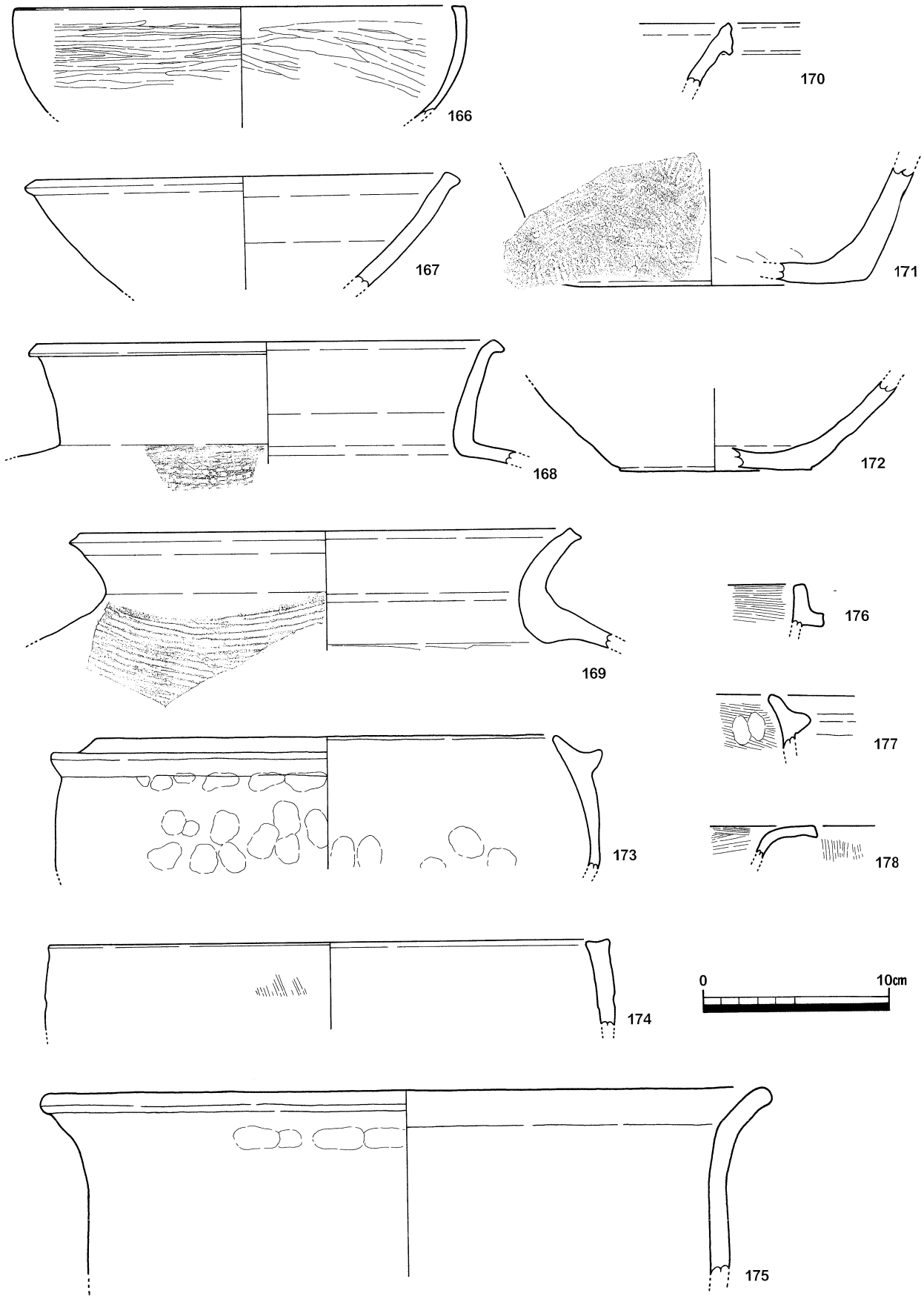
第19図　SR3001出土遺物③(1/3)



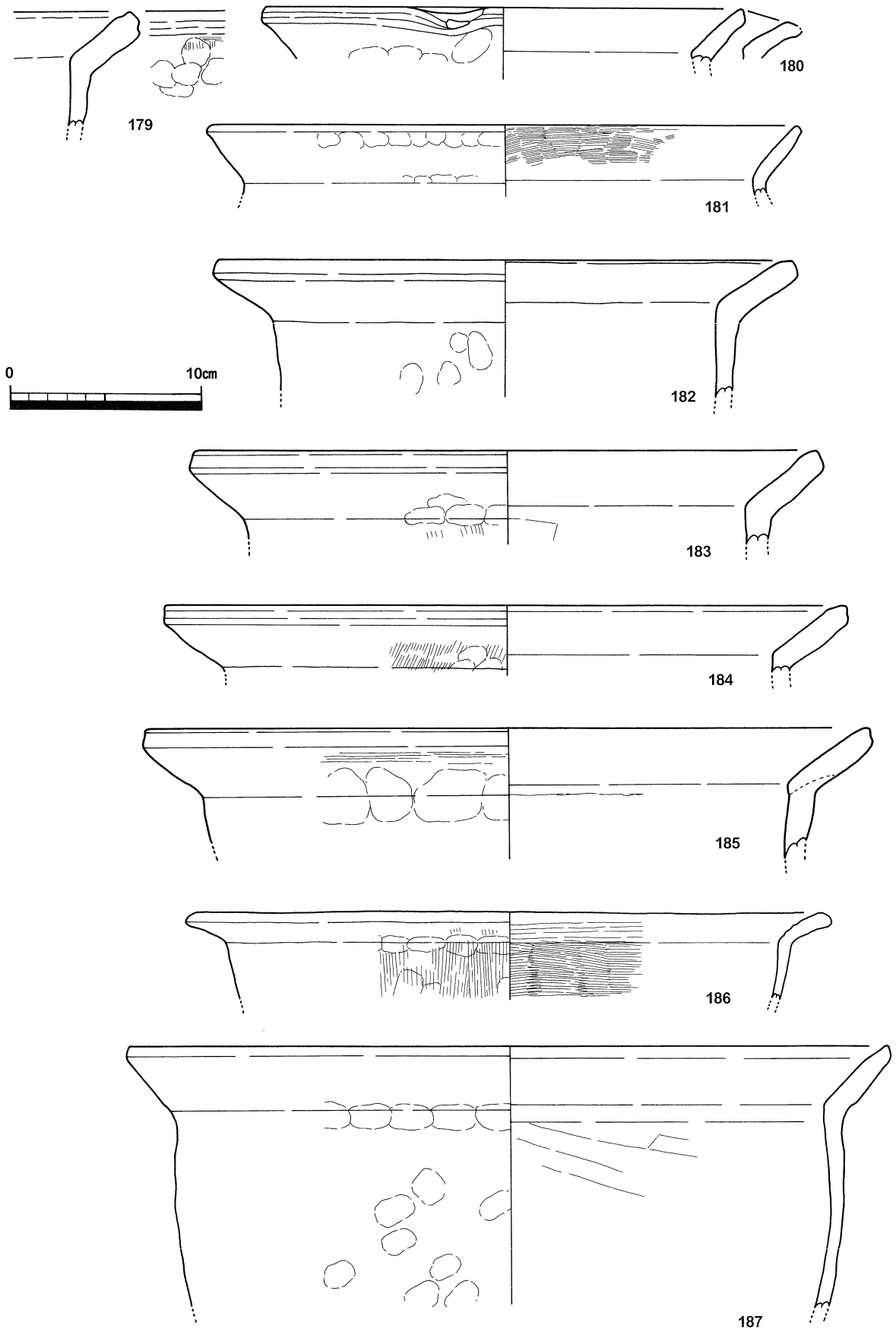
第20図　SR3001出土遺物④(1/3)



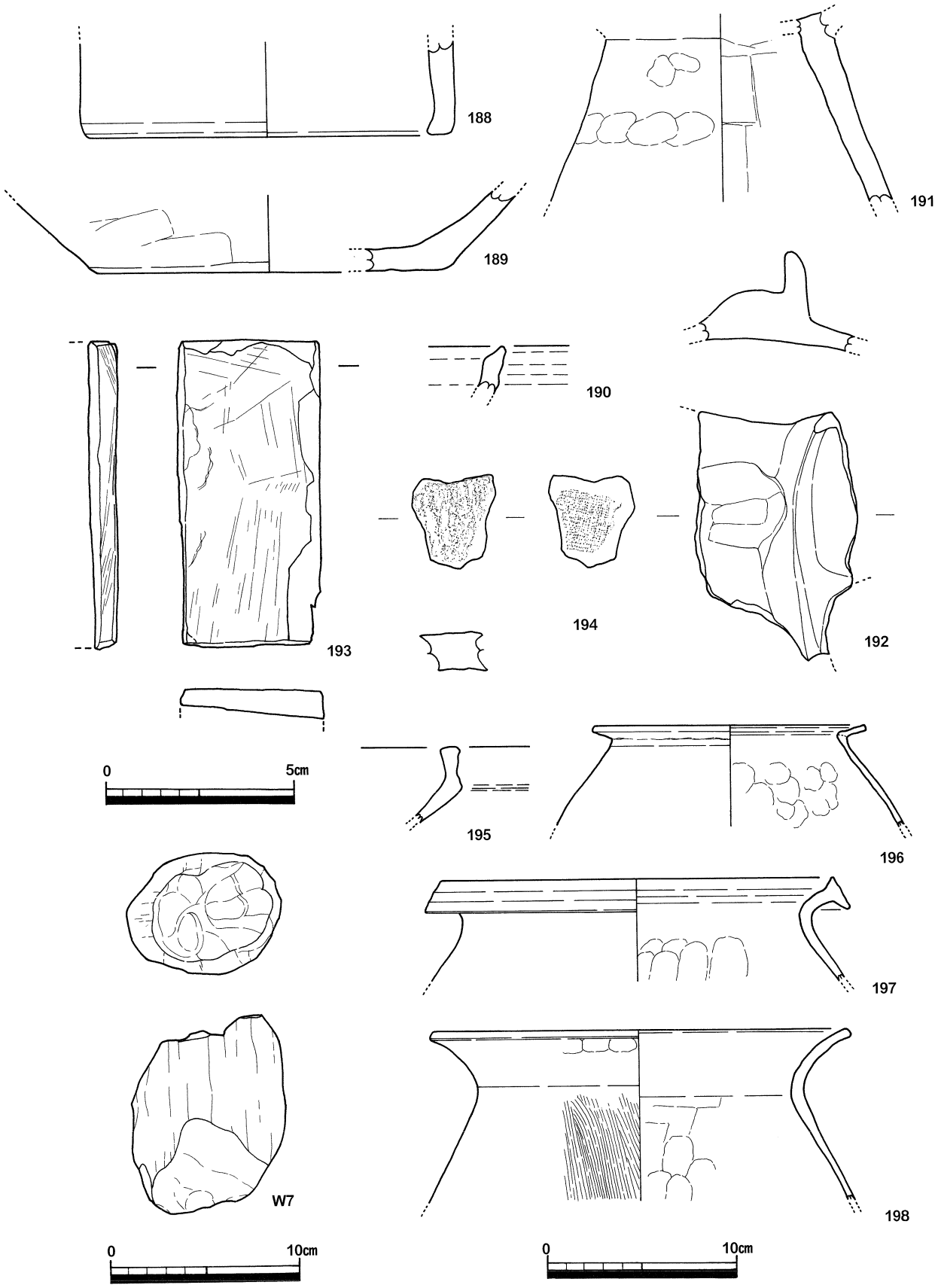
第21図　SR3001出土遺物⑤(1/3)



第22図　SR3001出土遺物⑥(1/3)



第23図　SR3001出土遺物⑦(1/3)



第24図　SR3001出土遺物⑧（土器・木製遺物1/3，石製遺物2/3）

柱穴・建物

SR3001の両岸部で，多数の柱穴を検出した。検出作業は１面で行なっているが，出土遺物や埋土の特徴から大概して３時期に分類される（第４表参照）。

大半がSR3001と同時期（Ⅰ期）のもので，微高地となる西岸部一帯及び南東部の一角を占める。これより後出すると考えられるもの（Ⅱ期）は，希薄ではあるが西岸部の微高地上で認められる。遺構全体の分布状況や遺物の出土量からみてⅠ期に盛期があり，続くⅡ期では衰退する状況がうかがわれる。

16世紀代（Ⅲ期）では，柱穴の存在が明確になるものは少ないが，低地となる北東部を土坑類が占めており，周辺で所属時期が不明なものも当該期になる可能性がある。また西部でも井戸跡とみられるSK3016が確認されており，本来は西部の微高地上にも生活域が広がっていたものと考えられる。16世紀代（Ⅲ期）の遺物については，後出のSX3001やSK2102等に一定量の出土が認められることから，南西部一帯が削平されたと想定される。

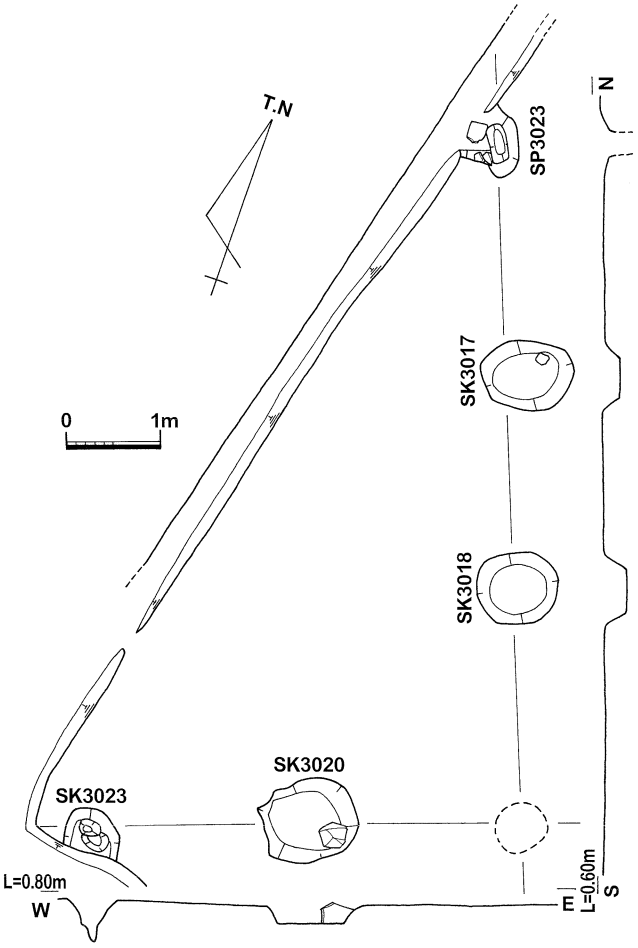
以上をもとに，調査地の西端部に認められる遺構の空白地に建替えのものも含めて３棟（SB3001～3003），及び南東部にも同主軸を示すものとして１棟（SB3004）を図上で復元した。

SB3001（第25図参照）

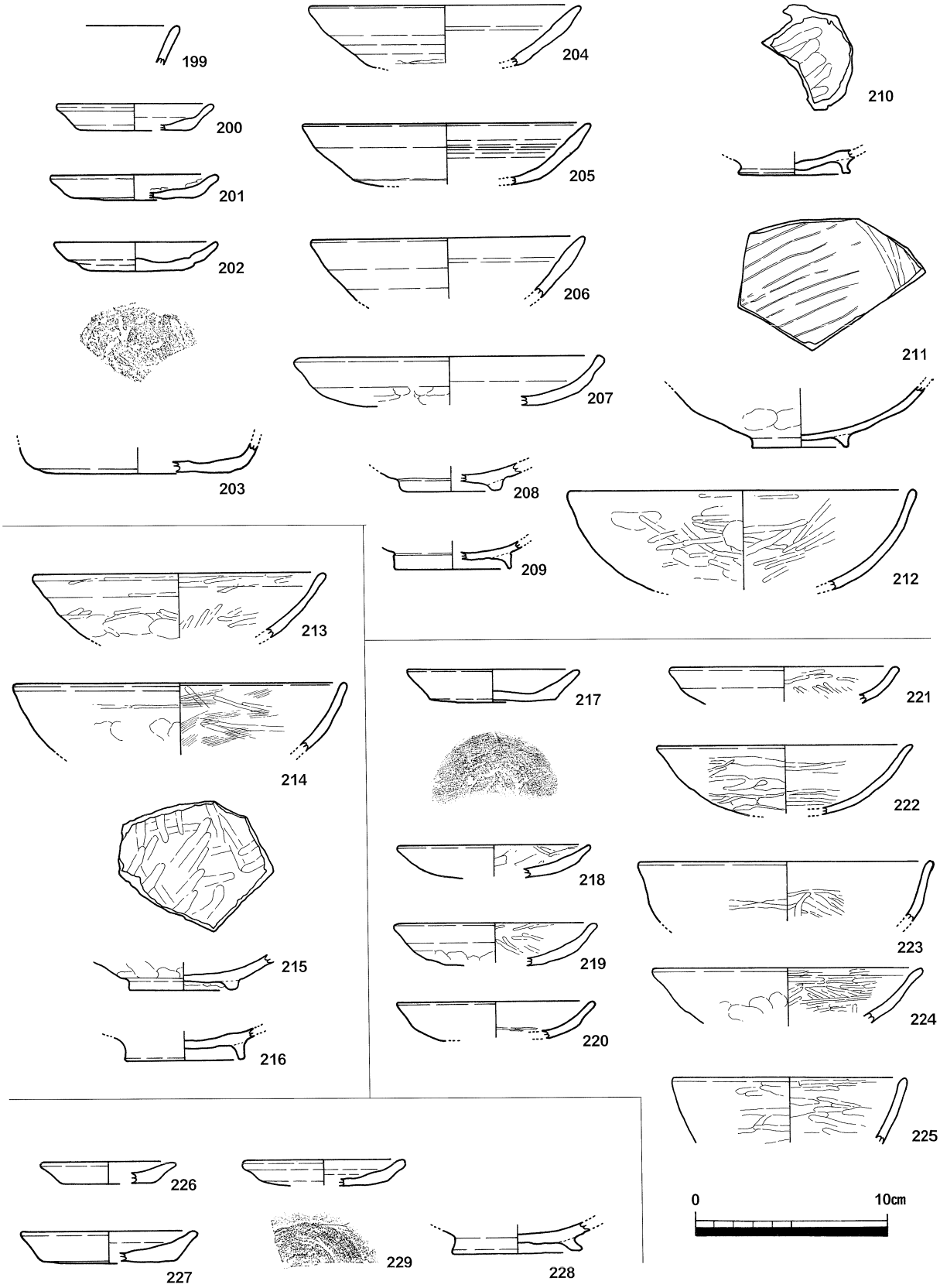
検出したSP3023・SK3017・3018・3020・3023を用い，復元した掘立柱建物である。円形の土坑として検出された大きな掘り方をもつSK3017・3018・3020では柱痕を確認していないが，SP3023・SK3023の底面で柱痕跡とみられる円～楕円形の窪みが認められる。また南東隅と推定される柱穴部はSR3001に重複し確認していないが，SP3023・SK3020の底面にはSR3001埋土中のものと同じ赤色に風化する安山石が認められ，これらの石が根巻きや根石として用いられた可能性も考えられる。

柱間距離は南面がやや狭く2.3m，東面で2.4m，主軸方位はN－23°－Wとなる。西側が調査対象外となり建物の規模は不明であるが，SK3023及びSP3023（底面のレベル記録なし）が段堀になっていることからみて，２×３間（梁4.6m×桁7.2m：床面積33.12㎡）のものが推定される。

所属時期は出土遺物及び埋土の特徴から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。



第25図　SB3001平・断面図(1/80)



第26図　SB3001出土遺物(1/3)

SB3001出土遺物（第26図参照）

皿・坏・椀がまとまって認められる。199～212は，SK3017の出土遺物である。199は土師質土器（皿？）の口縁部。200～202は，土師質土器皿である。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられ，器形及び法量から佐藤編年の皿ＢⅢ－２形式（11世紀末～13世紀初頭）に相当する。203～207は土師質土器坏である。203・205（回転ヘラ切り）以外は底部の切り離しは不明ながら，器形及び法量から佐藤編年の坏ＤⅡ－２・３形式（12世紀後半～13世紀初頭）に相当すると考えられる。207は京都系土師器皿。胎土は橙色系で，金雲母を含んだ精良なものを用いる。口径16cmを測り，器形は内弯気味に外傾する。体部下半～底部に指押えやナデ調整が施され，口縁部外面～体部上半を強く回転状にナデる。208～212は和泉型瓦器椀。SR3001と同時期（12世紀代）の所産と考えられる。

213～216は，SK3018の出土遺物である。213～215は和泉型瓦器椀で，SR3001と同時期（12世紀代）の所産と考えられる。216は土師質土器椀（吉備系？）である。

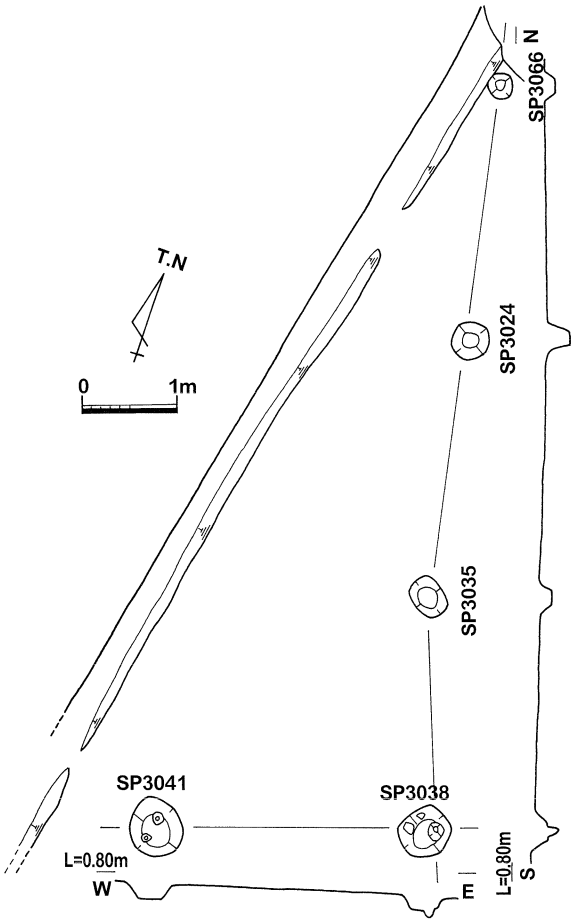
217～225は，SP3023の出土遺物である。217は底部回転ヘラ切りの皿。佐藤編年の皿ＢⅢ－２形式に相当する。218は京都系土師器皿。胎土は橙色系で，金雲母を含む精良なもの。207より小振りで，口径10cmを測る。口縁部外面～体部上半部にかけて，強い回転状のナデを行う。219～221は和泉型瓦器皿，222～224は和泉型瓦器椀である。12世紀代の所産。225は，十瓶山窯産須恵器椀である。

226～229は，SK3018の出土遺物である。226・227・229は土師質土器皿。すべて底部回転ヘラ切りで皿ＢⅢ－２形式と考えるが，226はやや小径に復元できる。

SB3002（第27図参照）

検出したSP3024・3035・3038・3041・3066を用い，復元した掘立柱建物である。SP3038は出土遺物及び埋土の特徴でⅠ期に後出するものと考えられる。他は出土遺物及び埋土の特徴ともⅠ期のものと大差を認めるものではないが，SB3001と重複する位置にあり，またⅠ期より後出しSP3038と同様の時期を示すものが散見されることから，同地点で建替えを想定した。

建物を構成するピットは，全て円形の掘り方をもち，南面のものが一回り大きく認められる。南東隅のSP3038は，底面で柱痕跡とみられる円形の窪みがあり，赤色に風化する安山石が器壁に沿い認められる。柱間距離は南面がやや広く3.0m前後，東面で2.5～2.7m前後を測り，主軸方位はN－11°－



第27図　SB3002平・断面図(1/80)

Wを示す。西側が調査対象外のため建物の規模は不明で，1×３間以上が考えられる。

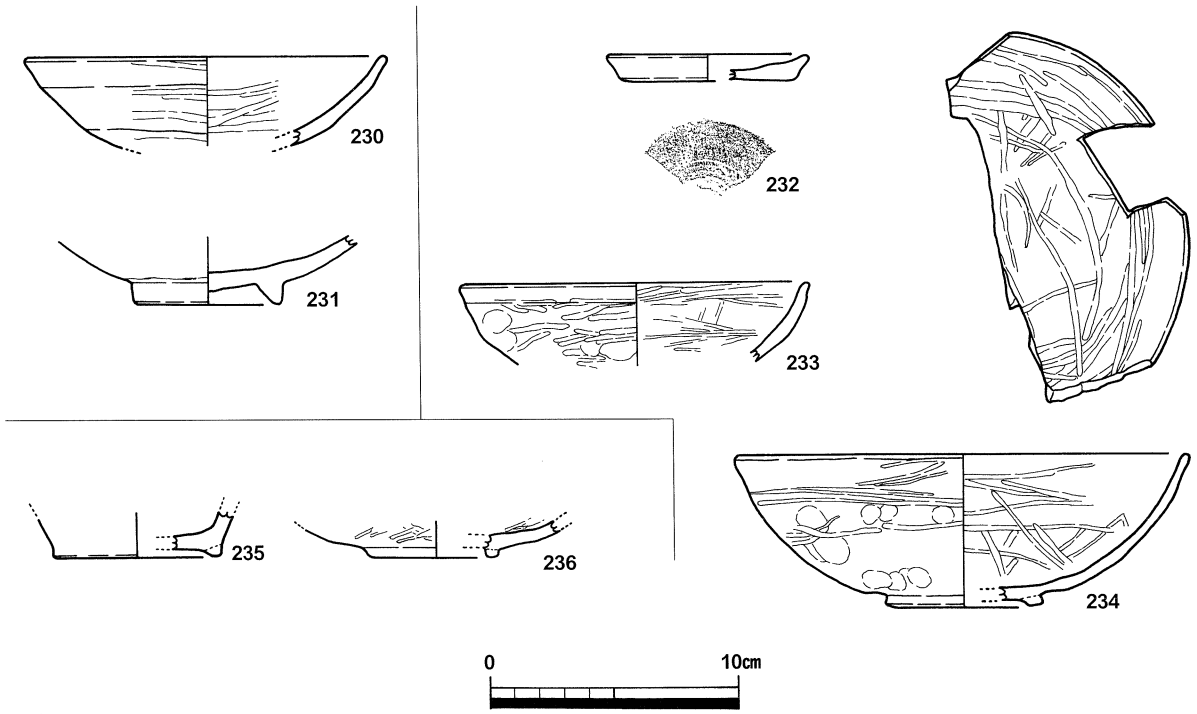
所属時期はSP3038の出土遺物及び埋土の特徴から，Ⅰ期以降の13～14世紀代（Ⅱ期）のものと想定できる。

SB3002出土遺物（第28図参照）

230・231は，SP3035の出土遺物である。230は，十瓶山産窯の土師質土器椀である。231は白磁碗で，横田・森田分類の碗Ⅱ類に相当する。

232～234は，SP3038の出土遺物である。232は土師質土器皿である。底部回転ヘラ切りで，短く外傾する口縁部をもつ。法量より，佐藤編年の皿ＢⅢ－４形式（13世紀前葉～14世紀前葉）に相当する。233・234は和泉型瓦器椀で，12世紀代と考えられる。

235・236は，SP3041の出土遺物である。235は須恵器（坏）底部で，焼成良好のもの。236は和泉型瓦器椀の底部である。



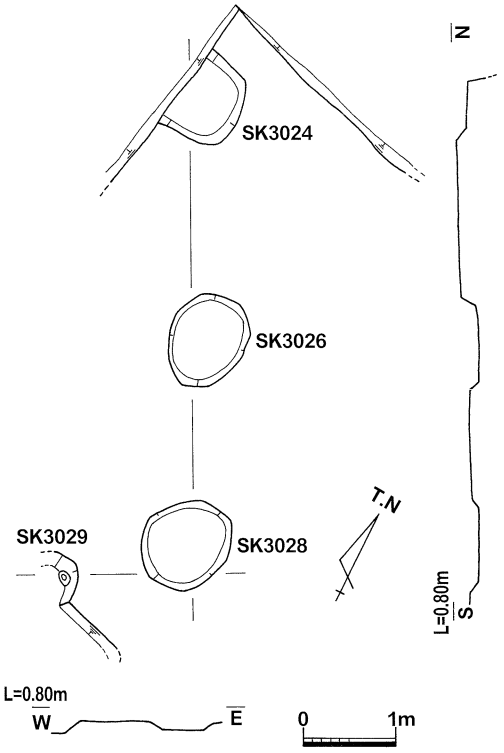
第28図　SB3002出土遺物(1/3)

SB3003（第29図参照）

検出したSK3024・3026・3028・3029を用い，復元した掘立柱建物である。

調査地の南西隅で円形の掘り方が並び，他は空白となることから復元を行った。大きな掘り方をもつSK3024・3026・3028を東面とし，これ以南で柱穴が確認されていないことから，SK3029が南面を構成するものとした。明瞭な柱痕は認められないが，柱間距離は南面が狭く1.3m，東面で2.5m前後と想定できる。主軸方位はN－24°－Wを示す。西側が調査対象外のため建物の規模は不明で，1×2間以上となる。

明瞭な所属時期を示す遺物は認められないが，SK3024・3026・3028の埋土の特徴がSK3020（SB3001）と同様であり，復元される主軸がSB3001と同方向のため，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と想定できる。



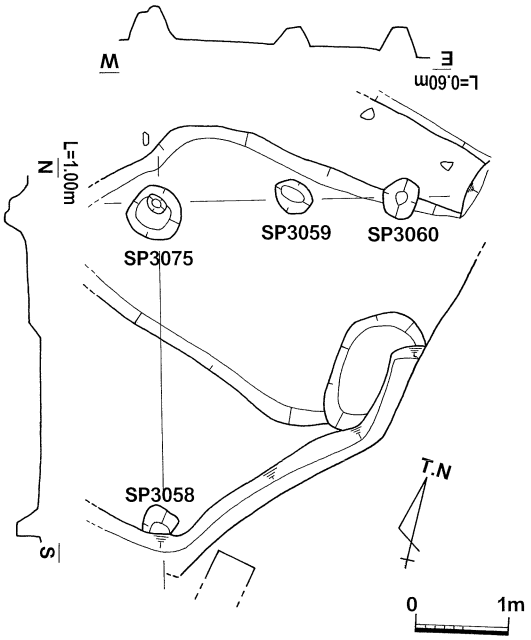
第29図　SB3003平・断面図(1/80)

SB3004（第30図参照）

検出したSP3058・3059・3060・3075を用い，復元した掘立柱建物である。

調査地の南東隅で柱穴がL字形に並び，他は空白となることから復元を行った。SP3058・3075はSK3015の底面で，SP3060はこれに切られて検出している。北西隅のSP3075の底面に柱痕跡とみられる楕円形の窪みが認められる。柱間距離は西面が広く3.3m，北面では1.2～1.4mになる。主軸方位はN－15°－Wを示す。南・東側が調査対象外のため建物の規模は不明で，1×2間以上となる。

明瞭な所属時期を示す遺物は認められないが，SP3059・3060の埋土の特徴及びⅡ期と推定されるSK3015に先行することから，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と想定できる。



第30図　SB3004平・断面図(1/80)

SP3030（第31図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.52m前後で，平面が長軸方向に0.38m，短軸方向に0.34mの円形である。掘り方南東側の壁面沿って赤色に風化した安山岩が並び，対面方向の底面が深くなっていることから，柱を据えていた可能性が考えられる。掘り方の中心部で，ほぼ完存する土師質土器皿（237）が浮いた状態で出土している。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3030出土遺物（第31図参照）

237は，土師質土器皿である。底部に回転糸切り痕が認められるもので，器形及び法量から佐藤編年の皿ＣⅠ形式（13世紀初頭）に相当するものと考えられる。

SP3052（第31図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.51m前後で，平面が長軸方向に0.64m，短軸方向に0.42mの楕円形である。掘り方の断面は，東西方向でW形を呈する。東西両端部の窪みの間，掘り方の中央部でほぼ完存する土師質土器皿（238）が浮いた状態で出土している。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3052出土遺物（第31図参照）

238は，土師質土器皿である。底部に回転糸切り痕が認められるもので，器形及び法量から佐藤編年の皿ＣⅠ形式（13世紀初頭）に相当する。239も土師質土器皿。器形及び法量から，佐藤編年の皿ＢⅢ－２形式（11世紀末～13世紀初頭）に相当するものと考えられる。

SP3026（第31図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.48m前後で，平面が長軸方向に0.39m，短軸方向に0.36mの円形である。掘り方の断面は，船底形を呈する。掘り方北側の壁面を中心に赤色に風化した安山岩が認められ，掘り方の中央部でほぼ完存する瓦器椀（240）が伏せられた状態で出土している。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3026出土遺物（第31図参照）

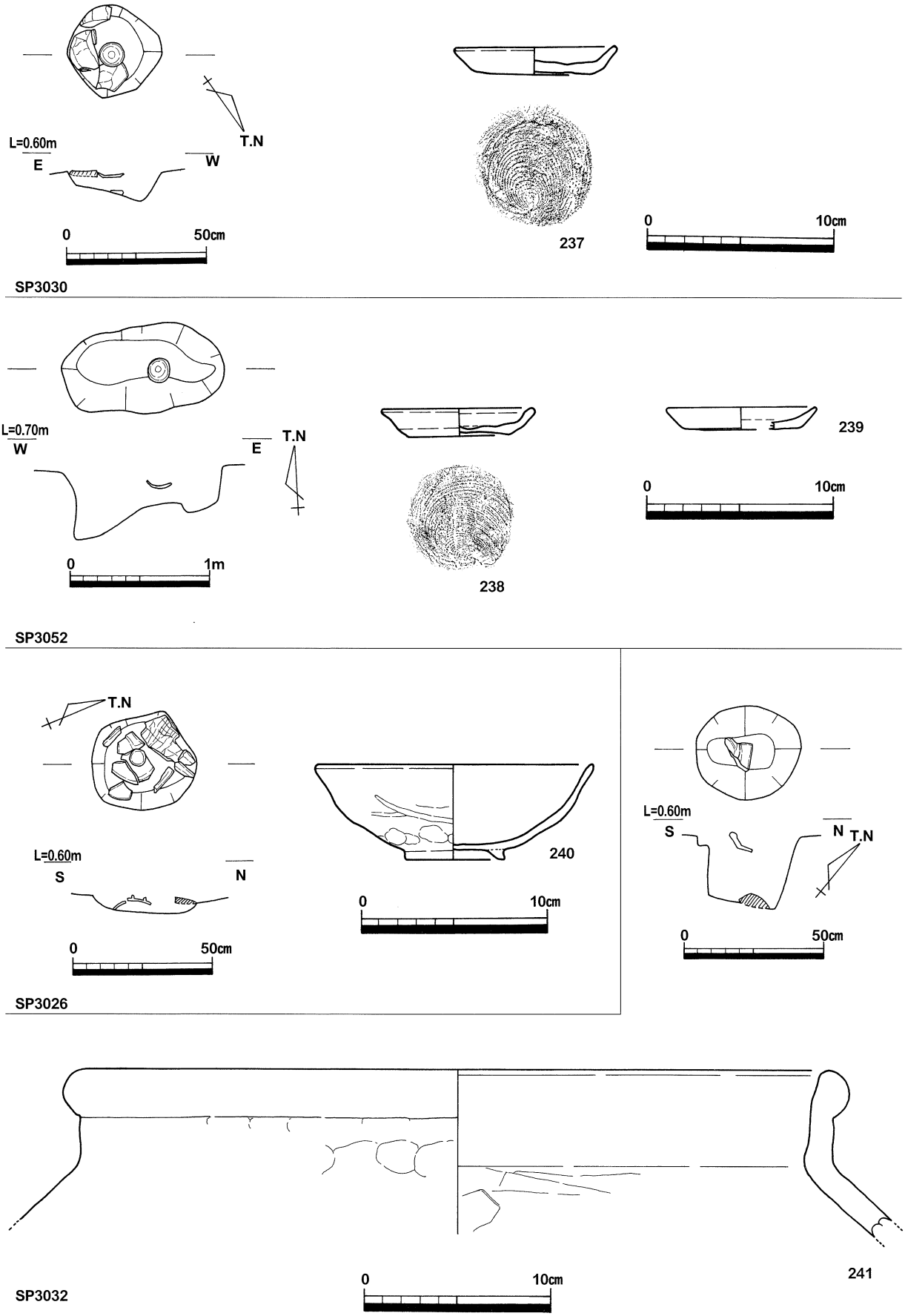
240は，和泉型瓦器椀である。器形より，尾上編年のⅡ－２・３期（12世紀中葉）に相当するものと考えられる。

SP3032（第31図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.53m前後で，平面が0.35mを測る円形である。掘り方の断面は箱形を呈し，深度は0.5m前後を測る。底面の中央部に赤色に風化した安山岩が認められ，備前焼甕の破片（241）が浮いた状態で出土している。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，13～14世紀代（Ⅱ期）と考えられる。

SP3032出土遺物（第31図参照）

241は，備前焼甕である。器形より，乗岡編年（乗岡2000）の中世２期ｂ・３期ａ（13世紀末～14世紀前半）に相当するものと考えられる。



第31図　SP3030・3052・3026・3032平・断面図(1/20)及び出土遺物(1/3)

SP3011（第32図参照）

調査地東端，SR3001の東岸部となる低地で検出した。検出した標高は0.53m前後で，東部が調査対象外となり規模は明確でないが，長軸方向では1.13mを測る。掘り方底面の縁辺に赤色に風化した安山岩が集まり，中央部が急激に窪む。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3011出土遺物（第32図参照）

242は，和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅡ－１期（12世紀前葉）に相当するとみられる。

SP3015（第32図参照）

調査地北西部で検出した。検出した標高は0.59m前後で，平面が長軸方向に0.39m，短軸方向に0.24mを測る楕円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。掘り方の南西部に赤色に風化した安山岩が認められる。詳細な所属時期は不明で，出土遺物から13世紀以降と考えられる。

SP3015出土遺物（第32図参照）

243は，土師質土器足鍋脚部である。

SP3021（第32図参照）

調査地西部で検出した。検出した標高は0.54m前後で，平面が長軸方向に0.24m，短軸方向に0.22mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3021出土遺物（第32図参照）

244は，十瓶山窯産須恵器椀の底部である。

SP3025（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.48m前後で，平面が長軸方向に0.24m，短軸方向に0.16mを測る楕円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3025出土遺物（第32図参照）

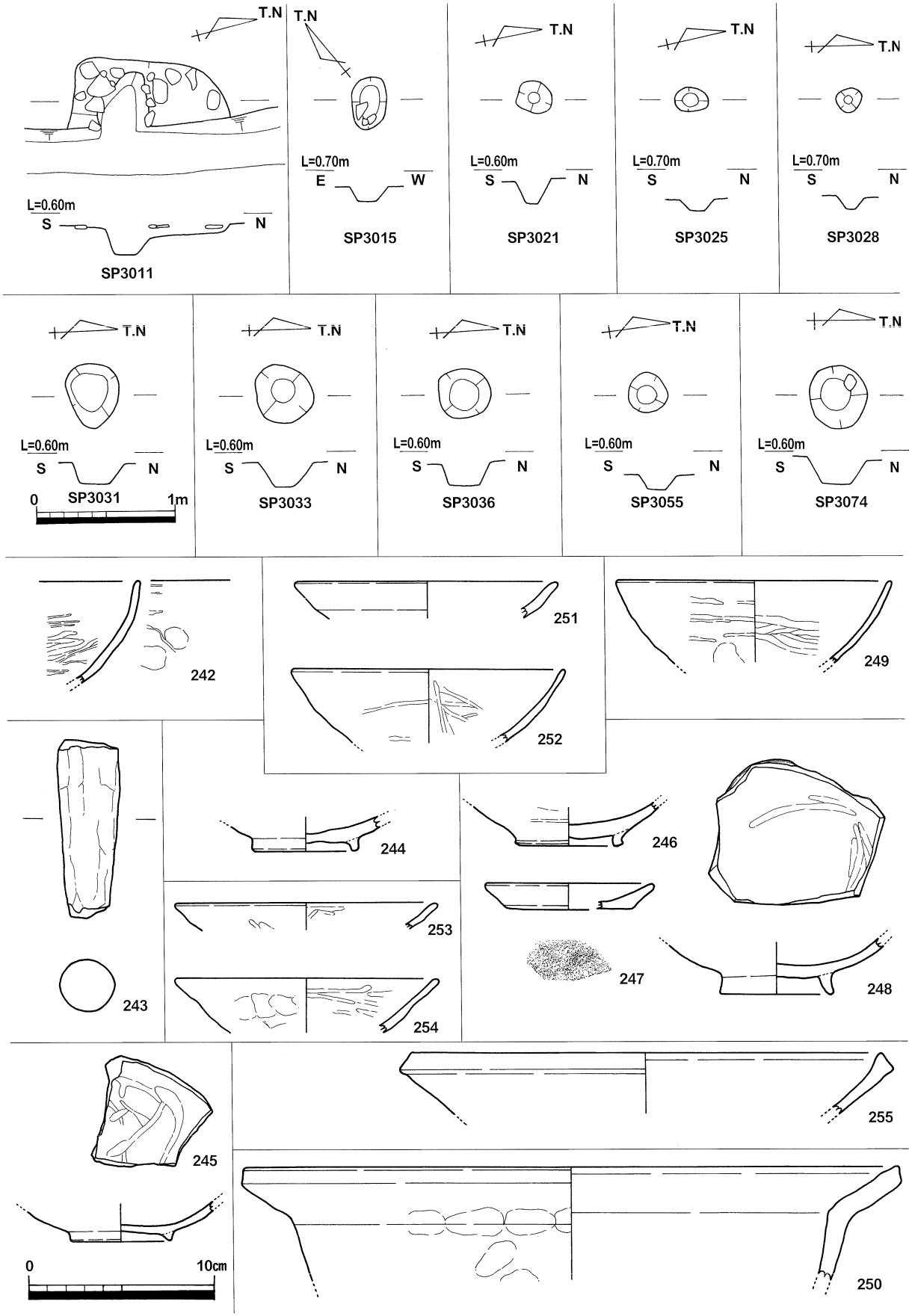
245は，和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅡ－１期（12世紀前葉）に相当するとみられる。

SP3028（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.51m前後で，平面が長軸方向に0.18m，短軸方向に0.15mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3028出土遺物（第32図参照）

246は，十瓶山窯産須恵器椀の底部である。佐藤編年の椀ＡⅡ－６形式（12世紀後半）に相当する。247は，土師質土器皿である。底部回転ヘラ切りで，法量より佐藤編年の皿ＢⅢ－２形式（11世紀末～13世紀初頭）に相当する。248は，吉備系土師質土器椀である。



第32図　SP3011・3015・3021・3025・3028・3031・3033・3036・3055・3074
平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)

SP3031（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.53m前後で，平面が長軸方向に0.44m，短軸方向に0.40mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は，出土遺物から12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）となるが，埋土の特徴より13～14世紀代（Ⅱ期）と考えられる。

SP3031出土遺物（第32図参照）

249は，和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅡ－２期（12世紀中葉）に相当するとみられる。

SP3033（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.53m前後で，平面が長軸方向に0.42m，短軸方向に0.40mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3033出土遺物（第32図参照）

250は，土師器甕。佐藤編年の甕ＥⅡ－１形式（11世紀中葉～12世紀後半）に相当する。

SP3036（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.48m前後で，平面が長軸方向に0.39m，短軸方向に0.36mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3036出土遺物（第32図参照）

251は，土師質土器（坏）口縁部である。252は，和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅡ－２期（12世紀中葉）に相当するとみられる。

SP3055（第32図参照）

SR3001内で検出した。検出した標高は0.47m前後で，平面が0.28mを測る円形である。掘り方の断面は，台形を呈する。図化では表現されていないが，掘り方の壁・底面に赤色に風化した安山岩が密集して見られた。所属時期は出土遺物より，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3055出土遺物（第32図参照）

253は，土師質土器（椀）口縁部である。254は，和泉型瓦器椀である。尾上編年のⅢ－１期（12世紀末）に相当するとみられる。

SP3074（第32図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.56m前後で，平面が長軸方向に0.44m，短軸方向に0.40mを測る円形である。掘り方の断面は台形を呈し，底面に安山岩が認められる。所属時期は埋土の特徴及び出土遺物から，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SP3074出土遺物（第32図参照）

255は，東播系須恵器捏鉢。外傾する体部で，やや内方向に肥厚する口縁端部より12世紀末～13世紀初頭に相当するものと考えられる。

SK3003（第33図参照）

調査地の北東部低地で検出した。検出した標高は0.41m前後で，平面が長軸方向に3.46m，短軸方向に3.34mを測る。平面は不整形な円形で，北面をSX1103に切られる。埋土には多量の獣骨及び鉄滓が認められ，廃棄土坑と考えられる。所属時期は15世紀代の包含層上面で認められることや，出土した遺物より16世紀代（Ⅲ期）と考えられる。

SK3003出土遺物（第33図参照）

256は，土師質土器鍋である。内耳が付く。257は，土師質土器擂鉢である。258は備前焼甕の口縁部。外傾する口縁部は，断面が扁平で外面に凹線が数条認められる。乗岡編年の中世６期（16世紀初頭～第３四半期）に相当するとみられる。

SK3013（第34図参照）

調査地の東部で検出した。検出した標高は0.50m前後で，平面が長軸方向に2.54m，短軸方向に1.19mを測る。平面は長方形を呈し，N－101°－Eの主軸方位を示す。断面は船底形で，埋土中には若干の赤色に風化した安山岩を含む。遺物量は少ない。所属時期は出土遺物より，13～14世紀代（Ⅱ期）と考えられる。

SK3013出土遺物（第34図参照）

259は，土師質土器足釜である。口縁部直下が内面側に肥厚し，小さな鍔部が付く。鍔直下には，爪形の工具痕が連続的に認められる。佐藤編年の足釜BⅢ類（14世紀後半）に相当するものと考えられる。

SK3015（第34図参照）

調査地の南東部で検出した。検出した標高は0.46m前後で，東面が調査対象外となり全容は不明だが，平面はやや不整形な長方形を呈し，長軸方向に4.00m以上，短軸方向に2.44mの規模をもつ。断面は船底形で，埋土中には若干の赤色に風化した安山岩を含む。遺物量は少ない。所属時期は，出土遺物に12世紀代のものも含まれるが，埋土の特徴がSK3013と同様相を呈することから13～14世紀代（Ⅱ期）と考えられる。

SK3015出土遺物（第34図参照）

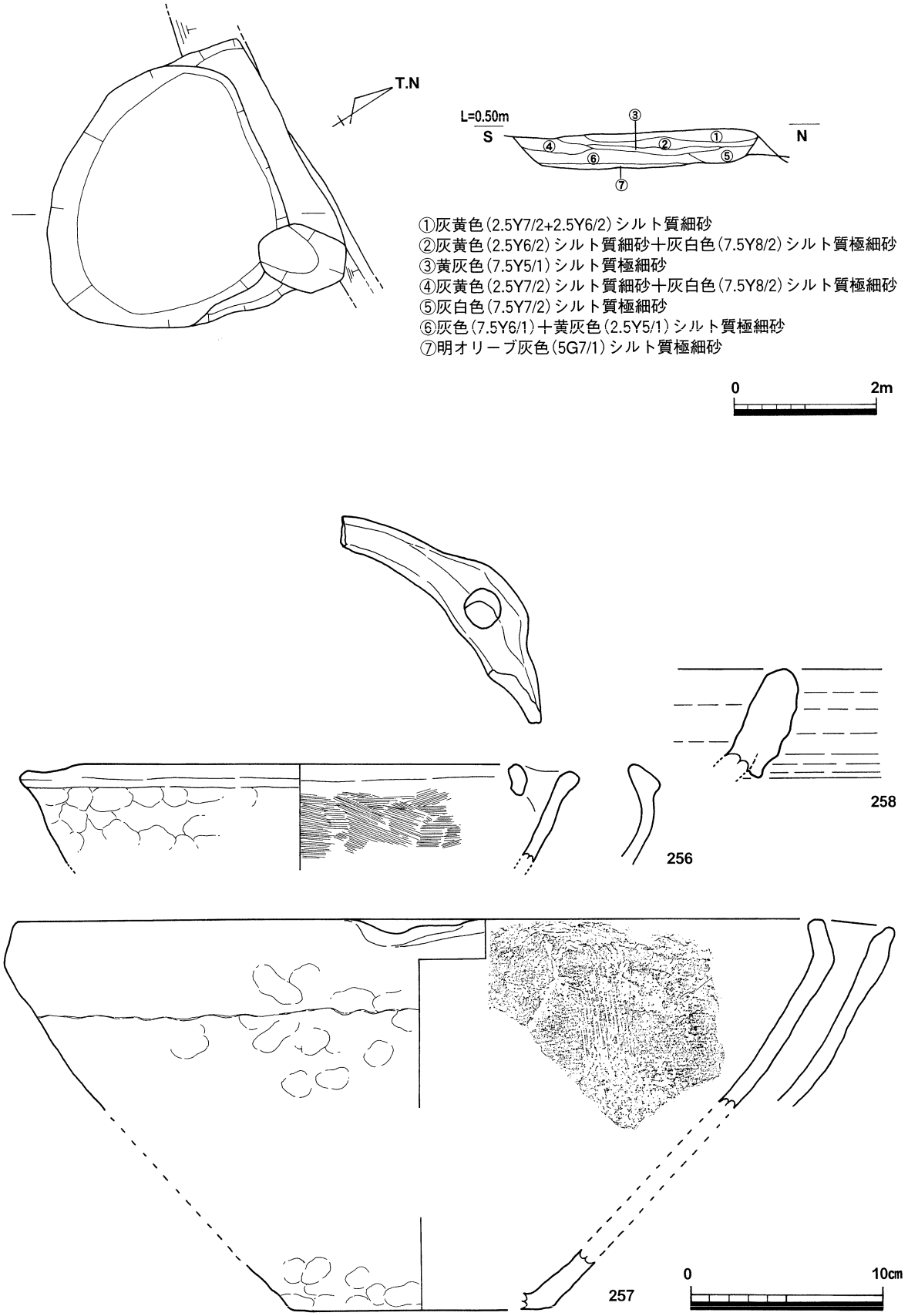
260は，和泉型瓦器椀の口縁部片である。261は，十瓶山窯産須恵器椀である。高台部に矮小化が認められる。

SK3016（第35図参照）

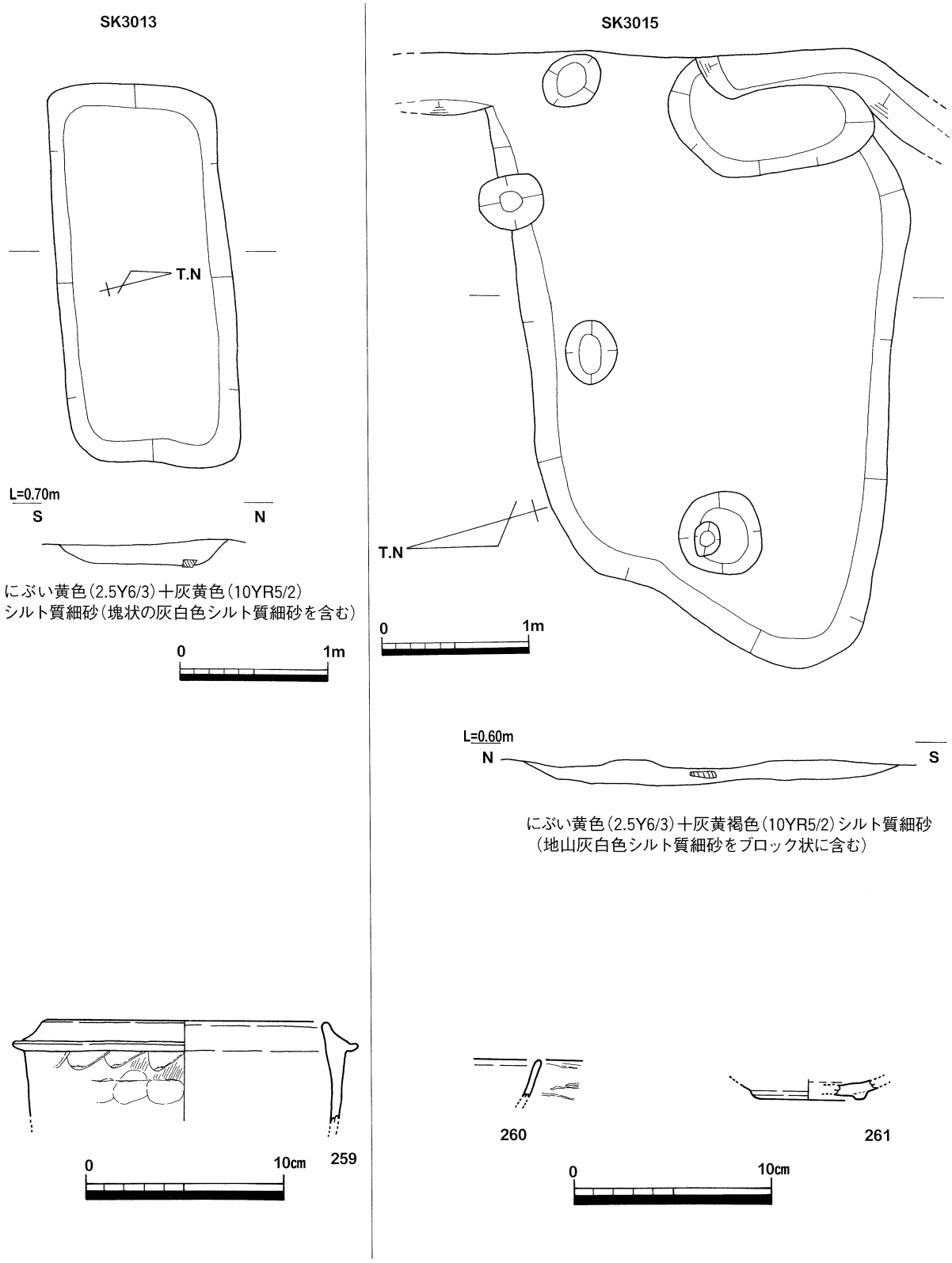
調査地の西端部微高地上で検出した，素掘りの井戸跡である。検出した標高は0.57m前後で，平面は2.00mの円形である。断面は箱形で，深度は1m以上を測る。埋土はレンズ状に堆積しており，最下層の10層付近で礫層に達し湧水が認められる。所属時期は，出土遺物に古相のものも混じるが，備前焼擂鉢より16世紀代（Ⅲ期）を中心とする時期と考えられる。

SK3016出土遺物（第35図参照）

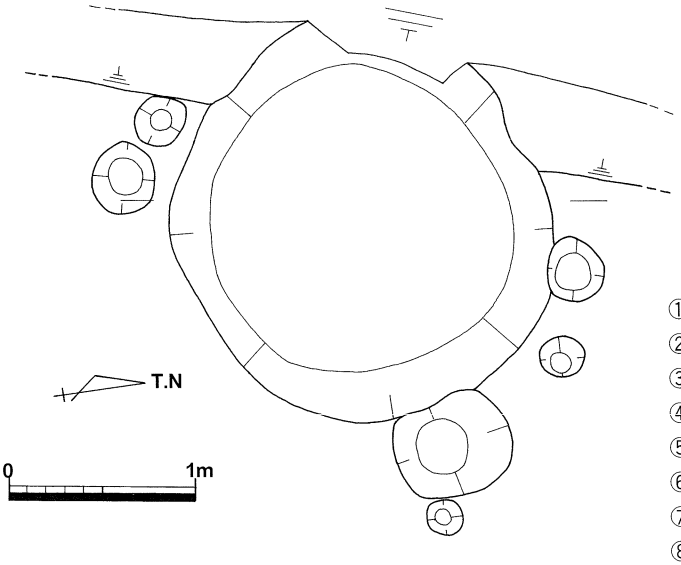
262は，和泉型瓦器椀の口縁部片である。263は，土師質土器足釜である。264・265は備前焼擂鉢の底部である。264は乗岡編年（乗岡1999）の中世６期（16世紀初頭～第３四半期）に相当するとみられる。265は斜め方向の擂目が認められ，近世１期（16世紀第２四半期末～17世紀初頭）に相当するとみられる。



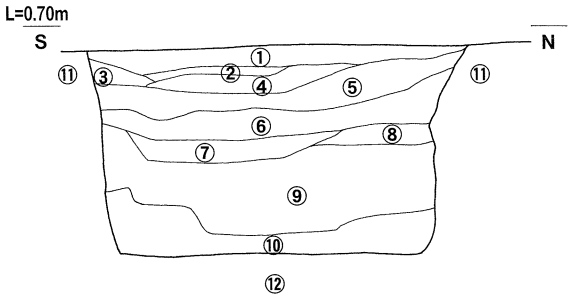
第33図　SK3003平・断面図(1/80)及び出土遺物(1/3)

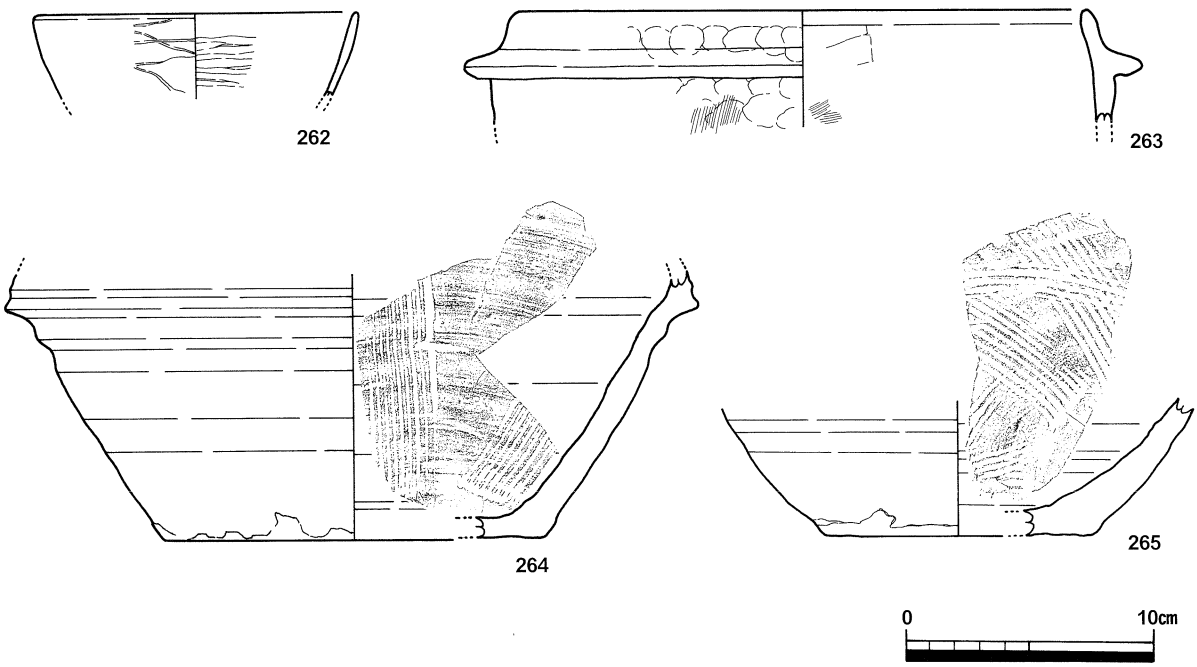


第34図　SK3013・3015平・断面図(1/80)及び出土遺物(1/3)



①灰黄褐色(10YR4/2)礫混極細砂
②暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土
③黄灰色(2.5Y5/1)礫混シルト質細砂(⑪を塊状に含む)
④黄灰色(2.5Y6/1)シルト質細砂
⑤灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂(小石⑪を塊状に含む)
⑥黄灰色(2.5Y5/1)砂混シルト(拳大の石、⑪を塊状に含む)
⑦灰色(N4/0)砂混シルト(拳大の石を含む、しまらない)
⑧灰色(N4/0)シルト質極細砂(⑪を塊状に含む)
⑨暗青灰色(5B4/1)～暗灰色(N3/0)砂混シルト
(拳～頭大の石を含む、有機木質遺物を含む)
⑩緑灰色(10G6/1)～暗灰色(N3/0)細砂
⑪にぶい黄色(2.5Y6/4)極細砂(第3面地山)
⑫暗緑灰色(5G3/1)礫(湧水層)





第35図　SK3016平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)

SK3005（第36図参照）

調査地の北東部低地で検出した。検出した標高は0.42m前後で，平面が長軸方向に1.70m，短軸方向に1.24mを測る。平面は不整形な円形で，南面でSD3003を切る。埋土には多量の獣骨及び鉄滓が認められ，廃棄土坑と考えられる。所属時期は15世紀代の包含層上面で認められることや，出土した遺物より16世紀代（Ⅲ期）と考えられる。

SK3005出土遺物（第36図参照）

266は，土師質土器足鍋の脚部。267は備前焼擂鉢の口縁部で，近世１期（16世紀第２四半期末～17世紀初頭）に相当するとみられる。

SK3007（第36図参照）

調査地の東端部で検出した。検出した標高は0.61m前後で，東面が調査対象外となり全容は不明だが，平面は楕円形を呈し，長軸方向に1.28m以上，短軸方向に1.12mを測る。掘り方の北西部に，赤色の安山岩が集まる。15世紀代の包含層が当地点以南で不明瞭となっており，所属時期の上・下限は特定されない。出土遺物では14世紀（Ⅱ期）以降と考えられるが，同様相を示すSP3011の存在等から12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と推定される。

SK3007出土遺物（第36図参照）

268は，産地不明の土師質土器足鍋。鍔端部が肥厚し，体部が張る器形になるものとみられる。詳細な時期は不明だが，14世紀後半～15世紀前葉のものと推定される。

SK3019（第36図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.63m前後で，平面は方形を呈し，長軸方向に0.76m，短軸方向に0.72mを測る。北面の掘り方は，ピットと重複し検出されている。断面は船底形を呈し，南西部隅の底面にピットが認められる。所属時期は，出土遺物より13・14世紀（Ⅱ期）と考えられる。

SK3019出土遺物（第36図参照）

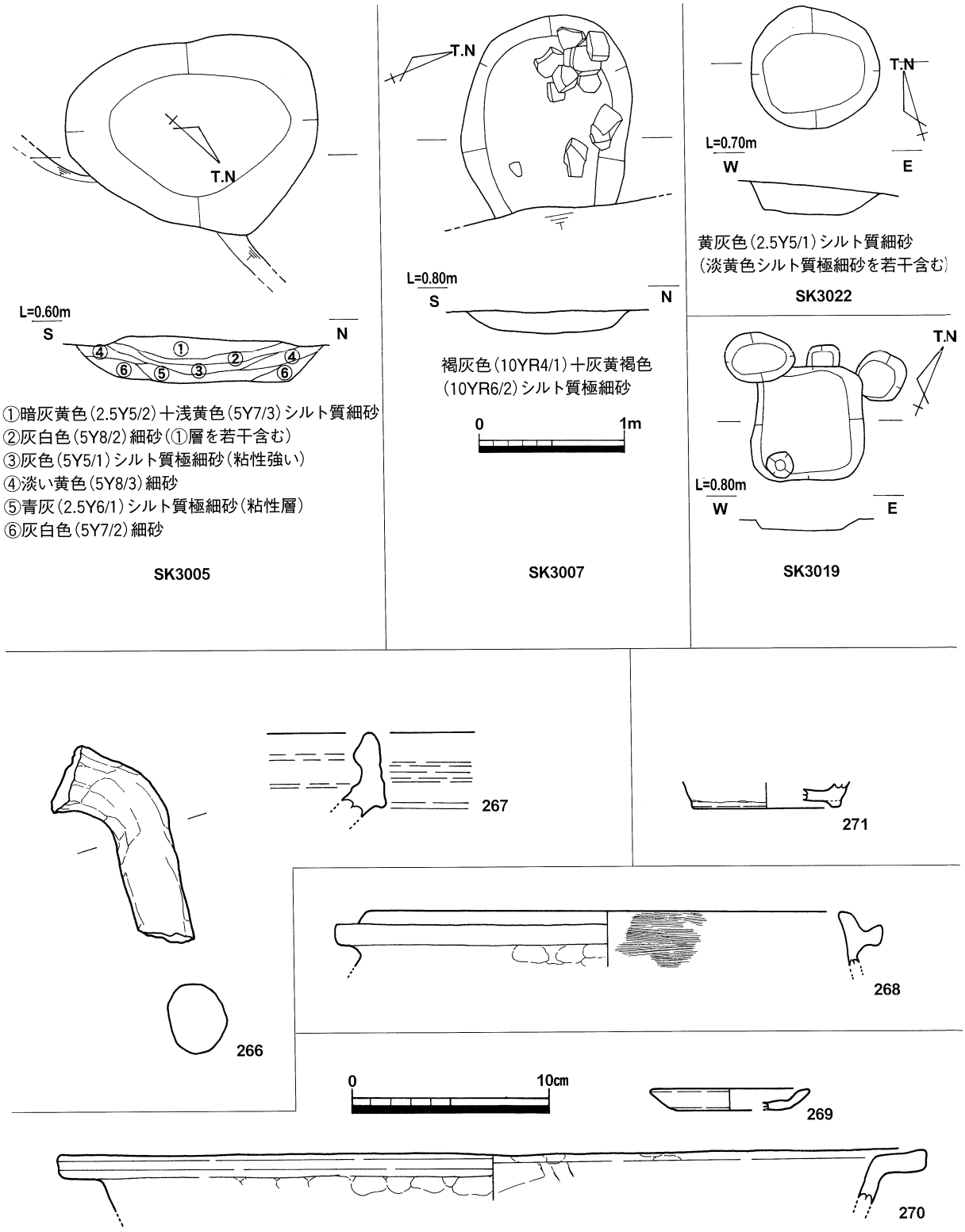
269は，土師質土器皿である。底部回転ヘラ切りで，佐藤編年の皿ＢⅢ－２・３形式とみられる。270は，土師質土器鍋である。佐藤編年の鍋ＡⅡ－１類（14世紀前葉）に相当するものと考えられる。

SK3022（第36図参照）

SR3001の西岸部である微高地上で検出した。検出した標高は0.68m前後で，平面は円形で，長軸方向に0.88m，短軸方向に0.82mを測り，断面は船底形を呈する。所属時期は埋土の特徴より，12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と考えられる。

SK3022出土遺物（第36図参照）

271は，須恵器（坏）底部である。



第36図　SK3005・3007・3019・3022平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)

SK3004（第37図参照）

調査地の北東部低地で検出した。検出した標高は0.42m前後で，平面は1.4m程の円形を呈する。掘り方は段掘りのもので，南側が深くなっている。埋土の堆積状況より中央部の円形となる掘り込みが後出して認められ，また最下層で湧水が認められることから，井側をもった井戸跡の可能性が考えられる。出土遺物がなく所属時期は明確ではないが，15世紀代の包含層上面で認められることから，16世紀代（Ⅲ期）と考えられる。

SK3006（第37図参照）

調査地の東端部で検出した。検出した標高は0.59m前後で，平面は楕円形で，長軸方向に1.28m，短軸方向に1.22mを測る。断面は船底形を呈するが，底面が凹凸になっている。出土遺物がなく所属時期は明確ではないが，15世紀代の包含層上面で認められることから，16世紀代（Ⅲ期）と考えられる。

SK3014（第37図参照）

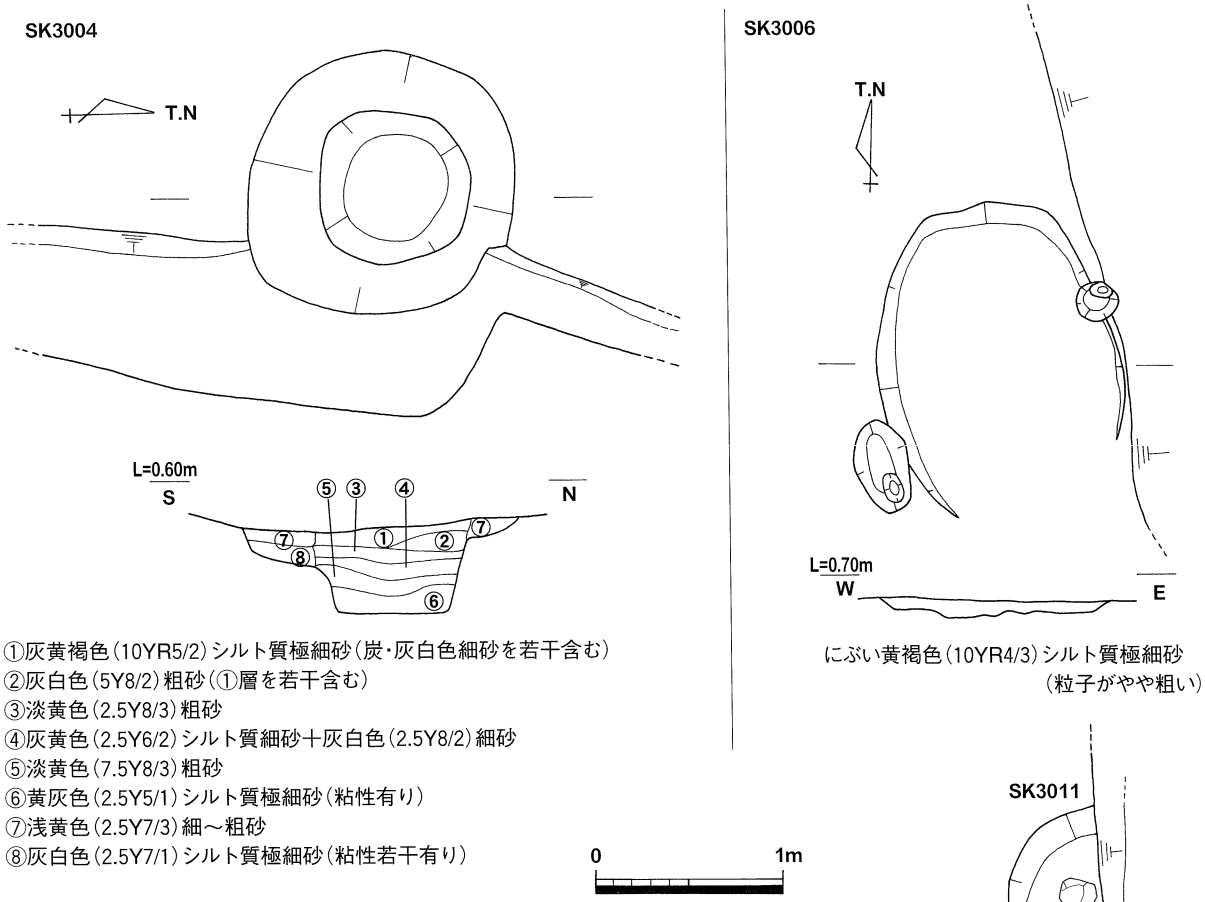
調査地の南東部で検出した。検出した標高は0.50m前後で，東面が調査対象外となり全容は不明だが，平面は長方形を呈し，長軸方向に2.36m以上，短軸方向に1.06mの規模をもつ。主軸方位はN－103°－Eを示す。断面は船底形を呈し，西側の底面でピットが検出されているが，本遺構に伴うものか不明である。出土遺物がなく詳細な時期は不明だが，SK3013と同様相を呈することから13・14世紀代（Ⅱ期）の所産と考えられる。

SK3011（第37図参照）

調査地の東端部で検出した。検出した標高は0.57m前後で，東面が調査対象外であり，また南側をSK3012に壊されており全容は不明だが，検出された平面は楕円形と推定されるもので，長軸方向に1.10m，短軸方向に0.58mを測る。掘り方内に，赤色の安山岩が密集して認められる。出土遺物がなく詳細な時期は不明だが，同様相を示すSP3011の存在等から12世紀～13世紀初頭（Ⅰ期）と推定される。

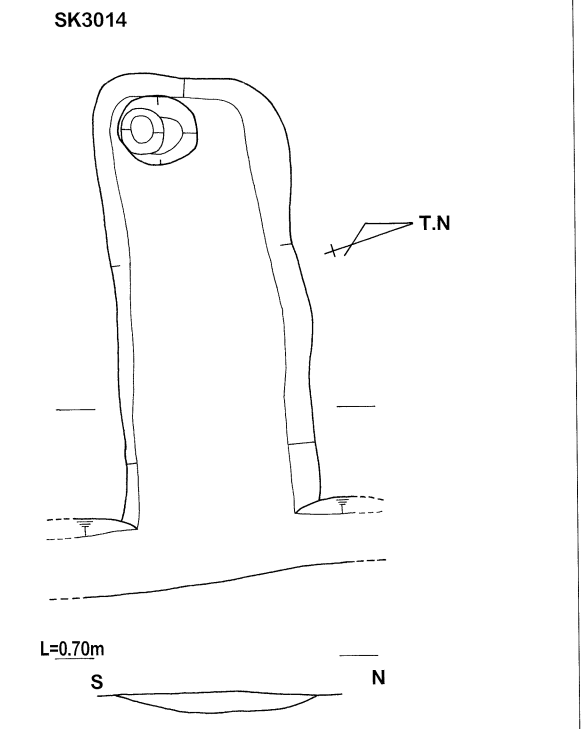
SK3012（第37図参照）

調査地の東端部で検出した。検出した標高は0.53m前後で，東面が調査対象外となり全容は不明だが，平面は長方形を呈し，長軸方向に3.20m，短軸方向に1.62m以上の規模をもつ。主軸方位はN－8°－Eを示す。断面は船底形を呈し，西側の底面ではピットや赤色の安山岩が散在して認められる。出土遺物がなく詳細な時期は不明だが，SK3013と同様相を呈することから13・14世紀代（Ⅱ期）と考えられる。



①灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(炭・灰白色細砂を若干含む)
②灰白色(5Y8/2)粗砂(①層を若干含む)
③淡黄色(2.5Y8/3)粗砂
④灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂十灰白色(2.5Y8/2)細砂
⑤淡黄色(7.5Y8/3)粗砂
⑥黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂(粘性有り)
⑦浅黄色(2.5Y7/3)細～粗砂
⑧灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細砂(粘性若干有り)

にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細砂
(粒子がやや粗い)



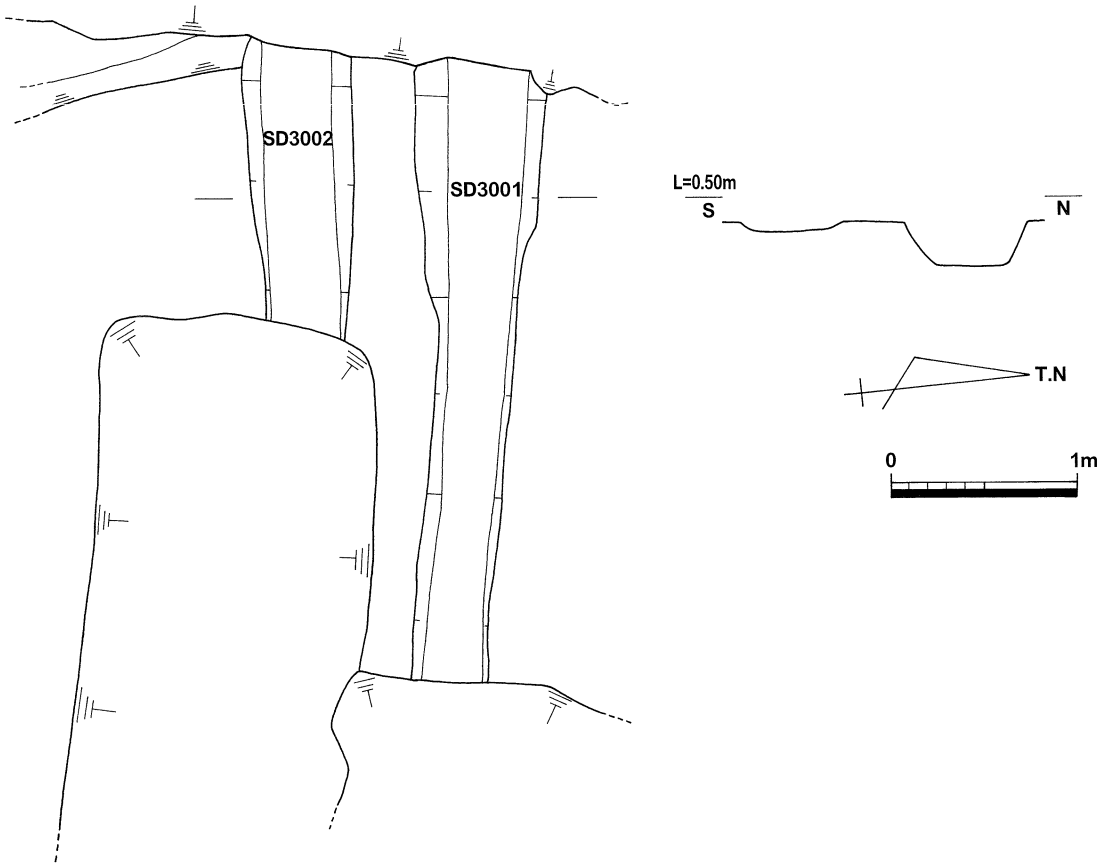
にぶい黄色(2.5Y6/3)十灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂
(地山灰白色シルト質細砂をブロック状に含む)

にぶい黄色(2.5Y6/3)十灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂
(地山灰白色シルト質細砂をブロック状に含む)

第37図　SK3004・3006・3014・3011・3012平・断面図(1/40)

SD3001・3002（第38図参照）

調査地の北西隅で検出した東西方向に併走する溝である。検出した標高は0.38m前後で，東側をSK3001・SX1103に壊される。検出幅は0.68m（SD3001），0.58m（SD3002）を測り，深度は0.23m（SD3001），0.04m（SD3002）で，北側のSD3001が深くやや規模が大きくみられる。出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが，北方向へ下がる砂堆に掘り込まれていることから近世城下の整備後のものとは考えにくく，また16世紀代の遺構が周囲に集中していることから，これらと同時期（Ⅲ期）と考えられる。



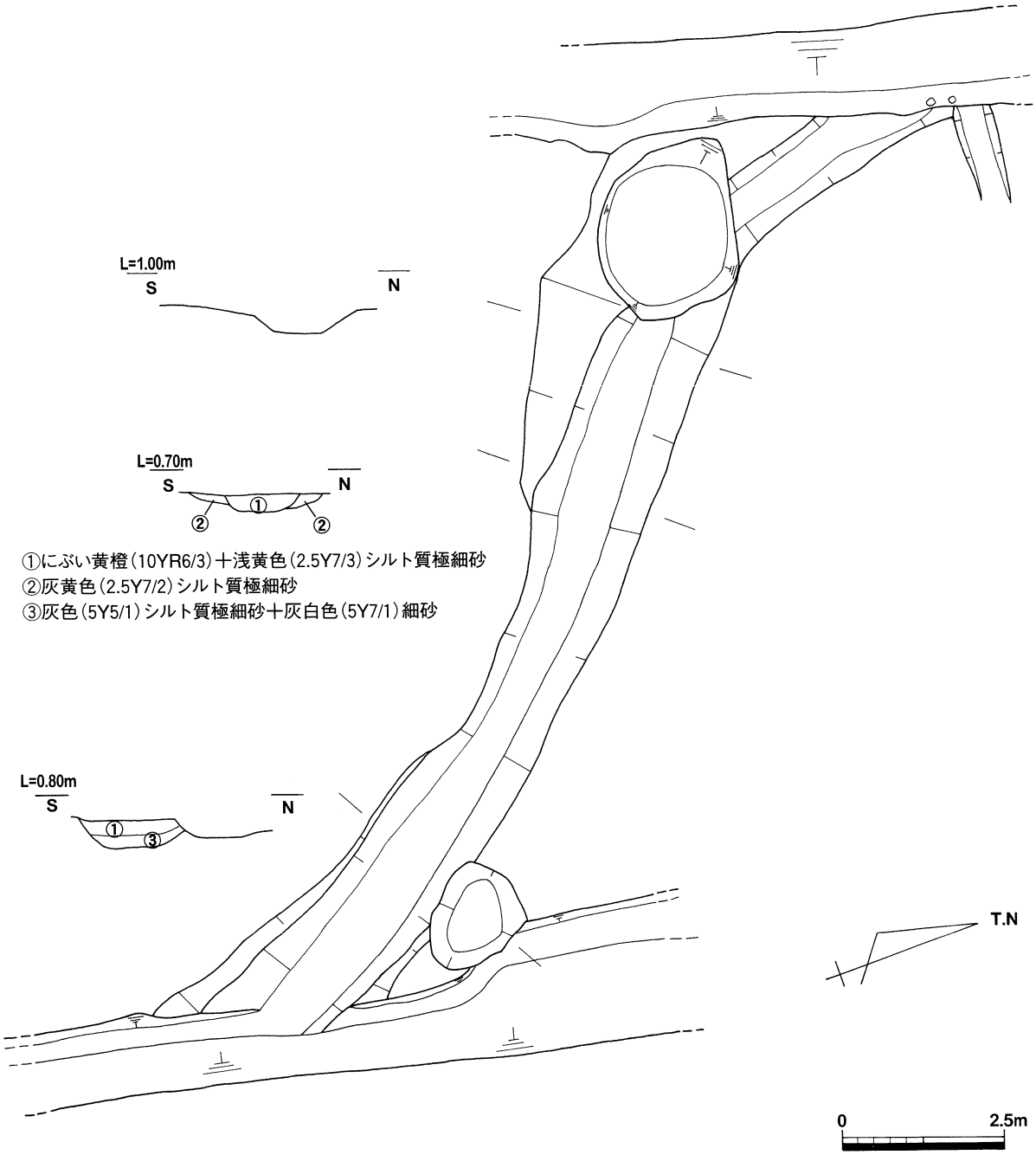
第38図　SD3001・3002平・断面図(1/40)

SD3003（第39図参照）

調査地の北半部で検出した東西方向に走る溝である。検出した標高は0.38～0.55mで，全体的に北岸部側が低い。底面の標高は0.04～0.28mを測り，南東方向へ下るがSR3001と接する箇所より急激に深さを増し，断面は西部で船底形，東部では台形となる。平面では等高線上を蛇行して走り，ほぼ地形に沿って開削されている。所属時期はSR3001より後出することから13世紀初頭を上限とし，出土遺物から14世紀後半に埋没するものと考えられる（Ⅱ期）。

SD3003出土遺物（第40図参照）

272は，龍泉窯系青磁碗の口縁部。273は，土師質土器坏。乗松編年の坏1b形式（14世紀前半）に相当する。274・275は，土師質土器鍋である。274は断面「て」字状の形態で，佐藤編年の鍋BⅡ類（14世紀後半）に，275は佐藤編年の鍋AⅡ－1類（14世紀前半）に相当する。276・277は，土師質土器足釜。276は佐藤編年の足釜BⅡ・Ⅲ類（14世紀代），277は足釜BⅡ類（14世紀前半）に相当すると考えられる。278・279は，土師質土器足釜の脚部。

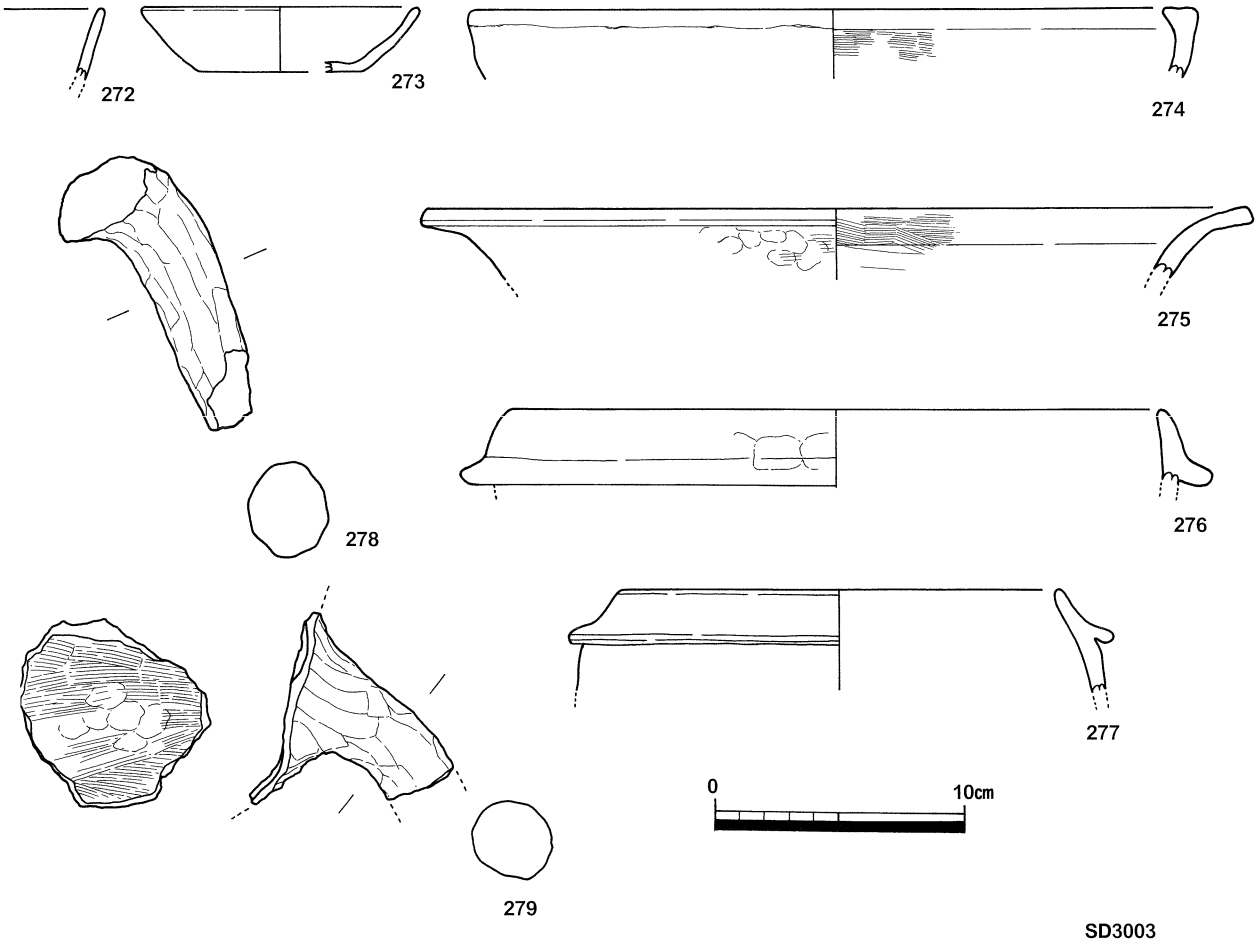


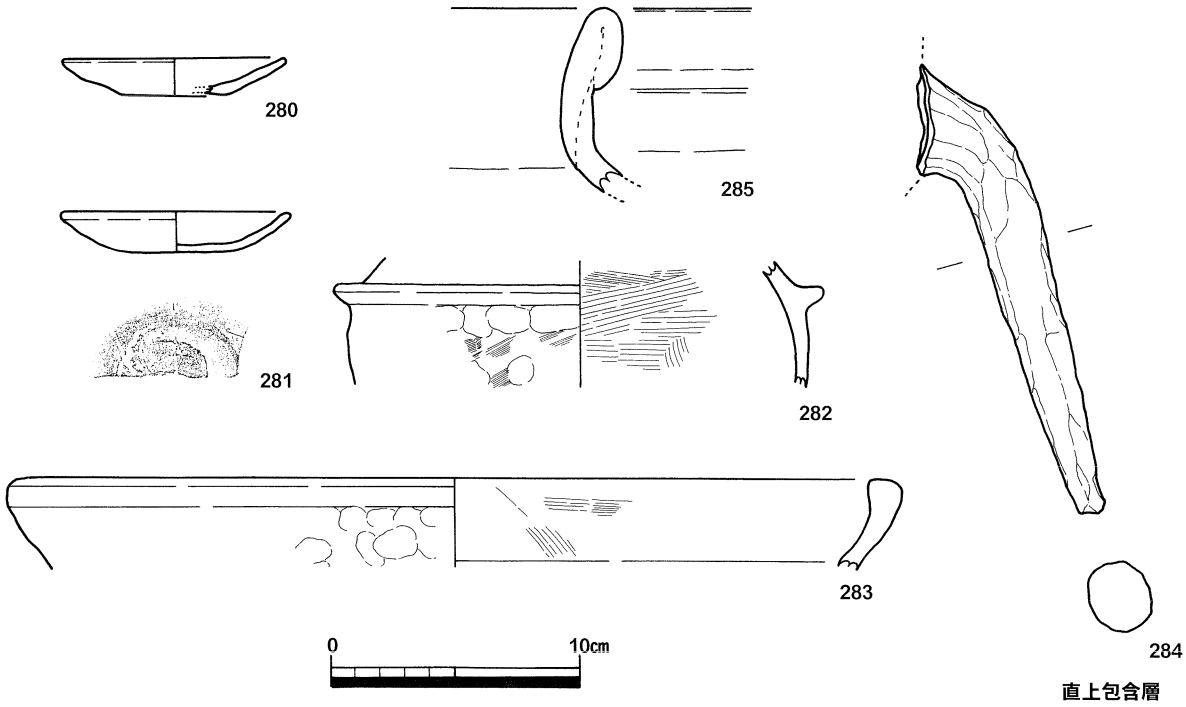
第39図　SD3003平・断面図(1/100)

SD3003直上包含層出土遺物（第40図参照）

調査地北東部一帯に広がる砂堆中のもので，SD3003検出にあたり得られた遺物である。15世紀前半までの遺物が認められる。

280・281は，土師質土器皿である。280は乗松編年の坏１ｅ形式（14世紀末～15世紀初頭），281は坏１d形式（14世紀後半）に相当する。282は，土師質土器足釜である。佐藤編年の足釜ＢⅡ類（14世紀前半）に相当する。283は，土師質土器鍋の口縁部である。274より丸みを帯びたもので，佐藤編年の鍋ＢⅢ類（14世紀末～15世紀前葉）に相当するものと考えられる。284は，土師質土器足釜の脚部。285は，備前焼甕口縁部である。扁平な玉縁をもつことから，乗岡編年の中世３b～４期（14世紀末～15世紀前半）に相当すると考えられる。





第40図　SD3003・SD3003直上包含層出土遺物(1/3)

3，近世の遺構・遺物

SX3001（第41図参照）

第３遺構面中央部で検出した大型の性格不明遺構である。検出作業は中世の遺構面と同じ砂堆上面で行ったが，第２遺構面の基盤層直下より確認されたもので，第３遺構面までの機械掘削中に瓦礫を含んだ粘土質の覆土が調査地の中央部一帯で認められている。

検出した標高は0.6m前後で，不整形を呈する。平面は長軸方向に12.4m，短軸方向に8.7mの規模をもつ。掘り方の上端部は，南北の両端が浅く張り出すため南北方向に長く，張り出した箇所には10cm足らずの浅い長方形や円形の窪みが認められる。また掘り方の下端部では，北西及び北東隅に突出する箇所があるが，ほぼ方形を呈している。底面は中央部へとやや窪み，最深部で海抜付近を測る。

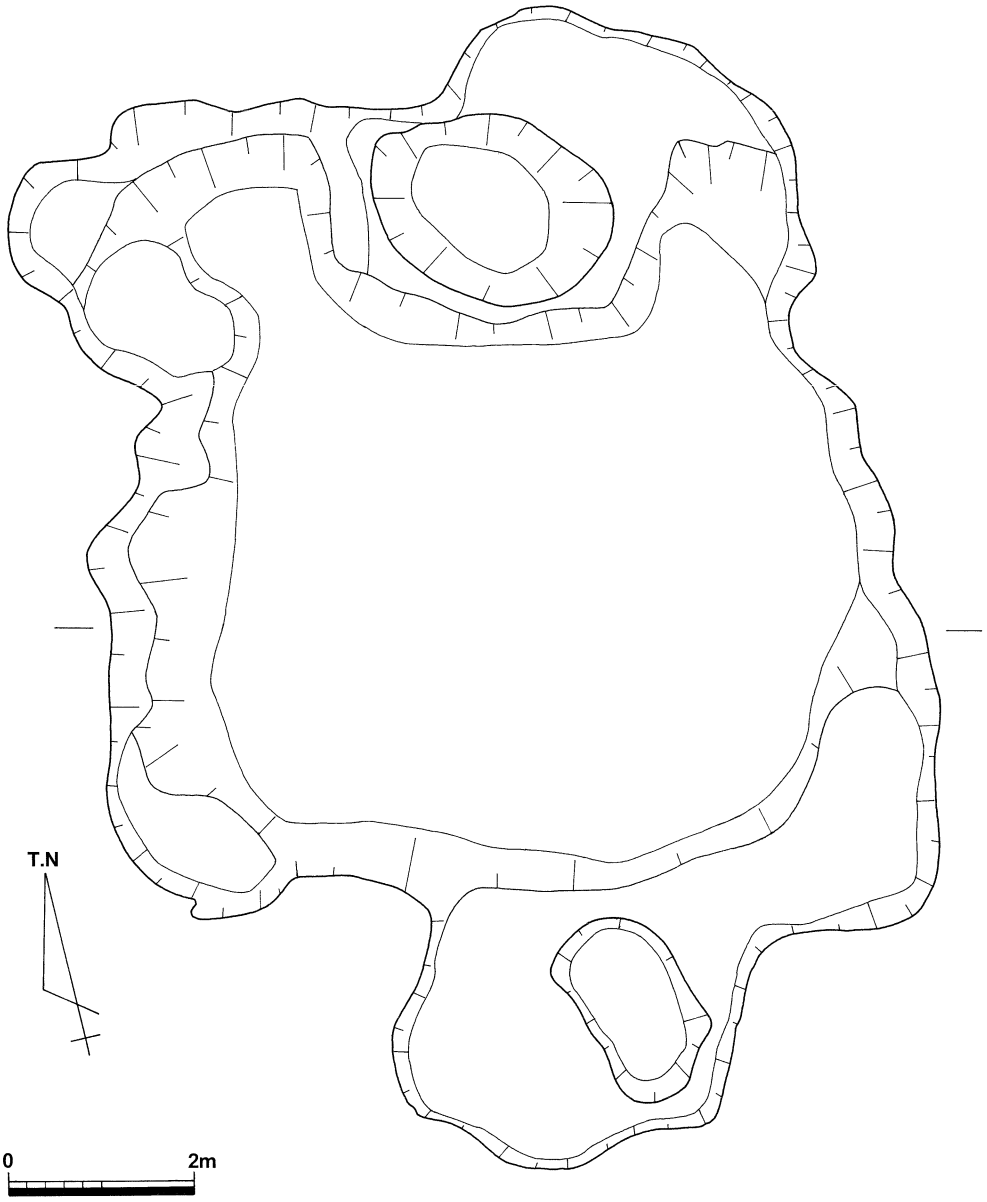
埋土の堆積状況では，最下層（13層）を除き，基本的には礫や瓦等を含んだ粘質土層が両側から埋積するものであり，基盤が軟質な砂堆面であることから，入念に埋め戻したものと考えられる。最下層は木質遺物等有機物を多く含むやや泥炭化した堆積層で，木片が水平状に堆積しているのが観察されたことから，底部では滞水していた状況がうかがわれる。

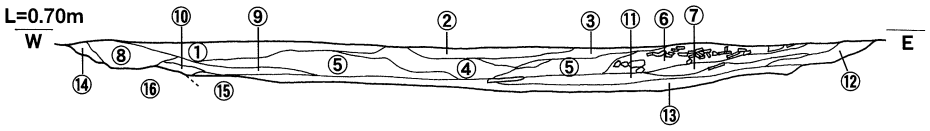
遺物の出土状況では，遺構の東側で完形に近い多量の瓦が炭化物を伴い認められ，陶磁器等は北西部で多く見られた。出土量は陶磁器・土器類がコンテナ約20箱分で，この他に漆器，部材等の木製品があるが，本遺構が塵溜として使用された印象はない。遺物は最下層のものと，それ以外のものを分けて取り上げたが，最下層のものは木製品を除けば少量しかなく，上部層との明確な時期差を想定できない。出土遺物より18世紀中葉頃（Ⅳ期）に短期間で埋没した遺構と考えられる。

SX3001出土遺物（第42～53図参照）

図化したものは一部であるが，陶磁器・土器類では17世紀末～18世紀中葉期のものが主体になっている。肥前系陶器では，刷毛目・呉器手・京焼風陶器碗等があり，大橋編年のⅢ・Ⅳ期で17世紀後半～18世紀前半とみられるもの他，陶胎染付や高台の高い刷毛目鉢がある。肥前系磁器では，高台断面Ｕ字形（径小）やくらわんか碗や蛇ノ目釉剥ぎの皿等があり，少量だが青磁染付や蛇ノ目凹型高台（低）が認められ，大橋編年のⅢ期末～Ⅳ期で18世紀中葉までと想定される。瀬戸・美濃系陶器では腰錆碗，片口等が少量であるが認められる。京・信楽系陶器では，色絵の丸碗が多量に認められ，錆絵を描く染付碗や香炉・火入，壺，急須等の多様な器種がある。備前系陶器では，堺・明石産のものを含む擂鉢や灯明皿，徳利等が認められる。土師質土器では，佐藤ＡⅥ・Ⅷ形式に相当するとみられる在地産の皿や焙烙（器高の深めで，内耳孔が貫通するもの）が多くみられる他，火鉢類や甕，人形等がある。以上のように，18世紀中葉期の肥前系磁器や，少量の瀬戸・美濃系陶器に対し多量の京・信楽系陶器が存在する点からは，高松城編年（松本2003）での様相６（18世紀第３四半期）に該当するものと考えられる。なお下層より出土した陶磁器に299・301の肥前系磁器等があるが，現況では上層とした他のものと時期差を想定できない。この他，土師質土器皿等の中世土器や17世紀中葉までとみられる肥前系陶磁器等が少量存在するが，摩滅を伴う小片が多く16世紀代（Ⅲ期）の混入及び本遺構に直接関連するものではないと考えられる。

286は，産地不明の磁器皿である。片原町遺跡の出土品に同様のものが認められる。漳州窯





①灰黄褐色(10YR5/2)～黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混シルト質粘土
(褐鉄鉱を多く含む)第2面基盤整地土と酷似
②青灰色(5B5/1)砂混粘土(炭化物を含む)
③黒色(10YR2/1)シルト質細砂(炭化物を多量に含む)
④青灰色(5B5/1)粘土
⑤黄灰色(2.5Y4/1)砂混シルト質粘土
⑥青灰色(5B5/1)～にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土
(瓦片を多量に含む、鉄分沈着著しい)
⑦青灰色(5B5/1)砂混シルト質粘土(炭化物⑪層を含む)
⑧青灰色(5B5/1)～黄灰色(2.5Y5/1)粘土
(拳～人頭大の石を多量に含む、褐鉄鉱を含む)
⑨黄灰色(2.5Y5/1)シルト質粘土
⑩黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混シルト
⑪灰黄褐色(10YR4/2)砂混シルト質粘土(木片・炭化物を含む)
⑫黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細砂(⑮・⑯層が混じる)
⑬灰オリーブ色(5Y4/2)粘土(上端部に木片が水平堆積・やや泥炭化)
⑭黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細砂
⑮明緑灰色(10G7/1)極細砂(しまらない、やや粘質)
⑯浅黄色(5Y7/4)極細砂(しまる)

②～⑭SX3001埋土・⑮中世の堆積(埋没流路)

第41図　SX3001平・断面図(1/80)

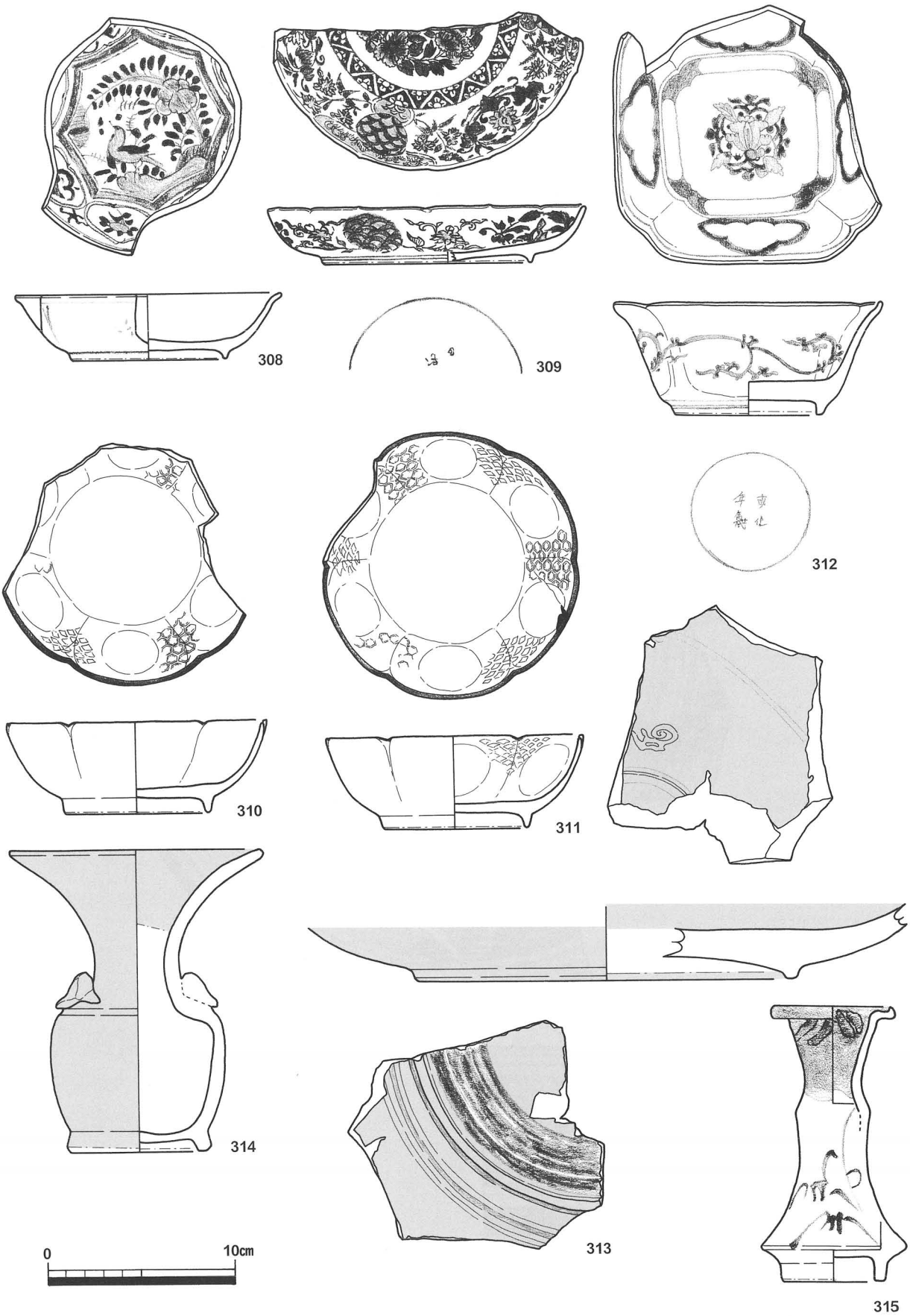
系のものか，或は初期伊万里であろう。287は大振りの陶器茶碗。器高が高く腰から高台にかけて尻窄む器形で，口縁は端反形になっている。やや丸みを帯びた腰部の上端には凹線が数条巡っている。高い高台部の内側には渦を巻く箆状痕が認められ，脇に角印とみられる破風高の刻印が認められる。釉は灰～白色にやや濁るものが薄く全面に施されており，胎土は浅黄色～橙系を呈するものでやや精緻さに欠けている。理兵衛焼との関連がうかがわれるが，本品は肥前系陶器に似た印象を受ける。

288・289は，肥前系陶器の刷毛目碗である。290は肥前系陶器で，刷毛目の皿。288・289と同様，黒褐色の鉄釉・白土を施して，外面には波状の櫛目を入れている。内面は打ち刷毛状に白土を施す。見込みには蛇ノ目釉剥ぎを行い，釉剥ぎ部分には鉄錆の塗布が認められる。291は肥前系磁器紅皿。292～297は肥前系磁器紅猪口。笹文を描く（292～294）ものが多量に出土している。296は色絵で，蓋付のもの。298・299は肥前系磁器碗で，くらわんか手のもの。大振りの298は，見込みにコンニャク印判の五弁花，高台内に「大明年製」銘款が認められる。299は見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し，外面には梅樹文が認められる。300・307は，肥前系磁器碗・蓋である。器壁の薄い丸碗形をした青磁染付。300は口縁部内面に四方襷文，茶溜り状の見込みに花唐草を描いている。307も口縁部内面に四方襷文，見込み（天井部）に五弁花を描く。高台内（摘み内部）に「渦福」の銘款が認められる。301は半球形を呈する肥前系磁器碗で，外面は氷裂文を地に菊花散しの文様が施されている。302は，雨振り文の肥前系磁器碗。303は肥前系磁器で，口錆を施した白磁碗。器形は薄手で半球形を呈する。304・305は，肥前系磁器の仏飯器。306は，肥前系磁器で蓋。308は，肥前系磁器皿。口縁は小さく外傾する折縁で，高台は低く断面U字形を呈する。芙蓉手のもので内面に花鳥文を描く。309は，肥前系磁器皿。輪花の色絵皿で，花・青海波等に金彩や赤色の上絵付が認められる。310・311は，肥前系磁器皿。同形となる輪花の白磁皿で，口錆を施す。型打ちによる円形の窓や扇・亀甲の陽刻文が認められる。311は口縁の破損部に，漆による補修が認められる。312は，肥前系磁器の角鉢。高台内に「成化年製」銘款が認められる。313は肥前系磁器で，波佐見産とみられる青磁（皿）の底部である。蛇ノ目凹形高台をもち，釉剥ぎ部に鉄錆を塗布している。内面に陽刻文を施す他，高台脇には数条の沈線が認められる。314は肥前系磁器で，青磁（仏）花瓶である。口縁部はラッパ状に開く広口のもので，頸部下端の両脇に耳が付く。高台下端部の内側及び畳付に鉄錆の塗布が認められる。315は，肥前系陶器で仏花瓶である。口縁は小さく水平に伸び端部は摘み上げられており，押圧状の絞り痕が認められる。頸部からは僅かに肩部をもち，スカート状に底部へと開く器形になっている。体部外面から底部にかけて灰釉が施され，笹葉の鉄絵が描かれている。口頸部には，内外面とも鉄釉が掛けられている。316は肥前系陶器で，口径50cmを測る二彩手の大鉢である。体部～口縁にかけてほぼ直線状に開き，口縁部は垂下気味に外方向へ突出している。外面は鉄釉を塗布し，白土を掛けて直線及び波状の櫛目を施す。内面も同様に直線状の櫛目を施し，黄褐・緑色を呈する釉で簡略な施文を行っている。見込みには，円形の砂目が連続して認められる。

317は，軟質の施釉陶器である。緑釉を施すが，体部下半以下は無釉で，平底の底部には回転糸切り痕を残す。紐状の耳が付くとみられ，小形の壺或は水注と考えられる。

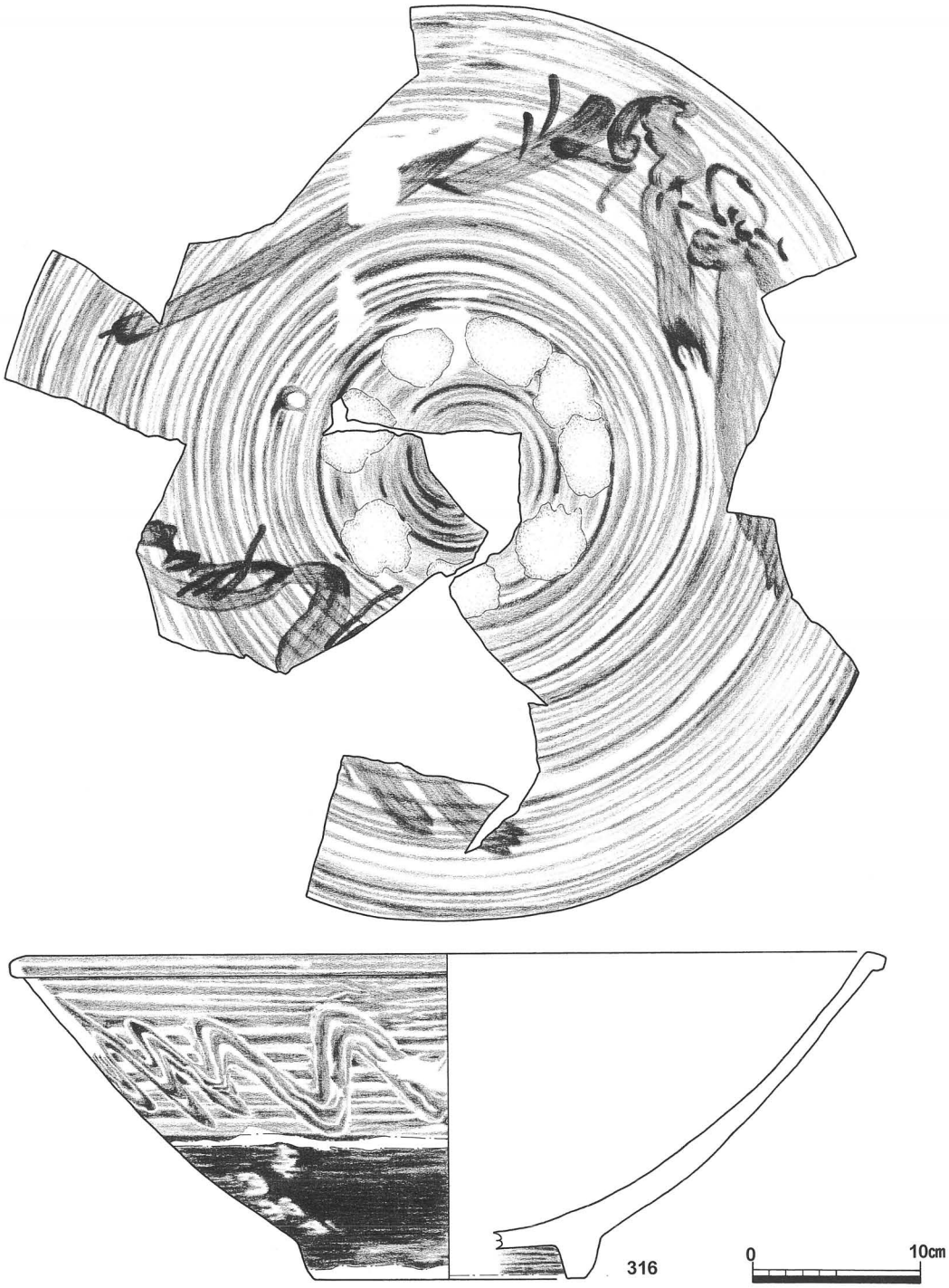
318は瀬戸・美濃系陶器で，腰錆茶碗。319も瀬戸・美濃系陶器。腰錆の碗であるが，腰が張る筒形の器形になっている。325は瀬戸・美濃系陶器皿で，灰釉を施したヒダ皿である。

第42図　SX3001出土遺物①(1/3)

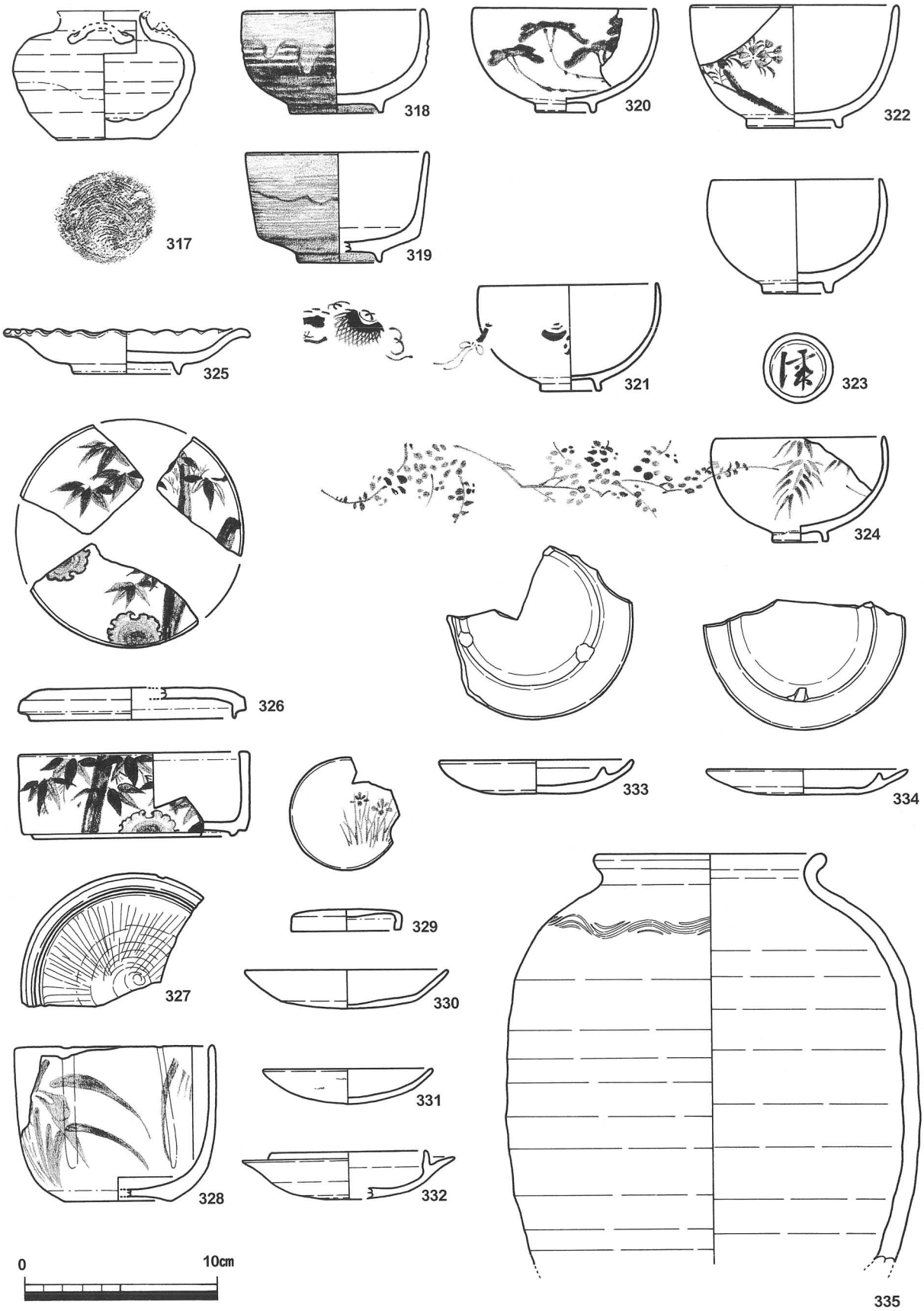


第43図　SX3001出土遺物②(1/3)

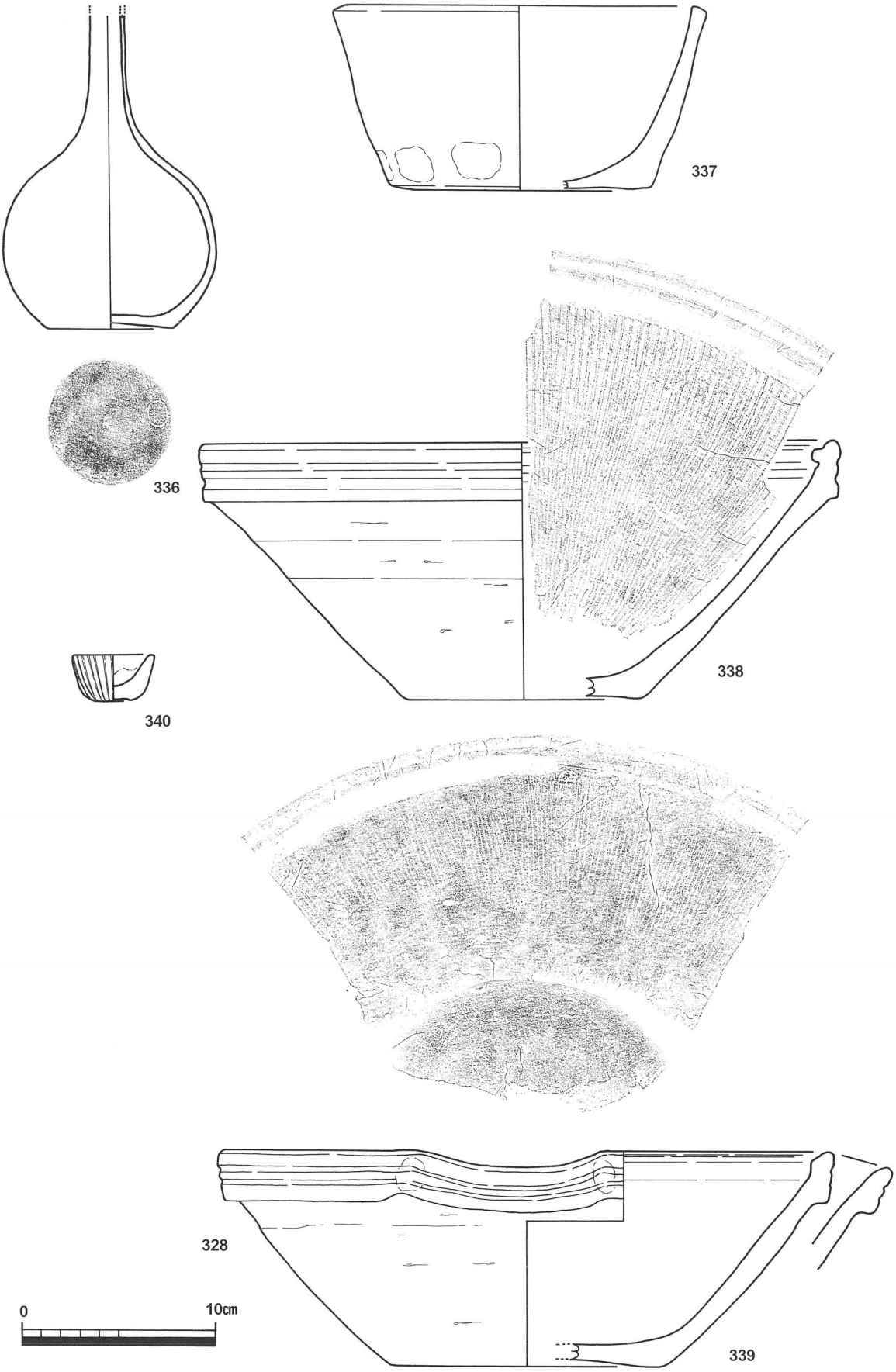
320～324は京・信楽系陶器碗である。320・321・323・324は半球形を呈する丸碗で，322を除き上絵付けが施されている。321は黒色で宝文を描き，赤・金彩が加えられている。323の高台内には，「漆」と読める墨書が認められる。322は幅の広い高台と直立する口縁部をもち，錆絵で桜が染付されている。花の箇所は，青色の絵付けが施されている。326・327は，京・信楽系陶器段重・蓋である。錆絵で竹を染付し，雪花部分には青・白色を呈する絵付けがされている。高台内には渦状痕及び，放射状のケズリ痕が認められる。328は，京・信楽系陶器の火入れである。敲打によるとみられる欠けが，口縁の円周上に認められる。外面に描かれた草葉は，



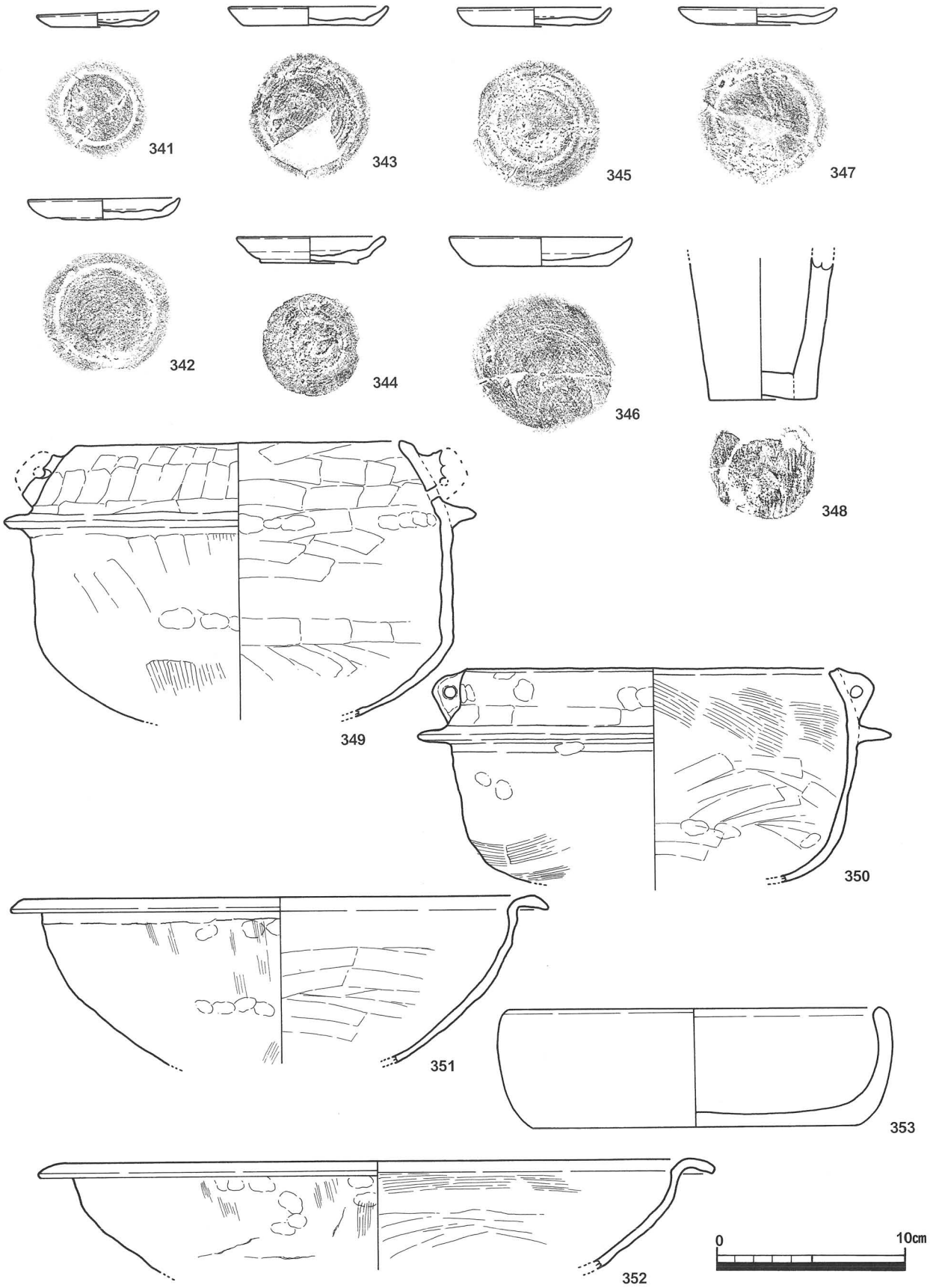
第44図　SX3001出土遺物③(1/4)



第45図　SX3001出土遺物④(1/3)



第46図　SX3001出土遺物⑤(1/3)

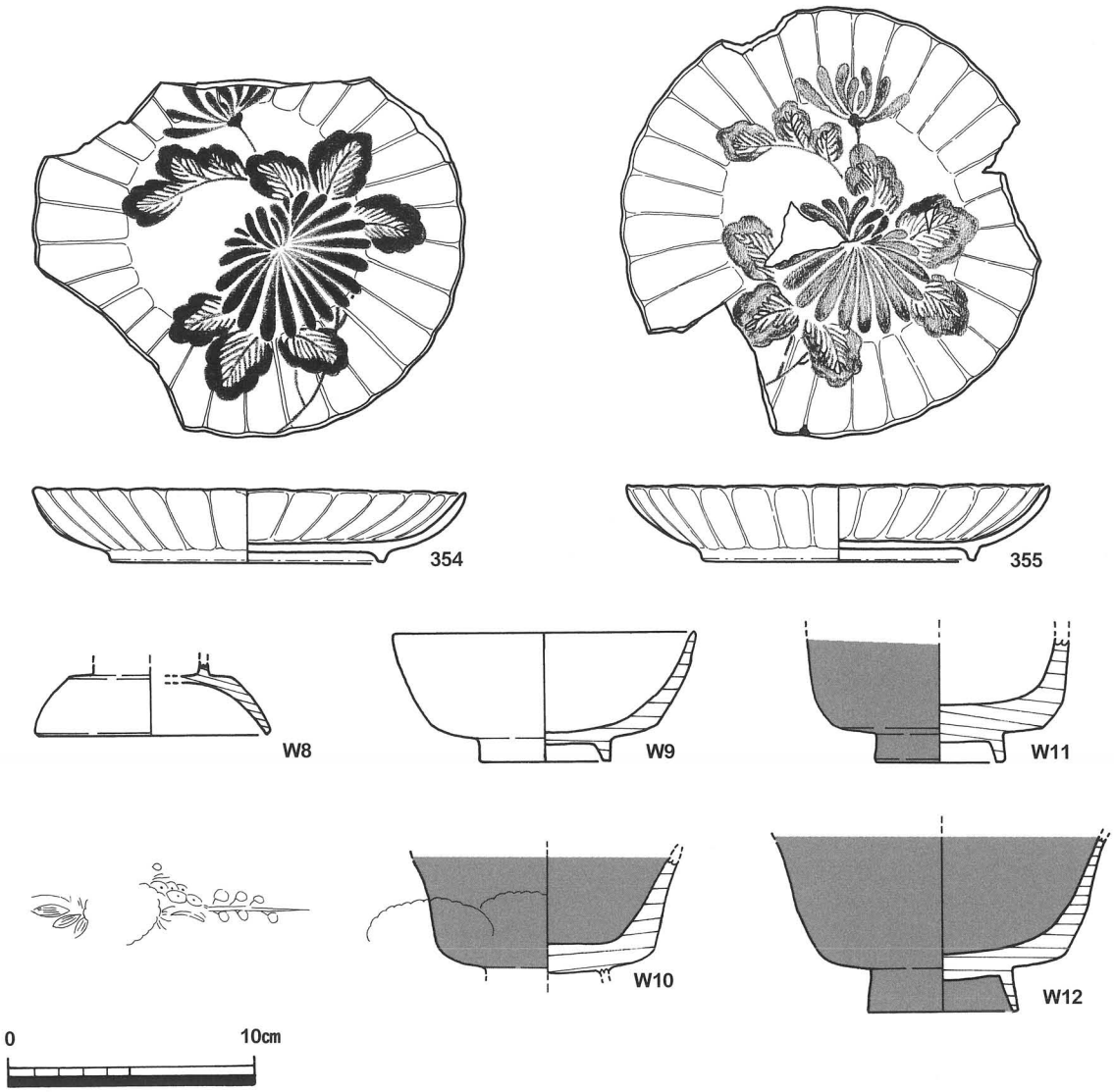


第47図　SX3001出土遺物⑥(1/3)

金及び緑色による上絵付けである。329は京・信楽系陶器の合子蓋で，外面に錆絵で草花を描く。花は青色の顔料を用いて絵付けがされている。

330～334は，備前焼系陶器灯明皿及び受皿である。332は外反する受け部より，かえりが長く直立して立ち上がる。335は，備前系陶器壺である。如意状の口縁部をもち，なで肩の肩部には波状文が施されている。乗岡編年中世６期に相当すると考えられる。336は，備前系陶器の鶴首。底部に楕円形枠で「長」の刻印が認められる。337は備前系陶器鉢。338・339は，備前系陶器擂鉢である。338は口縁端部が内面側へと突出し，凹線となっている。体部上端は擂目を横ナデにより消すもので，白神編年（白神1992）のⅠ形式（18世紀前半～中頃）に相当するとみられる。339は片口内面に扇形の枠に「上」長の刻印を認める堺擂鉢で，白神編年のⅠ形式（18世紀前半～中頃）に相当する。

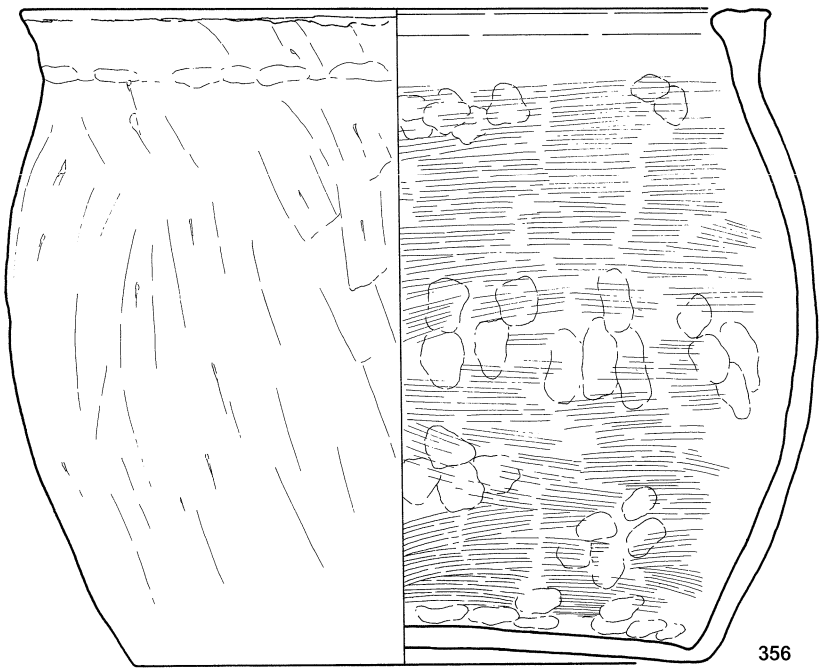
340はミニチュアで，玩具。軟質のもので，内面に緑釉が施されている。341～347は，土師質土器皿である。344を除き，底部に回転糸切り痕が認められ，器形及び法量から佐藤編年（佐藤2003）の皿ＡⅥ形式（高松城編年様相５・６）に相当するものと考えられる。344は白色系の胎土をもち，底部に回転ヘラ切り痕が認められる。16世紀代（Ⅲ期）の混入品であろう。

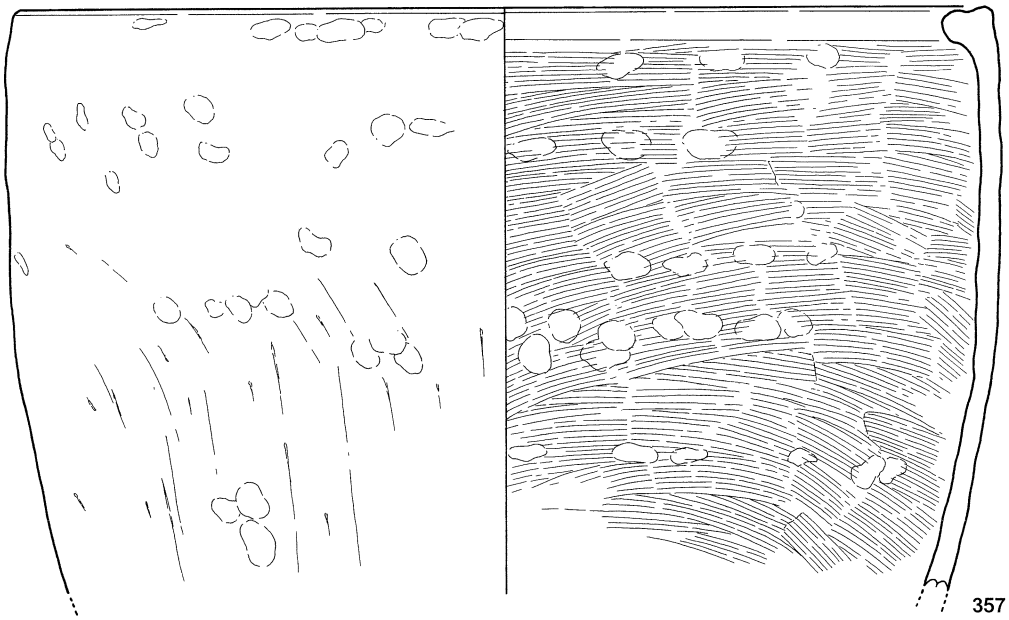


第48図　SX3001出土遺物⑦(1/3)

348は，板作り成形の焼塩壺である。349・350は土師質土器羽釜，351・352は土師質土器焙烙である。353は，土師質土器鉢。底部を中心に媒化が認められる。

354・355は産地不明陶器皿。形打ちにより成形し，菊花を青絵付けした同形のもので，２枚出土している。緻密な胎土を用いて，灰釉をやや厚く施しており，京・信楽系のものと推定される。

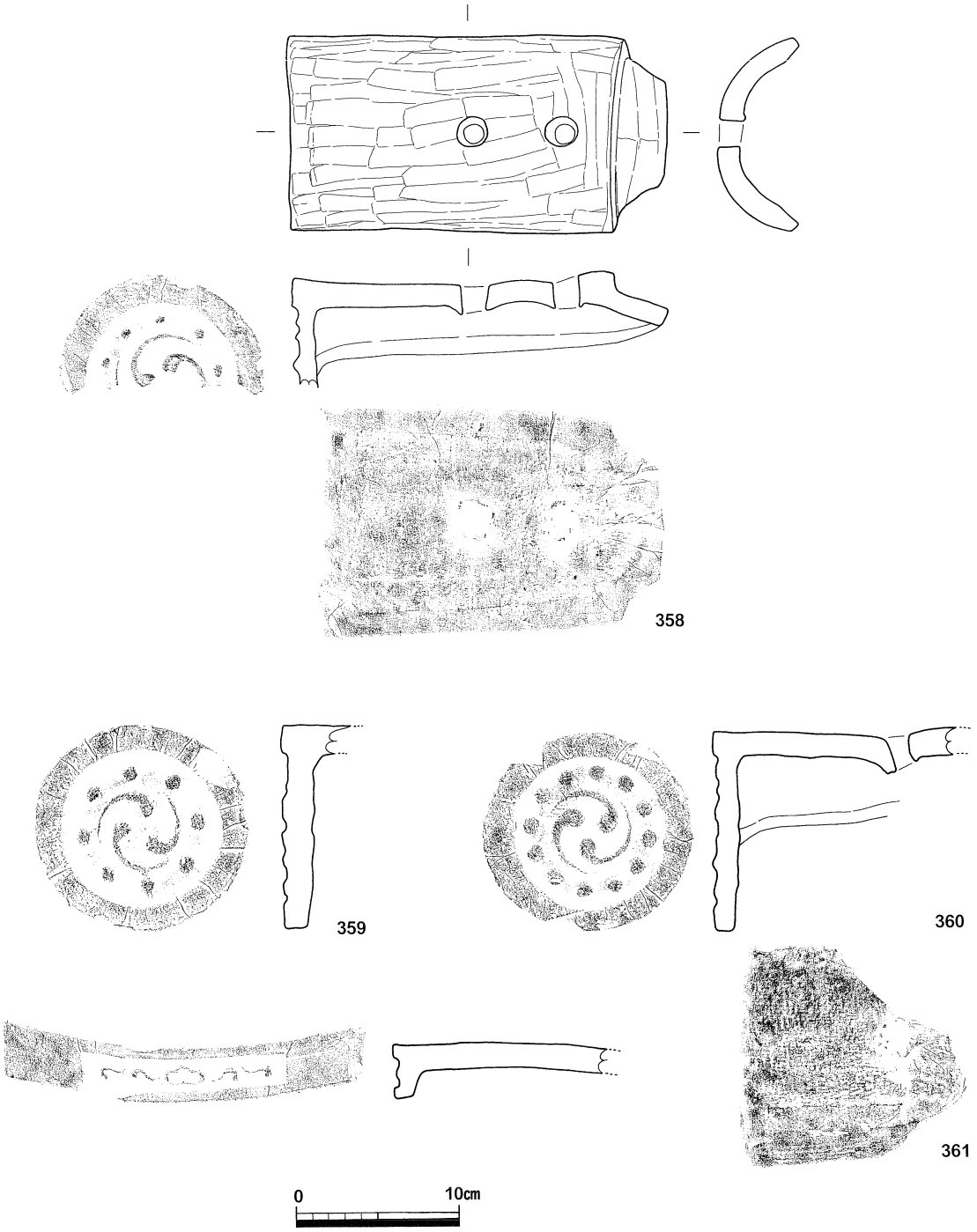




第49図　SX3001出土遺物⑧(1/3)

Ｗ８～W12は，漆器椀である。Ｗ８・９は，内外面を赤塗したもの。W10は内外面黒塗のもので，金彩による加飾が認められる。W11は内面を赤塗，外面を黒塗するものだが，器面は硬質な印象を受ける。外面は下地がやや透けて見られ，赤褐色を呈している。W12は内外面黒塗のもので，高台は高く削りも深い。

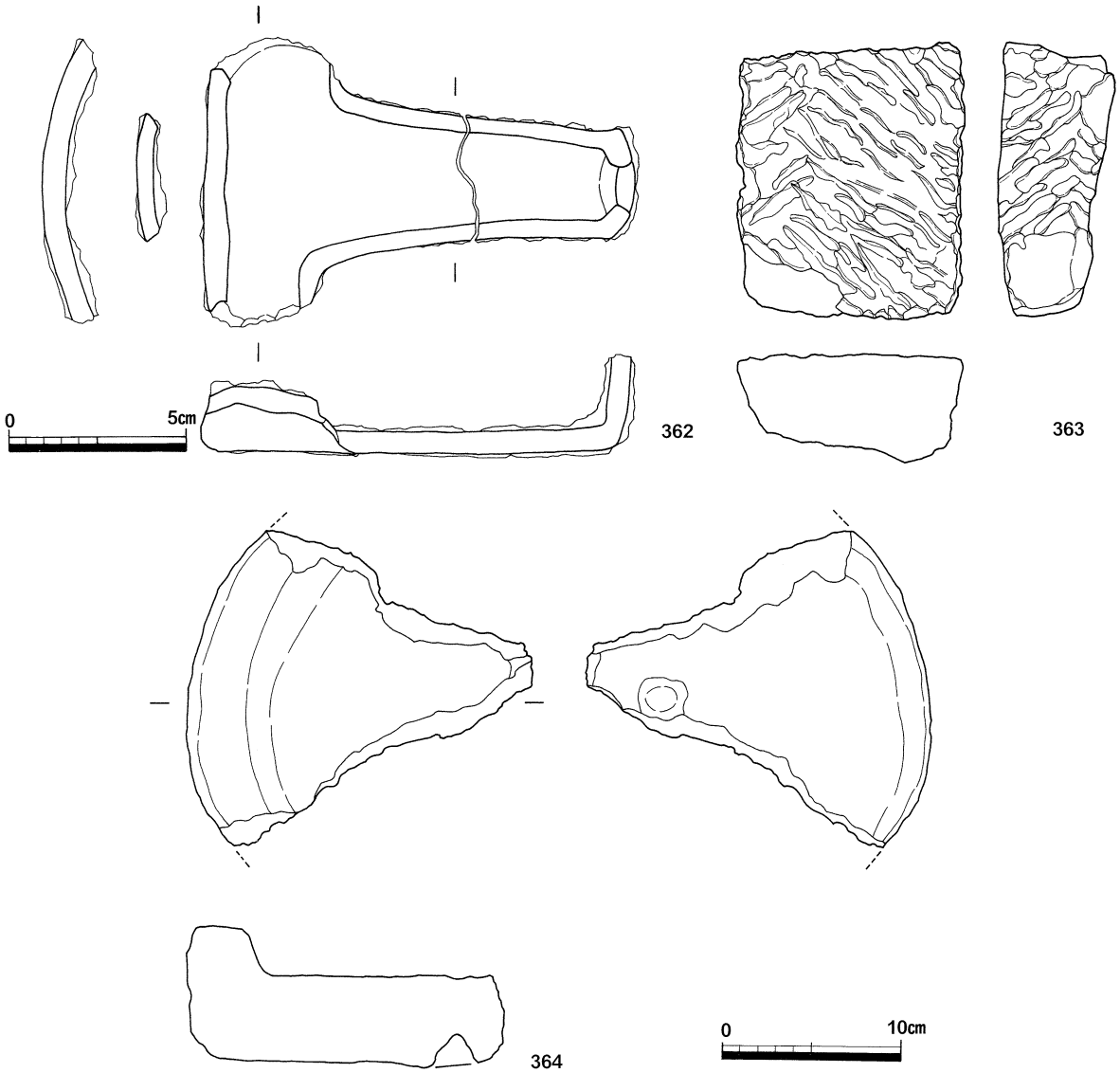
356・357は，土師質土器甕である。外面はケズリのみで，内面には刷毛調整を施している。358～361は瓦。一部のみ取り上げた。358～360は巴文の軒丸瓦で，キラコの塗布は認められない。361は軒平瓦で，陽刻線による宝珠の中心飾りと唐草文が認められる。362は，金属製品。



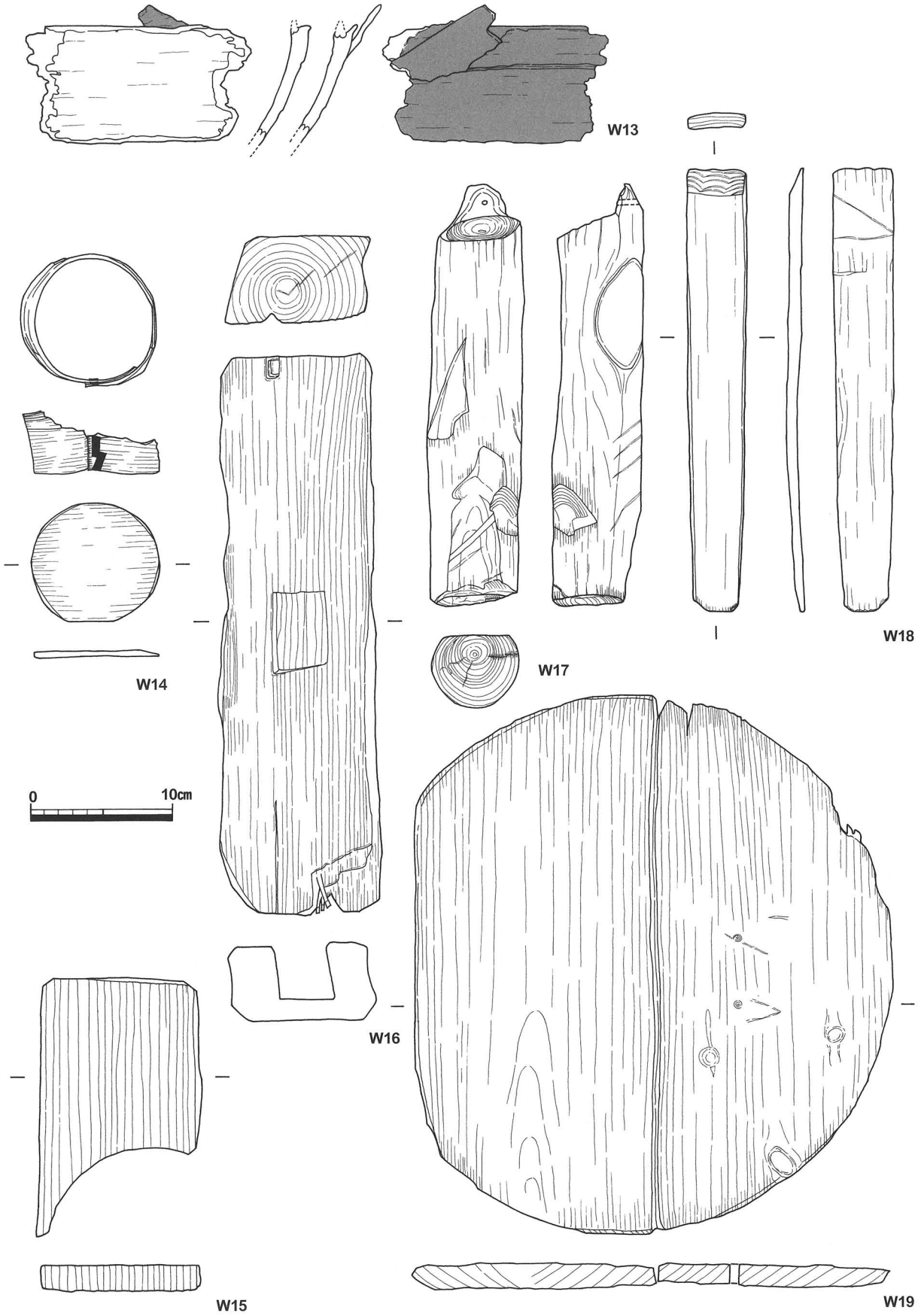
第50図　SX3001出土遺物⑨(1/4)

上面がＴ字形を呈し，端部はそれぞれ屈曲或いはやや弯曲している。金具類であろう。363・364は，角礫凝灰岩製の石製品。363は上面及び側面部に鑿状の加工痕が残り，平坦面となっている。364は石臼片で，穿孔部の上端は方形になっている。

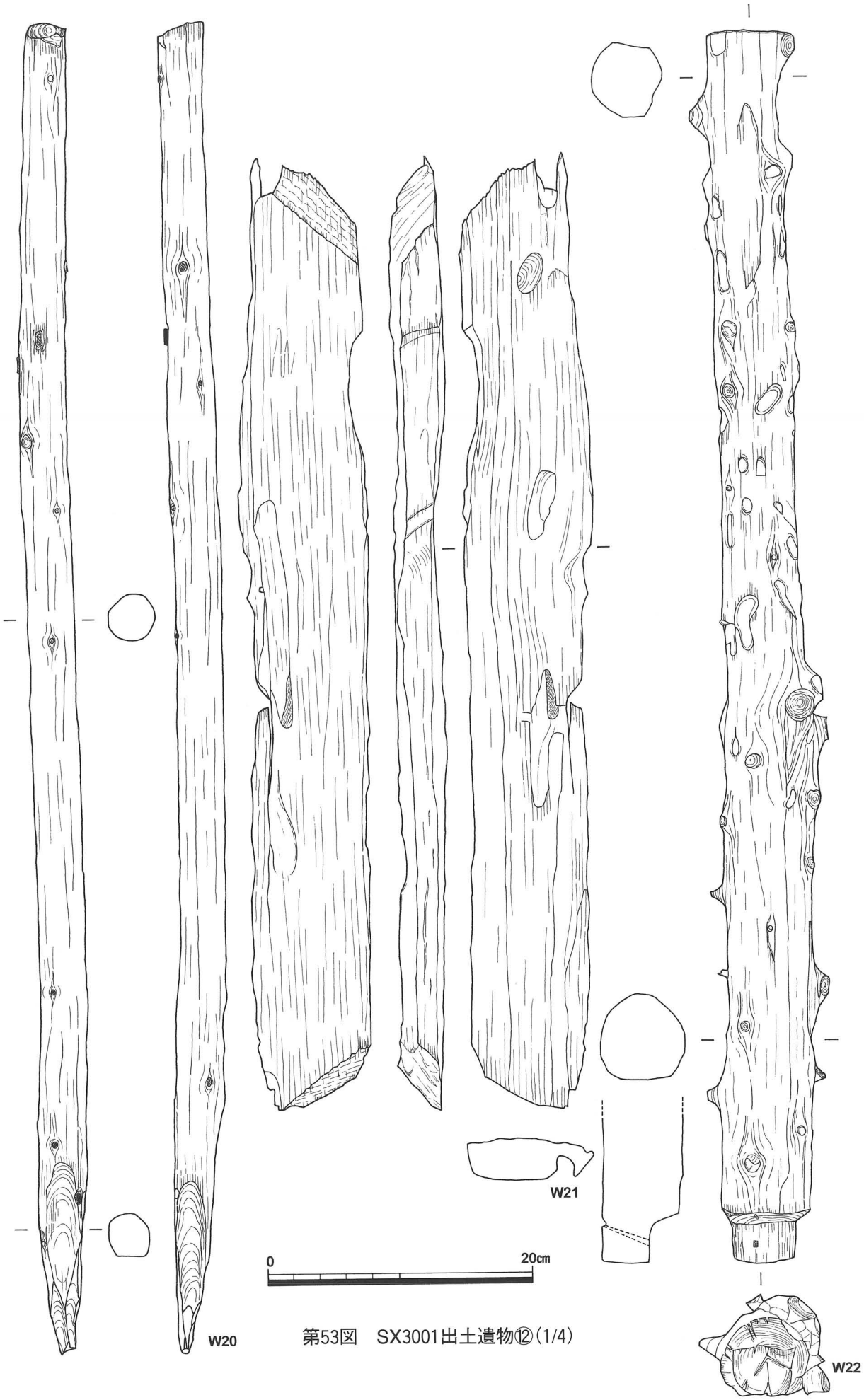
W13～W22は，漆器及び木製品である。W13は漆器片で，外面は黒塗，内面は赤塗されている。端部にはかえり及び突起部が認められ，大型で蓋の付く鉢類と考えられる。W14は小形の曲げ物。W15～W17は部材である。W18は桶の側板。W19は蓋類。W20は，杭状に先端部を尖らすもの。W21は板材，W22は片側に枘をもつ建材である。



第51図　SX3001出土遺物⑩(1/2・1/4)



第52図　SX3001出土遺物⑪(1/4)



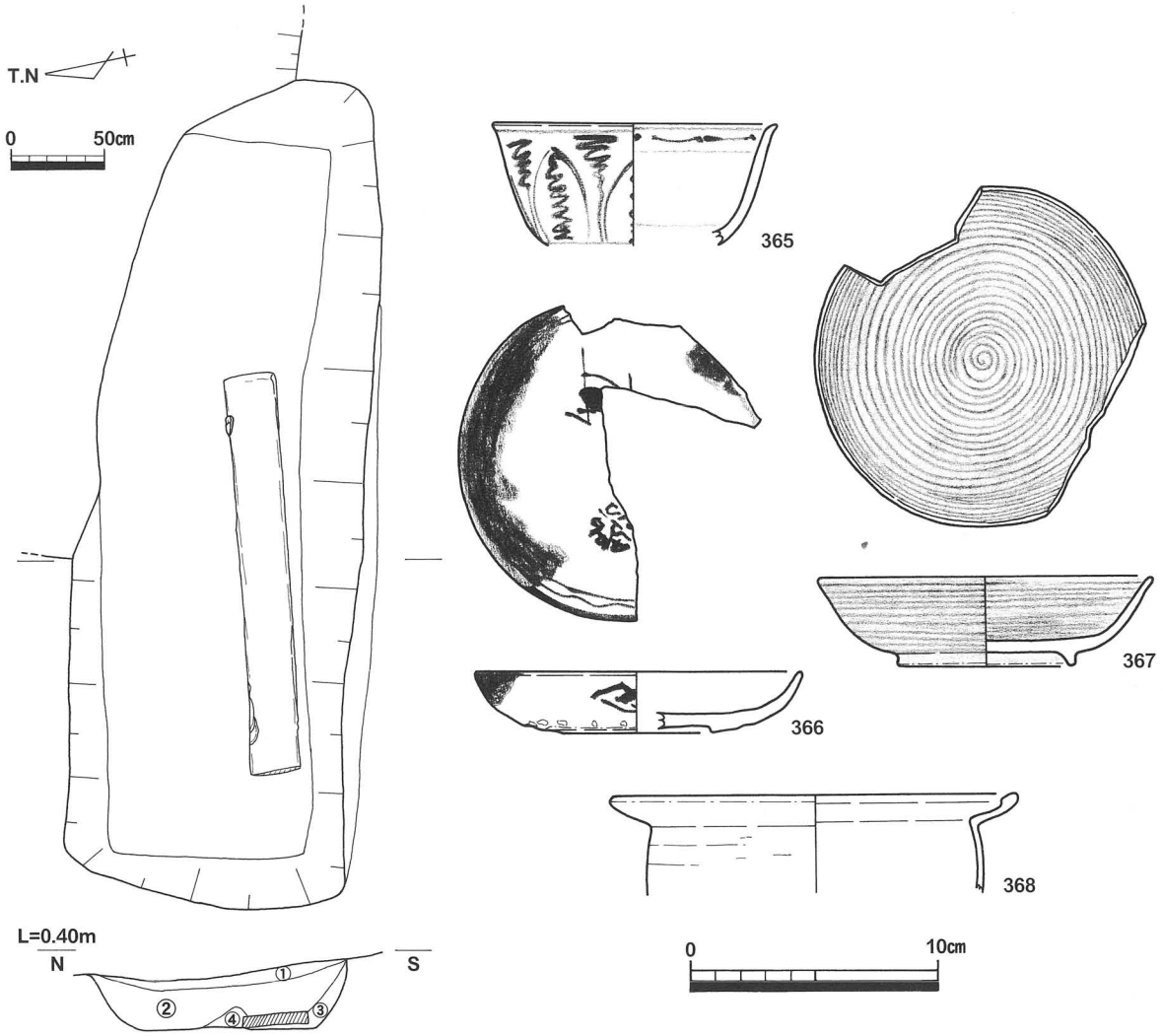
第53図　SX3001出土遺物⑫(1/4)

SK3001（第54図参照）

第３遺構面北端部で検出した土坑である。検出作業は第３遺構面で行ったが，本来は第１遺構面下層部より確認できるものである。検出した標高は0.4m前後で，長方形を呈する平面は長軸方向に4.36m，短軸方向に1.50mの規模をもつ。主軸方位はN－104°－Eを示す。底面では掘り方の南面に接し，同方向を向く２×0.25m程の板材が認められ，礎板等，土台部分に用いられた可能性が推定される。またSX1103の南西隅で接し明瞭な重複関係が認められないことから，同時期に埋没する関連した遺構と考えられる。所属時期は，検出状況及び出土遺物から19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。

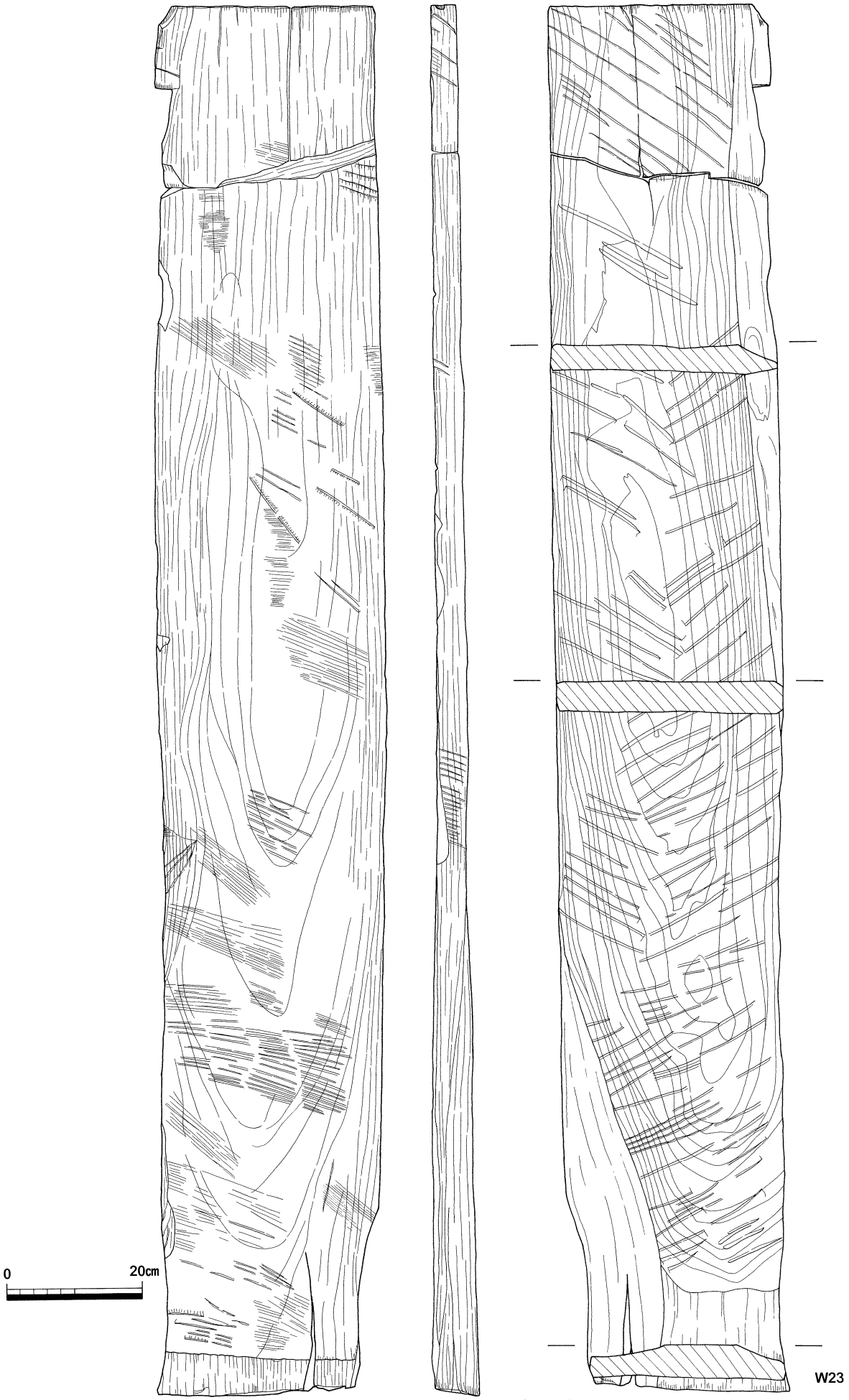
SK3001出土遺物（第54・55図参照）

出土量はコンテナ1/2箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付・京焼風碗・刷毛目鉢，肥前系磁器青磁染付，瀬戸・美濃系陶器碗，瓦片がある。365は，瀬戸・美濃系磁器端反碗。外面に簡略化した唐草文を描く。366・367は，瀬戸・美濃系陶器皿である。366は，織部風の銅釉や鉄絵を施す。367は刷毛目皿。368は軟質施釉陶器で，土鍋類の口縁部。明赤褐色の釉を用い，屋島焼とみられる。W23は板材。平坦面に，釿或は鉋痕とみられる加工痕が残る。



①褐灰色（10YR4/1）シルト質極細砂（灰白色細砂を若干含む）
②　〃　（10YR5/1）（粘性強い）
③灰白色（2.5Y7/1）細砂（②層を含む）
④黒褐色（2.5Y3/1）シルト質極細砂（粘性強い）

第54図　SK3001平・断面図（1/40）及び出土遺物①（1/3）



第55図　SK3001出土遺物②(1/8)

第２遺構面上層部遺構（付図・遺構観察表参照）

検出した遺構としてSP2001～2026，SK2001・2002がある。調査地東半部中心に散在して確認したもので，深度は10cm前後の浅いものが占め，遺物の出土量は上層部全体でも極少量に過ぎない。第２遺構面下層部を被覆する焼土層との前後関係が明瞭ではないが，遺構の埋土が褐色を呈し焼土・炭化物を含むものが認められることから，火災後の遺構面である可能性が考えられる。所属時期は下層部及び上位の遺構面から19世紀前葉と想定される。

第２遺構面下層部遺構

下層部は，褐鉄鉱を特徴的に含む粘質土を基盤に開削された遺構で，焼土層が被覆する。屋敷内での施設を明確にする遺構はないが，南半部を中心に溝状遺構や土坑を確認している。

所属時期については，上限がSX3001埋没以後となることから，18世紀中葉以降になる。また下限を示す出土遺物を遺構面全体でみると（第４表　遺構観察表参照），少量ながら肥前系磁器広東碗や京・信楽系陶器端反碗や灯明皿が認められることから，18世紀末～19世紀初頭と想定される。

この他，調査地南端及び北端部に位置するSK2102やSK2105において，16世紀～17世紀前葉の遺物を一定量含むものが認められ，SX3001と重複しない調査地の南・北端部では16世紀～17世紀前葉の遺構面が遺存し，当遺構面において一部露呈していた可能性も残る結果となった。

SK2101（第56図参照）

第２遺構面下層東端部で検出した土坑である。検出した標高は0.95m前後で，東面が調査対象外のため全容は不明だが，長軸方向に3.50m，短軸方向に1.54m以上の規模をもつ。南面では，SX2102を壊している。断面は船底形とみられ，埋土は２層に分層されている。所属時期は遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ⅴ期）と考えられる

SK2101出土遺物（第56図参照）

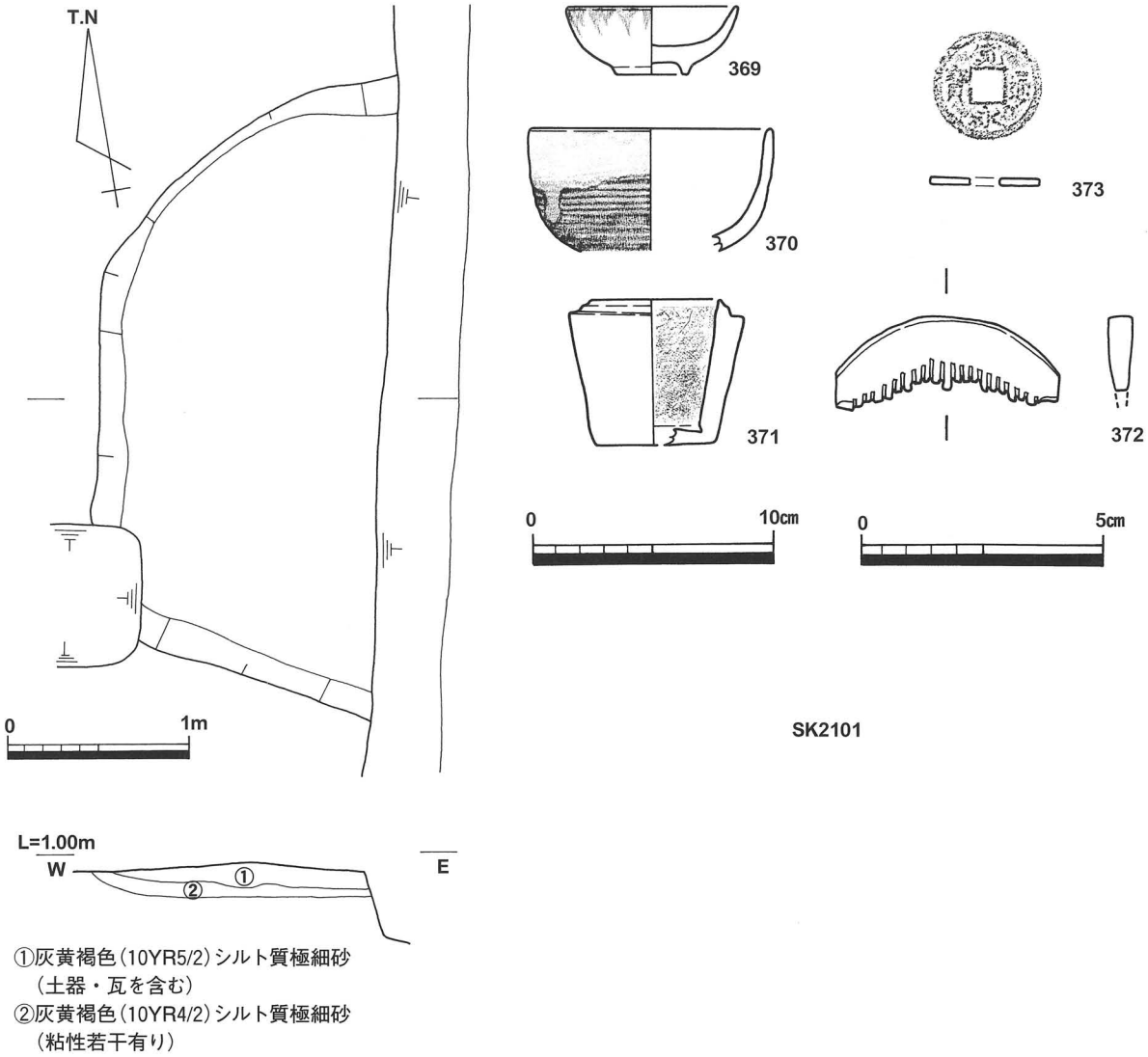
出土量はコンテナ1/3箱分で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目鉢，肥前系磁器青磁染付・くらわんか碗，瀬戸・美濃系陶器，軟質施釉陶器土鍋，土師質土器甕・焙烙，瓦片等がある。369は肥前系磁器で，紅猪口。370は瀬戸・美濃系陶器で，腰錆碗。371は土師質土器焼塩壺で，板作り成形のものである。372は骨角器で，小型の櫛である。374は寛永通宝。

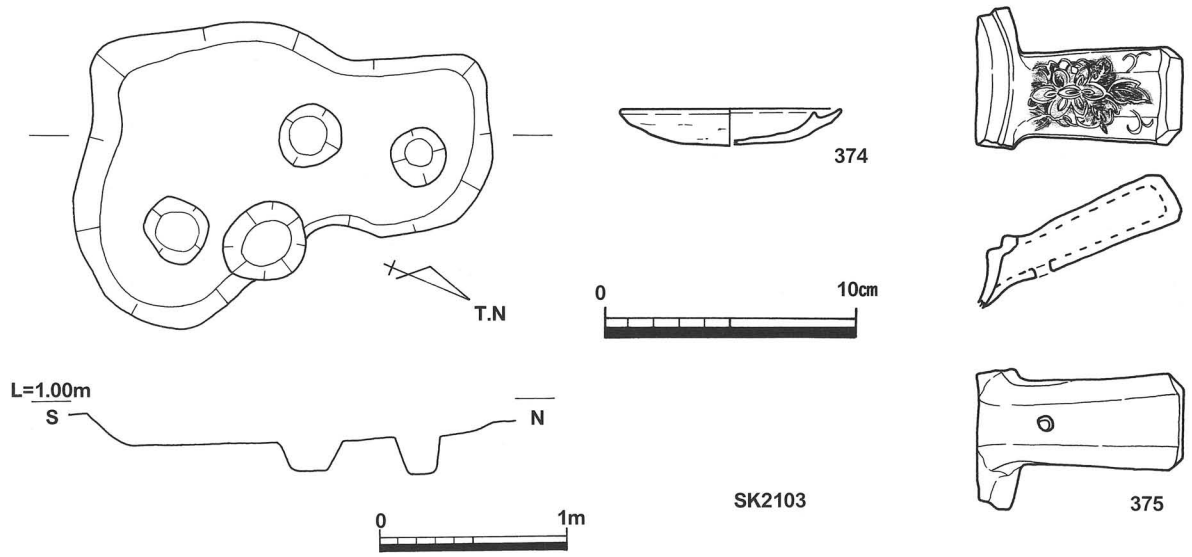
SK2103（第56図参照）

第２遺構面下層東部で検出した土坑である。検出した標高は0.94m前後で，長軸方向に2.10m，短軸方向に1.14mを測る。平面は不整形を呈し，底面ではピットが認められる。断面は船底形を呈する。所属時期は出土遺物及び遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ⅴ期）と考えられる

SK2103出土遺物（第56図参照）

出土量はコンテナ1/4箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付，肥前系磁器くらわんか・青磁染付・小広東・広東碗，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗，水甕，京・信楽系陶器平碗，灯明皿，源内焼，屋島焼，軟質施釉陶器，軒丸瓦がある。374は備前系陶器灯明皿。375は軟質施釉陶器で，行平鍋の把手部。緑釉が施された牡丹の陽刻がついている。



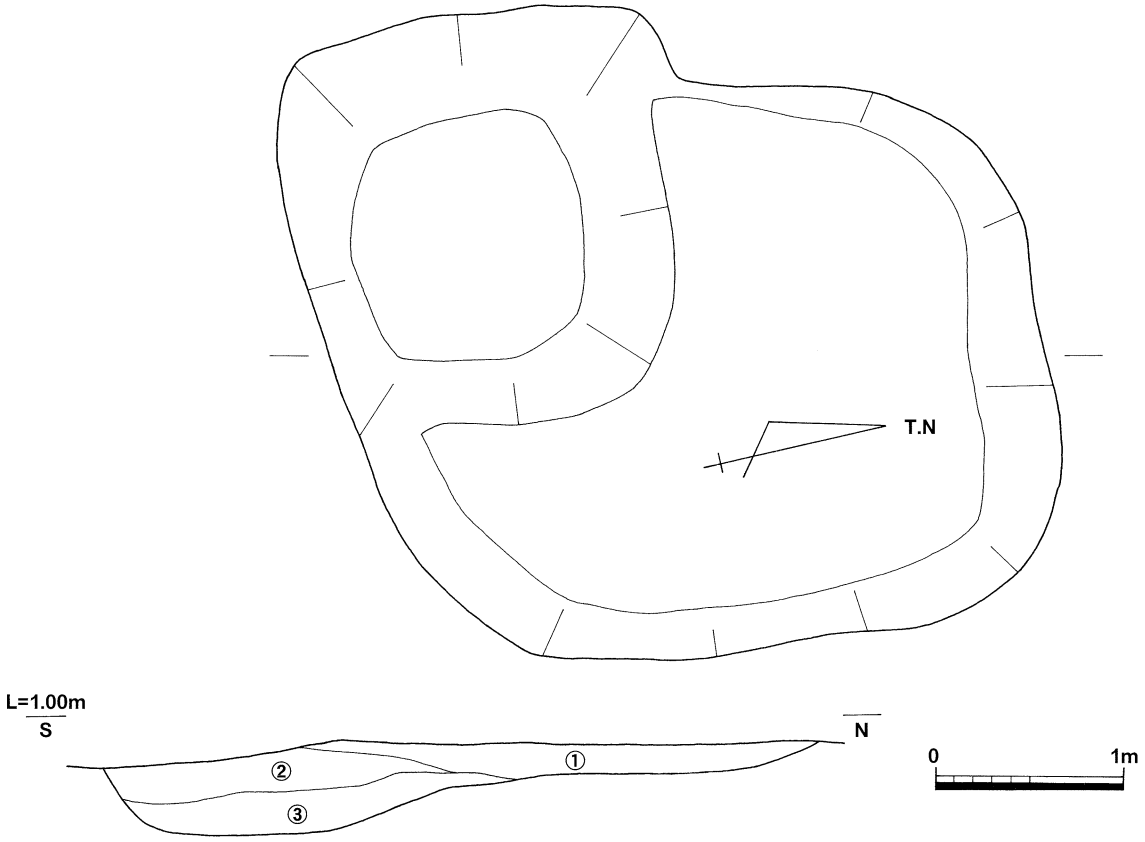


第56図　SK2101・2103平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3・2/3)

SK2102（第57図参照）

第２遺構面南端部で検出した土坑である。検出した標高は0.85m前後で，長軸方向に約3.7m，短軸方向に約3.5mを測り，南西部をSX2103に切られた状態で検出している。平面の形態では大小２つの方形プランが重複して見られるもので，断面でも浅く広いものが南西隅の落ち込みを切り込むように分層できた。取り上げた遺物でも明瞭に２時期を示していることから，本来は別遺構であった可能性が考えられる。所属時期は遺物を分割して取り上げていないため，遺構面より19世紀初頭を下限とし，また当遺構の基盤層が明確ではないことから，出土遺物より16世紀頃までの所産が考えられる。

また下層遺構の可能性がある南西部の落ち込みは，長軸方向に2.14m，短軸方向に1.96mを測る隅丸方形を呈し，深度0.45mを測る台形状の断面形態になっている。火輪や備前焼甕等の出土遺物から，本来墓であった可能性も考えられる。確認した状態で，当掘り方が墓の下部構造を示すものか，近世の整地に伴いこれらを廃棄した遺構であるか特定はできないが，破損した出土遺物の状態からは後者の可能性が推定される。



①灰オリーブ色（5Y6/2）＋黄灰色（2.5Y5/1）シルト質極細砂（粘性強い）
②灰白色（5Y7/2）細～粗砂（小石・礫を多量に含む）
③灰白色（5Y7/1）粗砂（小石・礫を含む）

第57図　SK2102平・断面図（1/40）

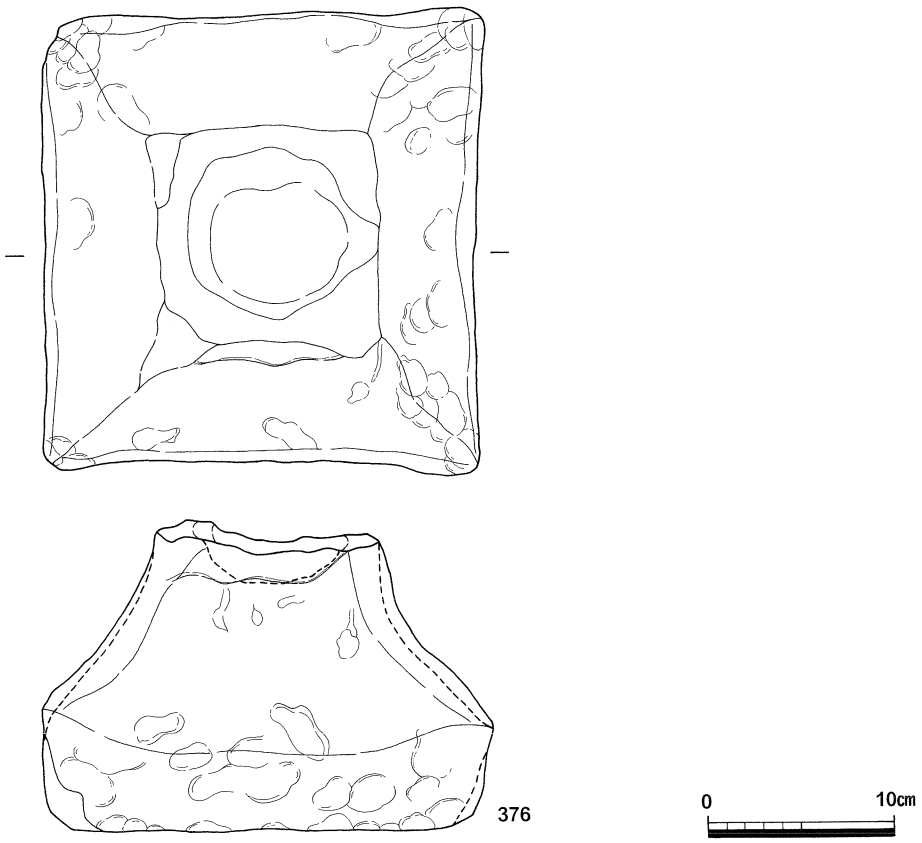
SK2102出土遺物（第58・59図参照）

出土量はコンテナ１箱分で，図化した以外に絵唐津，志野細片，備前系陶器灯明皿，土師質土器鍋，骨片がある。

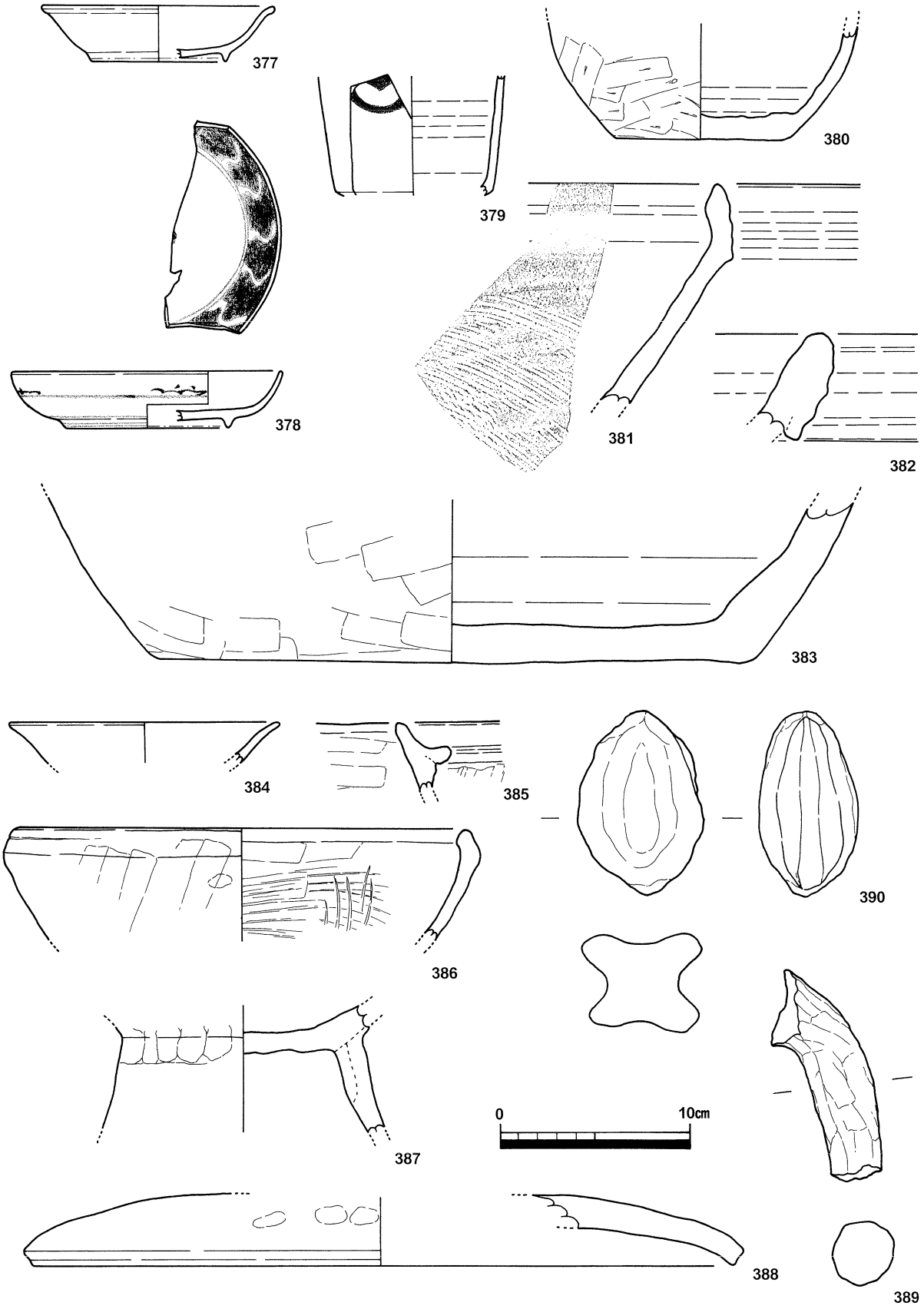
376は火輪。高さ16.4cm，幅22.4cmを測り，弥谷・天霧山系の凝灰岩製に推定される。上面に円形を呈する枘穴を認め，軒部は上端部が緩やかに反り下端ではほぼ水平になっている。

377は中国産とみられる白磁皿である。やや小形の皿で，端反の口縁部に断面三角形の高台をもつ。高台内には，放射状の鉋痕が認められる。形態の特徴から，森田分類（森田1982）の皿Ｅ－２に相当するものと考えられる。378は肥前系磁器皿。379は理兵衛焼に想定できる京・信楽系陶器片。筒形の口縁若しくは底部付近と考えられるもので，暗緑色の丸紋？が上絵付けされている。380は備前焼壺底部。381は備前焼擂鉢で，薄板状の口縁帯及び斜め方向の擂目が認められることから，乗岡編年の近世１b期（16世紀末）に相当する。382・383は，備前焼甕の口縁部及び底部である。口縁部の特徴から，乗岡編年の中世６期（16世紀初頭～第３四半期）に相当すると考えられる。384は，土師質土器皿の口縁部である。橙色系の胎土をもち，体部中位から口縁部へ外反する器形で大振りのものに復元される（京都系か）。385・389は，土師質土器足釜の口縁部及び脚部。386は，土師質土器擂鉢である。387は，器種不明の土師質土器の脚部。SR3001の出土品191と同形のものとみられる。388は土師質土器で，大蓋と考えられる土器。390は比較的大形の有溝土錘で，断面がＸ形になっている。

以上のように出土遺物では，肥前系磁器皿・京・信楽系陶器片・備前系陶器灯明皿が18世紀代以降のものであるが，これ以外は16世紀～17世紀初頭を主体とするものと考えられる。



第58図　SK2102出土遺物①(1/4)



第59図　SK2102出土遺物②(1/3)

SK2104（第60図参照）

第２遺構面下層東端部で検出した土坑である。検出した標高は0.86m前後で，東が調査対象外で，また北面をSD2101に壊され全容は不明である。底面は緩やかに東側へ下り，0.16mの深度を測る。所属時期は遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ｖ期）と考えられる。

SK2104出土遺物（第60図参照）

出土量はビニール１袋分で，図化した以外に肥前系陶器花生，肥前系磁器蓋付鉢・紅猪口，京・信楽系陶器色絵丸碗・平碗・施釉陶器蓋，土師質土器皿・焙烙がある。391は肥前系磁器碗。392は京・信楽系陶器丸碗。

SK2105（第60図参照）

第２遺構面下層北端部で検出した土坑である。検出した標高は0.85m前後。北面をSX1103に壊され全容は不明であるが，径２m程の円形と推定できる。所属時期は遺構面より19世紀初頭が下限となるが，遺構の基盤層が特定できないことに加え，出土遺物で16世紀～17世紀前葉のものが認められることから，当期が上限となる。

SK2105出土遺物（第60図参照）

出土量は少量で，図化した以外に磁器・備前・瓦質土器の細片がある。393は肥前系陶器で，砂目の溝縁皿。394は土師質土器で，内耳付鍋の口縁部片。

SD2101（第61図参照）

第２遺構面下層で検出した東西方向の溝状遺構である。検出した標高は0.89m前後で，底面は標高0.7～0.8mを測り，緩やかに東方向へ下る。幅は1.3m前後で，やや蛇行気味に検出されている。深度は0.2m足らずで，断面は船底形を呈している。所属時期は遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ｖ期）と考えられる。

SD2101出土遺物（第61図参照）

コンテナ1/4箱分で，図化した以外に肥前系磁器細片，京・信楽系陶器碗，備前焼灯明皿，丸瓦片がある。395は肥前系陶器で，陶胎染付の碗である。高台内～畳付に鉄錆を塗布している。396～399は肥前系磁器で，雨降り文の碗（396），紅猪口（397），小広東碗（398），角小皿（399）。400は瀬戸・美濃系陶器の平碗。401は，備前系陶器灯明皿である。

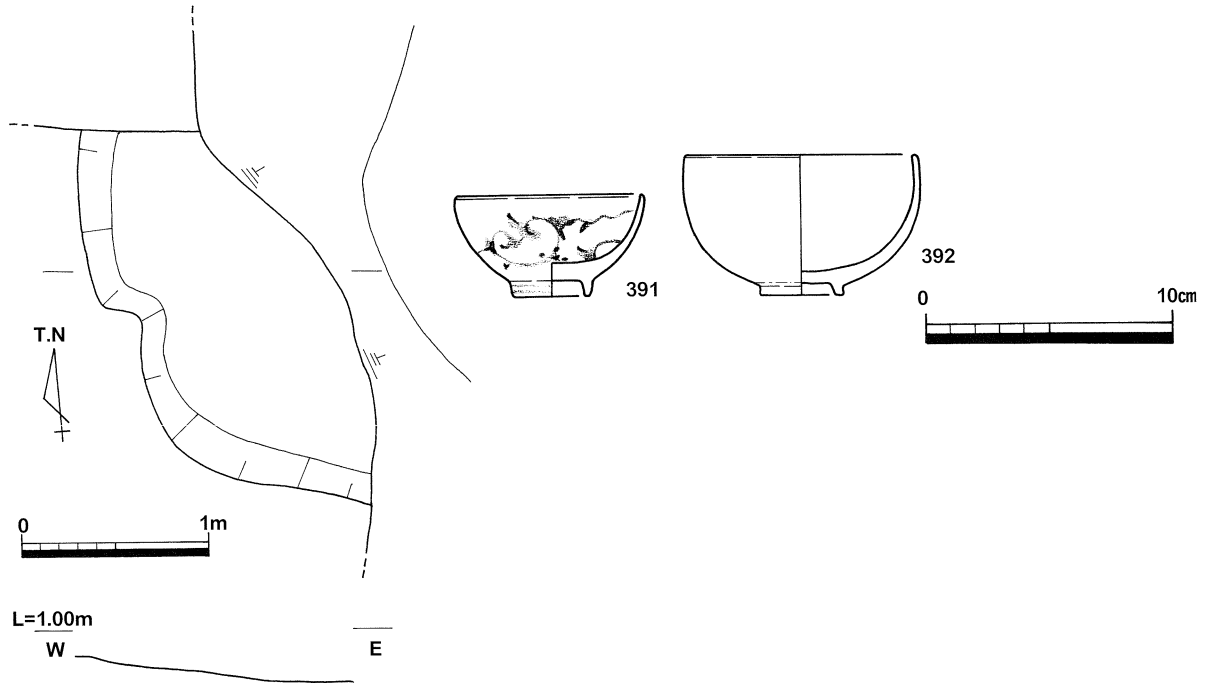
SD2102（第62図参照）

第２遺構面下層で検出した東西方向の溝状遺構である。検出した標高は0.91m前後で，底面は標高0.73～0.8mを測るが，底面及び肩部に複数の掘り方が重複したと考えられる凹凸部が認められる。検出幅は0.9m前後で，やや南よりの西方向へ伸び，SX2104に切られ途切れる。深度は0.2m足らずで，断面は船底形を呈する。所属時期は遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ｖ期）と考えられる。

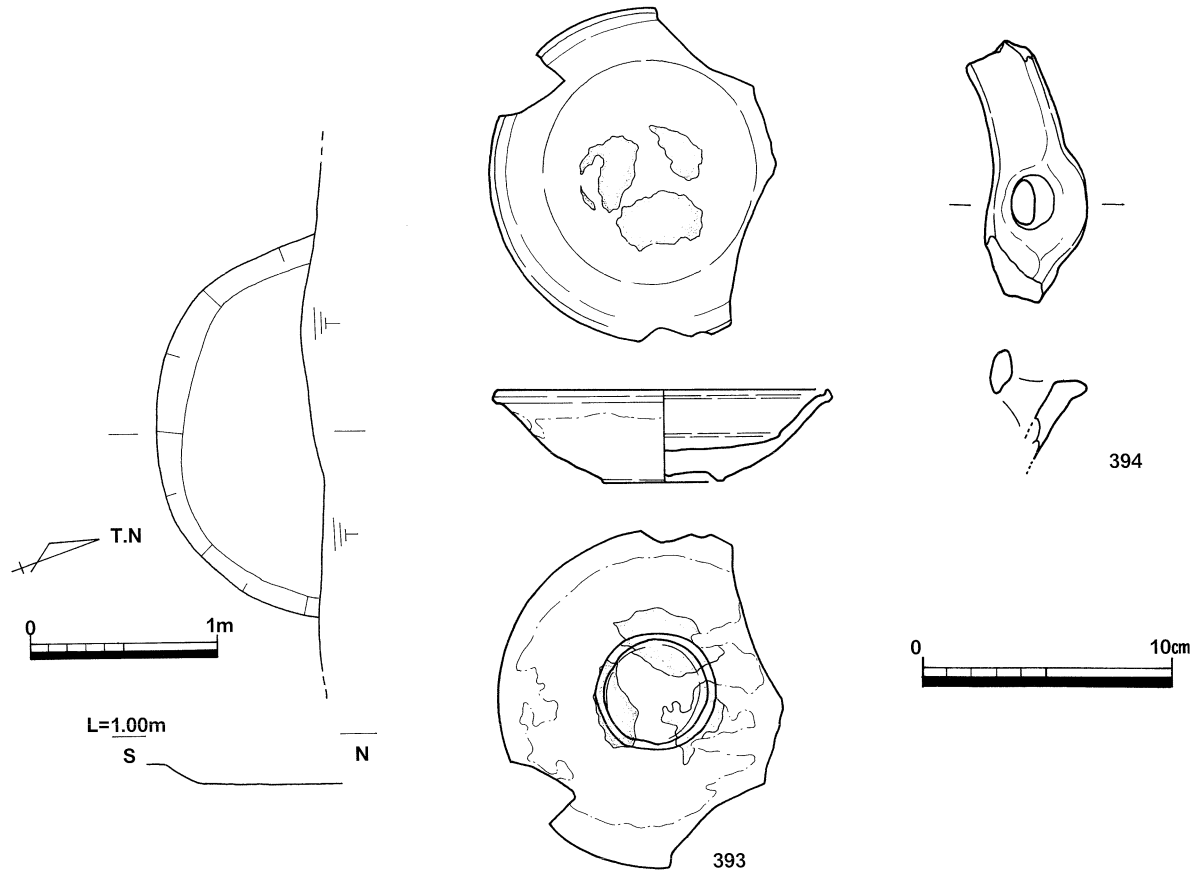
SD2102出土遺物（第62図参照）

コンテナ１箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付，肥前系磁器くらわんか・半球形碗，瀬戸・美濃系陶器・水甕，京・信楽系陶器色絵碗・土鍋，備前系陶器灯明皿・擂鉢がある。

402～404は肥前系磁器で，紅猪口（402・403），碗（404）。405は，京・信楽系陶器端反碗。406は備前系陶器灯明皿。407は土師質土器焼塩壷蓋。408は，ミニチュアの玩具。

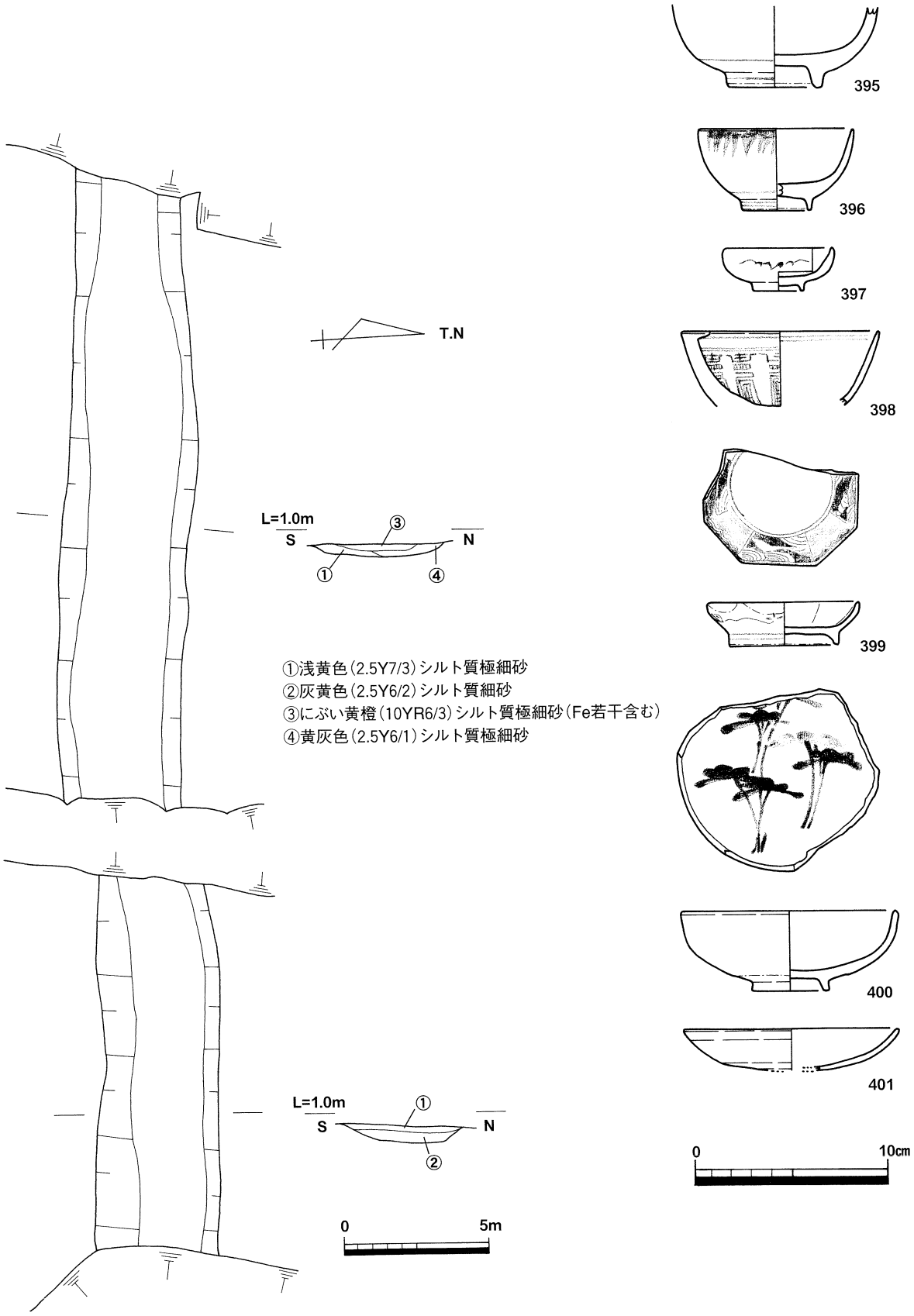


SK2104

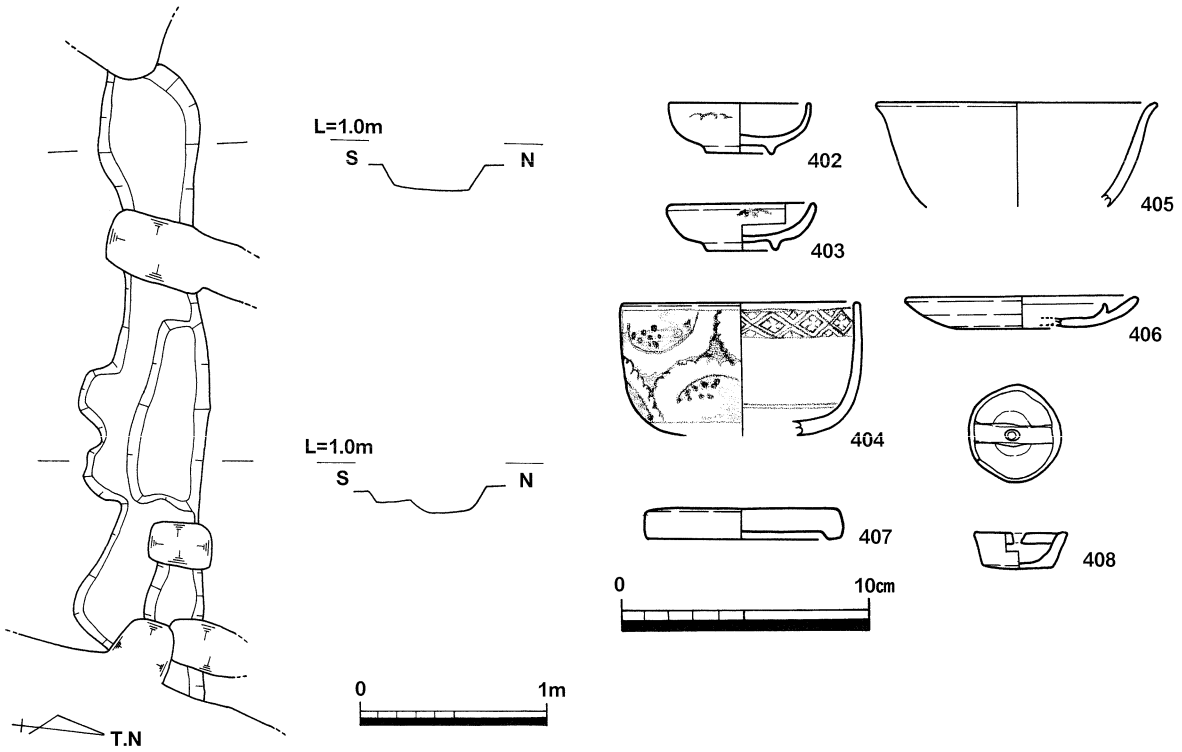


SK2105

第60図　SK2104・2105平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)



第61図　SD2101平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)



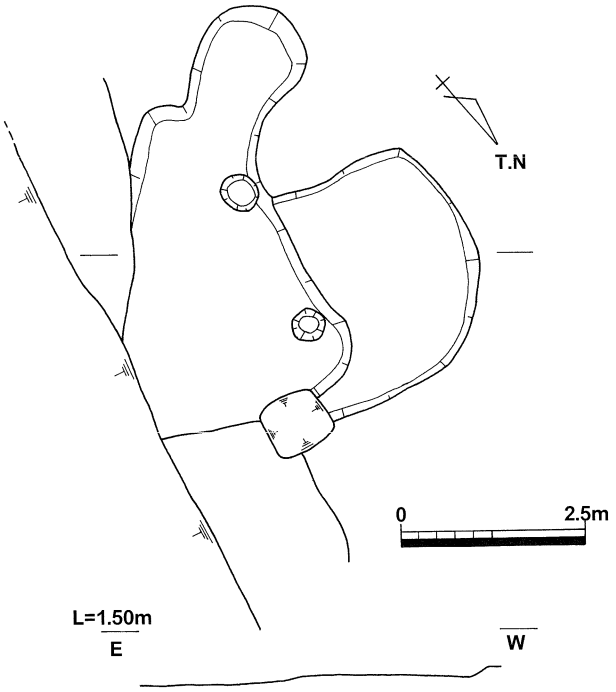
第62図　SD2102平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)

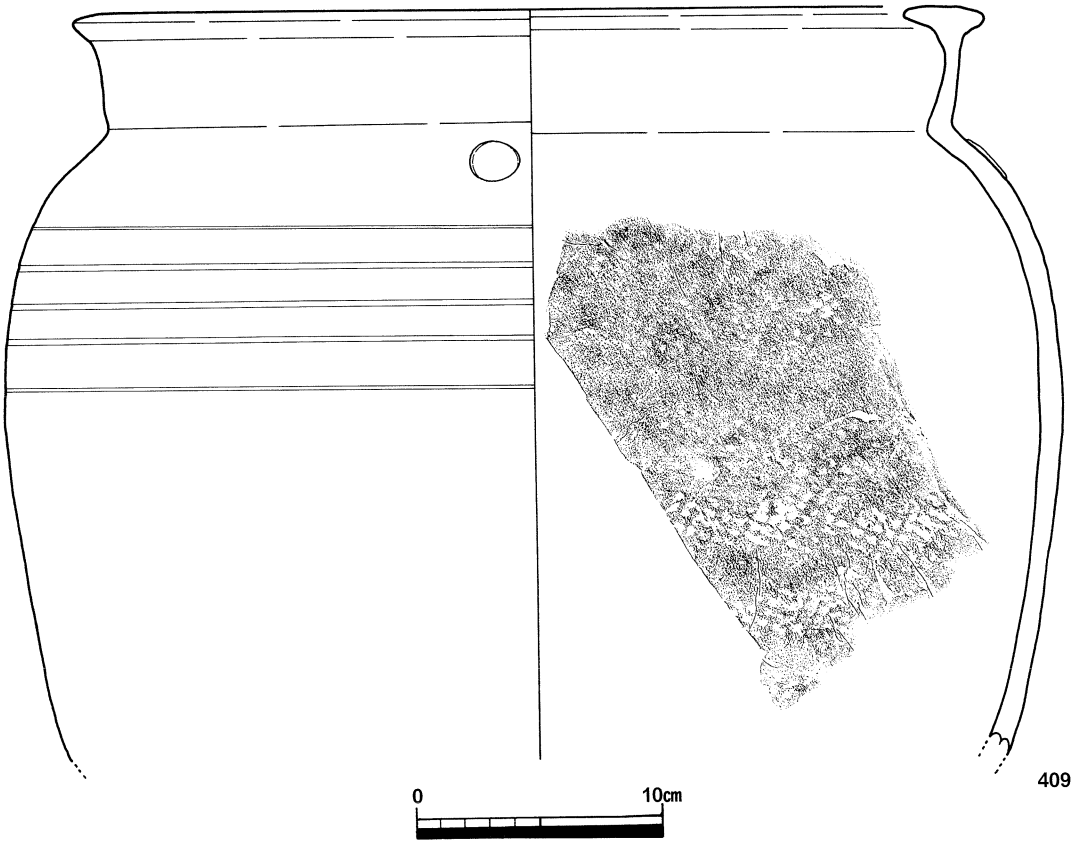
SX2102（第63図参照）

第２遺構面下層東端部で検出した性格不明遺構である。検出した標高は0.98m前後で，東面が調査対象外になり，またSK2101・SX2101に壊され全容は不明である。西面は浅く方形状に伸びる等，複数の掘り方が重複したものと考えられる。深度は0.08mと浅く，底面では柱穴が認められる。所属時期は遺構面より，18世紀後半～19世紀初頭（Ⅴ期）と考えられる

SK2102出土遺物（第63図参照）

出土量はコンテナ２箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付碗・銅緑皿，肥前系磁器青磁染付・くらわんか・広東碗・紅猪口，京・信楽系陶器丸碗・土鍋，備前系陶器灯明皿・擂鉢，土師質土器甕・火鉢類，施釉陶器，屋島焼，瓦片等がある。409は肥前系陶器甕である。なで肩の肩部から頸部が直立し，口縁部は内・外方向に肥厚している。外面に鉄釉を施し，体部上端にボタン状の貼花文，上半部には凹線が５条認められる。体部内面には，格子目状の当て具痕が認められる。17世紀後半の所産と考えられる。





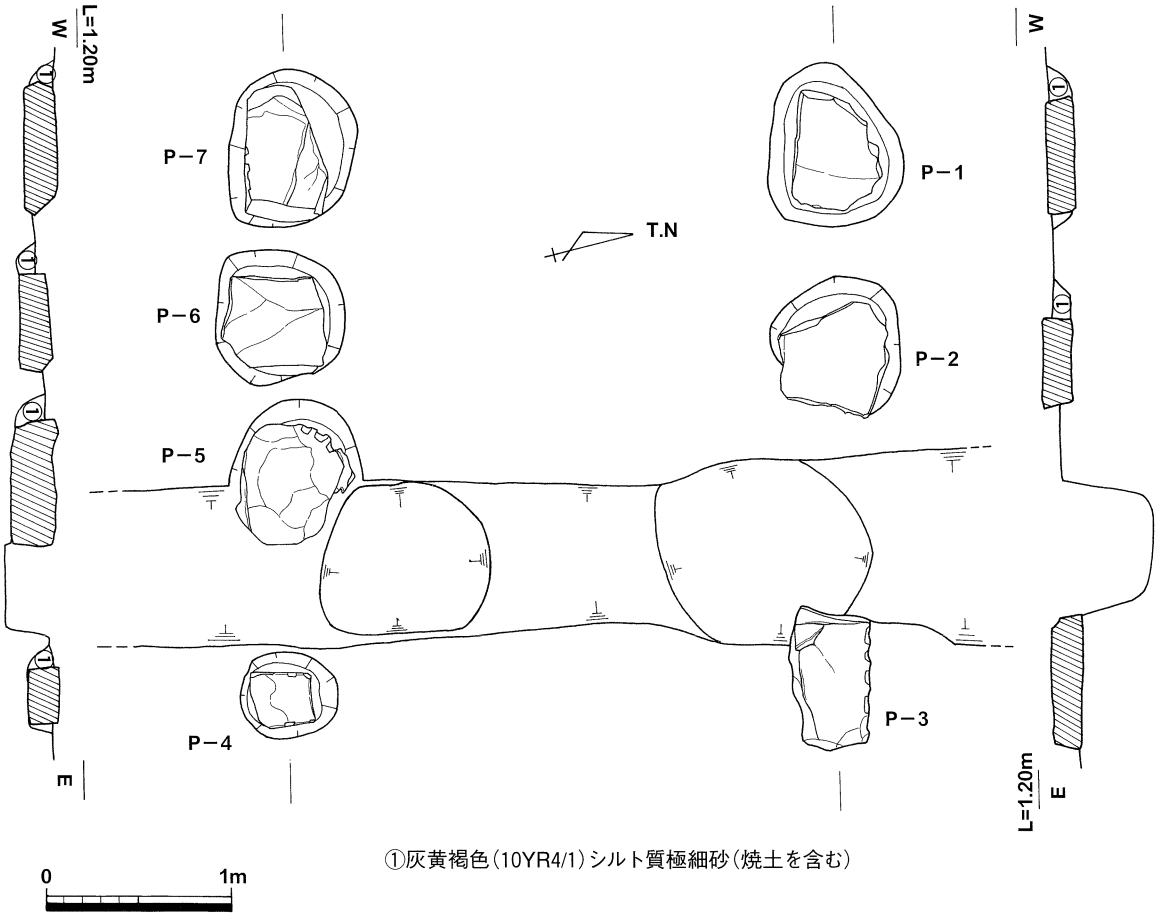
第63図　SX2102平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

第１遺構面下層部遺構

調査地の北端部で大形の性格不明遺構SX1103，その南側の微高地上では礎石建物２棟（SB 1101，SB1102）が認められる。調査地の南半部は低地となり，溝状遺構等を多数確認している。所属時期は，下位の遺構面（第２遺構面下層部）より19世紀初頭以降で，出土遺物で明らかに明治期のものは認められず，瀬戸・美濃系磁器端反碗や京・信楽系陶器灯明皿，屋島焼等が存在することから19世紀前半期を中心としたもの（Ⅵ期）と想定できる。遺構面の大半部で，焼土層が被覆するのを確認しており，火災により廃絶した遺構面と考えられる。

SB1101（第64図参照）

第１遺構面下層北部で検出した礎石建物である。撹乱坑により北面で１箇所の礎石を欠くが，平面が正方形を呈する梁間１間（約３ｍ）×桁行３間（約３ｍ）で規模面積約９㎡が確認できた。柱間は梁間３ｍ，桁行１ｍと推定でき，主軸方位はＮ－103°－Ｅを測る。確認された礎石は全て扁平な安山岩で，北東隅のもの（Ｐ－３）を除き，円形を呈する掘り方の底面に据付けられ，礎石上面は標高0.90～0.95ｍの間で揃う。確認できた建物の規模は以上のとおりだが，東面を構成する礎石が他に比べて小さいもの（Ｐ－４）と掘り方を伴わず地面に置かれた状態のもの（Ｐ－４）が認められ，更に東方向に伸びる可能性がうかがわれる。南面が桁行５ｍ分に相当する柱筋上に扁平な安山岩も認められ（付図２参照），東面の以東は上層部で確認されている学校校舎に付随する廂の下に相当し土間（廊下）であった可能性を考慮すると削平を受けた可能性も推定され，本来は東西方向に長い建物であったと考えることもできる。礎石は焼

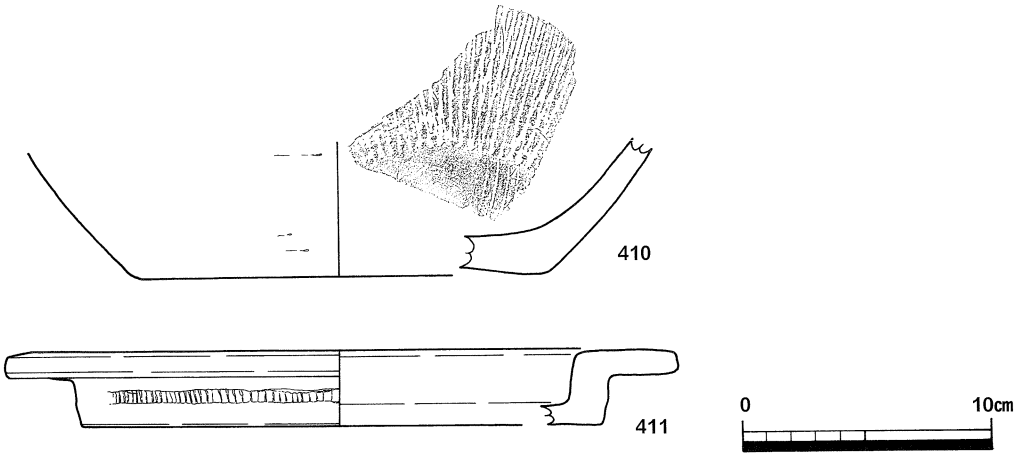


第64図　SB1101平・断面図（1/40）

土で被覆され，なおかつ礎石を据え付けた掘り方の埋土にも焼土を含むことが認められることから，２度に亘る火災の間に存続した建物と考えられ，第２遺構面下層が廃絶して比較的短期間のうちに建てられたものと推察できる。

SB1101出土遺物（第65図参照）

410はＰ－５の出土遺物で，備前焼系陶器擂鉢。411はＰ－７の出土遺物で，蓋形の土師質土器。上面部には赤色の顔料が塗られており，合口の下部には帯状の押圧痕が認められる。



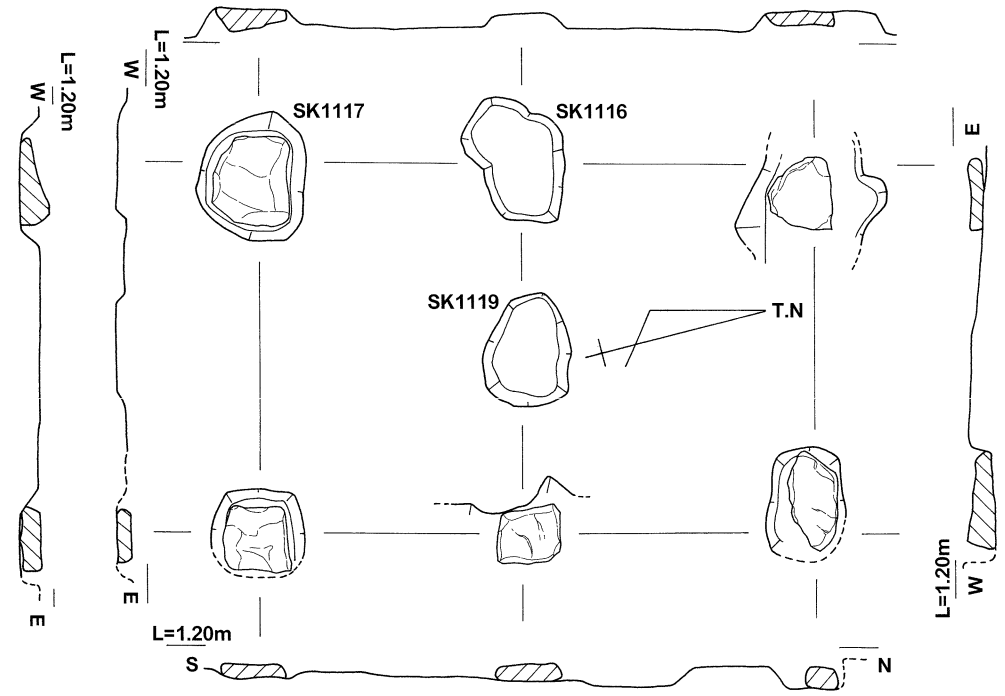
第65図　SB1101出土遺物(1/3)

SB1102

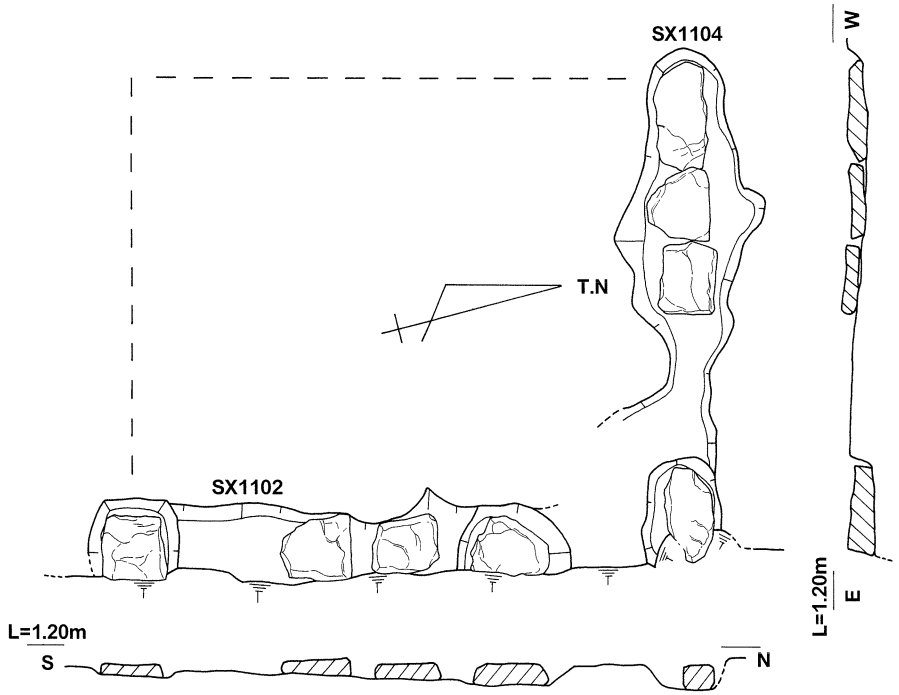
第１遺構面下層中央部で検出された礎石建物である。検出時には溝状遺構（SD1111），土坑（SK1116・1117・1119），性格不明遺構（SX1102・1104）として確認しているが，遺構の前後関係や基礎の構造，平面での規模を検討した結果，当地点で２度の建替えが行なわれた建物として図上で復元した。以下SB1102－1～3として報告する。なお確認された石材はSD1111の割石を除き全て扁平な安山岩で，個別に特徴あるものは確認していない。

SB1102－1（第66図参照）

土坑（SK1116・1117・1119），性格不明遺構（SX1102・1104）を用い復元した礎石建物である。平面が南北方向に長い長方形となり，梁間１間（約3.9m）×桁行２間（約5.9m）で規模面積約23㎡を測る。柱間は梁間3.9m，桁行2.8m，3.1m前後を測り，北側の間取りがやや広くなる。主軸方位はＮ－12°－Ｅを測る。Ｐ－１（SK1117）は円形に壺掘りされ，礎石を底面に据えたもので，Ｐ－３（SK1116）・Ｐ－４（SK1119）は，同様の礎石据付痕（Ｐ－３南西部の掘り込みは抜取痕か）と考えられる。また建替え後のものと考えられる布掘りされたSX1102・1104底面でも円形の掘り方をもつＰ－２・７が認められ，建替え前の礎石が用いられたものと推測できる。他のＰ－５・６については掘り方が認められず，またSX1102・1104の掘り方の形状から，掘削時に一旦，原位置よりはずされた可能性も考えられるが，位置関係及び礎石上面高が他に揃ったものになる。第１遺構面下層部が形成されて間もなく建てられたと考えられるSB1101と同様の基礎構造が認められる（Ｐ－４の底面で多量の焼土が確認されている）点や最も小規模となることから，建替え前の段階と推定できる。



SB1102－1



SB1102－2

第66図　SB1102－１・２平・断面図(1/80)

SB1102－2（第66図参照）

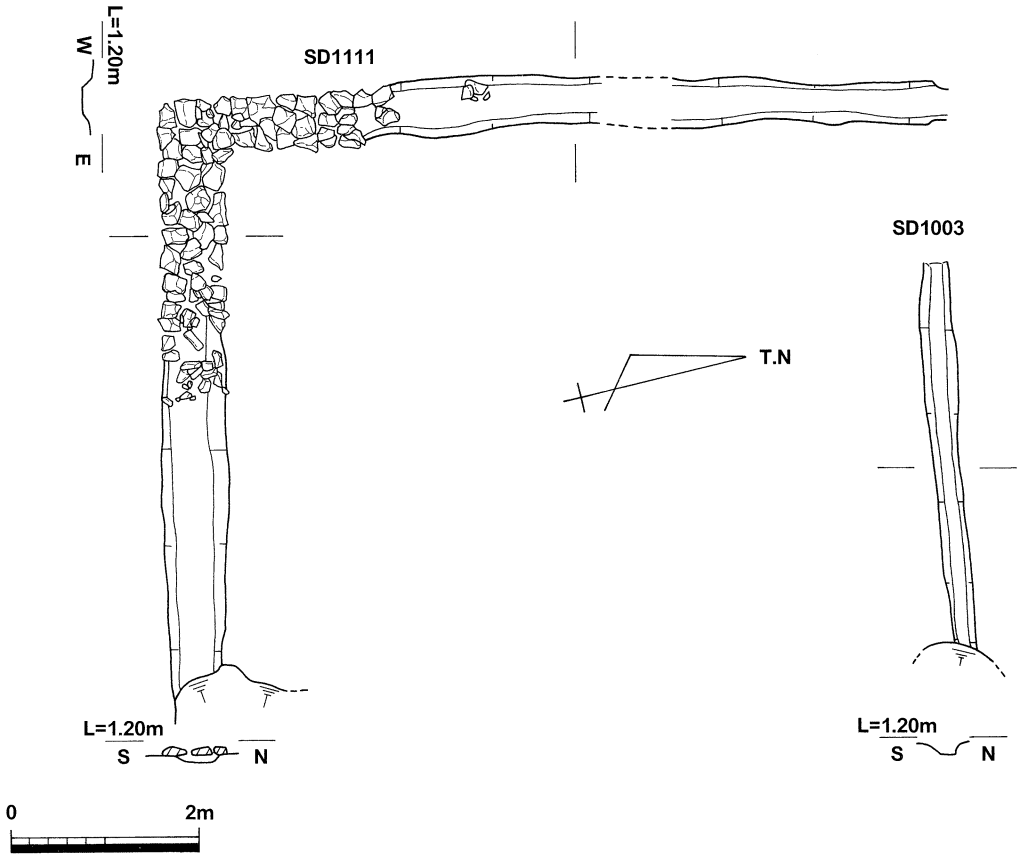
性格不明遺構（SX1102・1104）を用い復元した建物である。SX1102・1104はＬ字形に布掘りされたもので，底面で扁平な安山岩が北及び東に面が揃うように並べられている。また土台の構造からは，先行のものよりも堅固な上部構造になっていることがうかがわれる。西面及び南面を欠くが，西・南面を広くする次の段階での建て替え時に，取り外されたものと推測する。また掘り方の西及び南端部が他の遺構に壊されず収束することから，以下のような建物の規模が想定できる。平面は南北方向に長い長方形となり，東西方向約4.9m×南北方向約5.9mで，規模面積約29m²を測る。東面は建替え前と同じ位置で，西方向に１m（半間相当）分拡張されており，以前よりやや東西方向に長くなる。主軸方位は建替え前と同じＮ－12°－Ｅになる。

以上のように前段階の東面，両端の礎石を利用し西側へと拡張したと判断されるため，建替え後のものとした。

SB1102－3（第67図参照）

溝状遺構（SD1111・1003）を用い復元した建物である。SD1111はＬ字形に布掘りされたもので，南西部のみだが拳大の割石が南及び西面で揃うように並び確認されている。SD1111は第１面下層遺構として検出しているが，当遺構面を被覆する焼土層及び後出のSX1007との前後関係が不明瞭であったことから，本来，第１遺構面上層に帰属する可能性が高いものと考えられる。また第１遺構面上層部において同様な溝状遺構（SD1003）を検出しており，平面形態で当遺構と「コ」の字状になることから，両遺構を合わせ以下のように推定する。

建物の北面となるSD1003は前段階の北面（SX1104）と同じ位置に開削されており，北側へは拡張されなかったと考えられる。一方，南・西面（Ｌ字形のSD1111）は，南側へ２m前後



第67図　SB1102－３平・断面図(1/80)

（１間分）及び西側へ１ｍ前後（半間分）広がる形になる。東面は先行するもの（SX1102）を利用した可能性もあるが，以東では先述したように近代校舎の廊下（土間）部分に相当し削平が激しいため，確定できない。よって東西方向約5.9ｍ以上×南北方向約7.9ｍで面積約47㎡以上の規模と推定できる。

以上から，第１面下層が火災にあった後（第１遺構面上層部形成直後に）建替えられた建物と推測が可能である。

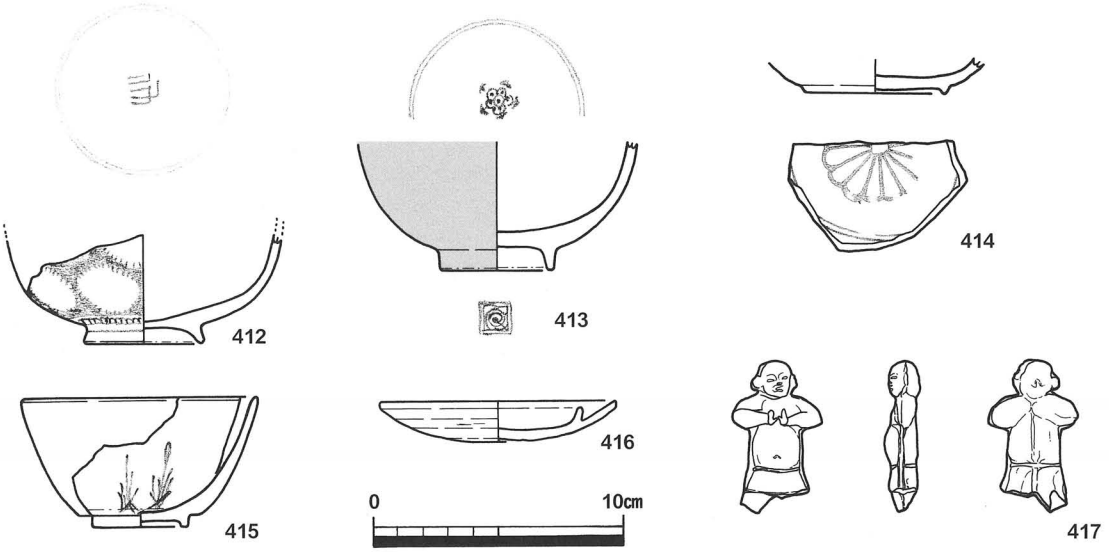
SB1102出土遺物（第68図参照）

SB1102－1では，出土量は少ないがSK1116・1117・1119で肥前系磁器広東碗・端反碗，織部向付，屋島焼髪水入れ，施釉陶器鉢，土師質土器細片，軒平瓦が認められる。

SB1102－2では，SX1102でコンテナ1/4箱分出土があり，図化した以外に肥前系陶器刷毛目碗，肥前系磁器小広東碗，瀬戸・美濃系陶器水甕，京・信楽系陶器端反碗・備前系陶器瓶，屋島焼，ミニチュア・玩具が認められる。SX1104ではコンテナ1/4箱分出土があり，図化した以外に肥前系磁器撥高台碗，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗，瀬戸・美濃系磁器碗，京・信楽系陶器端反碗，備前系陶器瓶，軟質施釉陶器行平鍋，木製品杭が認められる。

SB1102－3では出土量は少ないが，ＳＤ1111で肥前系磁器端反碗，備前系陶器灯明皿，屋島焼，土師質土器茶釜があり，SD1003では，備前系陶器灯明皿がある。

図化したものは，SX1102の出土遺物（412・413・415・416）及びSX1104の出土遺物（414・417）である。412・413は肥前系磁器で，撥高台及び青磁染付の碗。414は瀬戸・美濃系陶器皿である。黄瀬戸で，菊花の押印文が認められる。415は京・信楽系陶器で，小杉碗。416は，備前系陶器灯明皿。417は，型成形の土師質製人形。



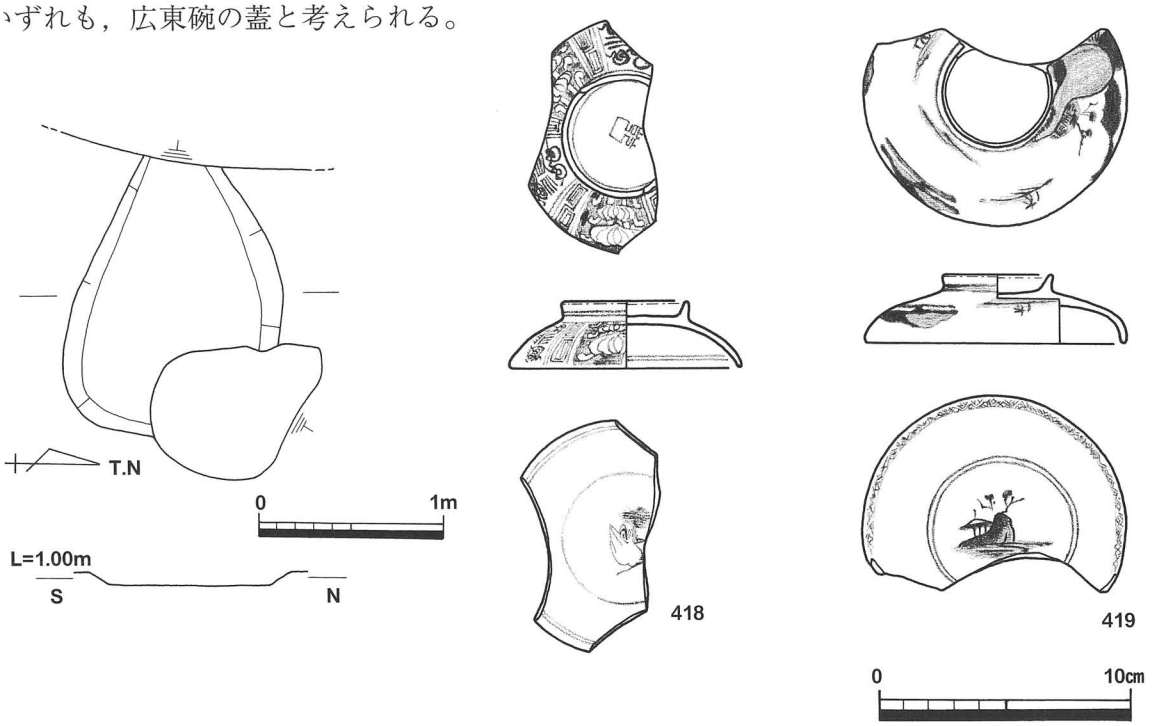
第68図　SB1102出土遺物(1/3)

SK1103（第69図参照）

第1遺構面下層南部で検出した土坑である。検出した標高は1.08m前後で，北東部をSP1102に西部を撹乱坑に壊される。平面は不整形な方形を呈し，長軸方向に1.47m，短軸方向に1.09mを測る。断面は船底形になる。所属時期は遺構面及び出土遺物より，19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。

SK1103出土遺物（第69図参照）

出土量はコンテナ1/2箱分で，図化した以外に肥前系磁器青磁染付・端反碗・猪口，瀬戸・美濃系陶器広東碗・水甕，京・信楽系陶器碗，屋島焼，施釉陶器土鍋，土師質土器甕，鉄屑がある。418・419は肥前系磁器で，碗蓋である。418は外面に清朝風の絵柄を付け，高台（摘み）内に変字で「乾」銘款が認められる。見込み（天井部）には，鷺のワンポイント文様が付けられている。419は内・外面に風景文を描くもので，口縁部内面に四方襷文が付けられている。いずれも，広東碗の蓋と考えられる。



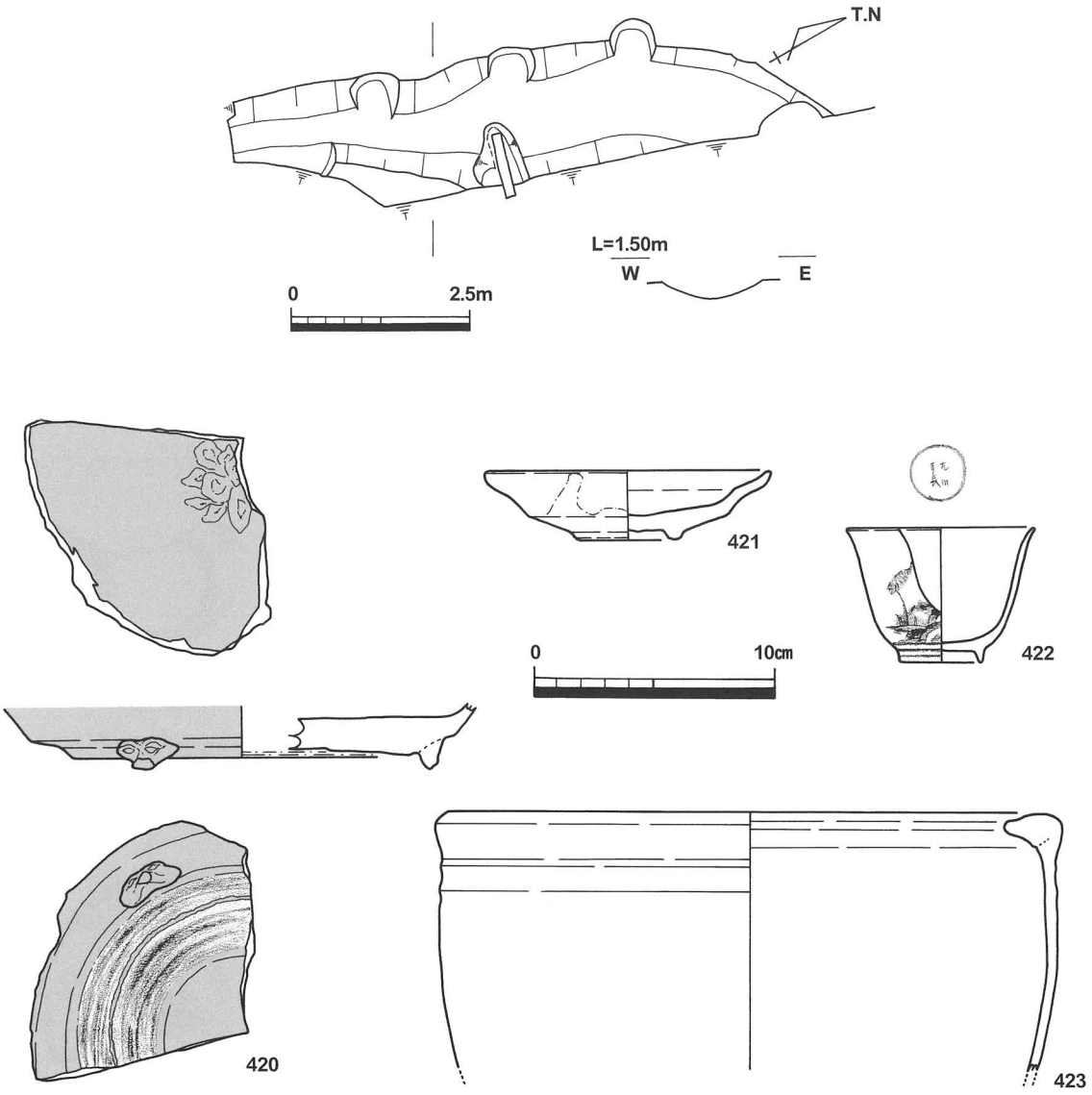
第69図　SK1103平・断面図(1/40)及び出土遺物(1/3)

SD1100（第70図参照）

第１遺構面下層南東部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出した標高は1.19m前後で，底面は標高0.98～1.13mを測り，緩やかに南方向へ下る。幅は1.7m前後で，やや蛇行気味に南西方向から南へと湾曲して検出されている。深度は0.2m足らずで，断面はU字形を呈している。所属時期は遺構面より，19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。

SD1100出土遺物（第70図参照）

出土量はコンテナ1/4箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付・二彩手鉢，軟質施釉陶器細片等がある。420は波佐見産とみられる，肥前系磁器青磁（皿）底部。獣面の脚付きで，内面に牡丹の陽刻文を施す。蛇ノ目凹形高台で，釉剥ぎ部に鉄錆を塗布している。421は肥前系陶器で，胎土目の皿。422は肥前系磁器で，端反口縁の小坏。高台内には圏線及び「大明年製」の銘款が認められる。423は，産地不明陶器甕である。外面に白泥及び緑色の釉を施す。



第70図　SD1100平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

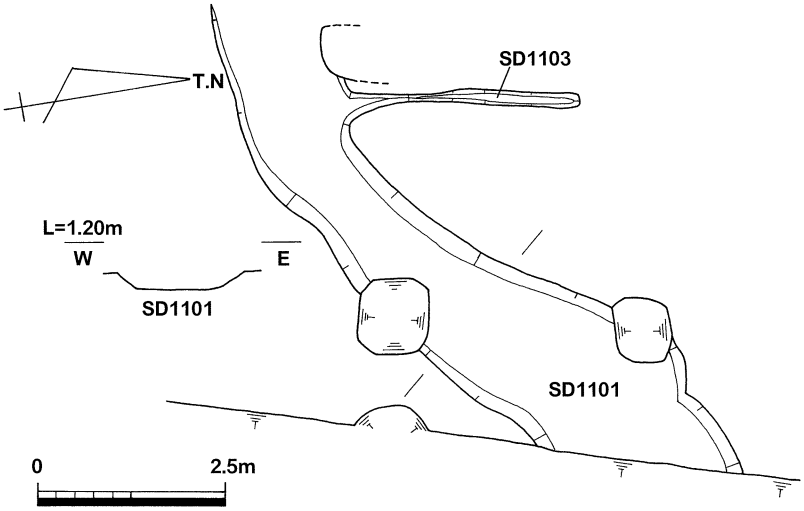
SD1101（第71図参照）

第１遺構面下層南東部で検出した南西方向の溝状遺構である。検出した標高は1.14m前後で，底面は標高0.89～0.92mを測る。幅は1.7m前後で，やや蛇行しながら南西へと伸び途切れる。深度は0.2m程で，断面は船底形を呈している。所属時期は出土遺物及び遺構面より，19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。

SD1101出土遺物（第73・74図参照）

出土量はコンテナ５箱分で，図化した以外肥前系陶器陶胎染付・刷毛目碗・鉢，肥前系磁器小広東・広東碗・仏飯器・紅皿，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗，小杉碗，瀬戸・美濃系磁器皿，京・信楽系陶器碗，屋島焼，軟質施釉陶器行平鍋，土師質土器火灯，焙烙・竈片がある。424～427は肥前系磁器で，青磁染付碗（424），染付碗（425），蛇ノ目凹形高台（低）の皿（426），青磁鉢（427）。427はSX2102と接合関係がある。428は瀬戸・美濃系陶器（植木）鉢で，雲龍の貼花文が付けられる。内面は鉄錆を刷毛塗し，外面に緑釉を施す。429～433は京・信楽系陶器で，

端反碗（429），灯明皿（430），錆絵染付の碗（431・432），甕（433）。434は軒平瓦，宝珠の中心飾りに唐草文が認められる。435～437は備前系陶器で，擂鉢（435・436），灯明皿（437）。438は産地不明陶器（鉢）口縁部で，橙及び白色を呈する交胎を用いる。



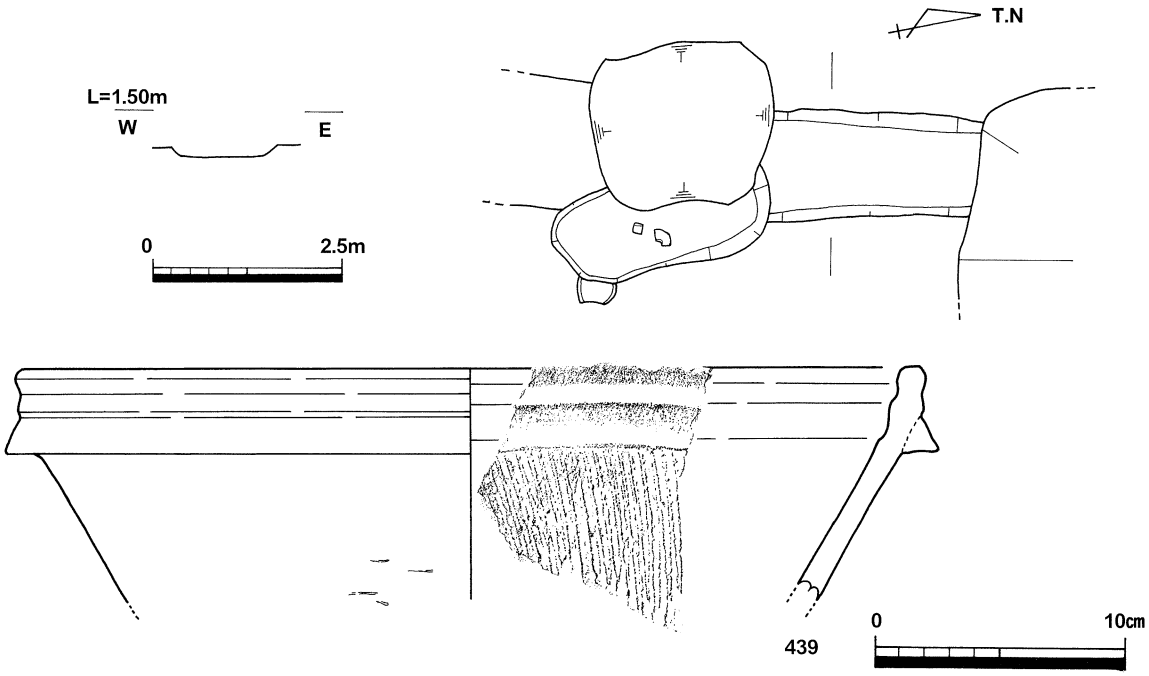
第71図　SD1101平・断面図(1/100)

SD1110（第72図参照）

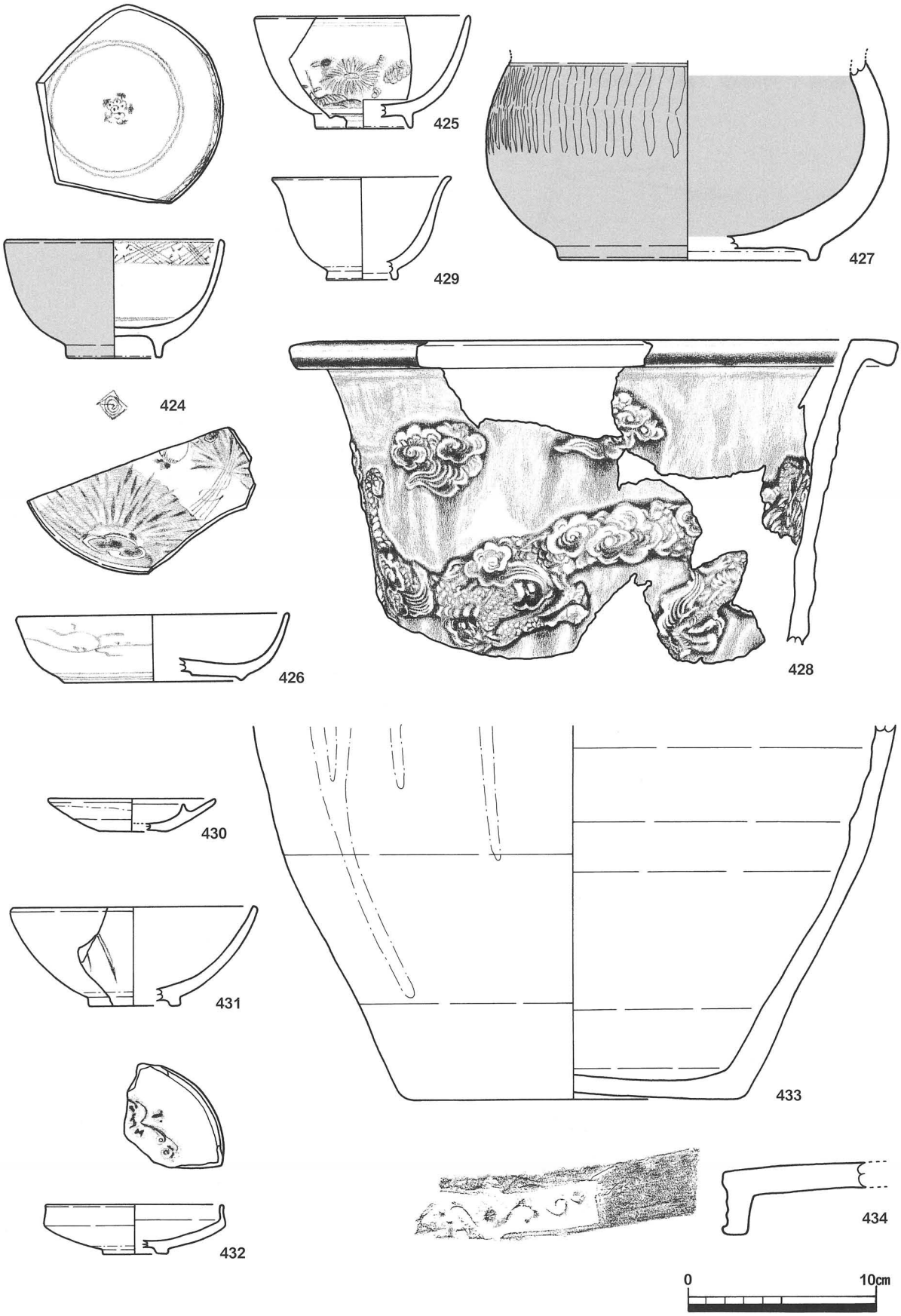
第１遺構面下層北西部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出した標高は1.10m前後で，底面は標高0.92m前後を測る。幅は1.4m前後で，SX1103（SK3001）に取り付くものだが，南側では，削平の為か途切れる。深度は0.2m程で，断面は船底形を呈している。所属時期は出土遺物及び遺構面より，19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。

SD1110出土遺物（第72図参照）

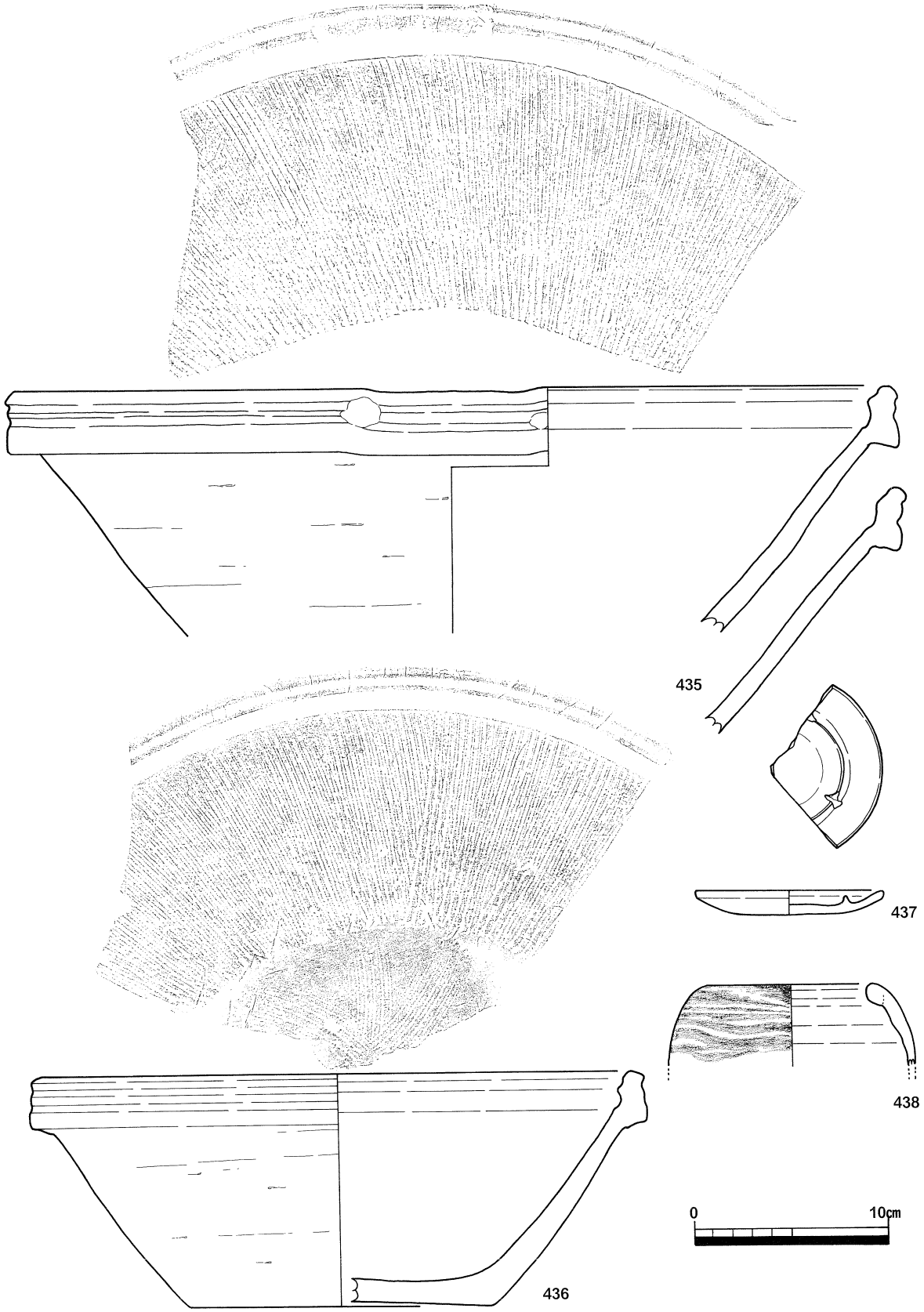
出土量は少量で，図化した以外に磁器細片，屋島焼の土瓶がある。439は，備前焼系擂鉢



第72図　SD1110平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)



第73図　SD1101出土遺物①(1/3)



第74図　SD1101出土遺物②(1/3)

SX1103（第75図参照）

第１遺構面下層北端部で検出した大形の性格不明遺構である。検出作業及び一部の遺構掘削は本遺構面で行なったが，調査の工程上，完掘作業は第３遺構面まで機械掘削を行った後で実施した。第１遺構面で検出した標高は1.05m前後で，調査地の末端部に位置するため詳細は不明で，東西方向に約10m，南北方向に約４mの規模で検出したが，調査地東壁では北端部の底面がやや上がって認められることから，南北方向には約８mの規模と推定される。なお掘り方の上端部はＬ字形に検出でき，西部で突出した部分をもつことから第３遺構面での掘削時に突出部を別番号（前述のSK3001）として掘削した。完掘の結果，掘り方の下端部でもＬ字形になり，検出面から深度1.6mの規模を測る。

埋土の堆積状況では，埋め戻し土とみられる多量の遺物を含んだ１～７・11・12層が上位に堆積した後，木質遺物を含みやや泥炭化した８層が認められる。以下に砂質土である９・10層が存在している。遺物の取り上げは，概ね上位のレンズ状堆積となる１～５及び11・12を上層，その下位で褐色を帯びた６・７層を中層，黒褐色を呈する８層を下層，以下の砂質土層を最下層に分別し行なった。

また検出時には第１遺構面下層を覆う焼土が削平のためか確認できず，焼土層との前後関係が明確ではないが，被熱した完存に近い瓦を多量に検出したことから，火災直後に埋没したものと推定される。所属時期は，出土遺物より19世紀前半（Ⅵ期）と考えられる。遺構の性格は明確にならないが，後出する区画溝SD1002の下位に存在することから，本遺構も同様の性格が想定される。調査地東壁の埋土に屋敷側の南壁が急傾斜になるレンズ状堆積や，北壁にもレンズ状堆積（砂層の９層）が認められ，Ｌ字形の区画溝を示すものとみられる。

SX1103出土遺物（第76～85図参照）

取り上げた遺物はコンテナ約25箱分で，以下は，取り上げ別で確認できる出土品である。

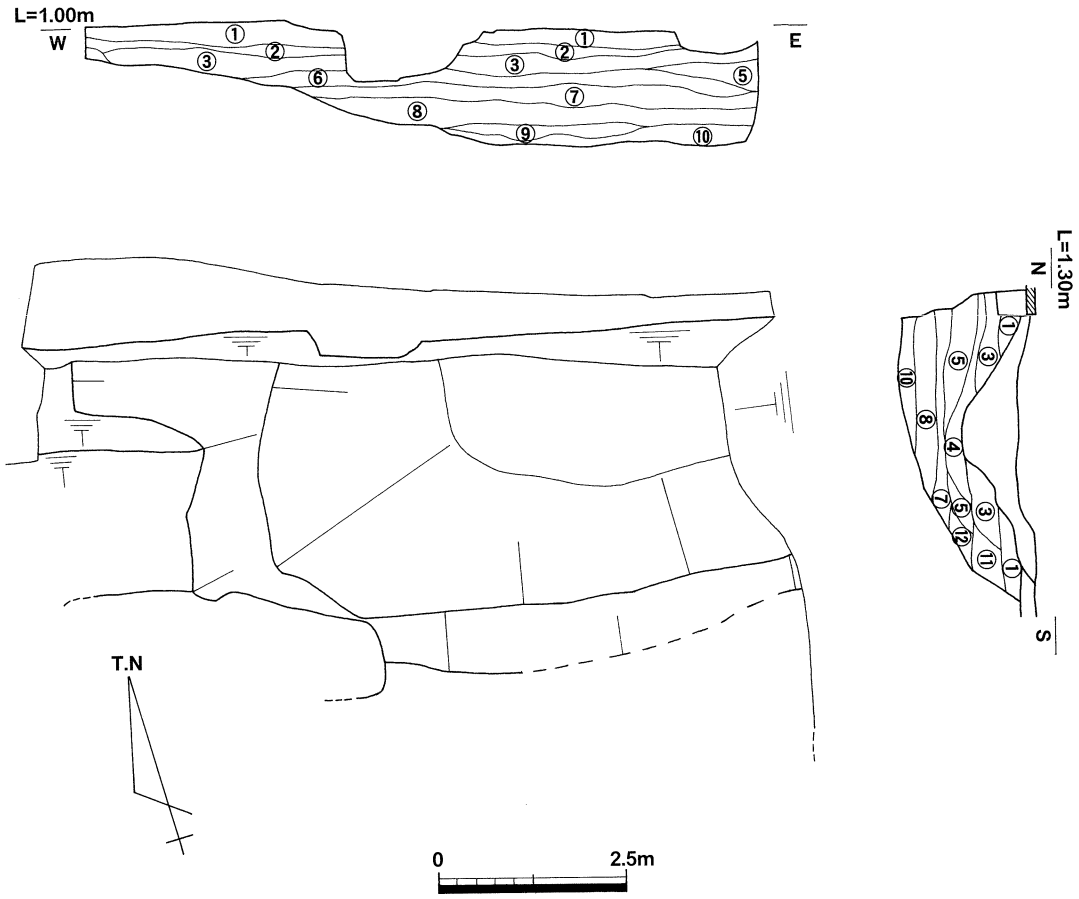
上層部では，肥前系陶器呉器手・陶胎染付碗，肥前系磁器・小広東・広東碗・蛇ノ目凹形高台（低）の皿等，京・信楽系陶器小杉碗・端反碗・灯明皿・甕・土鍋，瀬戸・美濃陶器馬ノ目皿・練鉢等，瀬戸・美濃系磁器碗，備前系陶器灯明皿・徳利・擂鉢，施釉陶器急須・土鍋，屋島焼，土師質土器甕，玩具がある。

中層部では，肥前系陶器陶胎染付・刷毛目碗，肥前系磁器小広東・広東碗・鉢・皿等，瀬戸・美濃系陶器刷毛目・広東碗・水甕・練鉢・植木鉢，瀬戸・美濃系磁器端反・湯呑碗，京・信楽系陶器端反碗・灯明皿・火入・甕等，備前系陶器灯明皿・擂鉢・徳利，施釉陶器土鍋・甕，軟質施釉陶器蓋・土鍋・人形，源内焼，屋島焼，土師質土器火鉢・甕・焙烙・土釜等，軒丸瓦がある。

下層部では，肥前系陶器呉器手碗・刷毛目鉢，肥前系磁器広東碗・鉢・青磁花生等，瀬戸・美濃系磁器碗，京・信楽系端反碗・灯明皿等，備前系陶器灯明皿・擂鉢，施釉陶器甕，軟質施釉陶器土鍋，土師質土器蓋・火鉢・甕・焙烙，軒丸瓦がある。

最下層では，少量の木質遺物が認められた以外はほぼ皆無であった。上層から下層までで遺物の様相には大差が認められず，遺構の確認状態からも短期間に埋没したものと推定される。

440～462・490は，上層の出土遺物である。440・441は肥前系磁器で，小広東碗。442は肥前系磁器で，コンニャク印判（蕪）の碗。見込みに蛇ノ目釉剥ぎをし，アルミナ砂を塗布する。443も肥前系磁器碗。稲束と鳥の絵を描く。444は肥前系磁器広東碗。445は肥前系磁器で，若松文の皿。446・447は肥前系磁器蓋。448・449は瀬戸・美濃系陶器腰錆碗。450も瀬戸・美濃

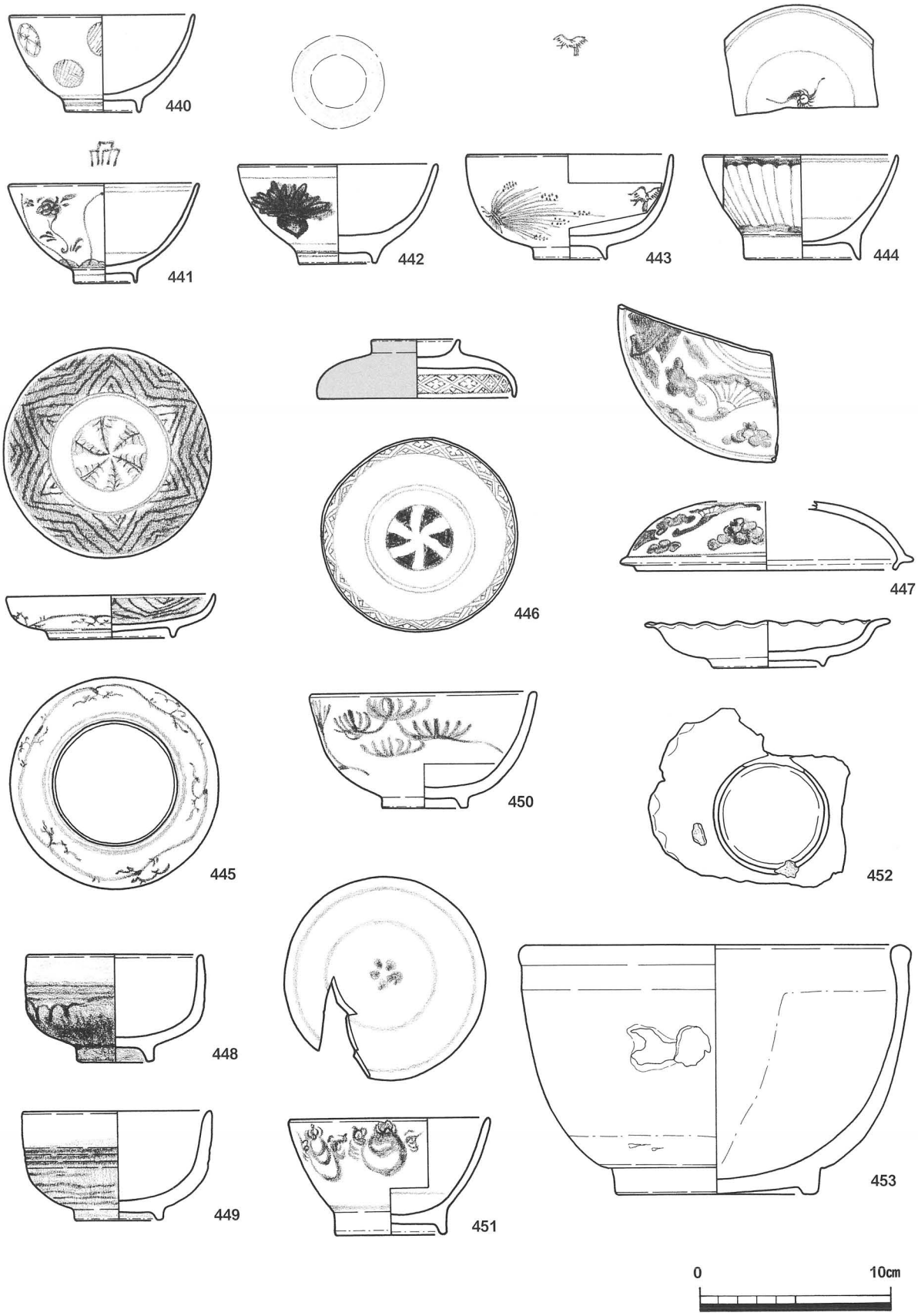


①黄褐色(2.5Y5/3)十浅黄色シルト質細砂
②灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂
③暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細砂(瓦・土器を多量に含む)
④褐灰色(10YR6/1)シルト質細砂
⑤褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂十灰白色(5Y8/2)細砂
(灰黄色シルト質極細砂を若干含む)
⑥褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂(粒子が細かく粘性有り)
⑦褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂(粒子が細かく粘性有り)
⑧黒褐色(7.5YR3/2)シルト質極細砂(植物遺体を含み、泥炭化する)
⑨灰白色(7.5Y7/1)細～粗砂
⑩灰色(5Y5/1)シルト質極細砂(粒子が細かい)
⑪暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細砂
⑫灰黄褐色(10YR4/2)シルト質細砂

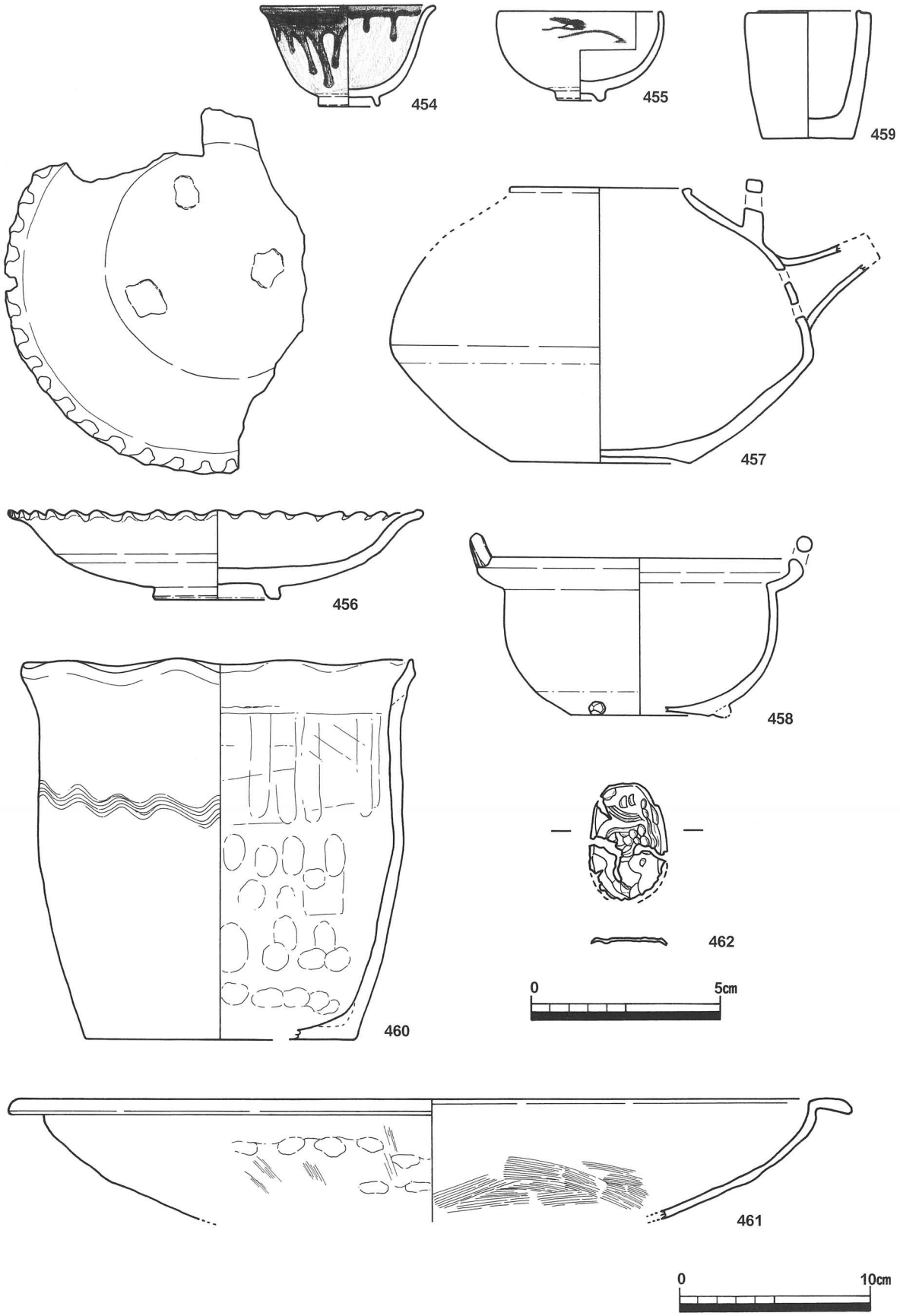
第75図　SX1103平・断面図(1/100)

系陶器の丸碗で，外面に染付で松枝を描く。451は瀬戸・美濃系陶器の広東碗，外面に宝珠文，見込みには五弁花の染付を施す。452・456は瀬戸・美濃系陶器で，鍔折れヒダ皿。外面腰部(452)，見込み（456）に目跡が認められる。453は瀬戸・美濃系陶器練鉢。外面に熔着痕が残る。454・455は京・信楽系陶器で，端反形碗（454）・丸碗（455）。455の畳付には，赤色顔料（漆？）が付着している。457は軟質施釉陶器の土瓶。458は施釉陶器の土鍋。紐状の把手と粒状の脚が付く。459は土師質土器で，ロクロ成形の焼塩壷。460は土師質土器甕。外面に波状文を施す。461は土師質土器焙烙。462は飾り金具（柄頭？）。

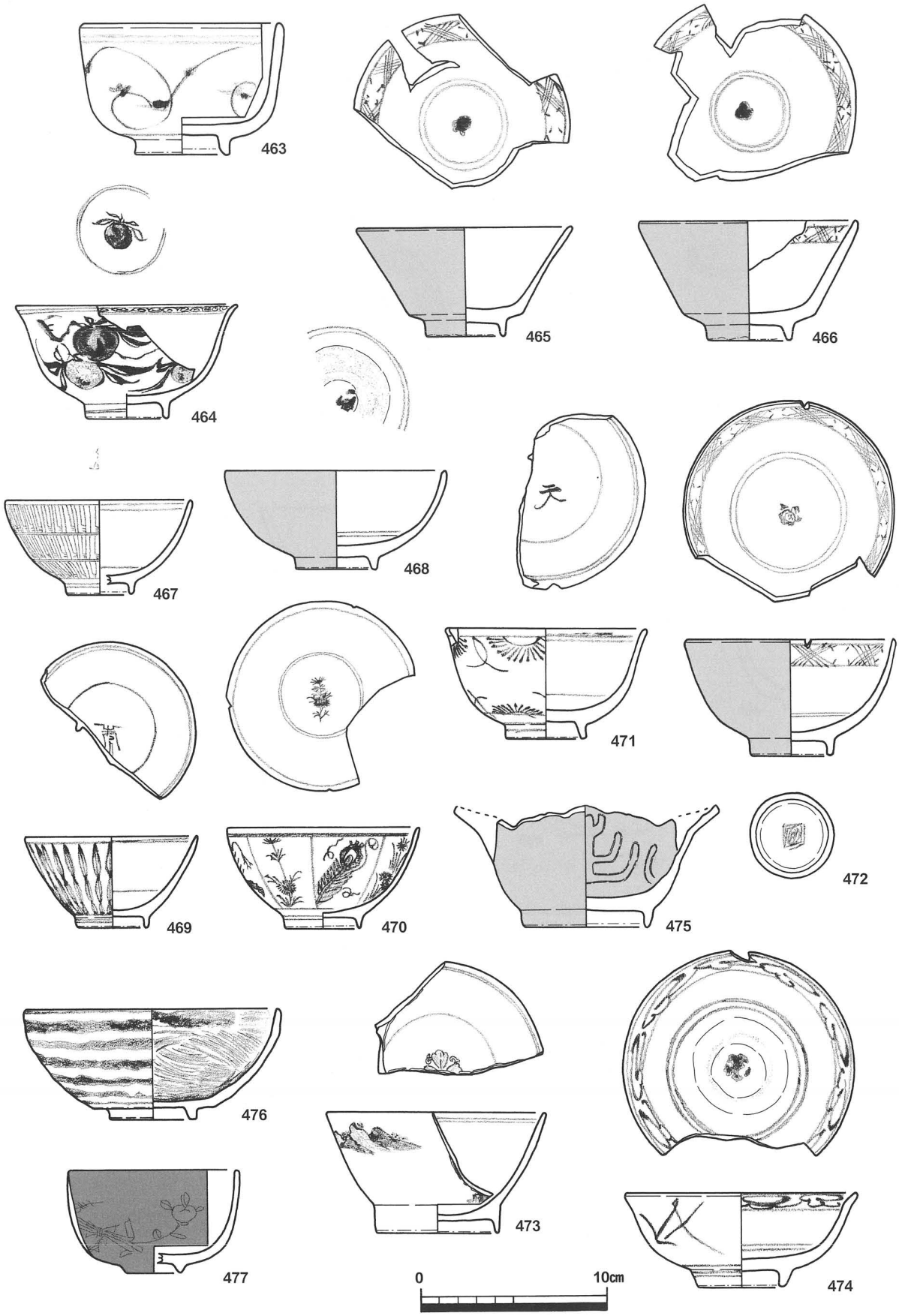
463～489・491～502は，中層の出土遺物である。463は肥前系陶器で，陶胎染付の碗。高台内に鉄錆を塗布している。464は，産地不明の磁器碗。器壁の薄い端反形で，外面及び見込みに桃，口縁部内面には渦巻き状の雷帯が描かれている。外面に描かれた桃の果実は，桃色～赤褐色を呈する釉下彩（釉裏紅）になっており，中国産かその模倣品とみられる。465・466・468・472は肥前系磁器で，青磁染付碗。465・466は朝顔形の碗で，口縁部内面に四方襷を描き，見込みには五弁花のコンニャク印判を施す。468は，見込みにアルミナ砂を塗布した蛇ノ目釉剥ぎと五弁花とみられるコンニャク印判が認められる。472は，内面に同上の五弁花，四方襷文を施すもので，高台内には二重方形枠「禍福」銘款が認められる。467・469・470は肥前系磁器で，小広東碗。471は，肥前系磁器の端反碗。473は風景文の肥前系磁器広東碗で，ガラス質の熔着剤で焼継ぎをし，金の傷隠しをしている。474は肥前系磁器碗で，外面に松葉文を描く。見込みにはアルミナ砂を塗布した蛇ノ目釉剥ぎと五弁花のコンニャク印判が認められる。475は肥前系磁器で，青磁の鉢。内面に型打ちの陽刻文が認められる。476は瀬戸・美濃系陶器で，刷毛目碗。477は瀬戸・美濃系磁器で，瑠璃釉の碗。上絵とみられる花卉文様の痕跡が認められる。478・479は，肥前系磁器皿。479は，三方割銀杏を描いた蛇ノ目凹形高台（低）の皿。480は，肥前系磁器紅皿。481は肥前系磁器で，菊花散し文の猪口。482は肥前系磁器で，風景文を描いた段重。483・484は，肥前系磁器蓋。483は（朝顔形）青磁染付碗蓋で，コンニャク印判の五弁花と四方襷文を施し，高台（つまみ）内には二重方形枠「禍福」銘款が認められる。484は風景文の蓋で，高台（つまみ）内には二重方形枠「禍福」銘款が認められる。485は肥前系磁器仏飯器。風景文を描いている。486は瀬戸・美濃系陶器で，捻り文を描く広東碗。見込みには，五弁花のコンニャク印判が認められる。487は，京・信楽系陶器の端反碗である。488は，京・信楽系陶器の小杉碗である。489も京・信楽系陶器で，筒形の碗。内面の体部中位に，錆絵の染付けで圏線を描く。490は産地不明の施釉陶器で，ミニュチア大の土鍋。491は，瀬戸・美濃系陶器の灯明（受け）皿。外面の体部中位に，熔着痕が円形状に残る。492は京・信楽系陶器で，筆立て。折枝梅の貼花をもち，花を白と青の顔料で，枝を錆釉で染付して表現している。494は，土師質土器。脚上部が受け口状になり穿孔されている。器種は不明だが，瓦灯或は燭台等の灯火具が考えられる。495は，土師質土器鉢。小形のもので，焼塩壷と考えられる。496は，寛永通宝である。497は，軟質施釉陶器の蓋。底部に回転糸切り痕が残る。498は産地不明陶器の徳利である。鉄釉を施し，白土で「丹嘉」の文字を描く。499・500は，備前系陶器擂鉢。501は，源内焼とみられる軟質施釉陶器の（香炉）口縁部。細かな型打ちによる陽刻文を付け，緑・褐・黄色の釉を施している。502は，産地不明の陶器碗。青色の盛絵文様を描いている。



第76図　SX1103出土遺物①(1/3)

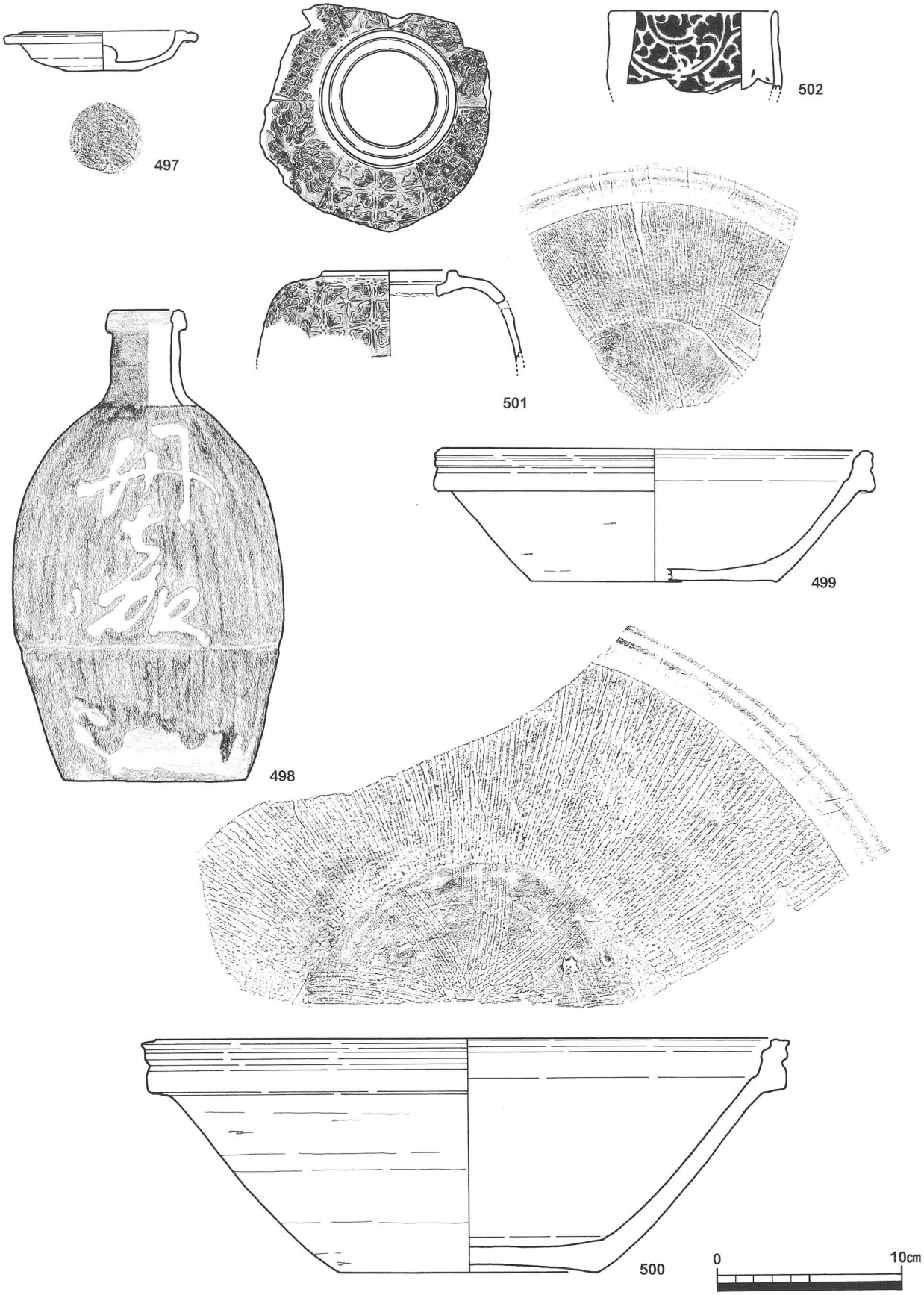


第77図　SX1103出土遺物②(1/3・2/3)

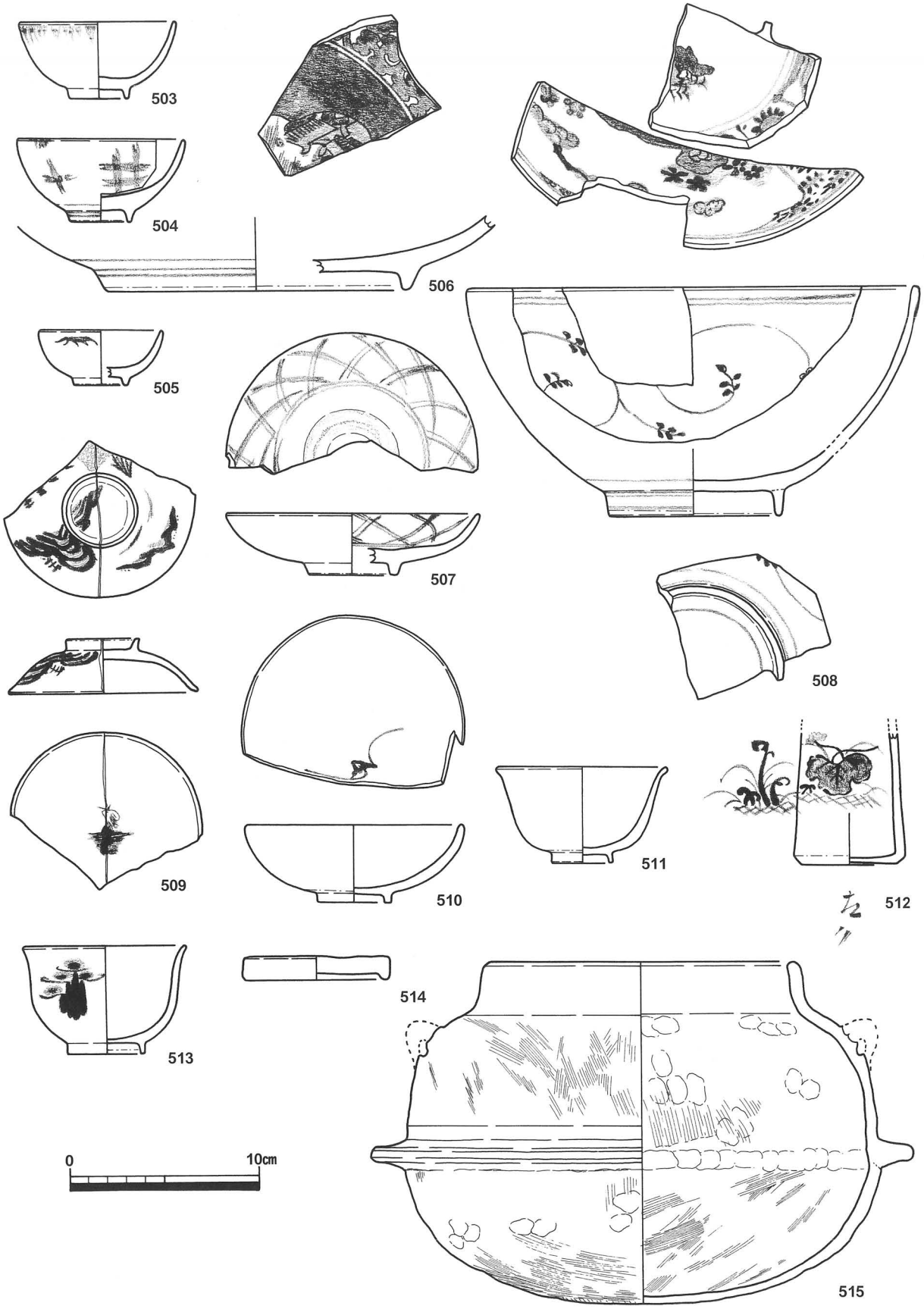


第78図　SX1103出土遺物③(1/3)

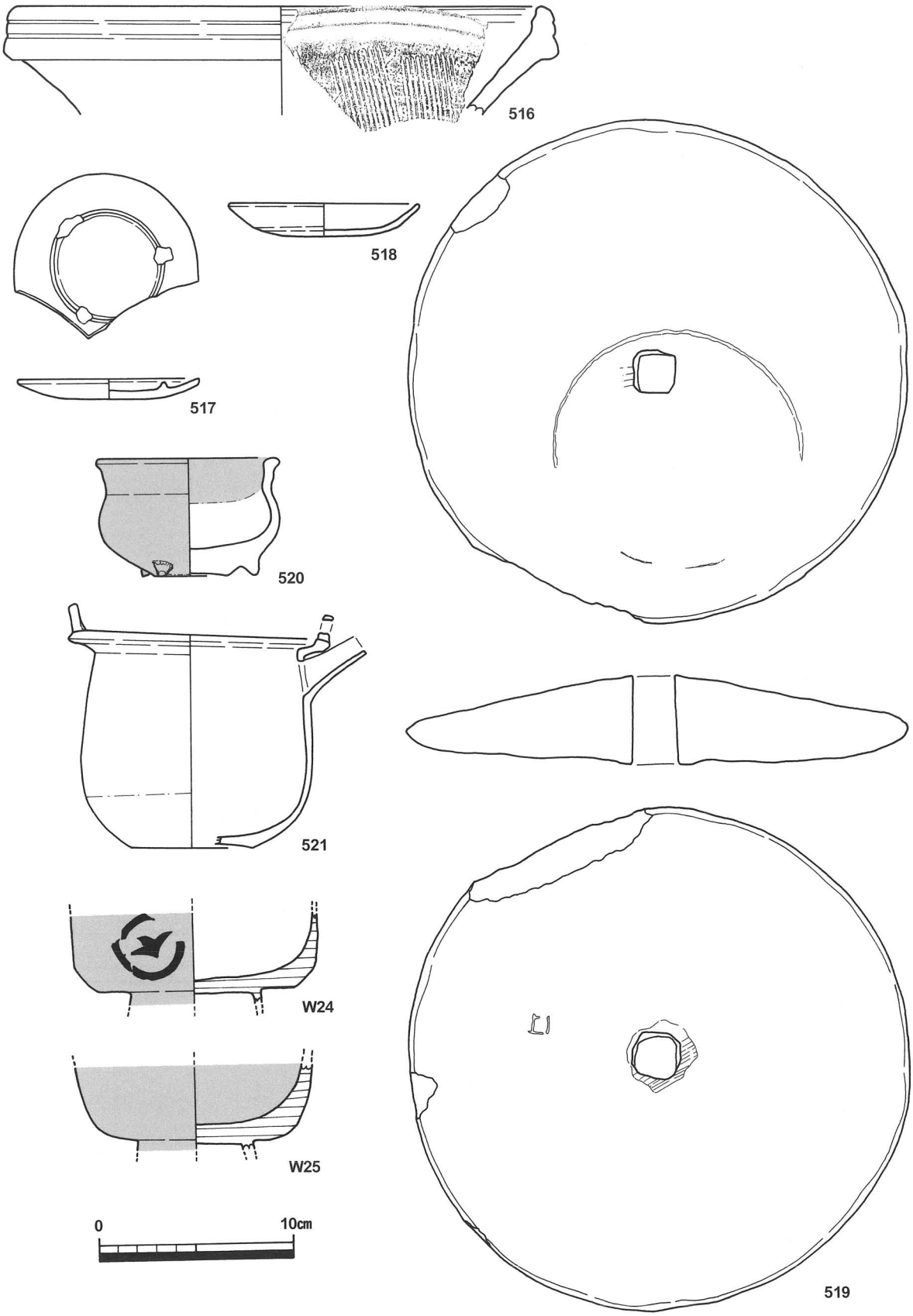
第79図　SX1103出土遺物④(1/3・2/3)



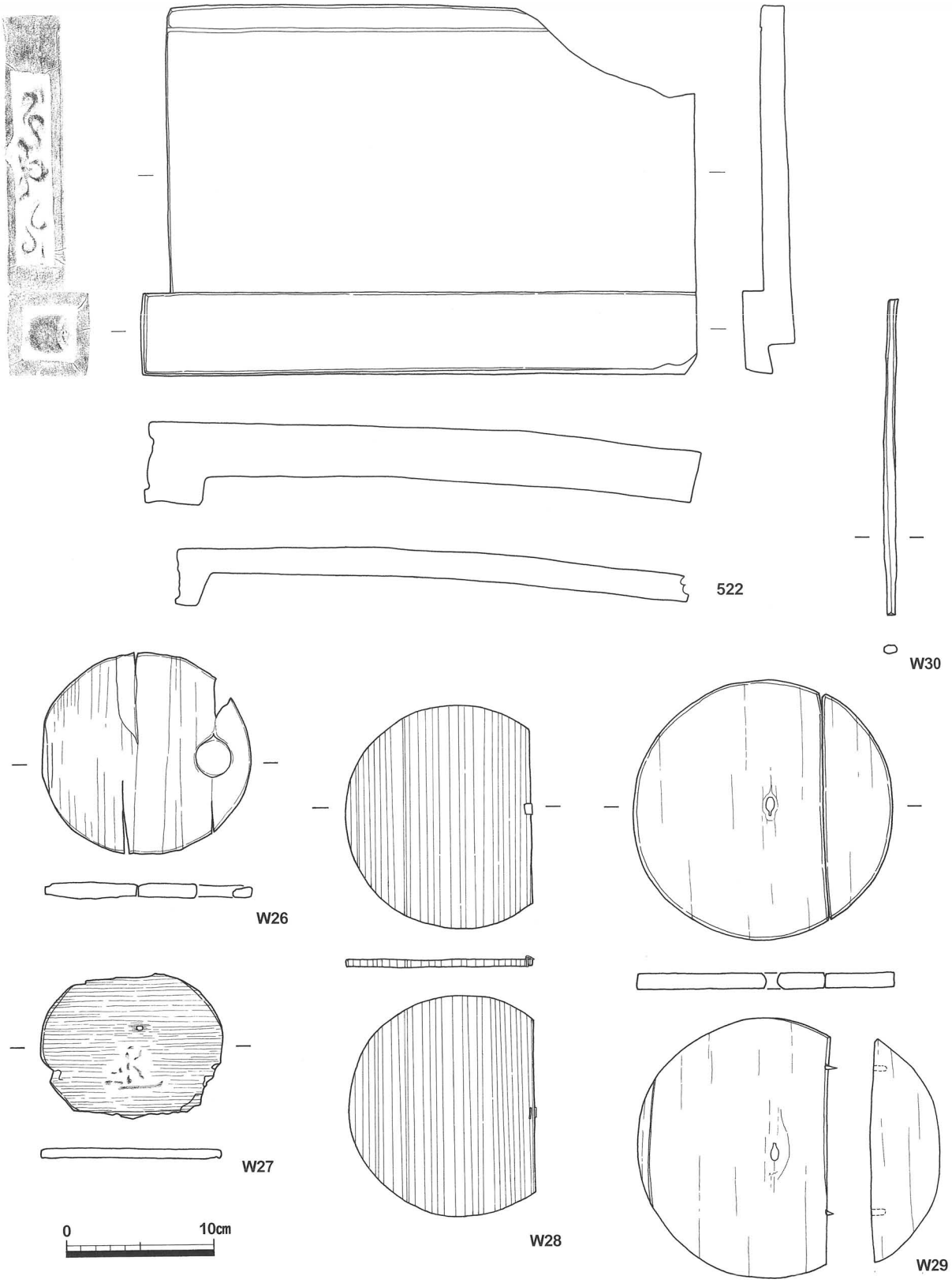
第80図　SX1103出土遺物⑤(1/3)



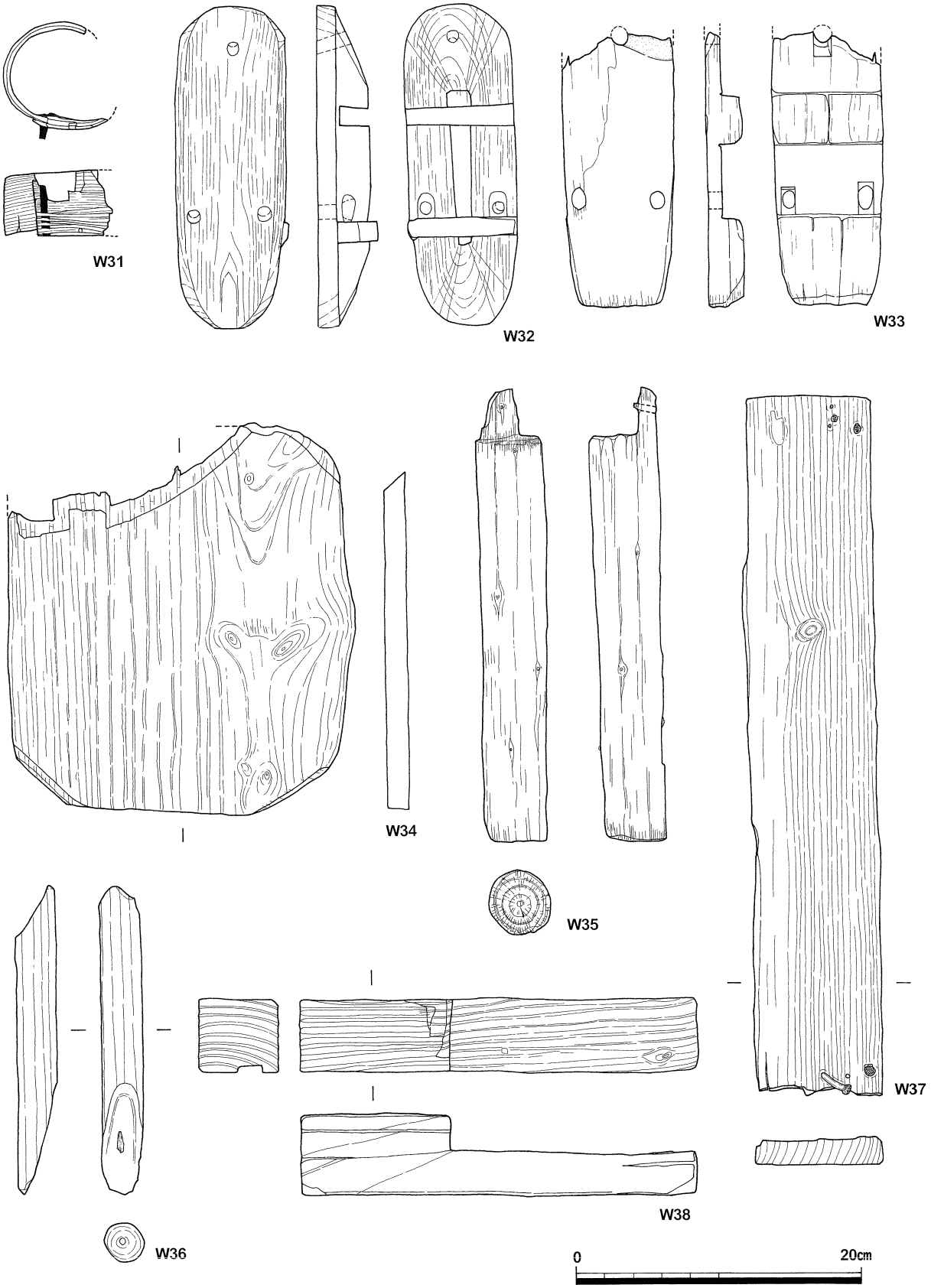
第81図　SX1103出土遺物⑥(1/3)



第82図　SX1103出土遺物⑦(1/3)



第83図　SX1103出土遺物⑧(1/4)



第84図　SX1103出土遺物⑨(1/4)

503～522は下層の出土遺物である。503・504は肥前系磁器碗である。503は雨振り文，504は井桁の文様。505は肥前系磁器で，笹葉文の紅猪口。506は肥前系磁器の大皿。風景文を描く。507は肥前系磁器で，二重格子文の皿。見込みにはアルミナ砂を塗布した蛇ノ目釉剥ぎが施されている。508は，肥前系磁器鉢。外面に唐草文，内面には松竹梅文が見られる。509は肥前系磁器で，碗蓋。外面に風景文，内面に鷺が描かれる。破損部には，ガラス質の熔着剤で焼継ぎ，金の傷隠しが見られる。510は，京・信楽系陶器平碗。見込みに錆絵の染付文様が認められる。511は京・信楽系陶器で，端反碗。512は，京・信楽系陶器（花生）の底部。外面に，草花文を緑色の上絵で描く。底部は無釉で，墨書が認められる。513は産地不明陶器で，端反形の碗。514は，土師質土器（焼塩壷）の蓋。515は，土師質土器茶釜。516は，備前系陶器擂鉢。517・518は，備前系陶器灯明皿（受け皿）。519は，備前系陶器薬研。方形に穿孔され，周辺には刷毛原体とみられる押圧痕が残る。両面とも塗土が刷毛を用い同心円状に施され，片面にはほぼ灯明皿の大きさになる円形の熔着痕が残っている。また片面側には刻印が押され，側縁部は摩耗している。520は肥前系磁器で，青磁香炉。521は，施釉陶器の燗鍋。522は，軒瓦。上層部より同形のもので完存するものが多数認められた。奥行きは長く，上面・下面とも平坦面になっており階段状の桟が付く。桟の差込部分には，溝が側面に平行して彫られている。軒の飾りは，軒平部が中心飾りに半裁花菱，両脇には唐草文を配している。桟の部分は方形になっており，大きな宝珠文が付けられている。上面部には，被熱の痕跡が認められる。

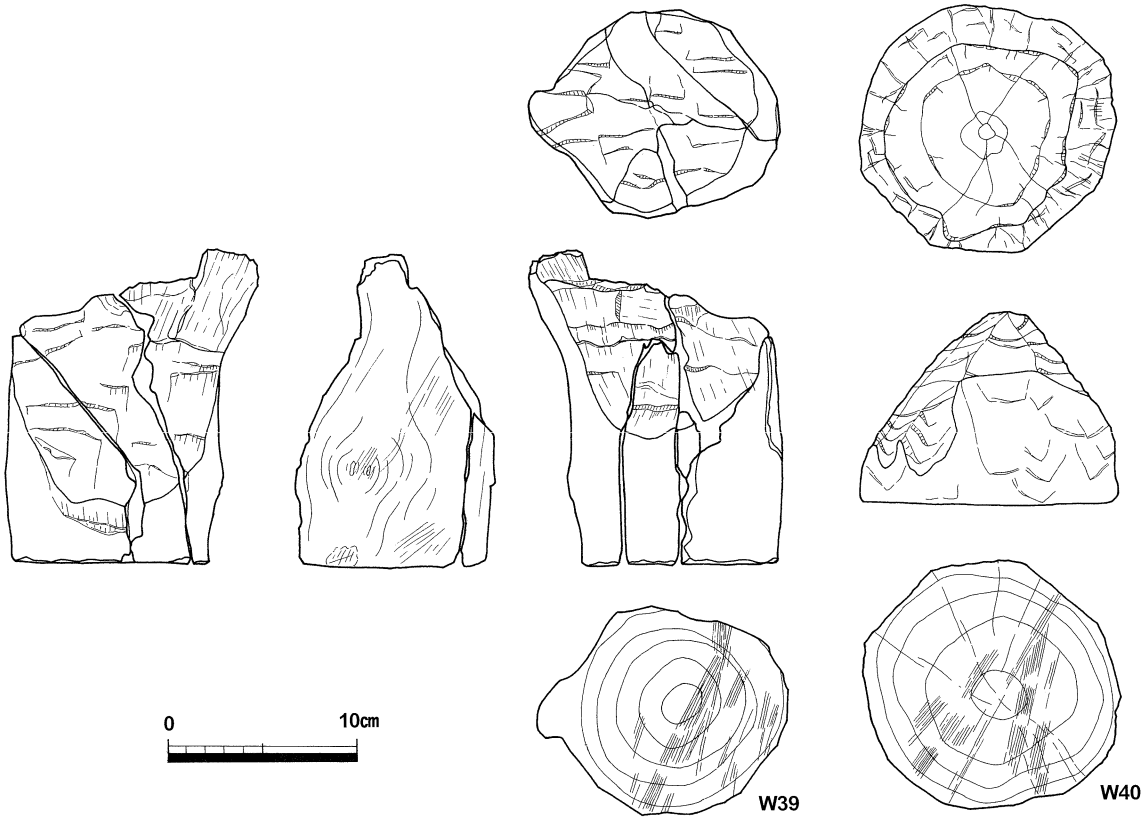
W26～W40は，木製品である。W40は中層出土，W33は最下層の出土で，他は下層の出土遺物である。W26～29は，円形を呈する蓋或は底板の類である。W26は，端に円孔が空けられている。W27は，焼印が押されている。W28・29は1/3程が欠けるもので，桜の樹皮或は竹製の合釘を用いて繋ぎ合わされている。W30は，白木の箸。W31は小形の曲げ物。桜の樹皮で綴じ合わされている。W32は，差歯下駄で陰卯タイプのもの。W33は，連歯下駄。W34は上面が方形になる板で，隅が切り落とされている。W35は部材で，丸木材の両端部を切断したもの。片方は突起状に残し，鉄釘が打たれている。W36も部材。面取りをし，両端部を斜め方向に切断している。W37は板材。両端部に鉄釘が残っている。W38は，側面が階段状になる部材。39は加工木。白色を呈するやや軟質な丸木材を用いている。片面は平坦のままだが，上面から山形になるように成形されている。W40も加工木。底面は平坦で，上部が円錐形になるように成形されている。

SX1100（第86図参照）

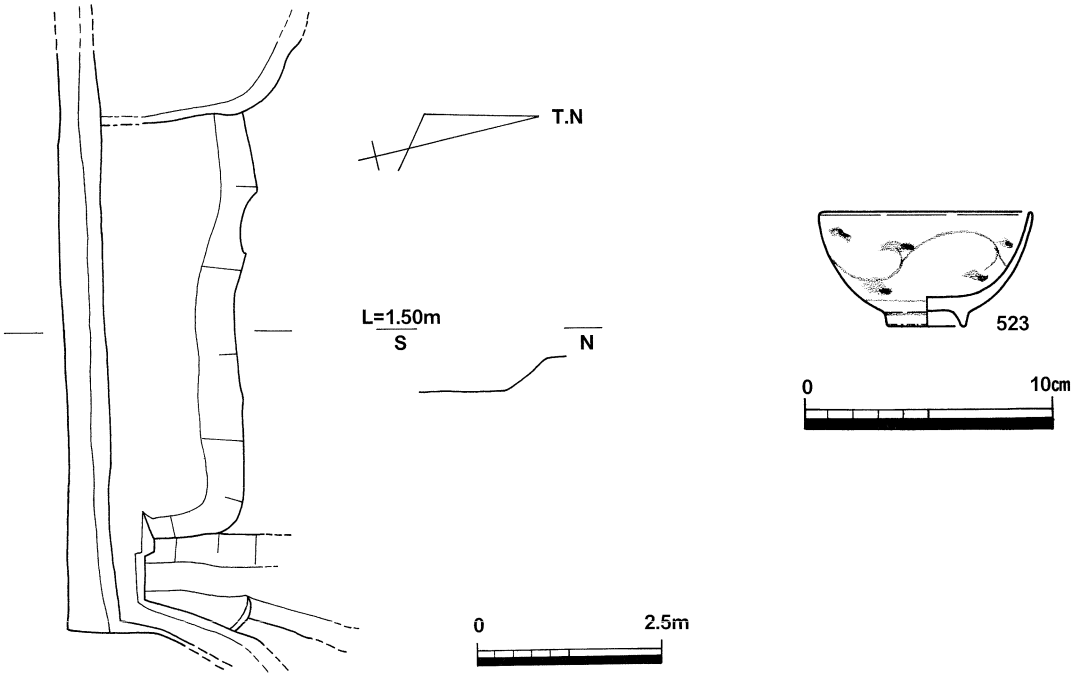
第１遺構面下層南端部で検出した性格不明遺構である。調査地の末端に位置する大形遺構のため詳細は不明ながら，調査地南壁のほぼ全体を占める南方向への落ち込みが認められ，その北肩部を当遺構面で確認したものである。また土層堆積から本来，第２遺構面（Ⅴ期）より存在し，第１遺構面上層（Ⅶ期）で完全に埋没する状況がうかがわれる。第１遺構面上層部ではSX1010・1013として検出しており，試掘調査（南西トレンチ）で確認された19世紀末期の池状遺構へ繋がる落ち込みとなっている。

SX1100出土遺物（第86図参照）

出土量はコンテナ1/4箱分で，図化した以外に肥前陶器呉器手・刷毛目碗・鉢，肥前系磁器くらわんか碗，京・信楽系陶器碗がある。523は，肥前系磁器碗である。



第85図　SX1103出土遺物⑩(1/4)



第86図　SX1100平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

4，近世・近代の遺構・遺物

第１遺構面上層部遺構

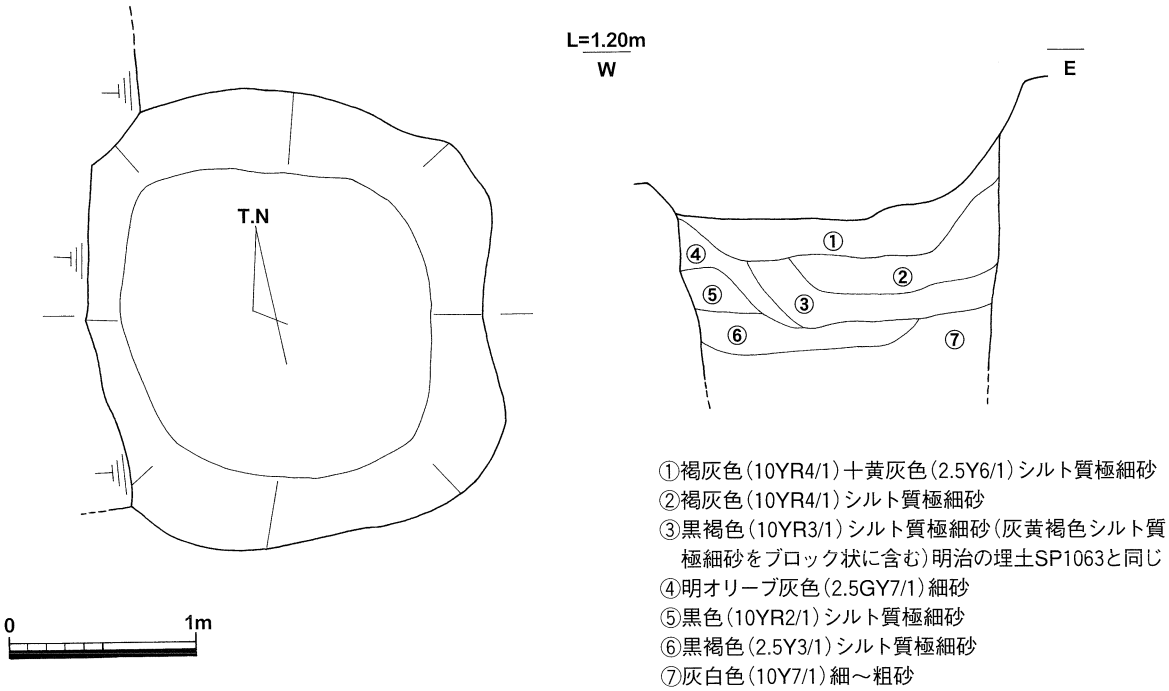
第１遺構面上層では，学校校舎やそれに付随する廂の基礎やSX1003の西端部を壊す井戸，SX1005上面の竈跡等19世紀末～20世紀代とみられる遺構が顕著に残る（Ⅷ期）。これに先行するものに，区画溝SD1002や廃棄土坑SK1006・1007がある。これらの遺構には，コバルト色の顔料を用いた型紙刷や銅版転写を用いた磁器製品等19世紀後半代とみられる遺物を多量に含み，学校校舎建設に伴い廃絶したと推定される（Ⅶ期）。一方，SX1003・1004・1005・1006・1007・1008・1010・1013等一定量の焼土粒を含んだ整地痕とみられるものを確認しているが，上記のような明治期の遺物は少量であることから，基本層序で認められるように第１遺構面下層が火災で廃絶して以降，学校校舎建設までに２時期の遺構が存在するものと考えられる。しかし上記した以外の遺構では，遺構の配置状況や出土遺物によって新旧を明確に判別しにくく，また明確な遺構は確認されなかったことから，19世紀後半（Ⅶ期）の間で大きな改変はなかったと考えられる。

SK1002（第87図参照）

第１遺構面上層北西部で検出した井戸である。検出した標高は1.13m前後で，平面は円形状を呈し，長軸方向に2.40m，短軸方向に2.12mを測る。遺構の底面まで堆積状況の確認はできなかったが，断面は箱形を呈し底面に達する以前に湧水が認められている。所属時期は遺構面より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SK1002出土遺物

取り上げた遺物は少量で図化していないが，肥前系磁器青磁鉢，瀬戸・美濃系陶器水甕，京・信楽系陶器端反碗・灯明皿，屋島焼，珉平焼，土師質土器甕（井戸枠？），軒平瓦がある。



第87図　SK1002平・断面図（1/40）

SK1006・1007（第88図参照）

第１遺構面上層西部で検出した土坑である。SK1006は北側の不整形を呈するもので，SK1007は南側の楕円形のものである。平面の検出時においてSK1007が突出してみられたため別遺構としたが，遺構掘削時においても明確な前後関係が認められず同時期に埋没したものと考えられる。検出した標高は双方とも1.27m前後で，不整形のSK1006は長軸方向2.70m，短軸方向1.27mで，深度0.33mの規模で検出している。SK1007の検出規模は長軸方向1.08m，短軸方向0.90m，深度0.66mを測り，断面は船底形を呈するSK1006の底面で窪みとなって現れている。所属時期は遺構面及び出土遺物より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SK1006・1007出土遺物（第88図参照）

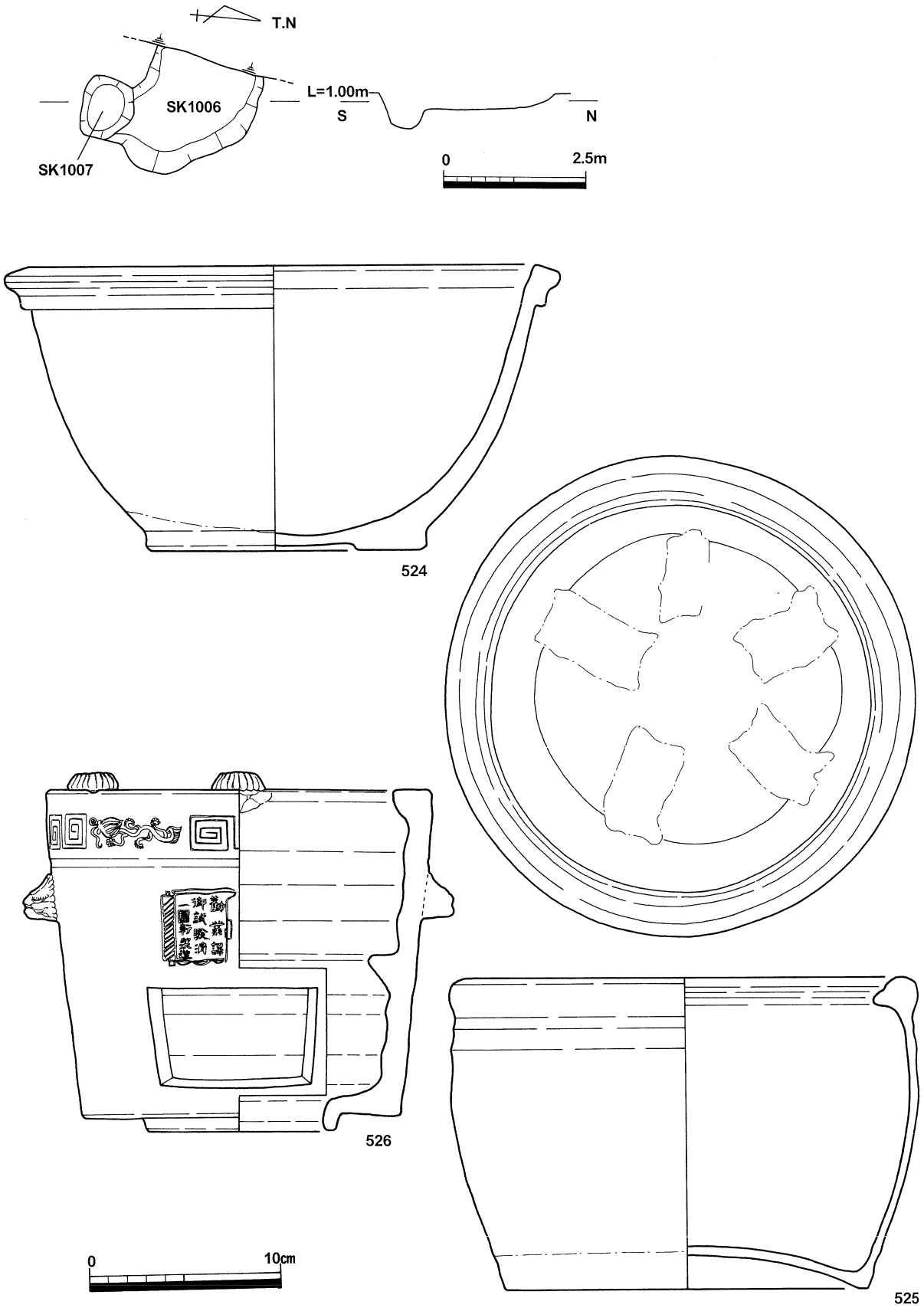
取り上げた遺物はコンテナ６箱分で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目碗，肥前系磁器端反碗・蓋・皿（型紙刷）・小坏・瓶・青磁鉢，瀬戸・美濃系陶器練鉢，瀬戸・美濃系磁器端反碗蓋・反り皿・鶴首・関西系磁器クロム青磁・白磁皿・小坏・銅版転写の皿・急須，京・信楽系陶器端反碗・灯明皿，備前系陶器灯明皿・擂鉢，屋島焼土瓶，大谷焼，産地不明陶器徳利・急須，施釉陶器小鉢（イッチン盛絵）・甕，軟質施釉陶器，土師質土器焙烙（型成形），羽釜（瓦質），硯，金属製品皿等がある。524は，施釉陶器鉢である。蛇ノ目高台で，Ｌ字に突出する口縁帯をもつ。内外面にオリーブ灰色の釉が施され，見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。525は，土師質の焜炉類。上部は五徳状になっており，３箇所の菊花の形をした台や上面が三角形を呈する内側への突起物をもつ。体部中位の内面側には，目皿の支えとみられる円周する枠状の突起があり，体部下半部には長方形の窓が付いている。底面は円筒形の突出部があり，本体は中空であることから，灰溜等下部の付属品と組み合わせて用いるものと推定される。側面には獣面の把手が付き，口縁部の外面下端に雷帯等の印花文が施されている。また体部外面の中央部には，ガス窯を模したとみられる枠に「勧業課御試験済一圃軒製造」の刻印が認められる。胎土は橙色を呈し，外面には磨き調整が施されている。525は，施釉陶器甕である。外面は白泥に緑色の釉が掛けられ，内面は透明色の釉が施されている。見込みには，長方形を呈する重ね焼きの痕が５箇所認められる。

SD1002（第89図参照）

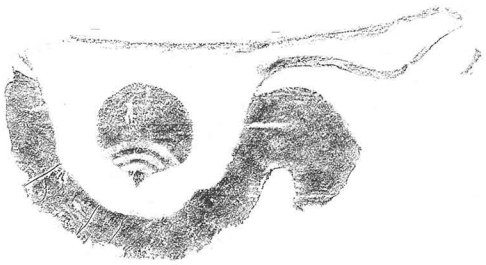
第１遺構面上層北端部で検出した東西方向の溝である。検出した標高は1.14m前後，底面は標高0.10m前後を測るもので，深度は１m程になる。幅は2.7～3.0mで，検出長約11mの規模で直線的に確認している。断面はＶ字形を呈し，東半部では南壁側が急傾斜になっている。上記の規模より，南側に展開する敷地の区画溝と推定される。所属時期は出土遺物及び遺構面より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

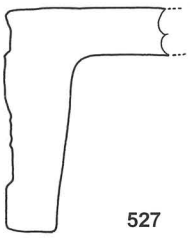
SD1002出土遺物（第89～93図参照）

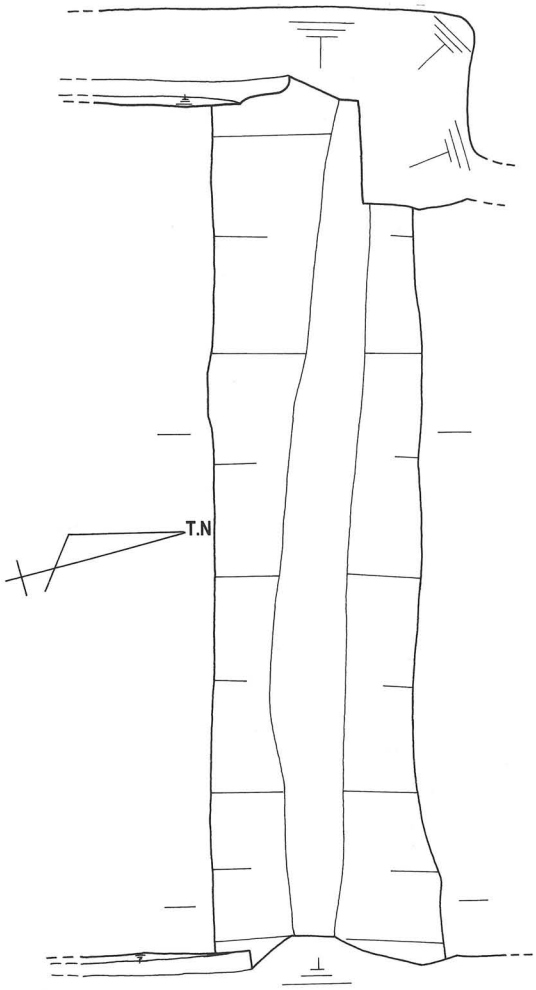
取り上げた遺物はコンテナ約30箱で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目鉢，肥前系磁器碗・蓋・小皿・段重（型紙刷）・小坏・角鉢・蛇ノ目凹型高台（高）の皿・滑車等，瀬戸・美濃系陶器刷毛目碗・皿・灯明皿・瓶掛・水甕等，瀬戸・美濃系磁器端反碗・広東碗・木型打ち込みの皿・そり皿・蓮華・燗徳利等，関西系磁器皿・瓶・徳利（銅版転写）・碗・皿（クロム青磁）小坏・花生等，京・信楽系陶器端反碗・鉢・甕等，備前系陶器擂鉢・鉢・蓋等，施釉陶器小坏・急須・鉢・蓋・行平鍋（トビカンナ），軟質施釉陶器土鍋・箱庭セット等，屋島焼急須，源内焼，大谷焼瓶，珉平焼角小皿等，土師質土器焼塩壷・火鉢類・蓋・焙烙（型成形）等，ガラス

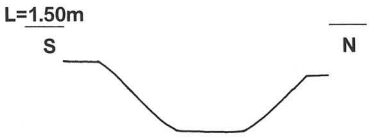


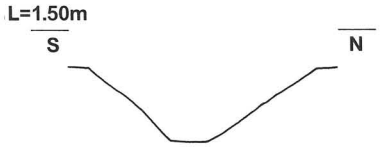
第88図　SK1006・1007平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)







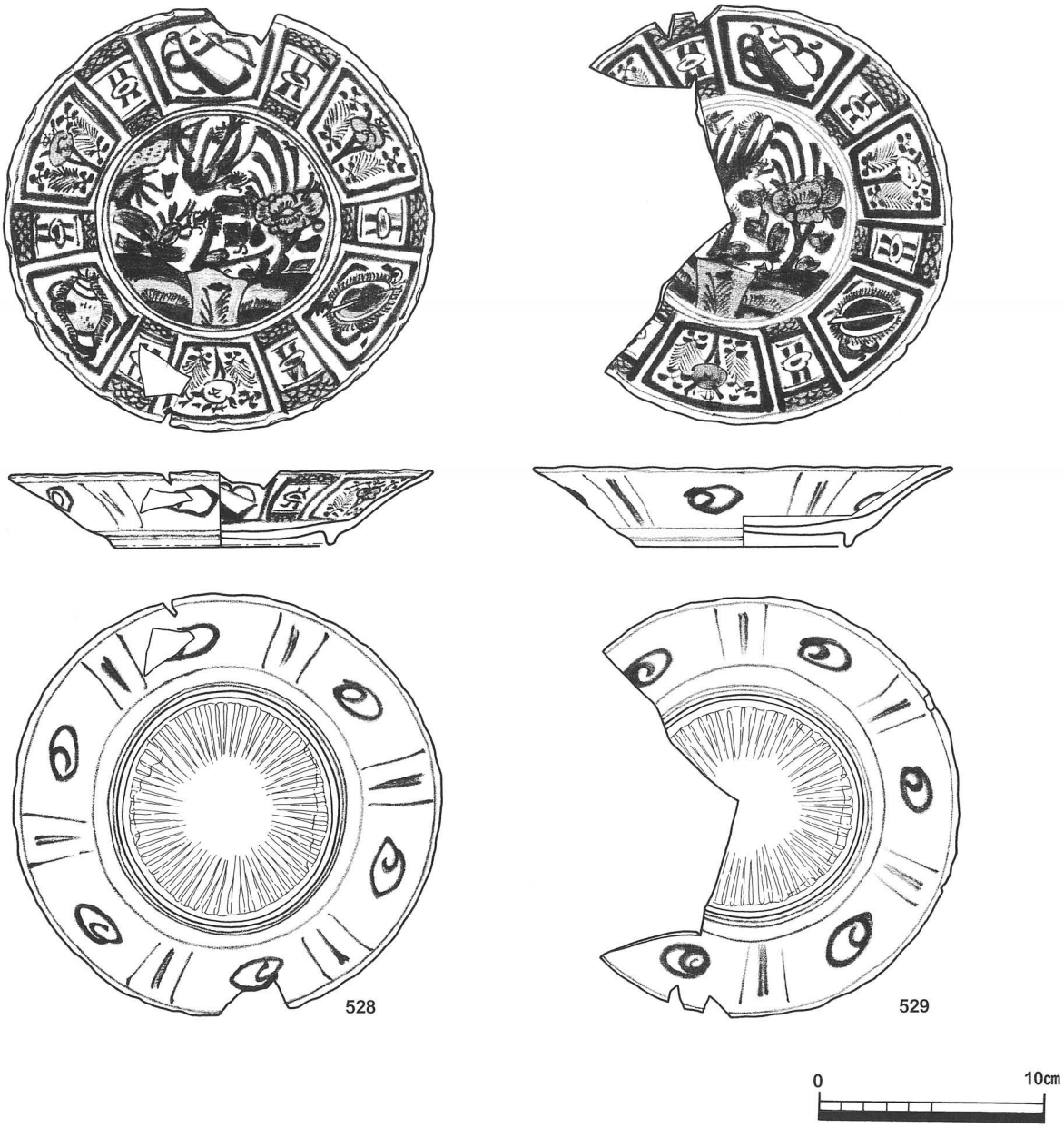




第89図　SD1002平・断面図(1/100)及び出土遺物①(1/4)

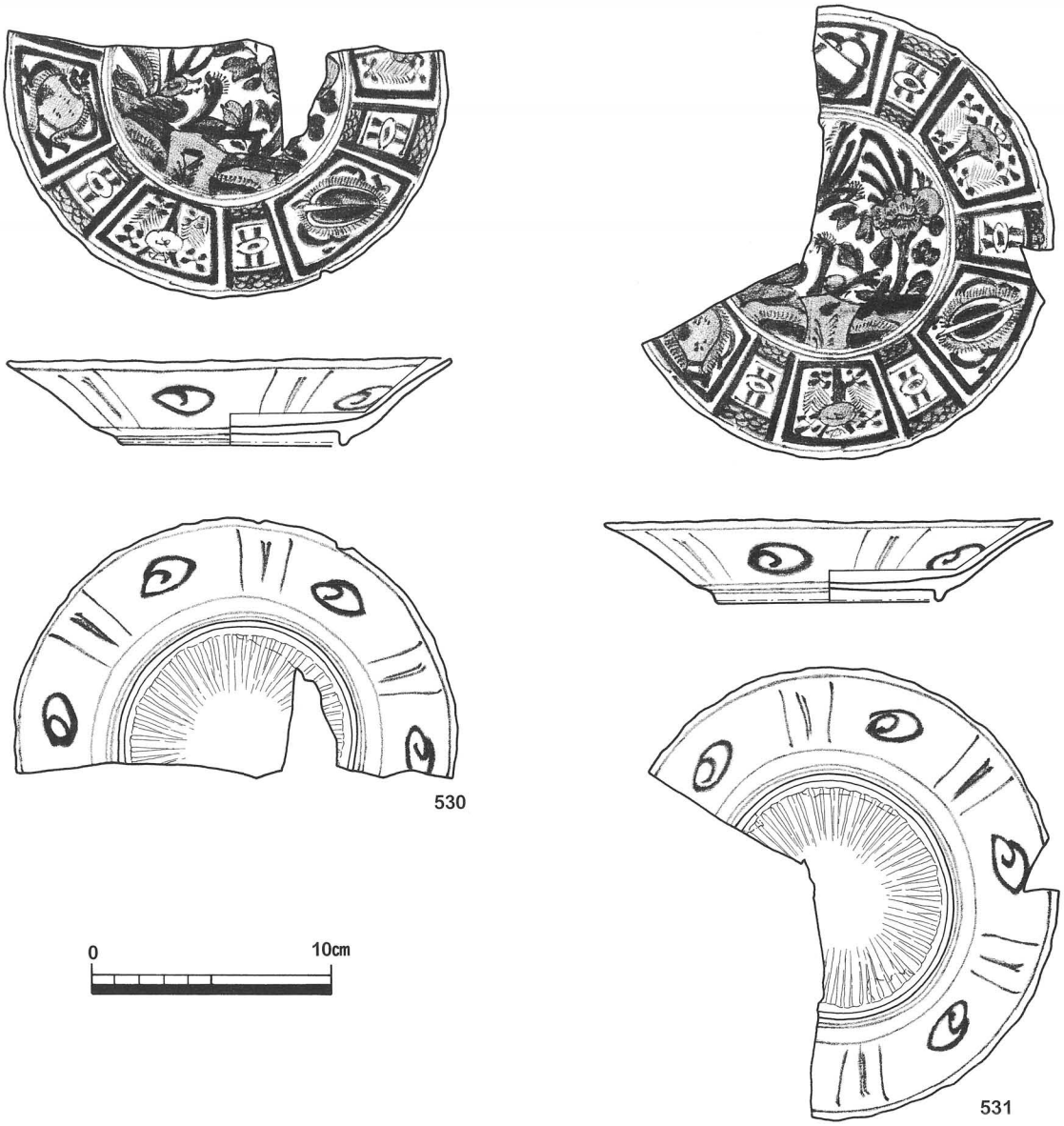
製品・グラス杯等，金属製品土管，ハサミ等がある。

528～531は，景徳鎮窯系青花皿。４枚同形のものが出土している。６つに区割りした縁文様に宝文や唐花を交互に描き，牡丹の花が見込みの文様になっている。高台内の放射状に残るカンナ痕は粗く，器壁もやや厚くなっている。いわゆる芙蓉手輪花皿のタイプとみられるが，全体的に粗製で簡略な印象を受ける。詳細な製作年代は不明だが，伝世的に組皿で保持していたものと推定される。532は，肥前系磁器碗。装飾文様は，コバルト色を呈し型紙刷で描かれる。533は，肥前系磁器小鉢。口錆を施す。534は肥前系磁器で，竹虎文を描く大皿。折縁の口縁をもち，高台内に３箇所のハリ支え痕が認められる。破損部は漆により焼継ぎし，金の傷隠しを行なっている。高台内「二六」と読める焼継印が見られる。535は，関西系磁器小皿。装飾には銅版転写を用い，唐草風の雲竜文や牡丹の絵を施している。536も関西系磁器で，酸化クロ

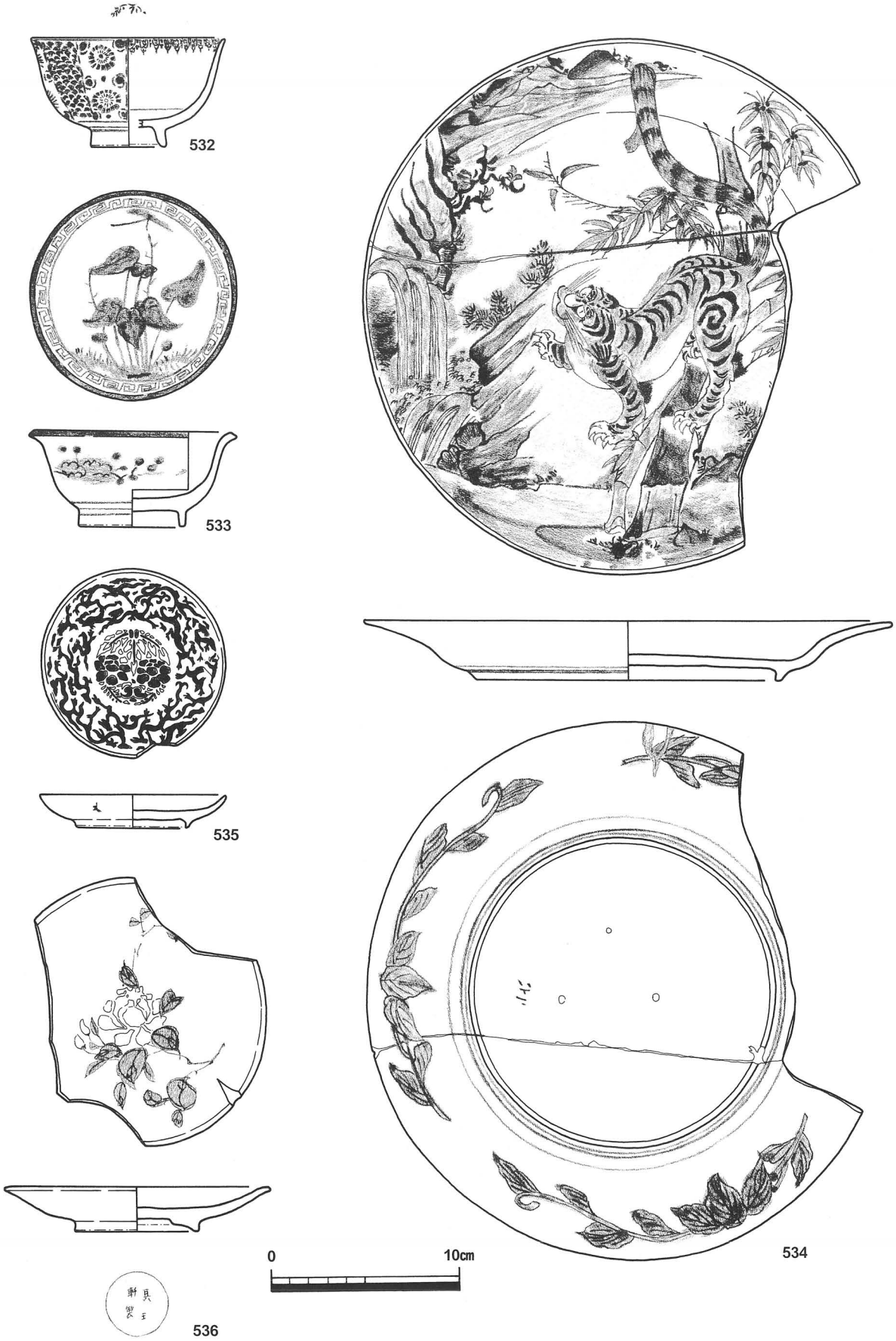


第90図　SD1002出土遺物②(1/3)

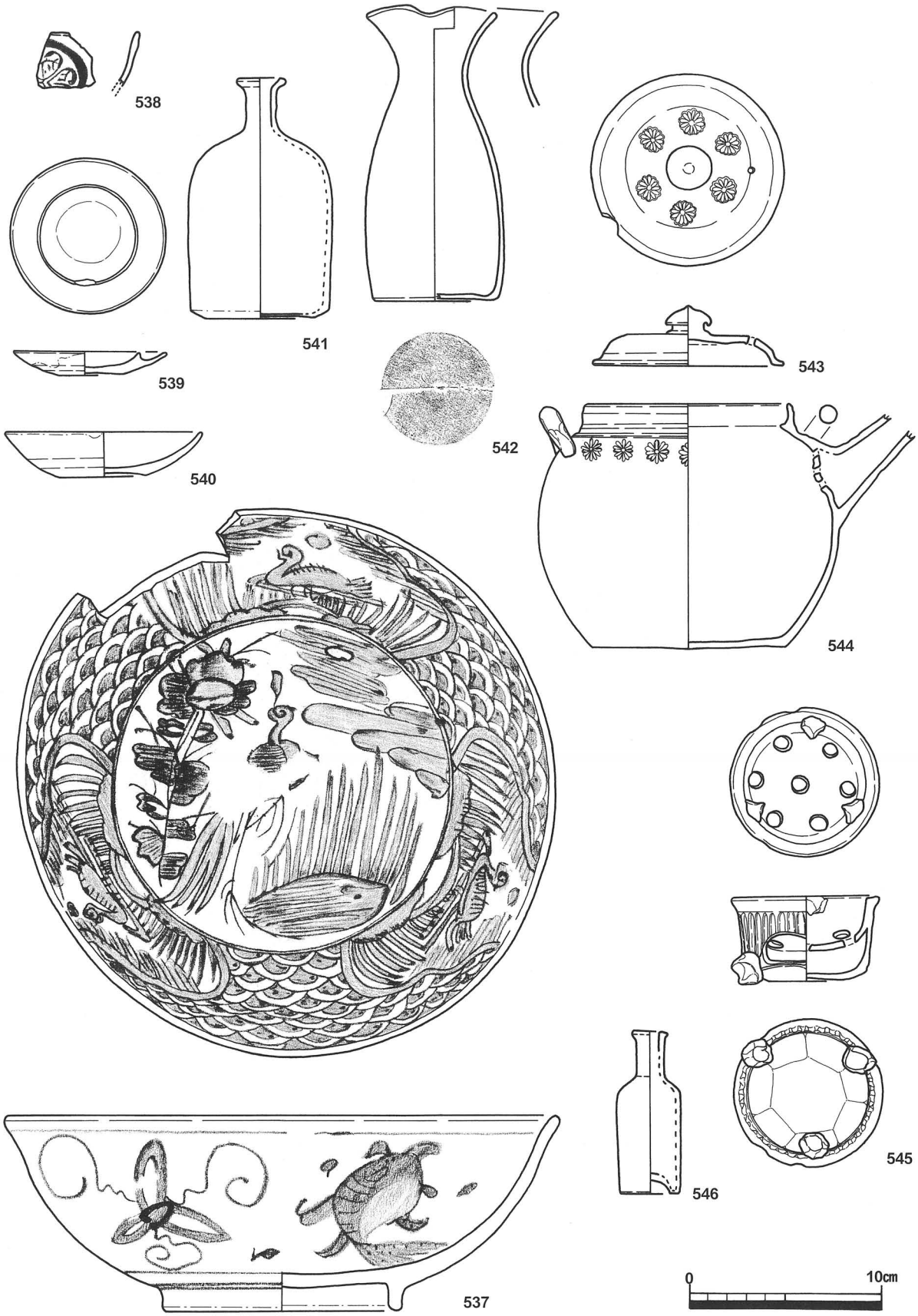
ムを用いた青磁皿。白色の盛絵で花を描いている。蛇ノ目凹形高台で，高台内に「其王軒製」の銘款が認められる。537は肥前系磁器で，やや粗製の大鉢。538は京・信楽系陶器碗の口縁部。丸に葵の紋が，青色の上絵付けされている。江戸期に廃棄されたとも考えられるが，ここでは明治以後不要になったと推定しておきたい。539・540は，京・信楽系陶器灯明皿である。540には，受け部が認められない。541は，大谷焼の瓶類。542・543・544は産地不明の陶器で，清涼な明赤色の胎土をもち，薄作りに仕上げられたもの。542は徳利。器壁は極めて薄く，片口をもつ。底部に小さな刻印が押されている。543・544は，印花文を施す土瓶・蓋である。545は，ミニチュア大の涼炉。完存で出土した。546は，ガラス製の小瓶である。527は瓦の軒部分で，飾りに宝珠が認められる。



第91図　SD1002出土遺物③(1/3)



第92図　SD1002出土遺物④(1/3)



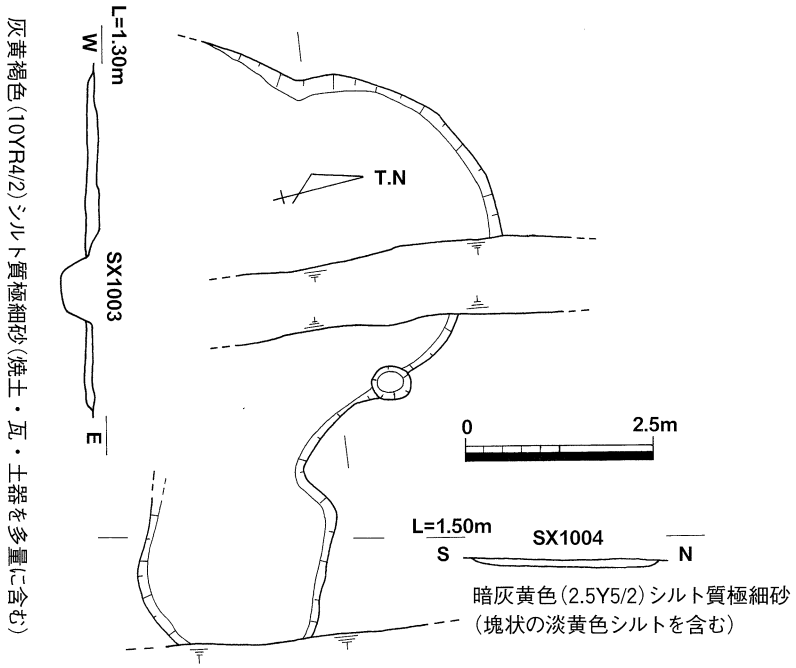
第93図　SD1002出土遺物⑤(1/3)

SX1003・1004（第94図参照）

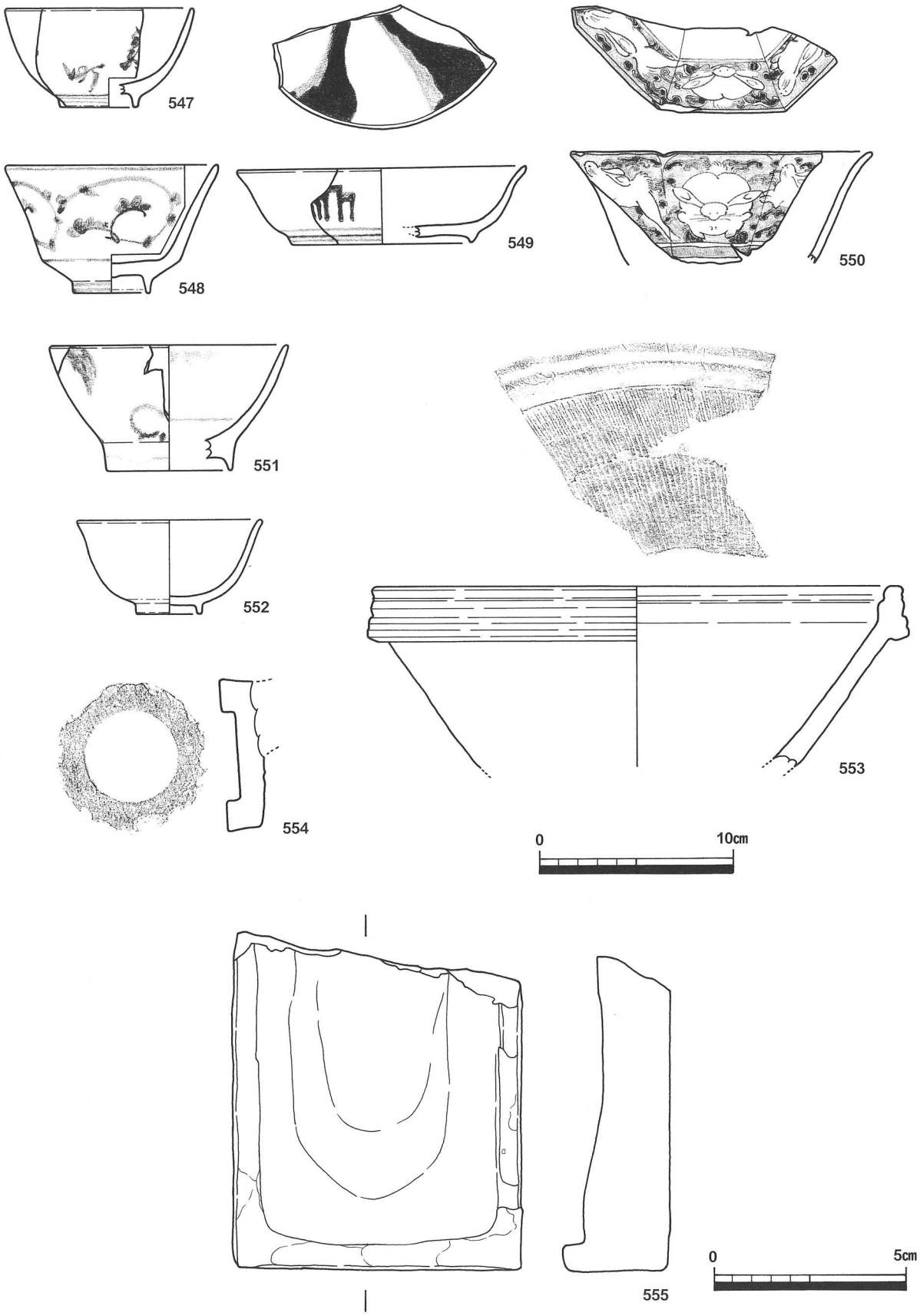
第１遺構面上層東部で検出した性格不明遺構である。SX1003は西側の不整形を呈するもので，SX1004は東側の方形のものである。平面の検出時においてSX1004が突出し方形にみられたため別遺構としたが，遺構掘削時においても明確な前後関係が認められず同時期に埋没したものと考えられる。検出した標高は1.14～1.17mで，規模はSX1003が長軸方向6.14m，短軸方向1.27m，深度0.17mで，SX1004が長軸方向2.42m，短軸方向2.12m，深度0.11mを測る。何れも浅く広範に及ぶもので，南部では削平され確認できない。所属時期は遺構面及び出土遺物より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SX1003・1004出土遺物（第95図参照）

取り上げた遺物はコンテナ12箱分で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目碗等，肥前系磁器端反碗・撥高台・小広東・広東碗・蛇ノ目凹形高台（高）の鉢・青磁染付・色絵鉢・段重，コバルト型紙刷細片，瀬戸・美濃系陶器練鉢・水甕等，瀬戸・美濃系磁器碗（イッチン盛絵），角小皿（陽刻文＋瑠璃釉）・小坏・瓶・仏飯器（瑠璃釉），京・信楽系陶器端反碗，灯明皿，甕，土瓶等，関西系磁器青磁染付小坏，備前系陶器灯明皿・擂鉢・鉢・蓋・大甕・徳利，屋島焼土瓶，源内焼，大谷焼，施釉陶器皿（イッチン盛絵）・香炉・鉢・甕・蓋，軟質施釉陶器急須・鉢，土師質土器焜炉・甕・火鉢・蓋・焙烙・人形・玩具，軒丸・軒平瓦，金属製品釘等がある。547は肥前系磁器猪口で，「□町□」の文字を呉須で書く。548は，肥前系磁器碗。完存で出土した。549は肥前系磁器で，捻文の皿。550は肥前系磁器で，兎絵柄の角鉢。551は瀬戸・美濃系陶器で，広東碗。552は，京・信楽系陶器端反碗。553は，備前系陶器擂鉢。554は軒桟瓦で，桟部分の瓦当は無文になっている。555は，硯である。



第94図　SX1003・1004平・断面図(1/100)



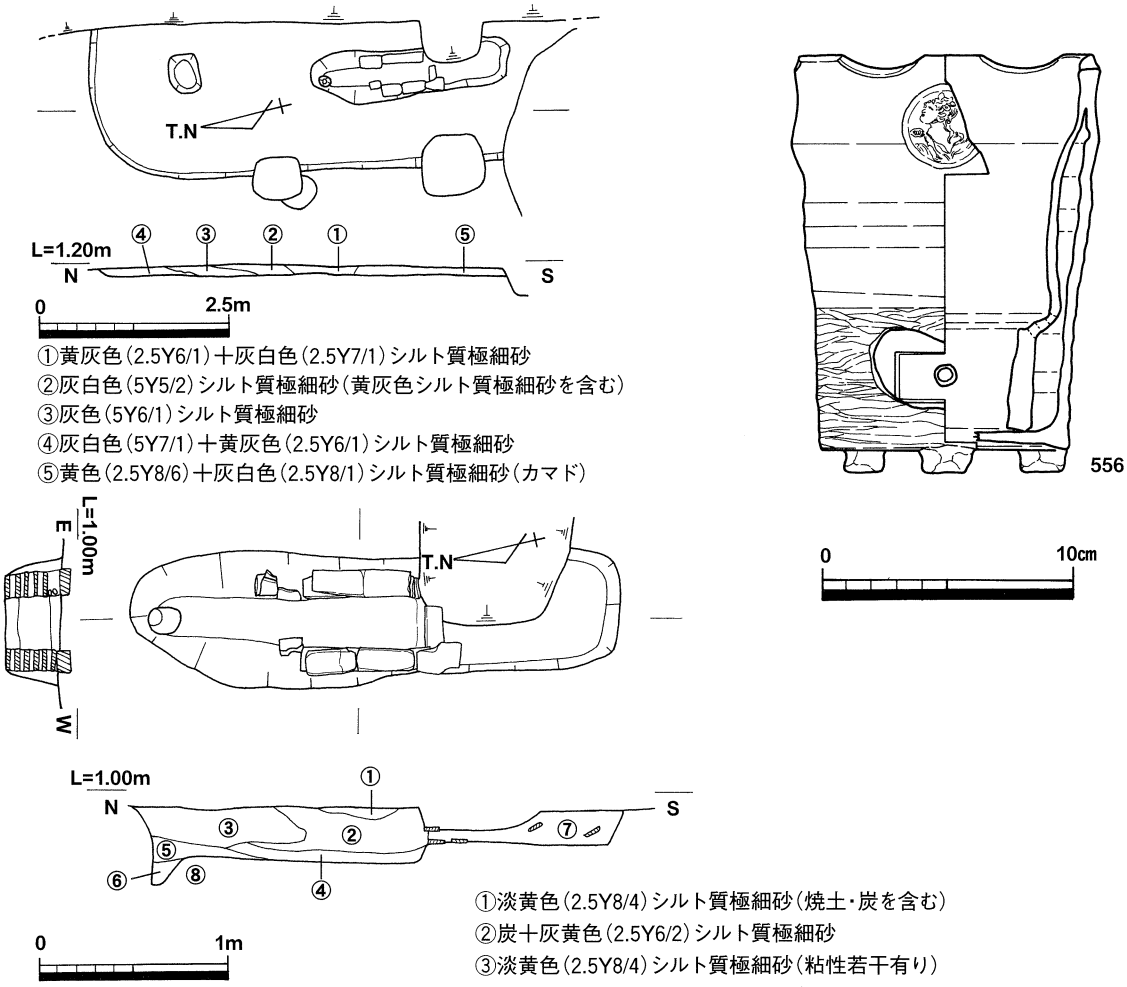
第95図　SX1003・1004出土遺物(1/3・2/3)

SX1005（第96図参照）

第１遺構面上層東端部で検出した性格不明遺構である。東側が調査対象外であり，また南部をSK1011に壊され全容は不明だが，北・東面をほぼ直線状に検出した。検出した標高は1.27ｍで，規模は長軸方向約６ｍ，短軸方向約２ｍ，深度0.25ｍを測る。また中央部では，後出するレンガ造りの竈が確認されている（第96図参照）。所属時期は遺構面より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SX1005出土遺物（第96図参照）

取り上げた遺物はコンテナ1/2箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付碗・刷毛目鉢，肥前系磁器青磁染付碗・蓋・紅猪口，瀬戸・美濃系陶器瓶掛，京・信楽系陶器丸碗・端反碗・段重，備前系陶器擂鉢，屋島焼，施釉陶器甕，土師質土器甕等がある。556は，土師質土器涼炉。白色系の胎土を用いた二重構造のもので，３足とハート形の窓をもつ。体部下半は片切彫状の文様が施され，上端には西洋人風な女性のレリーフが付けられている。底部に「植嘉」と読める線刻文字と円形枠の「□岩」の刻印が認められる。



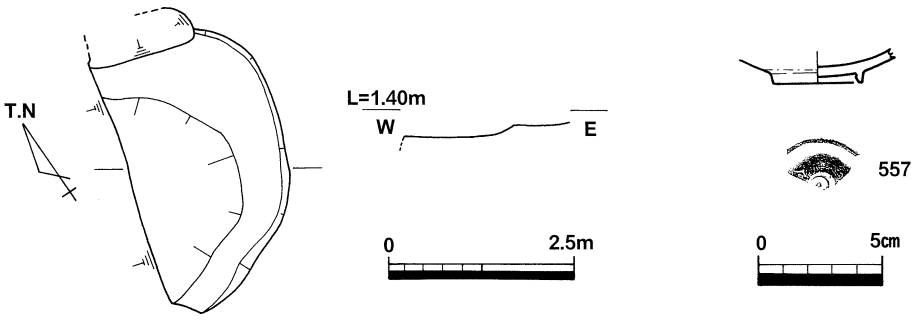
第96図　SX1005・竈跡平・断面図(1/100・1/40)及び出土遺物(1/3)

SX1014（第97図参照）

第１遺構面上層南西隅部で検出した性格不明遺構である。西側が調査対象外であり，また北部を撹乱坑に壊され全容は不明だが，平面が半円形状を呈し，段掘りされたものとして確認した。検出した標高は1.23mで，規模は長軸方向で3.14m，深度0.19mを測る。また調査地の西壁では，後出する井戸に切られていることを認めている。所属時期は遺構面より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SX1014出土遺物（第97図参照）

取り上げた遺物はコンテナ１箱分で，図化した以外に肥前系陶器陶胎染付・刷毛目碗・鉢，肥前系磁器青磁染付・広東碗・端反碗等，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗・練鉢，京・信楽系陶器端反・小杉碗・灯明皿，関西系磁器小坏，備前系陶器擂鉢・灯明皿，屋島焼，施釉陶器甕・土鍋，軟質施釉陶器急須，土師質土器甕，瓦片等がある。557は，京・信楽系陶器碗の底部である。高台内には破風高と推定される刻印が認められ，理兵衛焼の可能性が考えられる。



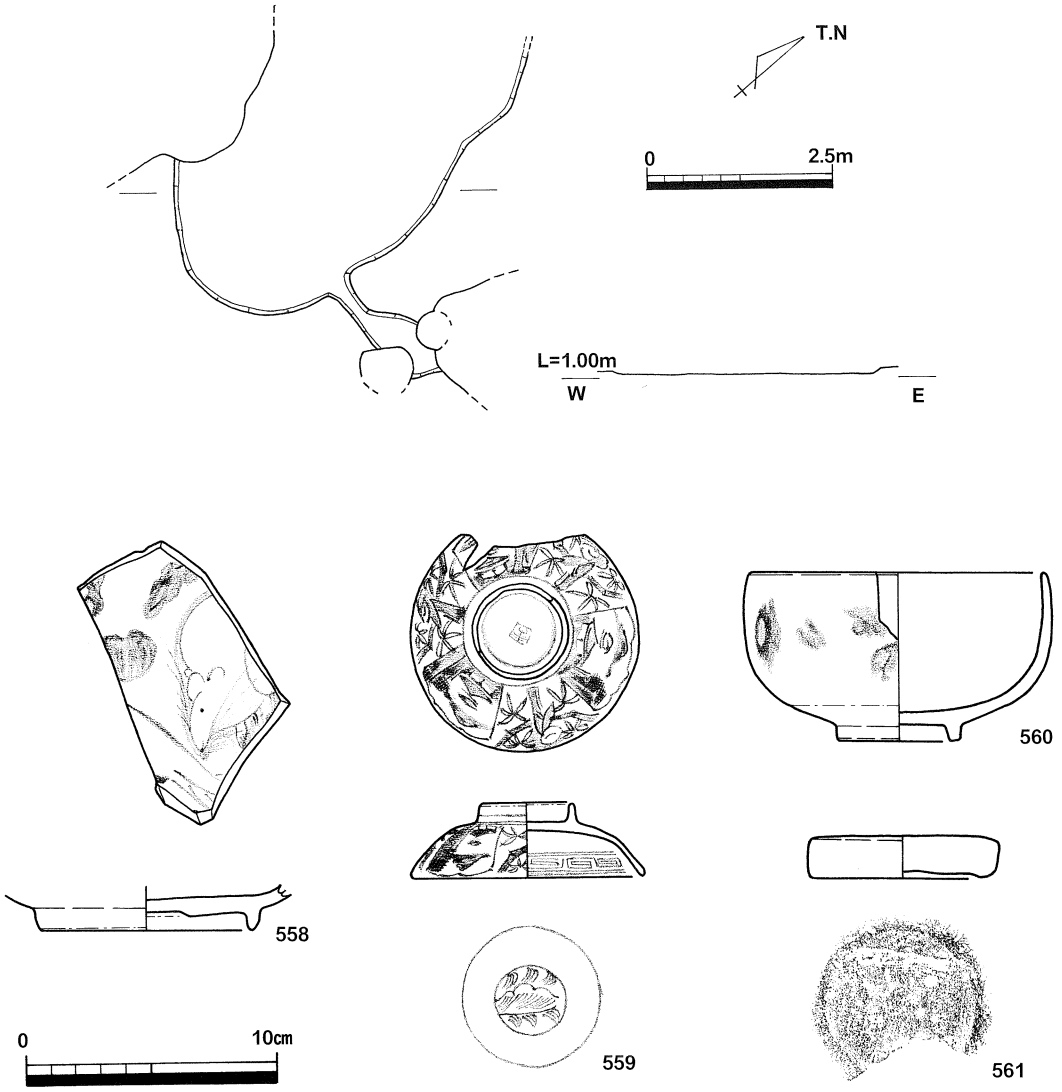
第97図　SX1014平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

SX1007（第98図参照）

第１遺構面上層西部で検出した性格不明遺構である。平面は不整形な楕円形を呈し，溝状に東へと伸びる突出部が検出されている。西側が調査対象外であり，またSK1006・1007に壊され全容は不明だが，検出した標高は1.14mで，規模は長軸方向4.86m，短軸方向2.84m，深度0.09mを測る。所属時期は遺構面及び出土遺物より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SX1007出土遺物（第98図参照）

取り上げた遺物はコンテナ１箱分で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目鉢，肥前系磁器端反碗・皿・鉢・瓶，瀬戸・美濃系磁器碗・小坏・蓋物・瓶，京・信楽系陶器端反碗・小杉碗・丸碗・灯明皿・甕，関西系磁器碗，備前系陶器擂鉢・灯明皿・蓋，屋島焼土瓶，施釉陶器甕・土鍋，土師質土器焙烙・焜炉等がある。558は肥前系磁器で，蛇ノ目凹形高台（高）の皿或は鉢底部。559は肥前系磁器の蓋で，高台（摘み部）内に一重方形枠で「青」銘款が認められる。560は，瀬戸・美濃系陶器碗。561は，土師質土器（焼塩壷）の蓋である。



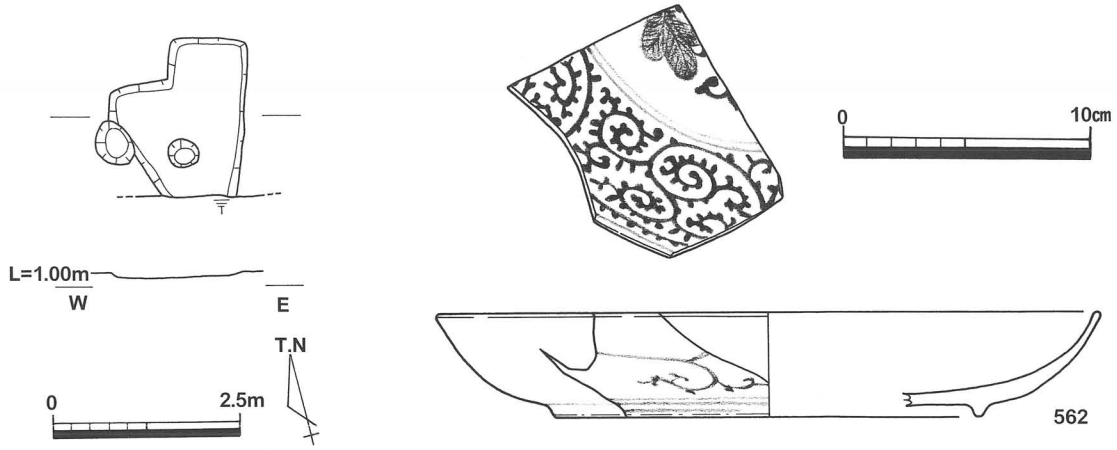
第98図　SX1007平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

SX1011（第99図参照）

第１遺構面上層南端部で検出した性格不明遺構である。南側が調査対象外であり全容は不明だが，平面は不整形である。検出した標高は1.23mで，規模は長軸方向2.14m，短軸方向1.81m，深度0.09mを測る。所属時期は遺構面より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。

SX1011出土遺物（第99図参照）

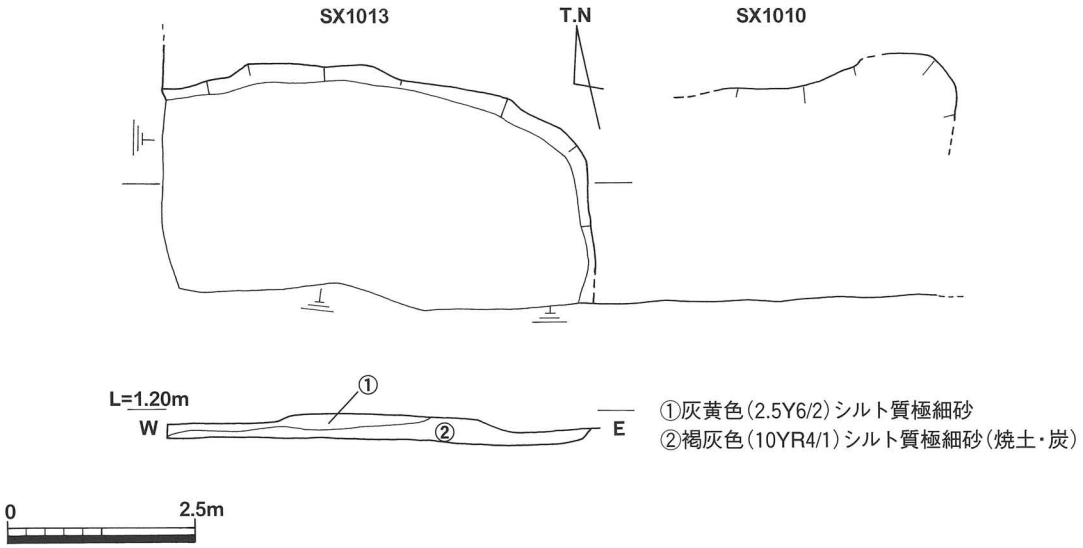
取り上げた遺物は少量で，図化した以外に肥前系磁器（型紙刷），瀬戸・美濃系陶器碗，瀬戸・美濃系磁器細片，陶器細片などがある。562は肥前系磁器で，蛸唐草文様の皿である。



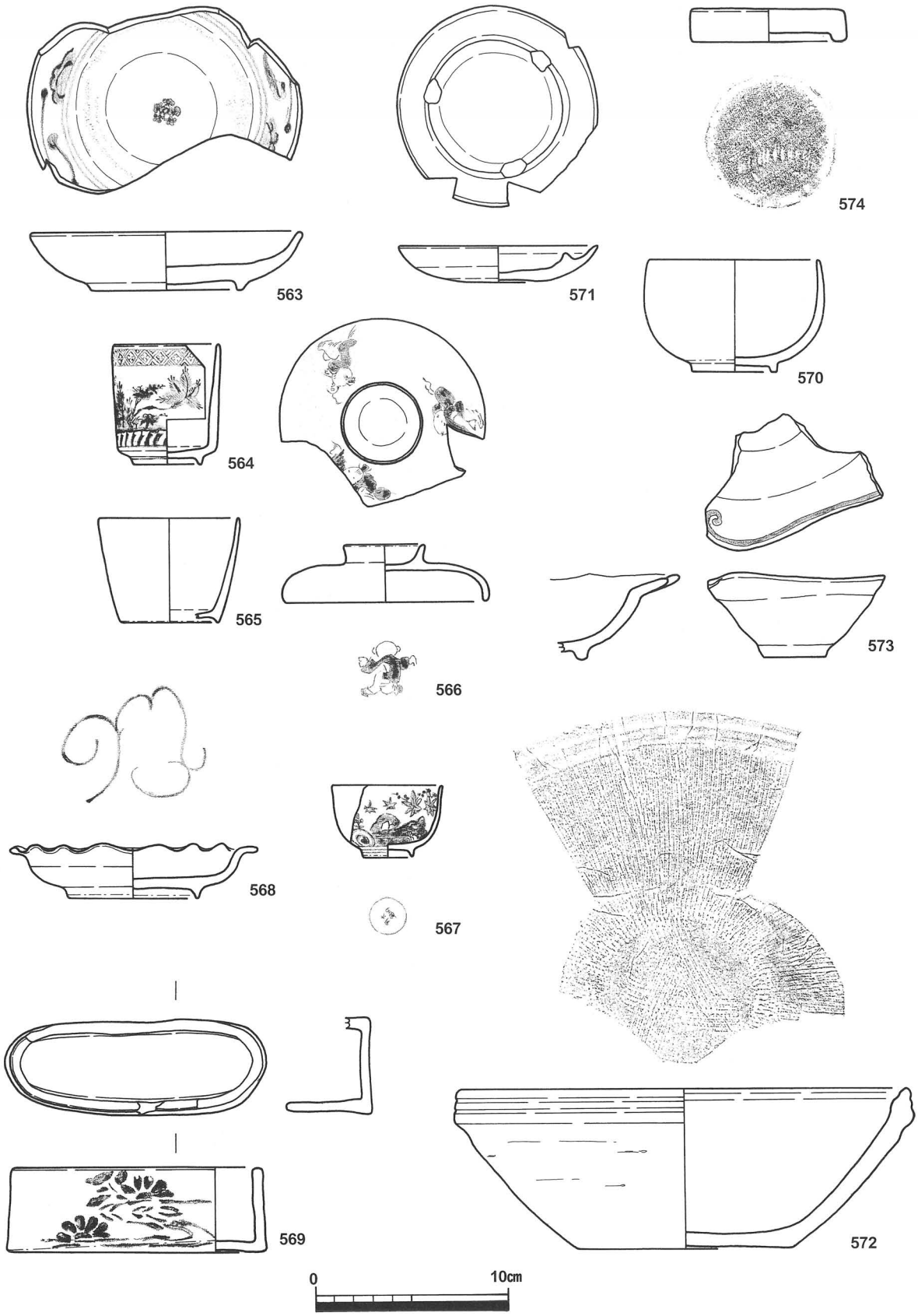
第99図　SX1011平・断面図(1/100)及び出土遺物(1/3)

SX1010・1013（第100図参照）

第１遺構面上層南端部で検出した性格不明遺構である。平面の検出時においてSX1010が複数の撹乱坑や遺構と重複関係を伴う浅い遺構のため別遺構としたが，本来は南部へ下る同一の落ち込み状の遺構と考えられる。またSX1013は，SX1014に先行するものとして確認されている。検出した標高は1.12～1.15mで，規模はSX1013で長軸方向約5.7m，短軸方向約３m，深度0.26mを測る。SX1010は浅く，南側では確認できない。所属時期は遺構面及び出土遺物より，19世紀後半（Ⅶ期）と考えられる。



第100図　SX1010・1013平・断面図(1/100)



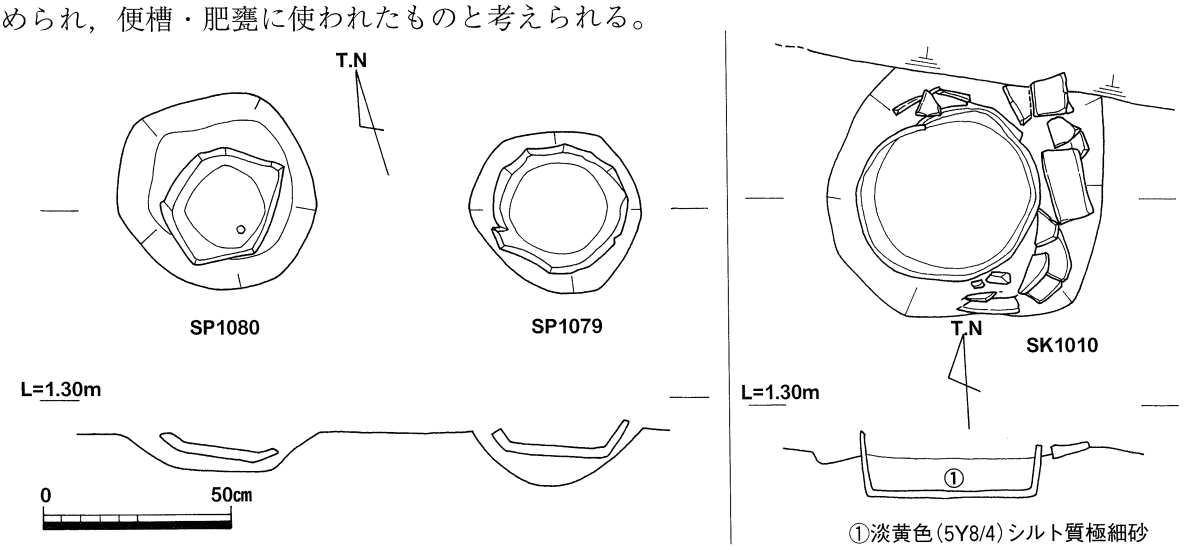
第101図　SX1010・1013出土遺物(1/3)

SX1010・1013出土遺物（第101図参照）

取り上げた遺物はコンテナ３箱分で，図化した以外に肥前系陶器刷毛目碗・鉢・肥前系磁器青磁染付・広東碗・皿・大鉢・紅猪口・紅皿，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗・馬の目皿・水甕，瀬戸・美濃系磁器碗・角小皿・小坏，関西系磁器小坏，京・信楽系陶器丸碗・小杉碗・灯明皿，屋島焼，施釉陶器香炉・土瓶，軟質施釉陶器土瓶・土師質土器甕・火鉢等がある。563は肥前系磁器で，蛇ノ目釉剥ぎの皿。564・565は，肥前系磁器猪口。566は，肥前系磁器碗蓋。567は，瀬戸・美濃系磁器猪口。高台内に「大明年製」銘款が認められる。568は，瀬戸・美濃系陶器のヒダ皿。見込みには，呉須で文様を描いている。569は，瀬戸・美濃系陶器鬢水入れ。570は，京・信楽系陶器碗。571は，備前系陶器灯明皿。572は，備前系陶器擂鉢。573は波状の口縁部をもつ大皿と考えられ，口縁部内面に白土で文様を描く。胎土は褐灰色を呈した緻密なもので，京・信楽系陶器（理兵衛焼）に推定される。574は，土師質土器（焼塩壷）蓋。

埋甕（第102図参照）

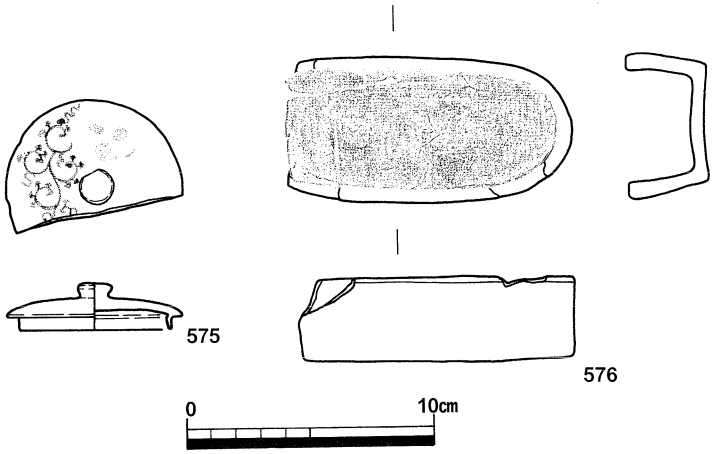
南部の低地帯で確認された埋甕（SK1010・SP1079・1080）である。何れも備前系陶器甕が，壊された状態で底部のみ遺存していた。SP1079・1080の出土品は内面に石灰質の付着物が認められ，便槽・肥甕に使われたものと考えられる。



第102図　SK1010・SP1079・1080平・断面図(1/20)

遺構外出土遺物（第103図参照）

２点を図化した。575は赤・青色の上絵付けをした蓋で，胎土は褐色を呈した緻密なもので，京・信楽系陶器（理兵衛焼）に推定される。576は軟質施釉陶器鬢水入れで，赤褐色の釉を施し屋島焼と考えられる。



第103図　遺構外出土遺物(1/3)

第４章　調査のまとめ

第１節　遺構の変遷

当調査では中世～近代に至る遺構が確認され，８段階で遺構の変遷が認められる。各時期の全体像を知るには部分的な調査であったが，調査結果にあわせ周辺部の調査例や絵地図等の資料を参考にしながら概観し，発掘調査成果のまとめとしたい。

Ⅰ期（12世紀～13世紀初頭　第104図参照）

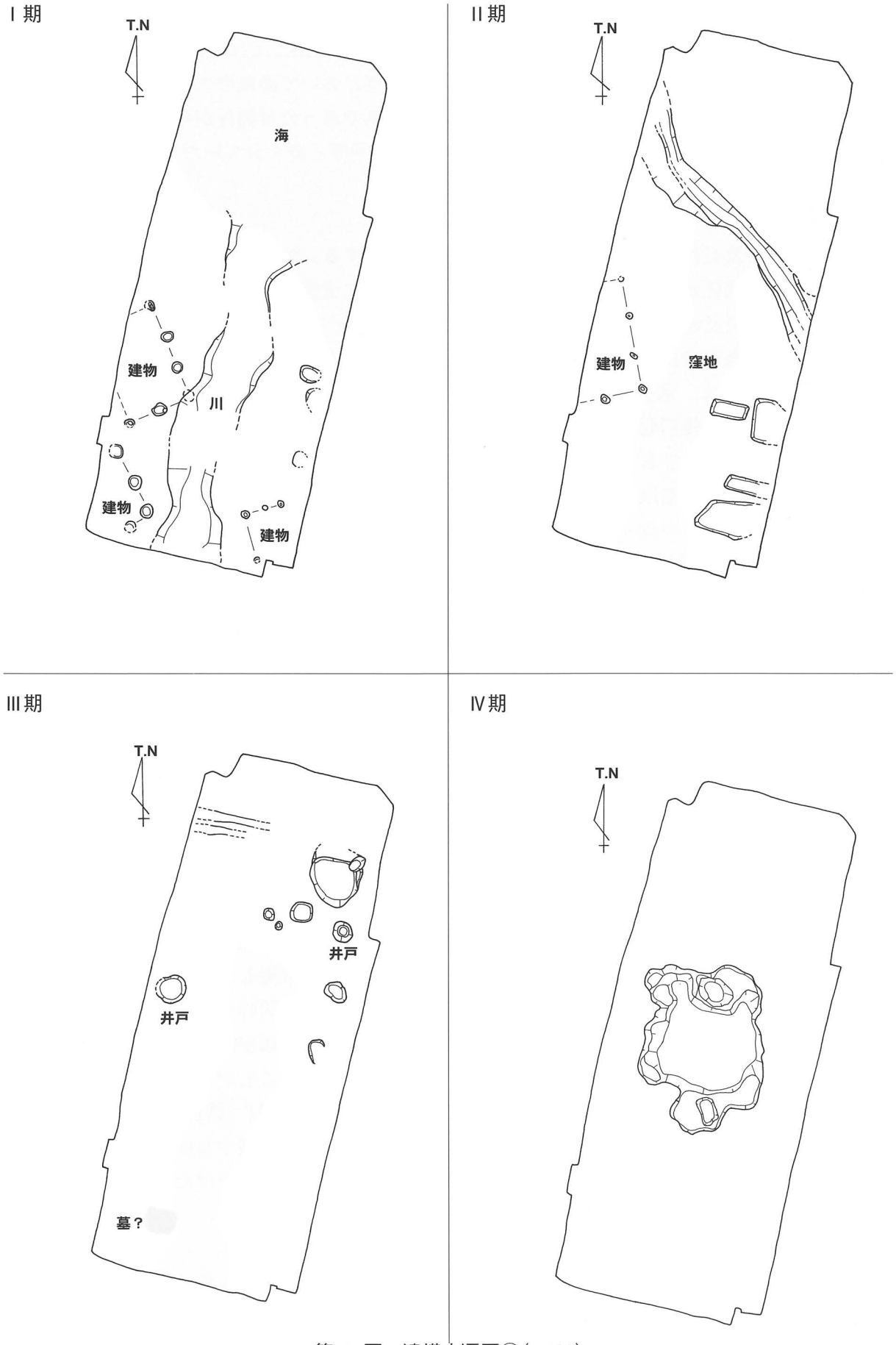
当期は遺構密度や遺物の出土量から中世での最盛期であったと推定でき，確認された遺構では流路状遺構SR3001の他，多数の柱穴や土坑がある。主要なものでは，遺構が最も密集する南西部の微高地上で掘立柱建物２棟，南東部でも１棟が現地割に西傾して復元され，西部の低地では多量の板石が詰まった特徴的な土坑が認められた。SR3001は調査地北部まで伸びず途切れることが確認されており，また北部の砂堆上では当該期の遺構は皆無であることから，海浜部の河口に相当する可能性が考えられる。当時の環境が遠浅の海であったことを考慮すれば明確な海岸線の特定は難しくなるが，遺構の配置や後出のSD3003が本遺構に接して等高線上に開削されることから，凡その満潮時のラインと推定したい。この後SR3001は砂の堆積により河口から離れ，不安定な窪みとして砂堆に取り残される状況が少量存在するⅡ・Ⅲ期の出土遺物からうかがわれる。海浜部に位置した集落と考えられることに加えて，第１表に示すように，搬入品が高頻度に確認できる点や，赤色に風化した安山岩がSR3001を中心に多量に認められる点は，港湾施設を確認した高松城西の丸地区での調査成果と類似している。この知見からすれば，当地東浜でも物資の運搬に用いた舟入（川）を備えた集落の存在を考えることもでき，今後広範囲な調査によりその存在が明確になることが期待される。

Ⅱ期（13・14世紀　第104図参照）

遺構密度や遺物の出土量から，前段階からの集落が衰退する時期に該当するものと考えられる。西部の微高地上では，Ⅰ期に後出するとみられる柱穴類が散在しており，掘立柱建物１棟が復元できた。南東部へ下る溝SD3003は14世紀代に埋没しており，この頃に一旦集落が途絶えるものとみられる。SD3003はSR3001に接する箇所より急激に深度が増すことから，やはり当期においても，中央部は滞水し不安定な土地であったと考えられる。南東部の長方形を呈する土坑は，出土遺物が極少量のため不明な点が多いが墓の可能性も考えられることや，またその主軸方位の点でⅢ期に近い様相になっている。

Ⅲ期（16世紀　第104図参照）

北東部の遺構は，SD3003を被覆する包含層により15世紀後半以降の所産と考えられ，大半の遺構に存在する備前焼から17世紀初頭の廃絶時期が推定される。東端では土坑等の遺構が直線的に並んで認められ，東側に同方向の溝や建物の存在も推測されよう。調査地の南隣に位置する片原町遺跡では，現況の地割にほぼ合致する同時期の区画溝が確認されており，当地点においても同様の地割が及んでいたものと考えられる。また，確認された遺構は北東部に集中し，鉄滓や獣骨とみられる骨を多量に含んだ土坑等があるが，西部の微高地上では井戸跡が確認さ



第104図　遺構変遷図①(1/400)

れていることから，本来は微高地上に居住域があったとものと考えられる。この他，第２遺構面の確認となり不明な点が多いが，火輪等当期の遺物を含むSK2102が確認されており墓の存在も想定される。当地の北に位置する高松城東の丸地点において漁民の火葬墓が確認されているが，本遺構も同様に大形の土錘が認められ，漁民の墓であった可能性が考えられる。五輪や中国産の磁器が認められることから，比較的裕福な人が手厚く葬られていたものと推察される。

Ⅳ期（18世紀中葉　第104図参照）

Ⅲ期以降，17世紀代の遺構は皆無であり空白期が存在する。削平を受けた可能性が高いが，調査地点の位置関係からすれば土塁や堀端に近接し，本来遺構が形成しにくい地点であったとも推測される。調査地の堆積状況からは，Ⅲ期まで自然地形に沿い北東部が低くなっていたが，当期より北部が微高地になり南東部に低地が広がるものと考えられる。

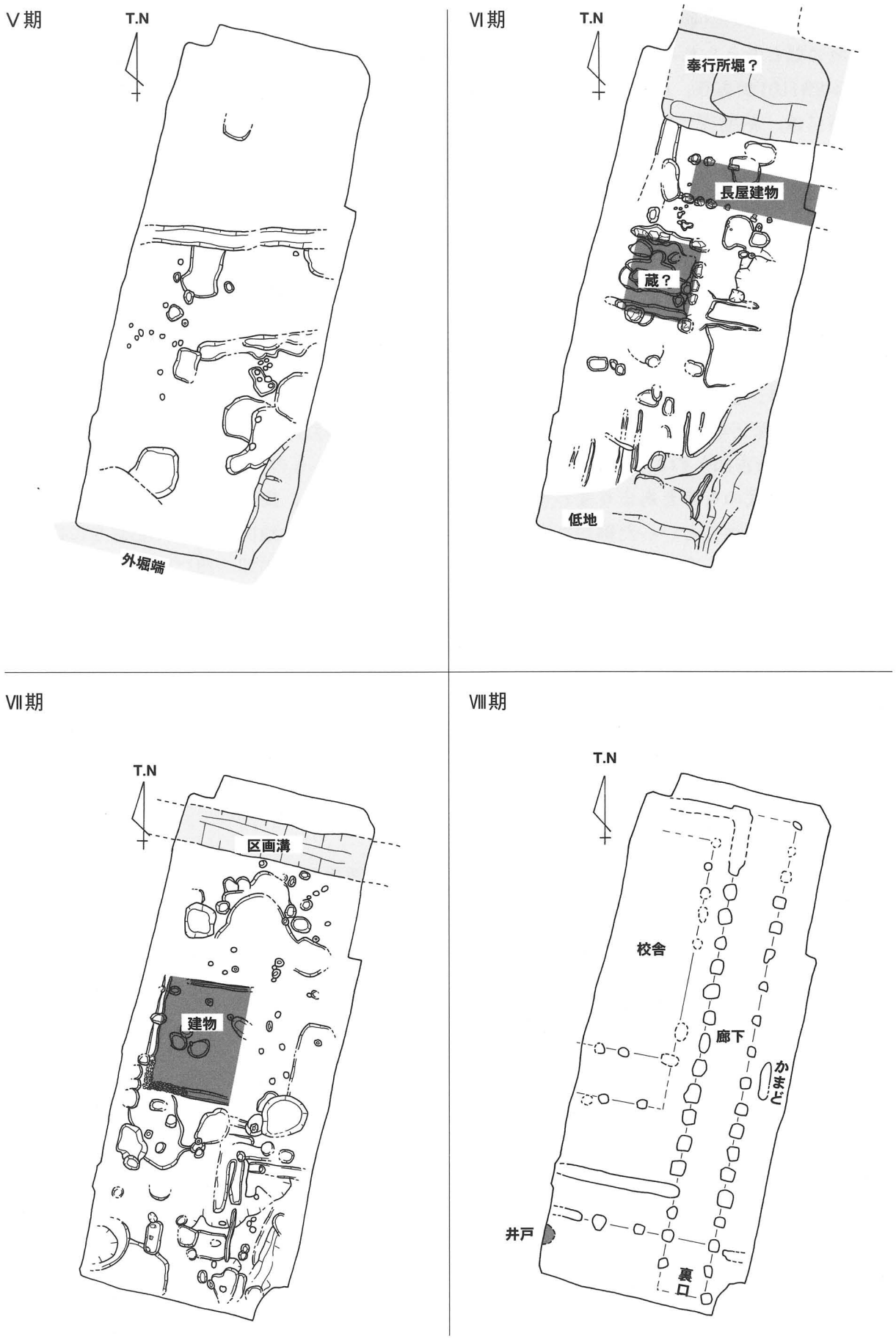
確認された遺構は，調査地中央部の大形遺構SX3001のみである。遺構の性格は不明だが，滞水していたものが短期間で埋め戻されたと考えられる。埋土は瓦礫を多量に含んだ粘質土で入念な埋め戻しを行っており，建物を建設する等，居住域を広げようとした可能性が考えられる。埋没の契機を調査結果からは推定できないが，絵地図での表現や文献資料により２つの可能性が挙げられる。１つは「享保年間高松城下図」（第106図　1716～1736年）で認められる吉田藤右衛門の名が，「讃州高松地図」宝永７年（第107図　1757年）において石丸善太夫に替わっており，詳細な時期は不明であるが「高松藩士由緒録」を参考にすれば，「奉行吉田藤右衛門の子藤馬・養子浅見五郎兵衛次男，後改易断絶となる。」「石丸善太夫，奉行となる。」との記載内容があり，享保年間～宝永７年の間で拝領地及び奉行役が代わったと考えられ，この期に該当する可能性が挙げられる。もう１つは，続く「寛政元年巳酉年５月高松之図」（第108図　1789年）に石丸善太夫の名が消え，これまで奉行屋敷及び詮議場，牢屋等に分割されていたものが「町奉行」に統合され描かれており，表現上のみの可能性もあるが，敷地の整備を行ったことも考えられ，これに伴う可能性も挙げられる。

Ⅴ期（18世紀後半～19世紀初頭　第105図参照）

前段階のSX3001埋没直後に相当する遺構面で，焼土を多量に含む整地層によって廃絶している。出土遺物では18世紀末～19世紀初頭までと考えられ，記録に残る火災では1808年の鶴屋町出火が該当する。当時鶴屋町は奉行屋敷の道を挟んで対面に位置していたことから，当屋敷も被災していたと考えられる。確認された遺構は溝状遺構や土坑状のもので，屋敷の有様を明確に示すものはないが，遺構の空白地となる北部に建物跡等居住域が想定されることや，試掘調査の結果等から調査地南端部に南へと下る浅瀬状の地形をみることができる。これらの土地利用の制約を基に，当該期を描いた「寛政元年巳酉年５月高松之図」（第108図）を参考にすると調査地は敷地の南東部に位置していたものとみられ，これより推測すれば，溝及び地割に斜行する東西方向の溝は，調査地の東・南面でＬ字になる堀端に影響を受けた結果とみられる。

Ⅵ期（19世紀前半　第105図）

Ⅴ期の火災後となる遺構面で，幕末期と考えられる焼土を多量に含む整地層によって廃絶している。出土遺物は19世紀前半を示し，記録に残る1857年の西福寺出火に該当する。西福寺は外堀を挟んで対面に位置していたことから，当屋敷も被災していたと考えられる。調査地北端



第105図　遺構変遷図②(1/400)

部には，L字形の区画溝と想定されるSX1103がある。幅８m程の規模をもつことが推定され，奉行所の堀と考えられる。この南側では本来，東西方向に長い規模をもつものであったと考えられるSB1101があり，区画溝に面することから出入り口の付く長屋建物と推定される。更にこの南には，納屋或は蔵と考えられるSB1102が認められる。南部ではⅤ期で見られるような斜行する溝状遺構が南東隅に集まっており遺構の密集する低地帯となっている。なお，この低地帯と建物までの空間において，耕作痕とみられる溝状遺構が検出されている。

このSX1103を奉行所の区画（次期の区画溝SD1002）とした場合，敷地の北限及び，東の外堀に架かる土橋の位置関係で従来の想定と違いが生じる。大半の絵地図では，土橋は外堀の南東隅より北に折れ曲がった位置にあり，更に土橋の中央線上に屋敷の北限が位置している。現状でも地割に残る外堀や東浜港との位置関係から，比較的容易に現道路上に比定される。しかしSX1103から推定される北限は，その規模を割り引いても比定のラインよりも10m以上南に位置しており，また当該期を描く絵地図でも，「高松市街古図」（第110図　文化年間1808～1818年）や「天保15年高松之図」（第111図　1844年）等，この点についての表現に違いが認められ，「高松市街古図」のように屋敷の北限及び土橋が南に寄るものと，「天保15年高松之図」のように18世紀代のものとあまり変わらずに描かれたものがある。屋敷地と詮議場・牢屋を分ける南北方向の敷地割といった細かな表現によれば，天保15年の絵地図のように北寄りに描いたものに一致する点もあるが，調査結果によれば，江戸末期～明治初期の間については南よりの敷地であった可能性が高いものと考えられる。SX1103は対面に位置していた鶴屋町出火の後に開削されており，類焼防止のため広場を設けたことによるものと推測される。土橋については不明であるが，絵図を見る限り屋敷と同じ変化を辿っており，この機に移築した可能性が考えられる。類焼防止策の事例に「小神野夜話」の中で，高松大火後で中堀に面した表通りを５間南へ広げたとの記載があり，「享保年間高松城下図」にもこれに相当するような表現が認められる。

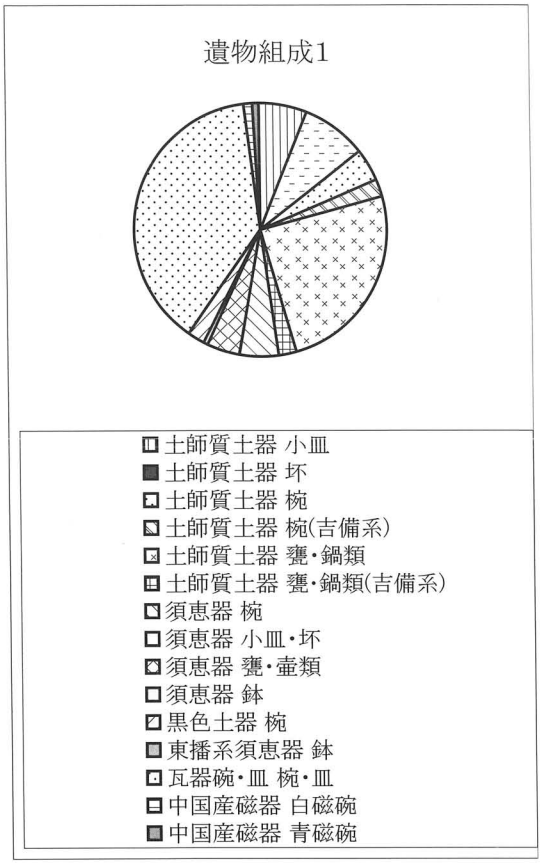
Ⅶ期（19世紀後半　第105図）

区画溝や廃棄土坑の遺物から，19世紀末期に廃絶する遺構面と考えられる。２時期に亘る遺構が存在するが，Ⅵ期の建替と考えられる建物跡や区画溝の位置，南部に遺構の密集した低地が存在する等，前段階と比べても大きな変化は認められない。後出するⅧ期では小学校跡となる明確な痕跡を認めることができるが，当期では基本的には江戸時代の屋敷跡から改変することなく学校として利用されていたものと考えられる。高松市史によれば「鶴屋町小学校は従来の民家を使用したため，三簡易小学校からの転校児童を収容できず，分教場を設けた。」と明治25年（1892）の記載にある。この後，明治30年（1897）において「鶴屋町尋常小学校舎建築に着工した。」とあり，これにより廃絶した遺構面と考えられる。

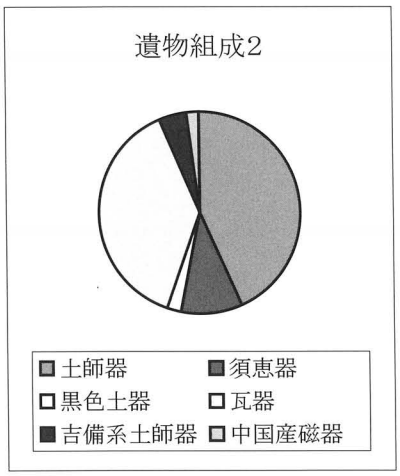
Ⅷ期（19世紀末～20世紀前半　第105図）

尋常小学校舎の東面及び，廊下とみられる付随した廂を認めることができる。また明確なものではないが，基礎の配置関係から一回り規模の小さな校舎も推定され，Ⅶ期から当期の間において建替えを行なった可能性も推定される。大正期の絵地図では，敷地の西側に入り口が表現されたものもあり，当地で見られるのは校舎の裏面側に相当した箇所と考えられる。高松空襲によるとみられる焼土で廃絶することが，調査結果からも確認されている。

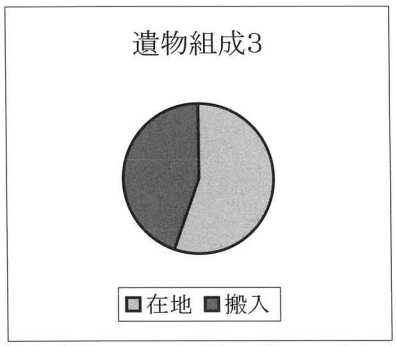
種別	器種	点数	比率
土師質土器	小皿	43	6.2%
	坏	58	8.3%
	椀	28	4.0%
	椀(吉備系)	15	2.1%
	甕・鍋類	172	24.8%
	甕・鍋類(吉備系)	16	2.3%
須恵器	椀	33	4.8%
	小皿・坏	0	0.0%
	甕・壷類	30	4.3%
	鉢	3	0.4%
黒色土器	椀	16	2.3%
東播系須恵器	鉢	0	0.0%
瓦器碗・皿	椀・皿	266	38.4%
中国産磁器	白磁碗	8	1.2%
	青磁碗	5	0.7%
その他		0	0.0%
合計		693	99.8%



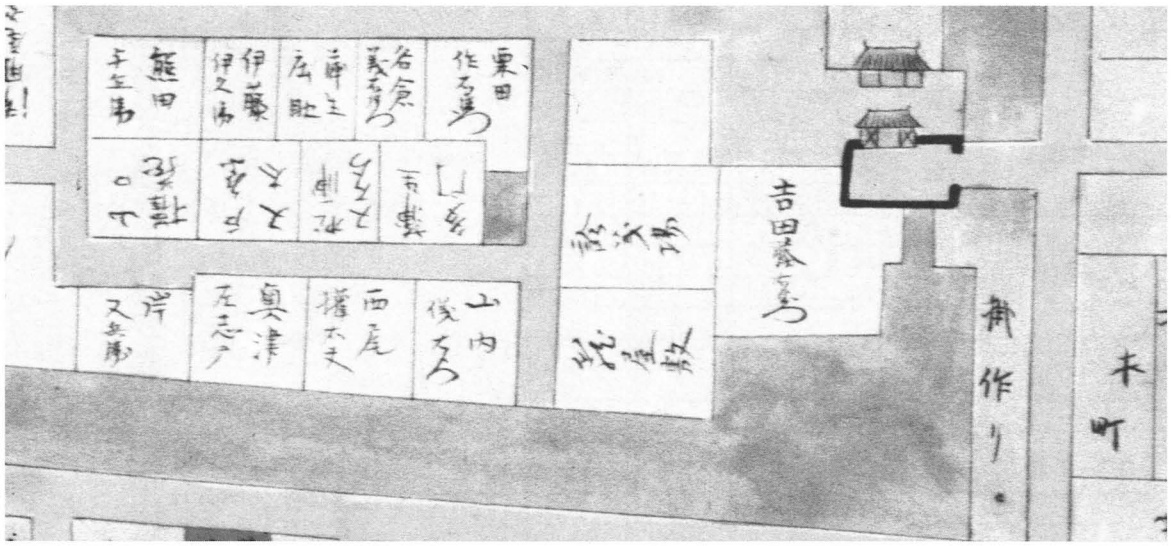
種別	点数	比率
土師器	301	43.4%
須恵器	66	10.0%
黒色土器	16	2.0%
瓦器	266	38.0%
吉備系土師器	31	4.0%
中国産磁器	13	2.0%



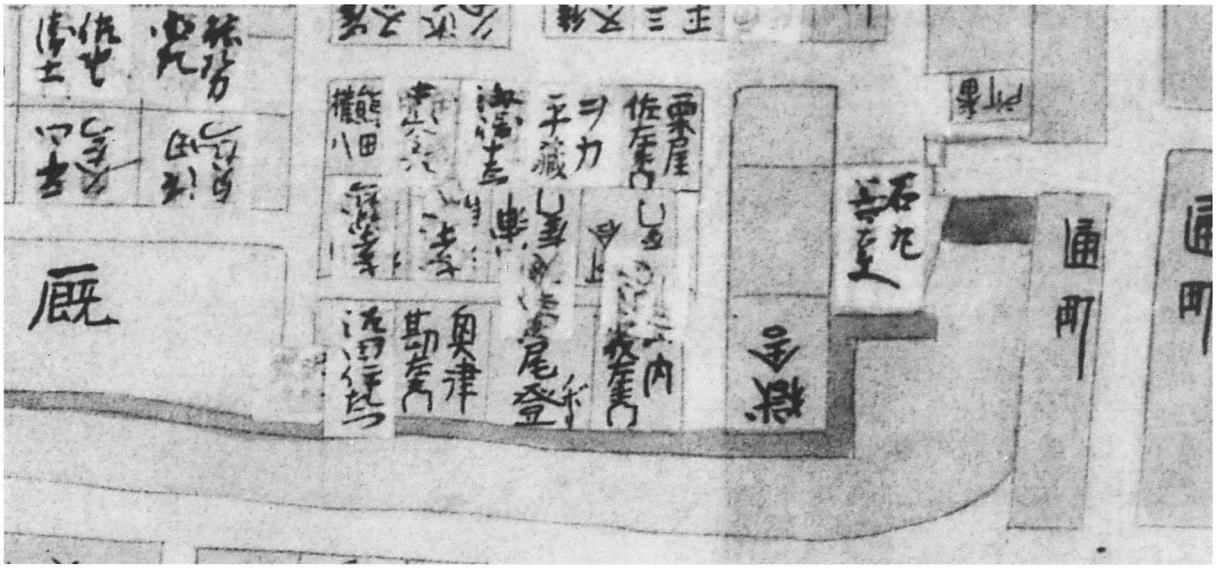
在地・搬入別	点数	比率
在地	383	55%
搬入	310	45%



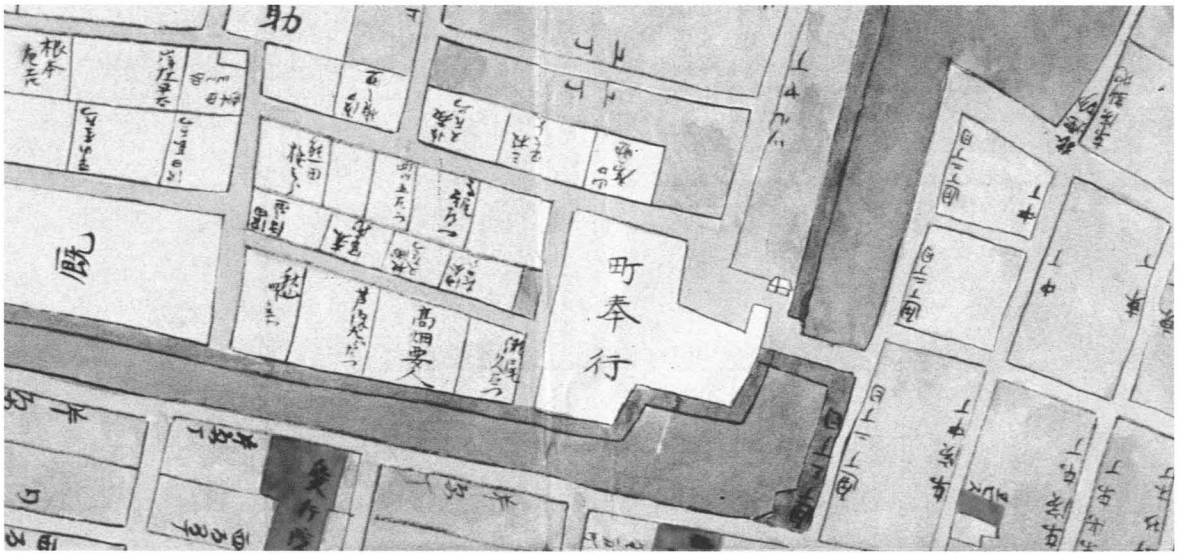
第１表　SR3001出土遺物産地・器種組成



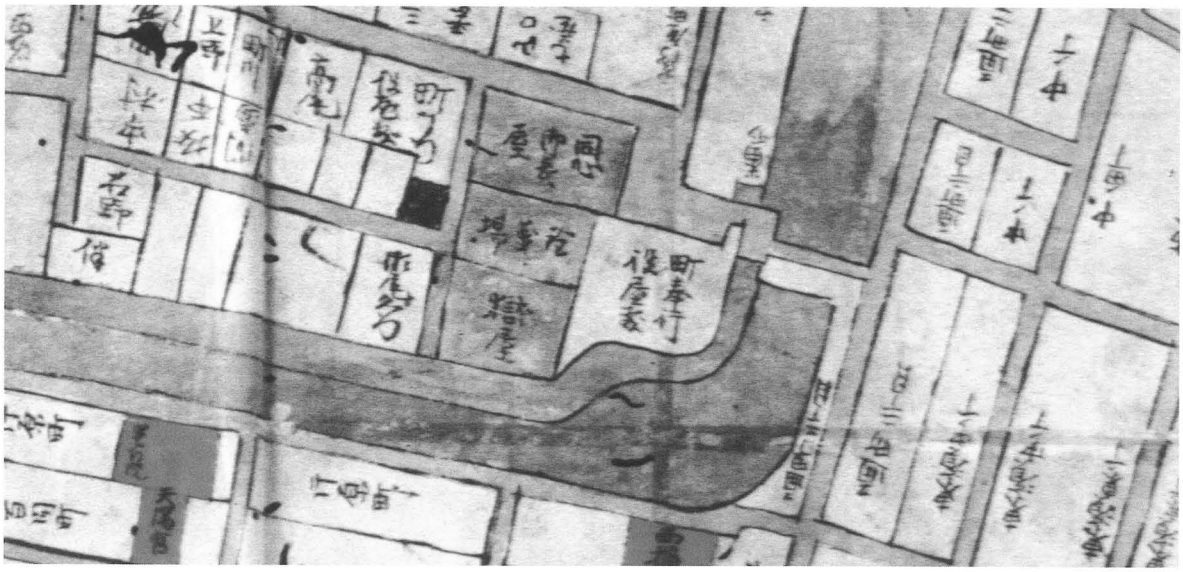
第106図　「高松城下図」　享保年間（調査地付近）



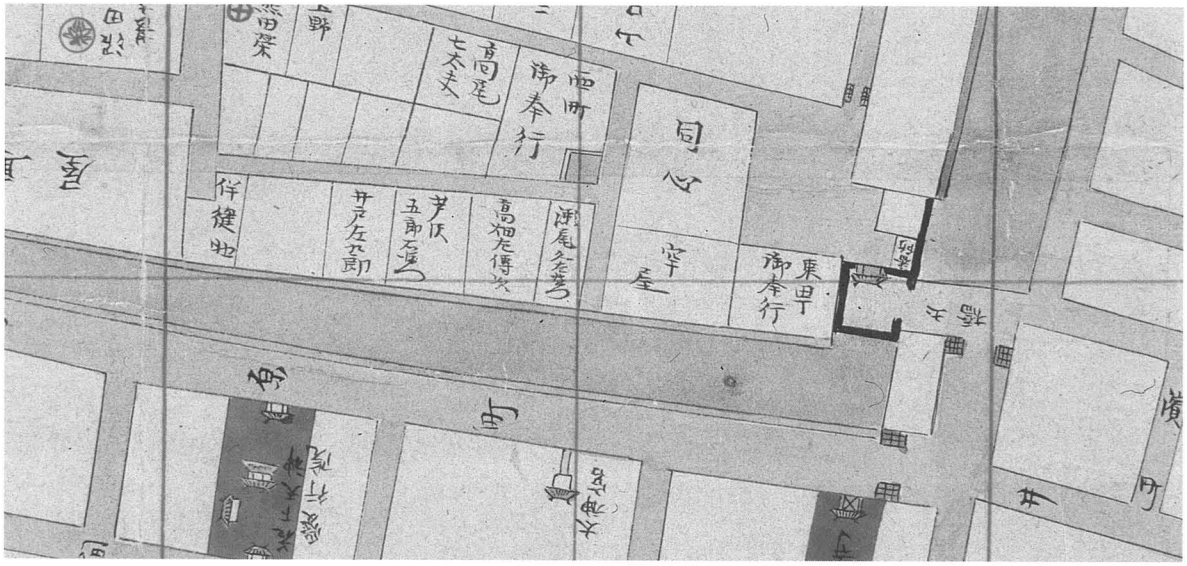
第107図　「讃州高松地図ー国立公文書館所蔵ー」（調査地付近）



第108図　「寛政元年巳酉年５月高松之図ー鎌田共済会郷土博物館所蔵ー」（調査地付近）



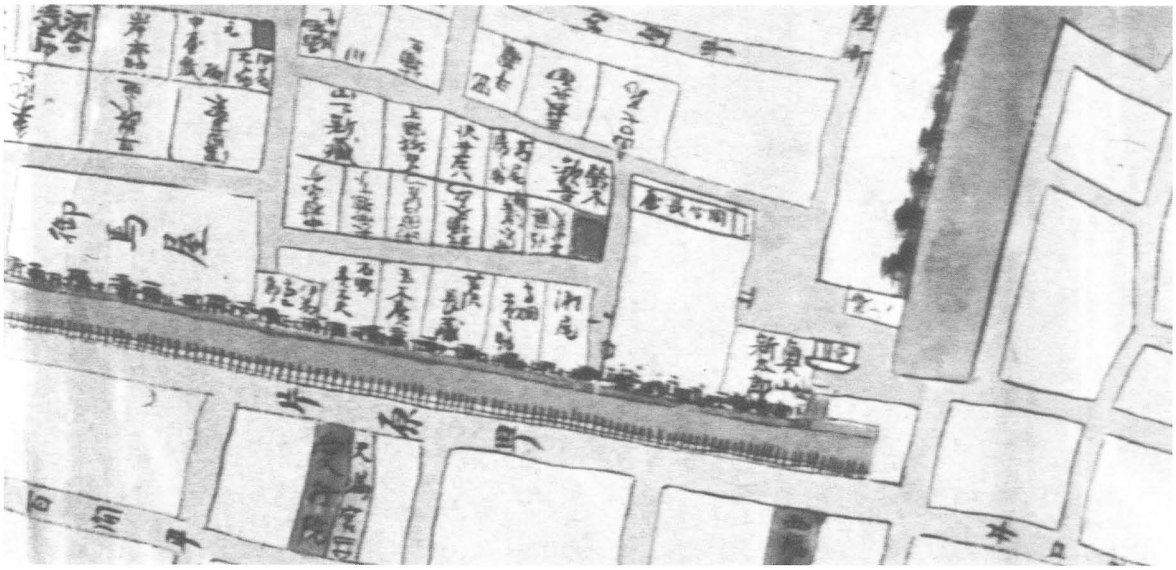
第109図　「高松城下絵図」(調査地付近)



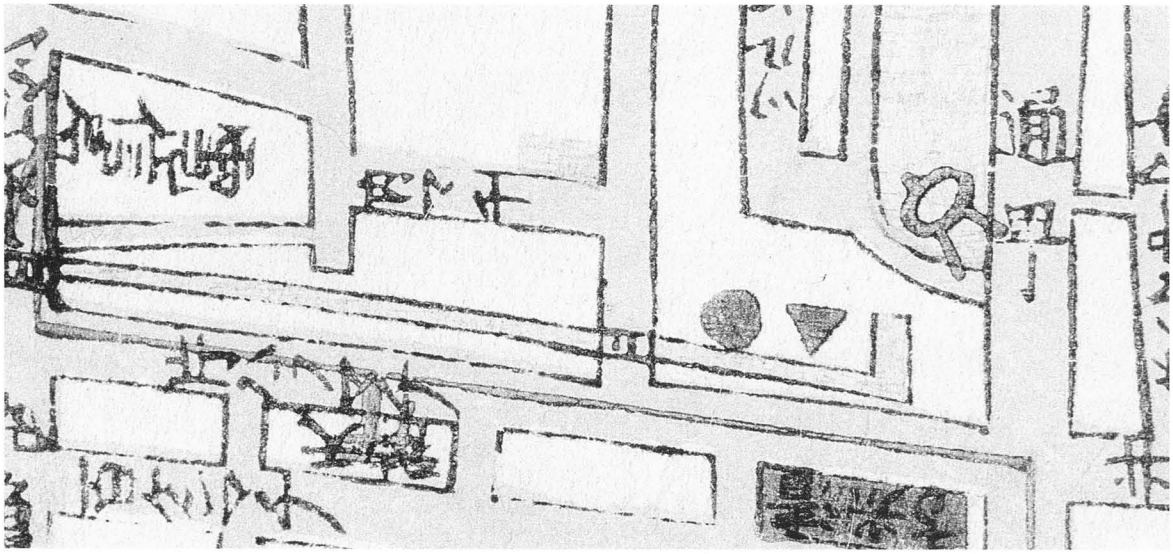
第110図　「高松市街古図」文化年間(調査地付近)

第111図　「天保15年高松之図ー鎌田共済会郷土博物館所蔵ー」(調査地付近)

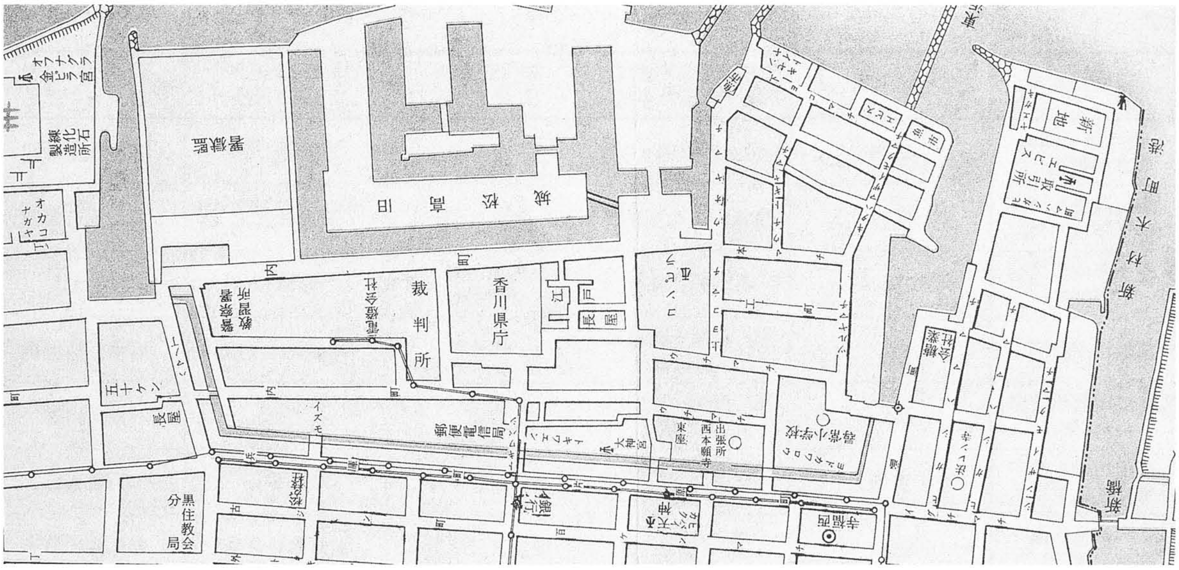
第112図　「東讃高松絵図ー香川県立歴史博物館所蔵ー」（調査地付近）



第113図　「安政４未年高松之図ー鎌田共済会郷土博物館所蔵ー」（調査地付近）



第114図　「讃岐高松市街細目新図」明治15年（調査地付近）



第115図 「高松市街明細全図」明治28年(調査地付近)

第2節　絵地図・文献資料からみた東町奉行所跡(第106～115図,第2・3表参照)

当調査は,「東町奉行所跡」の発掘調査として行ってきた。調査で確認できたものに奉行所の堀跡と推定されるものがあるが,当調査地点が奉行所跡と考えられるのはやはり絵地図や文献資料によるところが大きい。幸いにも調査で確認されている江戸時代後半では,現状でも比較的多くのものを見つけることができ,その絵地図で描かれた表現や文献に記載された人物・役職をもとに当調査地のもつ意味を探ってみたい。

絵地図では,17世紀中頃と時代はやや遡るが,現状で確認できるもので最も詳細に城下を描いた「高松城下図屛風」(表紙)がある。調査地点は城内の南東隅で,南・東側で外堀に接する付近と考えられる。外堀は中堀からみて斜行して東西に伸びており,城内側には土塁状の高まりと松林が描かれているが,城外の堀端に石垣を認めることはできない。前代的なもののように見えるが,「安政4未年高松之図」(第104図)でも表現されているように幕末期に至るまで石垣を築いた堅固なものになることはなかったと考えられる。堀の外,東端には通町と呼ばれた掛け造りの建物が並び,東門に伸びる土橋に至る。土橋には石垣が築かれており,外堀は廻船の浮かぶ東浜へと続いている。少し入り組んだ東門より城内に入ると番所のような建物があり,やや開けた広場になっている。この南側が奉行所に比定される屋敷にあたり,西隣には大きく3つに区画された敷地が南北に並んでいる。屋敷は南北に長く,北側に長屋門や主屋,納屋のような建物が集まっており,南側が大きく開けた空間となっている。この絵図からは,屋敷の主を知ることはできないが,立地からすれば東門の警備や城外の目付のような役を担った人物が想定される。

以上のような環境は,大概では後世の絵図でも変わるものではないが,江戸時代後半のものを並べてみると細部の表現において幾つかの違いが認められる。第2表では,各絵図に描かれた屋敷・西隣の区割や堀から土橋に至る表現について類型化を行った。絵地図が示す年代とやや矛盾するところもあるが,大概すれば堀端の形態が乱れていき,敷地が狭く南寄りとなることや,西隣に並ぶ屋敷のうちで,北の敷地が拡大していく状況がうかがわれる。

堀端の形態については,「高松城下図屛風」から享保年間の「高松城下図」の間で南岸のク

表2

絵地図	屋敷地面積の表現	同心長屋・詮議場・牢屋の表現	堀・東門の位置関係	東町奉行所該当地の記名	西町奉行所該当地の記名
高松城下図 享保年間	広い	空地＋詮議場＋牢屋	クランク	吉田藤右衛門	栗田佐左衛門
讃州高松地図 宝暦7年(1757年)	広い	空地＋空地＋牢屋	クランク	石丸善太夫	栗田佐左衛門
寛政元年高松之図 (1789年)	町奉行に統合	町奉行に統合	クランク (やや湾曲)	町奉行	(空地)
高松城下絵図	広い	同心長屋＋詮議場 ＋牢屋	湾曲	町奉行役屋敷	町奉行御屋敷
天保15年高松之図 (1844年)	広い	同心長屋＋詮議場 ＋牢屋	湾曲	(空地)	鈴木欽吾
高松市街古図 文化年間	狭い	同心長屋(広) ＋牢屋	堀にほぼ平行	東町奉行	西町奉行
東讃高松絵図 (弘化年間)	狭い	同心長屋(広) ＋牢屋	堀にほぼ平行	東町奉行役所	西町奉行番所
安政4年高松之図 (1857年)	狭い	同心長屋(広？)	堀にほぼ平行	奥山新太郎	鈴木欽吾
讃岐高松市街細目新図（明治15年）	役場と併設	役場を示す標識	外堀(南部) 埋め立て後	小学校を示す標識	
高松市街明細全図 (明治28年)	小学校に統合	小学校に統合	外堀(南部) 埋め立て後	尋常小学校	

ランク状の形が消えており，更に後になるとクランクの鋭角さが見られず次第に蛇行気味に湾曲する表現となっており，やはりそれほど恒久的な造りではなかったと考えられる。明治になり堀南部が埋められると，現道にほぼ合致した位置で城内に入る道路が認められる。かつての土橋の位置に相当し，橋が幾度か付け替えられたことになりやや不自然ではあるが，敷地の南面については堀に沿って直線的な表現になっていることから，敷地については既に堀の南端まで広げられていたことが分かる。一方，西隣の敷地については，「高松城下図屏風」頃より3つの区画が存在し，記載名やその区画での占有面積において表現の違いが認められる。初期の段階に考えられるものでは牢屋と詮議場で，やがて同心長屋が加わっている。この後での詳細は不明だが，同心長屋の占める割合が大きくなっているように見え，その役割の増減に関連する可能性も考えられる。

町奉行所に該当する敷地の遍歴では，東町奉行所及びその西にある西町奉行所について取り上げた。（第2・3表）東町奉行所の該当地では，享保年間の「高松城下図」（第106図）に奉行であった吉田藤右衛門の名が見られるが，上述のように改易断絶となり，以後「讃州高松地図」（第107図）には奉行であった石丸善太夫に代わっている。以後は拝領者名ではなく，町奉行の役名が記されるものが多いが，「安政4年高松之図」（第113図）では奥村新太郎の名が認められる。奥村新太郎は，先代と考えられる奥村彦蔵の名を文化年間の町奉行役に見ることができ，他の役職ではあるが石丸善太夫の名も代々に亘って認められることから，文化年間以前に町奉行の役と拝領地が代わった可能性が推測される。また西町奉行所の該当地では，享保年間の「高松城下図」及び「讃州高松地図」で旗・鎗奉行であった栗田佐左衛門の名があるが，以後途絶え，町奉行の役名や鈴木欽吾の名が認められる。鈴木欽吾が町奉行の役に就いた記載は確認できないが，幕末期の奉行役であった人物となっている。

第3表で示すように，文化年間以後になると町奉行役は2名就いていたことが明確になり，この頃には，西と東の敷地に分かれ交替で執務を行っていたと考えられる。さらに嘉永～慶應

期の分限録からは，町奉行役が絶えず代わっていたこともうかがわれ，絵図において人名ではなく町奉行（所）と記されることが多くなることと関連するものと推測される。このような状況と双方の奉行所の間に位置する同心長屋が拡大していく状況とを考え合わせると，幕末期の町奉行は，かなりの重責で多忙であったと推察される。この後，明治維新を迎えても，その初期まで小学校の隣に役場を認めることができ，町人との関わりが強い場であったこともうかがわれる。

第3表

	記載のある町奉行	東町奉行所比定地拝領者記載事項	西町奉行所比定地拝領者記載事項
高松藩仕由緒録 （文化年間頃まで）	丹羽新左衛門 元祖丹羽内蔵允，徒士よりのちに二百五十石鷹司政所様御守役となる。 その子弥五右衛門，町奉行となる。 その子弥五右衛門。 その子弾右衛門，大番組与頭，明和4年（1767）永の御暇となる。 その子新左衛門，惣領組に召しだされのちに側小姓七十俵四人扶持初め名円蔵後，百俵四人扶持下さる。	吉田弥助 本家吉田藤右衛門，水戸より肥田和泉与力，のちに二百石寺社奉行となる。 その子藤右衛門，奉行となる。 その子藤馬・養子浅見五郎兵衛次男，後改易断絶となる。 石丸庄三郎先祖善太夫慶安元年(1648)召しだされ二百五十石， その子善太夫，奉行となる。 その子善太夫，五十石加増都合三百石の奉行，馬廻頭格となる。 その子庄三郎，物頭となる。	栗田清輔 元祖佐左衛門，下館において百石，彦坂織部与力高松御入部二百石旗奉行となる。 その子佐左衛門，鎗奉行となる。 その子佐左衛門，旗奉行となる。 男子無く元木孫右衛門弟与一郎養子とするが，不縁に付き差し戻す。
宝暦十年分限帳	町奉行 250石　石丸善太夫	町奉行 250石　石丸善太夫	
高松藩御令條之内書抜上・下巻	天和元辛酉年(1681年) 篠原四兵衛 吉田藤右衛門 文化七庚牛年(1810年)6月13日 佐野衛士 文化七庚牛年(1810年)10月29日 奥村彦蔵 文化七庚牛年(1810年)12月22日 佐野衛士 文化八辛未年(1811年)2月22日 佐野衛士 文化九壬申年(1812年)2月29日 奥村彦蔵 文化十癸酉年(1813年)4月1日 奥村彦蔵 松井嘉右衛門 文化十癸酉年(1813年)9月20日 佐野衛士 文化十一申戌年(1814年)12月23日 奥村彦蔵 文化十二乙亥年(1815年)3月26日 奥村彦蔵 文化十二乙亥年(1815年)4月9日 奥村彦蔵	町奉行 吉田藤右衛門 町奉行 奥村彦蔵	
讃岐高松藩分限録 嘉永年間 （1848～1854年）	町奉行 250石　佐久間岩之進 250石　榎本善之助	足軽頭 150石　石丸善太夫 大番頭　大番組 200石　奥村蔀	鷹師頭 250石　鈴木欽吾
安政5年 高松藩分限録 （1858年）	町奉行 200石　国分七郎左衛門 →堀□□□□ 200石　後藤倢太良 →山名半六	寄合番頭 150石　石丸善太夫 鎗奉行 200石　奥村新太郎	奉行 250石　鈴木欽吾
慶應2年 高松藩分限帳 （1866年）	町奉行 150石　堀造酒之助 300石　坂入夘吉郎 ＊鎧奉行 米150表14人扶侍 山名半六	留守居番頭 150石　石丸善太夫 中寄合 200石　奥村新太郎	奉行 250石　鈴木欽吾

引用文献・主要参考文献

大川町　鴨居家文書『宝暦十年分限帳』

大橋康二1994『古伊万里の文様』理工学社

尾上　実1983「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』

小野正敏1982「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会

香川県教育委員会1987『高松城東の丸跡発掘調査報告書』

香川県立文書館1998・1999『香川県立文書館資料集１・２　高松藩御令之内書抜上巻・下巻』

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』

北山健一郎1999『香川県立博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

佐賀県立九州陶磁文化館1984『国内出土の肥前陶磁』

佐藤竜馬2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』・2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』・1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第18冊　国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

讃岐史談会『嘉永年間　讃岐高松藩分限録』

『高松藩分限帳　慶應二年』

『安政五年　高松藩分限録』

白神典之1992「堺擂鉢考」『東洋陶磁　第19号』

江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房

東京大学埋蔵文化財調査室編1990『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の世紀医学部付属病院地点』

豊田基1982「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成10　四国』平凡社

乗岡実2002『大坂城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会

藤沢良祐1993『瀬戸市史　陶磁史篇』瀬戸市

藤好史郎1996『高松港頭土地区画整理事業平成７年度埋蔵文化財発掘調査概報　高松城跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

古野徳久ほか2000『平成11年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　高松城跡（西の丸町）・浜の町遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

堀内秀樹1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学校内遺跡調査研究年報Ⅰ　1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室

松本和彦2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳ　(財)香川県埋蔵文化財調査センター

山仲　進『神出　神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』1986　妙見山麓遺跡調査会

山本悦代1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書　第６冊　鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財研究センター

山元素子・松本和彦2004『四国横断自動車同建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第48冊　大山遺跡　中谷遺跡　楠谷遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』

第４表　遺構観察表

各測定値は確認された最大値を示す。

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SP1001	1.13	(0.69)	0.54	0.08	-	楕円形	船底形	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1002	1.11	0.44	(0.22)	0.09	-	(円形)	船底形	-	灰黄色(2.5Y6/2)＋淡黄色(5Y8/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	西部を攪乱坑により壊される。
SP1003	1.11	0.70	0.43	0.09	-	長方形	船底形	-	灰黄色(2.5Y6/2)＋淡黄色(5Y8/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1004	1.09	0.47	0.36	0.05	-	楕円形	-	-	灰黄褐色(10Y6/2)シルト質細砂	-	Ⅶ期	
SP1005	1.10	0.40	0.33	0.08	-	方形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂(炭を含む)	-	Ⅶ期	
SP1006	1.13	0.18	0.18	0.08	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂(炭を含む)	-	Ⅶ期	
SP1007	1.13	0.78	(0.73)	0.19	-	方形	台形	SP1008に切られる	鈍い黄褐色(10YR5/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1008	1.13	1.12	(0.92)	0.20	-	方形	台形	SP1007,1009,SX1002を切る。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細～極細砂	-	Ⅷ期	校舎礎石痕。
SP1009	1.13	(0.93)	0.80	0.10	-	楕円形	船底形	SX1002を切る。SP1008に切られる。	鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂(焼土を含む)	少量。京・信楽系陶器灯明皿,屋島焼,土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1010	1.13	0.52	0.43	0.15	-	円形	箱形	SX1003を切る。	灰黄色(2.5Y6/2)＋淡黄色(5Y8/4)シルト質極細砂	ビニール1袋。肥前系磁器青磁染付他細片,屋島焼,土師質土器甕	Ⅶ期	
SP1011	1.03	0.33	0.27	0.05	-	円形	-	-	鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	-	Ⅶ期	
SP1012	1.09	0.42	0.42	0.07	-	円形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)＋淡黄色(5Y8/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1013	1.16	0.52	0.50	0.07	-	円形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1014	1.16	0.84	0.54	0.06	-	楕円形	-	SX1001を切る。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,瀬戸・美濃系磁器瓶,関西系磁器青磁,施釉陶器行平鍋,陶器甕,瓦質土器細片	Ⅶ期	
SP1015	1.14	1.07	(0.98)	0.12	-	楕円形	-	SP1016を切る。SP1017に切られる。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂	-	Ⅶ期	
SP1016	1.15	(1.04)	(1.00)	0.08	-	(円形)	-	SX1002を切る。SP1015,1017に切られる。	灰黄色(2.5Y6/2)＋黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1017	1.15	(1.46)	(0.52)	0.10	-	(長方形)	-	SP1018,SX1003に切られる。	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質細砂	少量。備前系陶器擂鉢	Ⅶ期	
SP1018	1.17	(0.98)	(0.90)	0.15	-	方形	-	SP1017を切る。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1019	1.13	0.99	0.82	0.11	-	(方形)	-	-	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂(ラミナ状に砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1020	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1021	1.17	0.28	0.28	0.03	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1022	1.13	0.26	0.22	0.07	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	少量。関西系磁器細片,土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1023	1.17	0.32	(0.26)	0.06	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1024	1.15	0.43	0.43	0.06	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片	Ⅶ期	
SP1025	1.17	0.49	0.49	0.12	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1026	1.17	0.24	0.17	0.07	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1027	1.17	0.66	0.53	0.06	-	楕円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1028	1.16	0.34	0.29	0.11	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1029	1.18	0.49	(0.32)	0.09	-	(円形)	-	SP1030を切る。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質細砂	-	Ⅶ期	
SP1030	1.16	0.20	(0.18)	0.04	-	円形	-	SP1029に切られる。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質細砂	-	Ⅶ期	
SP1031	1.12	0.40	0.29	0.05	-	楕円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1032	1.12	0.62	0.40	0.11	-	楕円形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1033	1.15	0.52	0.40	0.06	-	楕円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1034	1.12	0.41	0.34	0.11	-	円形	-	校舎礎石痕に切られる。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1035	1.13	0.44	(0.18)	0.12	-	(円形)	-	-	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細砂(若干粘性有り)	-	Ⅶ期	
SP1036	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1037	1.13	0.42	0.39	0.15	-	円形	-	-	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1038	1.12	0.49	0.32	0.12	-	楕円形	-	-	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1039	1.18	0.26	0.24	0.08	-	円形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1040	1.12	0.93	(0.38)	0.11	-	(円形)	-	-	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器広東碗他細片,京・信楽系陶器碗,土瓶細片,陶器、土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1041	1.14	0.35	0.35	0.13	-	円形	-	-	黄褐色(2.5Y5/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	東,西部を攪乱坑により壊される。
SP1042	1.16	0.44	0.42	0.15	-	円形	-	-	浅黄色(5Y7/3)シルト質極細砂	少量。堺・備前系陶器擂鉢,屋島焼蓋,陶器,土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1043	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1044	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1045	1.09	0.66	0.53	0.04	-	方形	-	-	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1046	1.09	0.39	(0.30)	0.03	-	(円形)	-	-	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1047	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1048	1.15	0.80	0.78	0.25	-	方形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)＋灰白色(2.5Y7/1)シルト質細砂(漆喰を含む)	少量。肥前系磁器細片,陶器,土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1049	1.17	1.06	(0.54)	0.12	-	(方形)	-	SP1050を切る。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1050	1.14	(0.75)	(0.72)	0.08	-	(円形)	-	SP1049,1051に切られる。	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	少量。肥前系陶器刷毛目碗,屋島焼	Ⅶ期	
SP1051	1.15	1.40	(0.81)	0.08	-	(楕円形)	-	SP1050,SX1007を切る。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1052	1.18	0.16	0.14	0.07	-	円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂(締まらない)	-	Ⅶ期	
SP1053	1.11	0.18	0.18	0.14	-	円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂(締まらない)	-	Ⅶ期	
SP1054	1.19	0.14	0.12	0.09	-	円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂(締まらない)	-	Ⅶ期	

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SP1055	1.14	0.60	0.43	0.13	-	楕円形	-	SX1007上面検出。	褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1056	1.15	0.74	0.64	0.10	-	楕円形	-	SX1007上面検出。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,陶器, 土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1057	1.15	0.86	0.84	0.12	-	円形	-	SX1007上面検出。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1058	1.14	0.35	0.31	0.13	-	円形	-	-	鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1059	1.14	0.24	0.23	0.19	-	円形	-	-	淡黄色(2.5Y8/3)シルト質極細砂(締まらない)	-	Ⅶ期	
SP1060	1.14	0.21	0.17	0.15	-	円形	-	-	鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1061	1.14	0.70	0.67	0.12	-	楕円形	-	SP1092を切る。	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1062	1.14	0.87	0.65	0.09	-	隅丸方形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1063	1.15	0.90	0.88	0.28	-	円形	-	-	褐色(10YR7/4)シルト質極細砂(レンガ塊を含み締まる)	-	Ⅶ期	
SP1064	1.13	0.20	0.18	-	-	円形	-	SK1003を切る。	-	-	Ⅶ期	
SP1065	1.13	1.37	0.97	0.10	-	不整形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1066	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1067	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1068	1.15	0.63	0.56	0.10	-	隅丸方形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1069	1.13	0.96	0.92	0.11	-	円形	-	SD1005,1006を切る。校舎礎石痕に切られる。	灰黄褐色(10YR4/2)+褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,京・信楽系陶器錆絵染付,色絵碗,灯明皿,土師質土器細片	Ⅶ期	
SP1070	1.16	0.53	0.43	0.18	-	円形	-	SD1004上面検出。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,土師質土器焜炉類	Ⅶ期	
SP1071	1.13	1.52	(1.00)	0.29	-	(円形)	-	SK1011に切られる。	-	コンテナ1箱分。肥前系磁器端反碗他細片,瀬戸・美濃陶器細片,京・信楽系陶器錆絵染付碗他細片,屋島焼,施釉・軟質施釉陶器細片,土師質土器焙烙,大甕等	Ⅶ期	底面に柱穴有り
SP1072	1.14	0.70	0.60	0.18	-	円形	-	SD1005上面検出。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器青磁染付,小広東碗,瀬戸・美濃系陶器練鉢,京・信楽系陶器碗,土師質土器片	Ⅶ期	
SP1073	1.14	0.30	0.29	0.05	-	円形	-	SX1006上面検出。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1074	1.19	0.32	0.30	0.10	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	少量。土師質土器鉢	Ⅶ期	
SP1075	1.17	0.34	0.32	0.05	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1076	1.18	0.47	0.43	0.05	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1077	1.21	0.66	0.62	0.06	-	円形	-	SP1078を切る。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1078	1.21	0.61	(0.50)	0.06	-	円形	-	SP1077に切られる。	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細砂(灰白色細砂を含む)	-	Ⅶ期	
SP1079	1.22	0.42	0.38	0.15	-	円形	-	SX1011上面検出。	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂	コンテナ1箱分。備前系陶器甕(便槽・肥甕)	Ⅶ期	埋甕
SP1080	1.22	0.64	0.48	0.10	-	楕円形	-	SX1011を切る。	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂	コンテナ1箱分。備前系陶器甕(便槽・肥甕)	Ⅶ期	埋甕
SP1081	1.22	0.81	0.63	0.10	-	楕円形	-	校舎礎石痕に切られる。	淡黄色(2.5Y8/3)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1082	1.22	0.52	0.28	0.13	-	楕円形	-	-	淡黄色(2.5Y8/3)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	-	Ⅶ期	
SP1083	1.19	0.59	(0.45)	0.14	-	(楕円形)	-	校舎礎石痕に切られる。	上位:灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂,下位:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂(粘性有り)	-	Ⅶ期	
SP1084	1.18	0.39	0.28	0.13	-	楕円形	-	SX1006上面検出。	鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅶ期	
SP1085	1.17	0.19	0.18	0.07	-	円形	-	-	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1086	1.22	0.65	(0.49)	0.14	-	隅丸方形	-	SX1009を切る。SP1087に切られる。	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1087	1.22	0.84	0.59	0.14	-	長方形	-	SP1086を切る。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	根石(礎石?)有り
SP1088	1.18	(0.81)	0.62	0.11	-	楕円形	-	校舎礎石痕に切られる。	黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅶ期	
SP1089	1.12	0.50	0.45	0.20	-	円形	-	SP1092,SK1009を切る。	灰オリーブ色(5Y6/2)+灰白色(2.5Y8/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SP1090	1.16	0.70	0.69	-	-	円形	-	SK1018を切る。	-	-	Ⅶ期	
SP1091	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1092	1.13	(0.92)	(0.60)	0.05	-	楕円形	-	SP1061,1089に切られる。	-	ビニール1袋分。肥前系磁器白磁皿他細片,(備前系?)徳利	Ⅶ期	SK1009,SX1007との切り合い不明瞭
SK1001	1.13	1.38	1.18	0.12	-	楕円形	船底形	-	灰黄色(2.5Y6/2)+淡黄色(5Y8/4)シルト質極細砂	少量。磁器細片	Ⅶ期	
SK1002	1.13	2.40	(2.12)	1.56	-	円形	箱形	-	-	少量。肥前系磁器青磁鉢,瀬戸・美濃系陶器水甕,京・信楽系陶器端反碗,灯明皿,屋島焼,瑕平焼,土師質土器甕(井戸枠?)軒平瓦	Ⅶ期	井戸跡
SK1003	1.16	1.57	1.16	0.14	-	楕円形	-	SP1064に切られる。	-	-	Ⅶ期	
SK1004	1.12	(1.03)	0.81	0.16	-	(長方形)	-	SX1007上面検出。	灰白色(5Y7/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	上面に礎石有り
SK1005	1.12	(1.18)	(1.18)	0.17	-	(楕円形)	船底形	-	-	-	Ⅶ期	東半部を攪乱坑により壊される。
SK1006	1.27	(2.70)	(2.23)	0.33	-	不整形	船底形	SX1007を切る。	-	コンテナ6箱分。肥前系陶器刷毛目碗,肥前系磁器端反碗,蓋,皿(コバルト型紙刷),小坏,瓶,青磁鉢,瀬戸・美濃系陶器練鉢,瀬戸・美濃系磁器端反碗蓋,反り皿,鶴首,関西系磁器クロム青磁,白磁皿,小坏,銅版転写の皿,急須,京・信楽系陶器端反碗,灯明皿,備前系陶器灯明皿,播鉢,屋島焼土瓶,大谷焼,産地不明陶器(備前系)徳利,急須(印花文),施釉陶器小鉢(イッチン盛り絵),甕,軟質施釉陶器,土師質土器焙烙(型成形),羽釜(瓦質),硯,金属製品皿等	Ⅶ期	SK1007との切り合い不明瞭。同時期に埋没。

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SK1007	1.27	1.08	0.90	0.66	-	(楕円形)	台形	-	-	SK1006を参照	Ⅶ期	SK1006との切り合い不明瞭。同時期に埋没。南部を撹乱坑により壊される。
SK1008	-	-	-	-		-		-	-	-	-	記録無(欠番)
SK1009	1.12	2.94	2.10	0.31	-	不整形	船底形	SP1089,校舎礎石痕に切られる。	上位:黄灰色(2.5Y6/1)～灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質極細砂,下位:黄灰色(2.5Y4/1)シルト質極細砂(粘性有り)	小量。肥前系磁器細片,瀬戸・美濃系陶器刷毛目,腰錆碗,屋島焼,土師質土器細片	Ⅶ期	SP1092との切り合い不明瞭。
SK1010	1.17	0.70	(0.60)	(0.50)	-	(円形)	-	校舎礎石痕に切られる。	-	甕底部		埋甕
SK1011	1.08	3.24	3.16	0.28	-	円形	船底形	SP1071,SK1012を切る。校舎礎石痕に切られる。	上位:褐灰色(10YR4/1)～黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂,下位:灰黄色(2.5Y6/2)～灰色(5Y4/1)シルト質極細砂(粘性有り)	瓦片	Ⅶ期	埋甕。北部を撹乱坑により壊される。
SK1012	1.13	1.83	(0.48)	0.10	-	(楕円形)	-	SK1011に切られる。	-	-	Ⅶ期	
SK1013	1.13	0.98	(0.88)	0.19	-	(楕円形)	-	校舎礎石痕に切られる。	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SK1014	1.17	(1.13)	(0.96)	0.09	-	(長方形)	-	SD1007を切る。	-	-	Ⅶ期	
SK1015	1.19	(1.34)	(1.12)	0.14	-	(方形)	-	SD1007を切る。	-	-	Ⅶ期	
SK1016	1.23	1.50	1.36	0.17	-	方形	-	SX1009を切る。	灰色(5Y5/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片	Ⅶ期	
SK1017	1.15	(1.56)	(0.66)	0.08	-	(円形)	-	校舎礎石痕に切られる。	-	-	Ⅶ期	
SK1018	1.18	2.30	1.06	0.12	-	長方形	-	SP1090に切られる。	-	少量。肥前系磁器皿,備前系陶器擂鉢	Ⅶ期	底面に石列有り。
SD1001	-	(4.03)	0.86	-	-	直線	-	SD1002を切る。	-	-	Ⅷ期	校舎基礎
SD1002	1.14	(11.60)	3.04	1.05	N-103°-E	直線	V字形	SD1001,SX1001 に 切られる。		本文，第90～93図参照	Ⅶ期	区画溝
SD1003	1.14	4.10	0.35	0.06	N-99°-E	直線	台形	校舎礎石痕に切られる。	灰黄色(2.5Y7/2)シルト質極細砂	少量。備前系陶器灯明皿	Ⅶ期	SB1102-3を構成
SD1004	1.16	(3.48)	0.80	0.12	N-98°-E	直線	-	校舎礎石痕に切られる。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	少量。瀬戸・美濃系陶器刷毛目碗,水甕,備前系陶器灯明皿	Ⅶ期	
SD1005	1.16	(3.10)	0.74	0.17	N-4°-E	直線	-	SP1072に切られる。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。京・信楽系陶器丸碗,土師質土器焙烙	Ⅶ期	SD1006との切り合い不明瞭。
SD1006	1.17	-	0.82	0.21	N-10°-E	L字形	-	校舎礎石痕に切られる。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。備前系陶器灯明皿,磁器細片	Ⅶ期	SD1005との切り合い不明瞭。
SD1007	1.19	(4.35)	(1.52)	0.20	-	やや蛇行	-	SD1008を切る。SK1014,1015,校舎礎石痕に切られる。	灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細砂(灰白色砂を含む)	-	Ⅶ期	
SD1008	1.20	(4.12)	(0.65)	0.07	-	直線	-	SD1007,校舎礎石痕に切られる。	灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	北部を撹乱坑により壊される。
SD1009	1.23	3.86	0.28	0.13	N-10°-E	やや蛇行	-	SX1007,1009,1010を切る。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅶ期	
SX1001	1.11	(1.83)	(1.68)	0.11	-	(長方形)	-	SD1002を切る。	-	少量。肥前系磁器細片,陶器,軒丸瓦細片	Ⅶ期	
SX1002	1.19	3.08	1.52	0.10	-	不整形	-	SP1009,1010,1016，校舎礎石痕に切られる。	-	少量。肥前系磁器細片,瀬戸・美濃系陶器刷毛目,腰錆碗,瀬戸・美濃系磁器瓶,京・信楽系陶器碗,甕,鉢,施釉陶器甕,土師質土器細片	Ⅶ期	撹乱坑により分断される。
SX1003	1.17	(6.14)	(3.32)	0.17	-	不整形	船底形	SX1002を切る。SP1010に切られる。	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細砂(焼土，瓦，土器を多量に含む)	コンテナ12箱分。肥前系陶器刷毛目碗,肥前系磁器端反碗,撥高台,小広東,広東碗,コバルト型紙刷,蛇ノ目凹形高台(高)の鉢,青磁染付鉢,色絵鉢,段重,瀬戸・美濃系陶器練鉢,水甕,瀬戸・美濃系磁器碗(イッチン盛り絵)角小皿(陽刻+瑠璃釉),小坏,瓶,仏飯器(瑠璃釉),京・信楽系陶器端反碗,丸碗,平碗,灯明皿,甕,土瓶,関西系磁器青磁染付小坏,備前系陶器擂鉢,灯明皿,鉢,蓋,大甕,徳利,屋島焼土瓶,源内焼,大谷焼,施釉陶器皿(イッチン盛り絵),香炉,鉢,甕,蓋,軟質施釉陶器急須,鉢,土師質土器煨炉,甕,火鉢,蓋,焙烙,人形,ママゴトセット,軒丸瓦,軒平瓦,金属製品釘	Ⅶ期	撹乱坑により分断される。SX1004との切り合い不明瞭。
SX1004	1.14	(2.42)	2.12	0.11	-	(方形)	船底形	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(塊状の淡黄色シルトを含む)	少量。京・信楽系陶器土瓶,甕		SX1003との切り合い不明瞭。
SX1005	1.27	(6.00)	(1.93)	0.25	N-13°-E	(方形)	船底形	SK1011,校舎礎石痕に切られる。	第96図参照	コンテナ1/2箱分。肥前系陶器陶胎染付,刷毛目鉢,肥前系磁器青磁染付,碗蓋,紅猪口,瀬戸・美濃系陶器瓶掛,京・信楽系陶器丸碗,端反碗,段重,備前系陶器擂鉢,屋島焼,施釉陶器甕,土師質土器甕		南部で平面不明瞭。上面で竈跡を確認。
SX1006	1.17	-	-	0.09	-	不整形	-	SD1005,1006,1009に切られる。	-	コンテナ2箱分。肥前系陶器陶胎染付(被熱),肥前系磁器コバルト型紙刷,広東碗,紅猪口,角鉢,青磁花生(被熱),瀬戸・美濃系陶器広東,腰錆碗,練鉢,瀬戸・美濃系磁器端反碗,角小皿,小坏,京・信楽系陶器色絵丸碗,端反碗,灯明皿,甕,関西系磁器皿(イッチン盛り絵),備前灯明皿,擂鉢,人形徳利,堺・明石擂鉢,屋島焼土瓶,軟質施釉陶器土瓶,土鍋	Ⅶ期	SX1008との切り合い不明瞭。同時期に埋没。
SX1007	1.14	(4.86)	2.84	0.09	-	不整形	船底形	SP1051,SK1006に切られる。	-	コンテナ1箱分。肥前系陶器刷毛目鉢,肥前系磁器端反碗,皿,鉢,瓶,瀬戸・美濃系磁器碗,小坏,蓋物,瓶，京・信楽系陶器端反碗,小杉碗,丸碗,灯明皿,甕,関西系磁器碗,備前系陶器擂鉢灯明皿,蓋,屋島焼土瓶,施釉陶器甕,土鍋,土師質土器焙烙,煨炉類		
SX1008	1.16	-	-	-	-	不整形		SK1016に切られる。	-	SX1006参照	Ⅶ期	SX1006との切り合い不明瞭。同時期に埋没。

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SX1009	1.22	2.62	1.90	0.05	-	長方形		SP1086,SK1016に切られる。	-	少量。肥前系磁器細片,京・信楽系陶器色絵碗,備前灯明皿,施釉陶器細片	Ⅶ期	
SX1010	1.12	-	-	-	-	不整形	船底形	SX1009,SX1011に切られる。	上位:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂,下位:褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	コンテナ3箱分。肥前系陶器刷毛目碗,鉢,肥前系磁器青磁染付,広東碗,皿,大鉢,紅猪口,紅皿,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,馬の目皿,水甕,瀬戸・美濃系磁器碗,角小皿,小坏、関西系磁器小坏,京・信楽系陶器丸碗,小杉碗,灯明皿,屋島焼,施釉陶器香炉,土瓶,軟質施釉陶器土瓶,土師質土器甕,火鉢	Ⅶ期	SX1013と同時期に埋没。
SX1011	1.22	(2.14)	1.81	0.09	-	不整形	船底形	SX1010を切る。SP1080に切られる。	-	少量。肥前系磁器コバルト型紙刷,瀬戸・美濃系陶器碗,瀬戸・美濃系磁器細片,他陶器細片	Ⅶ期	
SX1012	1.23	(1.96)	(0.70)	0.08	-	(長方形)	-	SD1007を切る。SX1011に切られる。	-	少量。肥前磁器コバルト型紙刷,他陶器細片	Ⅶ期	
SX1013	1.17	(5.70)	(3.00)	0.26	-	不整形	船底形	SK1018,SX1014に切られる。	上位:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂,下位:褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	SX1010参照	Ⅶ期	SX1010と同時期に埋没。
SX1014	1.23	(3.24)	(2.10)	0.19	-	(円形)	-	SX1013を切る。校舎礎石痕に切られる。	-	コンテナ1箱分。肥前系陶器陶胎染付,刷毛目碗,鉢,肥前系磁器端反碗,青磁染付,くらわんか,広東碗,皿,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,練鉢,京・信楽系陶器端反碗,小杉碗,灯明皿,関西系磁器小坏,備前系陶器擂鉢,灯明皿,理兵衛焼(高台内に破風高の印),屋島焼,施釉陶器甕,土鍋,軟質施釉陶器急須,土師質土器甕,瓦片	Ⅶ期	
SP1101	1.15	0.34	0.26	0.47	-	楕円形	-	SD1106を切る。	淡黄色(2.5Y8/4)十灰黄色(2.5Y7/2)シルト質極細砂	少量。陶器細片,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1102	1.04	(0.76)	0.62	0.11	-	(楕円形)	台形	SK1103を切る。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,備前系陶器灯明皿,陶器,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1103	1.05	0.78	0.66	0.11	-	方形	台形	SP1104を切る。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	少量。肥前系磁器青磁染付他細片,屋島焼,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1104	1.07	(0.68)	0.52	0.08	-	不整形	-	SP1103に切られる。	灰白色(7.5Y8/2)十灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質極細砂	少量。陶器,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1105	1.09	1.02	0.77	0.11	-	(長方形)	船底形	SK1105を切る。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	ビニール1袋分。肥前系磁器細片,京・信楽系陶器細片,土師質土器焙烙,炭化材	Ⅵ期	
SP1106	1.08	(1.30)	0.94	0.10	-	方形	船底形	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	少量。陶磁器細片,土師質土器甕,焙烙	Ⅵ期	
SP1107	1.08	0.56	(0.53)	0.08	-	(円形)	-	-	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器鉢,猪口,瀬戸・美濃系磁器端反碗,備前灯明皿,土師質土器細片,金属製品	Ⅵ期	
SP1108	-	-	-	-	-	-	-	-	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器青磁染付,瀬戸・美濃系陶器,備前系陶器瓶,屋島焼	-	記録無(欠番)
SP1109	1.07	0.39	0.32	0.02	-	円形	-	-	褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂(しまり有り)	-	Ⅵ期	
SP1110	1.00	1.00	0.87	-	-	方形	-	SD1109,SX1001を切る。	-	-	Ⅵ期	検出のみ
SP1111	1.09	(0.86)	0.44	0.07	-	楕円形	-	SK1108を切る。SP1112に切られる。	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	少量。肥前系磁器細片,陶器,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1112	1.09	0.43	0.36	0.17	-	楕円形	-	SP1111,SK1108を切る。	灰黄色(2.5Y6/2)十黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系陶器刷毛目鉢,陶磁器細片,土師質土器火鉢,瓦片	Ⅵ期	
SP1113	1.06	0.24	(0.14)	0.07	-	(円形)	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)十黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	
SP1114	1.05	0.50	0.42	0.20	-	円形	-	-	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂(炭を若干含む)	少量。陶器,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1115	1.03	0.32	0.26	0.17	-	円形	-	-	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	
SP1116	1.04	0.20	(0.12)	0.10	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)十黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	
SP1117	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Ⅵ期	記録無(欠番)
SP1118	1.04	0.15	0.13	0.11	-	円形	-	SK1108上面検出	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅵ期	
SP1119	1.05	0.14	0.14	0.11	-	円形	-	SK1108上面検出	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅵ期	
SP1120	1.05	0.20	0.17	0.07	-	楕円形	-	SK1108上面検出	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅵ期	
SP1121	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1122	1.05	0.78	0.72	0.10	-	方形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系陶器刷毛目鉢,屋島焼,瓦質火鉢	Ⅵ期	
SP1123	1.06	0.95	(0.70)	0.20	-	(円形)	-	SX1102を切る。	黄色(2.5Y8/6)シルト	少量。肥前系磁器細片,京・信楽系陶器碗,屋島焼,土師質土器細片	Ⅵ期	
SP1124	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP1125	1.09	1.17	0.69	0.11	-	不整形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片,土師質土器小皿	Ⅵ期	
SP1126	1.07	0.59	0.38	0.11	-	不整形	-	-	柱痕部:黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂,掘り方:浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	
SP1127	1.08	0.22	0.19	0.06	-	円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	
SP1128	1.09	0.30	0.27	0.11	-	楕円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅵ期	
SP1129	1.09	0.21	0.17	0.07	-	円形	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅵ期	杭遺存
SP1130	1.10	0.20	0.18	0.05	-	円形	-	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂(焼土を含む)	少量。肥前系磁器色絵皿,陶器細片	Ⅵ期	
SP1131	1.02	1.00	0.03	0.15	-	(円形)	-	SK1115を切る。	-	-	Ⅵ期	
SP1132	1.07	0.20	0.18	0.07	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	杭遺存
SP1133	1.05	0.22	0.22	0.04	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。屋島焼	Ⅵ期	
SP1134	1.06	0.18	0.17	0.10	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂	-	Ⅵ期	
SP1135	1.08	0.54	(0.30)	0.04	-	(円形)	-	SK1111,SB1101(P-7)に切られる。	黄灰色(2.5Y5/1)シルト質極細砂	-	Ⅵ期	

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SK1101	1.10	1.50	1.05	0.16	-	楕円形	船底形	SD1101を切る。	灰黄褐色(10YR4/2)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	ビニール1袋分。肥前系磁器糸切り細工の皿,青磁染付,端反碗,瀬戸・美濃系陶器長の,腰錆碗,京・信楽系陶器灯明皿,土師質土器細片,瓦片	Ⅵ期	
SK1102	1.08	1.22	0.78	0.13	-	長方形	船底形	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂(Fe沈着)	少量。肥前磁器広東碗他細片,瀬戸・美濃系陶器練鉢,陶器細片	Ⅵ期	
SK1103	1.08	(1.47)	1.09	0.12	-	不整形	-	SP1102に切られる。	-	コンテナ1/2箱分。第69図参照。他,肥前系磁器青磁染付,端反碗,猪口,瀬戸・美濃系陶器広東碗,水甕,京・信楽系陶器碗,屋島焼,施釉陶器土鍋,土師質土器甕,鉄屑	Ⅵ期	
SK1104	1.10	1.47	0.98	0.08	-	長方形	船底形	-	灰白色(7.5Y8/2)+灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質極細砂	少量。備前系陶器灯明皿,陶磁器,土師質土器細片,金属製品(釘?)	Ⅵ期	
SK1105	1.08	(3.47)	2.48	0.08	-	方形	-	SP1105,SD1108,1111に切られる。	-	-	Ⅵ期	
SK1106	1.02	1.74	1.16	0.26	-	-	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(焼土,炭,塊状の淡黄色シルト質細砂を含む)	少量。肥前系磁器碗,小坏,紅猪口,陶器蓋	Ⅵ期	大半を撹乱坑により壊される。
SK1107	1.09	1.27	1.15	0.21	-	方形	船底形	SK1108を切る。	灰色(5Y5/1)シルト質極細砂	少量。陶磁器細片	Ⅵ期	
SK1108	1.10	(3.40)	(3.40)	0.17	-	不整形	船底形	SP1111,SK1107に切られる。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂	少量。肥前系陶磁器細片,瀬戸・美濃系陶器植木鉢,土師質土器細片,金属製品(釘?)	Ⅵ期	
SK1109	1.10	2.33	1.96	0.15	-	不整形	船底形	SK1110を切る。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂	少量。肥前磁器広東碗,京・信楽系陶器灯明皿,備前系陶器灯明皿,屋島焼,土師質土器細片	Ⅵ期	
SK1110	1.10	2.24	1.49	0.40	-	不整形	船底形	SK1110に切られる。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(炭を若干含む)	ビニール1袋分。肥前系陶器溝縁皿,肥前系磁器皿,青磁染付,京・信楽系陶器細片,土師質土器焙烙,鉄釘	Ⅵ期	
SK1111	1.07	2.92	0.79	0.26	-	長方形	船底形	SP1135,SD1110を切る。	黄灰色(2.5Y6/1)十灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(焼土を若干含む)	少量。肥前系磁器端反碗,備前系陶器灯明皿,屋島焼,土師質土器茶釜	Ⅵ期	
SK1112	1.09	1.14	0.80	0.13	-	楕円形	-	-	-	少量。軟質施釉陶器細片	Ⅵ期	
SK1113	1.07	(1.62)	1.12	0.09	-	不整形	船底形	SX1105に切られる。	上位:褐灰色(10YR4/1)シルト質極細砂,下位:黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器青磁染付,皿,油壺,京・信楽系陶器灯明皿,	Ⅵ期	
SK1114	1.09	(2.07)	(1.10)	0.11	-	(長方形)	-	SX1105に切られる。	-	少量。肥前系磁器細片,陶器細片,鉄犀	Ⅵ期	
SK1115	1.08	(1.12)	(0.53)	0.07	-	(楕円形)	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(焼土を含む)	少量。肥前系磁器細片,陶器細片	Ⅵ期	
SK1116	0.99	1.47	1.02	0.09	-	不整形	船底形	-	鈍い黄褐色(10YR5/3)シルト質極細砂(焼土を多く含む)	少量。肥前系磁器細片,陶器細片	Ⅵ期	SB1102-1を構成
SK1117	1.07	1.35	1.16	0.16	-	方形	-	SD1108を切る。	-	少量。軒平瓦	Ⅵ期	SB1102-1を構成
SK1118	1.06	(0.78)	0.67	0.10	-	(楕円形)	-	-	-	少量。肥前系磁器端反碗蓋,黄瀬戸,備前系陶器細片,土師質土器焜炉,屋島焼	Ⅵ期	
SK1119	0.98	1.17	0.94	0.09	-	不整形	船底形	SX1105底面検出。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(多量の焼土,炭を含む)	少量。肥前系磁器広東碗,端反碗,織部向付,屋島焼髪水入れ,施釉陶器鉢,土師質土器細片	Ⅵ期	SB1102-1を構成
SK1120	1.09	1.00	0.75	0.19	-	方形	-	SD1108を切る。	-	少量。肥前系磁器青磁瓶,備前系陶器擂鉢,灯明皿	Ⅶ期	
SD1100	1.19	8.02	1.72	0.21	-	やや蛇行	U字形	-	-	コンテナ1/4箱分。肥前系陶器陶胎染付,二彩手鉢,軟質施釉陶器細片	Ⅵ期	
SD1101	1.14	6.40	1.70	0.25	-	やや蛇行	船底形	SK1101に切られる。	上位:灰黄褐色シルト質極細砂～細砂(瓦礫を含む),下位:鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質極細砂	コンテナ5箱分。第73・74図参照。他,肥前系陶器陶胎染付,刷毛目碗,鉢,肥前系磁器青磁染付,小広東,広東碗,仏飯器,紅皿,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,小杉碗,水甕,瀬戸・美濃系磁器皿,京・信楽系陶器碗,備前系陶器擂鉢,灯明皿,屋島焼,軟質施釉陶器行平鍋,土師質土器火灯,焙烙,竈片,瓦片	Ⅵ期	
SD1102	1.12	1.09	0.17	0.03	N-9°-E	直線	-	-	-	-	Ⅵ期	
SD1103	1.12	3.04	0.18	0.05	N-8°-E	直線	-	-	-	-	Ⅵ期	
SD1104	1.08	2.05	0.30	0.06	N-9°-E	直線	-	-	-	ビニール1袋分。肥前系磁器段重蓋,備前系陶器灯明皿,土師質土器七輪	Ⅵ期	
SD1105	1.09	(3.18)	0.23	0.03	N-9°-E	直線	-	-	-	少量。京・信楽系陶器端反碗,屋島焼	Ⅵ期	
SD1106	1.19	3.40	0.62	0.07	-	やや蛇行	-	-	鈍い黄褐色(10YR5/3)シルト質極細砂(焼土,炭を若干含む)	少量。備前系陶器擂鉢,灯明皿	Ⅵ期	
SD1107	1.09	3.32	0.33	0.06	N-17°-E	直線	-	-	-	少量。第73図参照。他,京・信楽系陶器錆絵染付碗,備前系陶器灯明皿	Ⅵ期	
SD1108	1.09	10.73	0.69	0.11	N-101°-E	直線	-	-	-	コンテナ1/4箱分。肥前系陶器刷毛目鉢,陶胎染付,蛇ノ目凹形高台(高)皿,紅猪口,瀬戸・美濃陶器練鉢,京・信楽系陶器端反碗,備前系陶器擂鉢,土師質土器甕,屋島焼	Ⅵ期	
SD1109	1.06	3.69	0.30	0.09	N-101°-E	直線	-	SP1110に切られる。	-	少量。肥前系磁器細片。京・信楽系陶器甕	Ⅵ期	
SD1110	1.10	8.62	1.40	0.17	-	直線	-	SK1111に切られる。	-	少量。第72図参照。その他,磁器細片,屋島焼土瓶	Ⅵ期	
SD1111	1.16	8.35	6.07	0.23	N-10°-E	L字形	-	SK1105を切る。SK1120に切られる。	-	コンテナ1箱分。肥前系磁器碗,瀬戸・美濃系磁器碗,京・信楽系陶器甕,備前系陶器擂鉢,屋島焼	Ⅶ期	SX1007との切り合い不明瞭。SB1102-3を構成
SX1100	1.16	5.47	(1.72)	0.55	N-100°-E	(長方形)	-	-	-	コンテナ1/4箱分。第86図参照。他,肥前陶器呉器手,刷毛目碗,鉢,肥前系磁器くらわんか,京・信楽系陶器碗	Ⅵ期	
SX1101	1.08	4.37	3.70	0.30	-	不整形	-	SP1110,SD1108,1109に切られる。	-	コンテナ1/2箱分。肥前系陶器陶胎染付,肥前系磁器小広東碗,猪口,瀬戸・美濃系陶器練鉢,水甕,志野,京・信楽系陶器小杉碗,備前系陶器灯明皿,屋島焼,土師質土器焼塩壷(輪積成形)	Ⅵ期	

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SX1102	1.06	5.13	2.63	0.08	N-12°-E	直線	船底形	-	-	コンテナ1/4箱分。第68図参照。他,肥前系陶器刷毛目碗,肥前系磁器青磁染付,小広東碗,瀬戸・美濃系陶器水甕,京・信楽系陶器端反碗,備前系陶器瓶,灯明皿,屋島焼,ミニチュア・ママゴトセット	Ⅵ期	SB1102-1・1102-2を構成
SX1103	1.05	9.95	1.35	1.61	N-102°-E	(L字形或は方形)	(U字形)	-	第75図参照	本文・第76～85図参照		区画溝か
SX1104	1.09	4.30	1.30	0.06	N-102°-E	直線	船底形	-	-	コンテナ1/4箱分。第68図参照。他,肥前系磁器撥高台,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,瀬戸・美濃系磁器碗,京・信楽系陶器端反碗,備前系陶器瓶,軟質施釉陶器行平鍋,木製品杭	Ⅵ期	SB1102-1・1102-2を構成
SX1105	1.06	4.27	2.95	0.17	-	不整形	船底形	SK1114を切る。	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	コンテナ1箱分。他,肥前系陶器刷毛目碗,肥前系磁器小広東,広東碗,瀬戸・美濃系陶器練鉢,京・信楽系陶器端反碗,備前系陶器鉢,土師質土器甕,火鉢,屋島焼,大谷焼	Ⅵ期	
SB1101	1.05	2.90	2.90	-	N-12°-E	-	-	-	第64図参照	第65図参照	Ⅵ期	
SB1102	-	-	-	-	N-12°-E	-	-	-	第66図参照	第68図参照	Ⅵ・Ⅶ期	図上復元,2回の立替(SB1102-1～1102-3)
SP2001	0.99	0.18	0.16	0.09	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2002	0.94	0.35	0.24	0.09	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2003	0.88	0.46	0.30	0.14	-	楕円形	-	-	暗灰黄色(2.5YR5/2)シルト質極細砂	少量。備前系陶器灯明皿,土師質土器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2004	0.91	0.32	0.24	0.14	-	円形	-	-	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂		Ⅴ・Ⅵ期	
SP2005	0.89	0.56	0.34	0.20	-	楕円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系陶器細片,土師質土器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2006	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP2007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	記録無(欠番)
SP2008	0.92	0.25	0.24	0.08	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(焼土を含む)	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2009	0.92	0.64	0.53	0.09	-	方形	-	-	鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質細砂	少量。肥前系磁器細片,瓦片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2010	0.93	0.41	0.28	0.10	-	楕円形	-	-	黄灰色(2.5YR6/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2011	0.93	0.18	0.18	0.23	-	円形	-	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2012	0.92	0.22	0.18	0.04	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2013	0.93	0.34	0.32	0.14	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂(焼土を含む)	少量。肥前系磁器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2014	0.95	0.42	0.36	0.22	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR6/1)シルト質極細砂(焼土,塊状の淡黄色シルトを含む)	少量。土師質土器細片,瓦片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2015	0.92	0.32	0.28	0.20	-	円形	-	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂(焼土,炭を含む)	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2016	0.92	0.27	0.26	0.28	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y7/2)シルト質細砂	少量。肥前系陶器,京・信楽系陶器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2017	0.95	0.28	0.22	0.07	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2018	0.92	0.50	0.28	0.21	-	楕円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。土師質土器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2019	0.94	0.32	0.28	0.06	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂(焼土,炭を若干含む)	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2020	0.95	0.40	0.24	0.14	-	楕円形	-	-	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂(粘性有り)	少量。肥前系陶磁器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2021	0.96	0.48	0.40	0.08	-	円形	-	-	褐灰色(10YR6/1)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2022	0.91	0.22	0.16	0.09	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR6/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	壁面に瓦を立てる
SP2023	0.94	0.29	0.27	0.13	-	円形	-	-	柱痕部:浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂,掘り方:黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2024	0.95	0.24	0.17	0.13	-	楕円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2025	0.94	0.24	0.23	0.19	-	円形	-	-	柱痕部:浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂,掘り方:黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2026	0.95	0.26	0.24	0.12	-	円形	-	-	柱痕部:浅黄色(2.5Y7/3)シルト質極細砂,掘り方:黄灰色(2.5Y6/1)シルト質極細砂	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SK2001	0.93	0.58	0.51	0.11	-	方形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂(焼土,炭を若干含む)	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SK2002	0.95	0.82	0.70	0.08	-	円形	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細砂(焼土,炭を若干含む)	-	Ⅴ・Ⅵ期	
SP2101	0.88	0.50	0.44	0.37	-	円形	-	SX2102底面検出。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂(焼土を含む)	ビニール1袋分。京・信楽陶器小杉碗,備前系陶器甕,土師質土器甕片	Ⅴ期	
SP2102	0.86	0.44	0.42	0.29	-	円形	-	SX2102底面検出。	灰黄褐色(10YR5/2)シルト質極細砂	ビニール1袋分。肥前系陶器刷毛目鉢,京・信楽系陶器碗,備前系陶器擂鉢,土師質土器細片	Ⅴ期	
SP2103	0.79	0.34	0.30	0.22	-	円形	-	SK2103底面検出。	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。土錘,土師質土器細片	Ⅴ期	

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	時期	備考
SP2104	0.83	0.46	0.41	0.26	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。肥前系陶器碗,京・信楽系陶器碗,土師質土器甕片	Ⅴ期	
SP2105	0.83	0.34	0.32	0.20	-	円形	-	SK2103底面検出。	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。京・信楽系陶器細片,土師質土器甕,焙烙	Ⅴ期	
SP2106	0.83	0.30	0.28	0.25	-	円形	-	SK2103底面検出。	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂	-	Ⅴ期	壁面に瓦を立てる
SP2107	0.82	0.34	0.20	0.28	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。肥前系陶器陶胎染付,京・信楽系陶器細片,	Ⅴ期	
SP2108	0.83	0.22	0.20	0.25	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	-	Ⅴ期	
SP2109	0.82	0.14	0.12	0.08	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	-	Ⅴ期	
SP2110	0.88	0.22	0.22	0.14	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。肥前系陶器細片,肥前系磁器青磁染付,備前系陶器灯明皿	Ⅴ期	
SP2111	0.88	0.38	0.28	0.11	-	楕円形	-	-	黄灰色(2.5YR5/1)シルト質極細砂(炭を含む)	少量。京・信楽系陶器細片	Ⅴ期	
SP2112	0.86	0.27	0.21	0.18	-	円形	-	-	黄灰色(2.5YR6/1)十灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ期	
SP2113	0.88	0.32	0.30	0.10	-	円形	-	-	柱痕部:鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂,掘り方:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ期	壁面に瓦を立てる
SP2114	0.89	0.72	0.66	0.13	-	円形	-	-	鈍い褐色(7.5YR6/3)シルト十鈍い黄褐色(10YR6/3)シルト質極細砂(Fe沈着)	少量。肥前系陶器細片,肥前系磁器青磁染付,瀬戸・美濃系陶器細片,京・信楽系陶器甕,土師質土器甕	Ⅴ期	
SP2115	0.90	0.70	0.50	0.07	-	楕円形	-	-	鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質極細砂(塊状の灰白色シルトを含む)	少量。瀬戸・美濃系陶器細片,土師質土器細片	Ⅴ期	
SP2116	0.91	0.94	0.70	0.06	-	長方形	-	SX2105を切る。	灰黄褐色(10YR6/2)十浅黄色(2.5Y7/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器細片	Ⅴ期	
SP2117	0.93	0.42	0.36	0.08	-	円形	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)シルト質極細砂(炭を若干含む)	少量。肥前系陶磁器細片,瀬戸・美濃陶器長の,京・信楽系陶器碗,土錘	Ⅴ期	
SP2118	0.94	0.26	0.20	0.08	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ期	
SP2119	0.92	0.22	0.20	0.08	-	円形	-	-	鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質細砂	-	Ⅴ期	
SP2120	0.99	0.24	0.22	0.08	-	円形	-	-	柱痕部:鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂,掘り方:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。軒丸瓦片	Ⅴ期	壁面に瓦を立てる
SP2121	0.95	0.18	0.14	0.04	-	円形	-	-	鈍い黄橙色(10YR7/3)シルト質細砂	少量。京・信楽系陶器細片	Ⅴ期	
SP2122	0.94	0.44	0.26	0.18	-	楕円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系磁器青磁細片,瓦片	Ⅴ期	
SP2123	0.94	0.26	0.26	0.10	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。肥前系陶器陶胎染付,土師質土器細片	Ⅴ期	
SP2124	0.93	0.24	0.24	0.11	-	円形	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	-	Ⅴ期	
SP2125	0.92	0.38	0.31	0.06	-	円形	-	-	鈍い黄橙色(10YR6/3)シルト質細砂	少量。肥前系磁器細片,土師質土器細片	Ⅴ期	
SP2126	0.93	0.24	0.22	0.09	-	円形	-	-	柱痕部:鈍い黄色(2.5Y6/3)シルト質極細砂,掘り方:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質極細砂	少量。土師質土器片,軒平瓦片	Ⅴ期	壁面に瓦を立てる
SP2127	0.84	0.26	0.22	0.13	-	楕円形	-	-	-	-	Ⅴ期	
SP2128	0.88	0.27	0.26	0.10	-	円形	-	-	-	-	Ⅴ期	楔石有り
SK2101	0.95	3.50	(1.54)	0.21	-	(方形)	船底形	SX2102を切る。	第56図参照	コンテナ1/3箱分。第56図参照。他,肥前系陶器刷毛目鉢,肥前系磁器青磁染付,くらわんか,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,長の,軟質施釉陶器土鍋,土師質土器甕,焙烙,瓦片,動物骨	Ⅴ期	
SK2102	0.95	3.70	3.50	0.57	N-9°-E	方形	段付	SX2103に切られる。	第57図参照	コンテナ1箱分。第58・59図参照。他,絵唐津,志野細片,備前甕,備前系陶器擂鉢,灯明皿,土師質土器擂鉢,鍋(中世),骨	Ⅲ～Ⅴ期	
SK2103	0.94	2.10	1.14	0.16	-	不整形	船底形	-		コンテナ1/4箱分。第56図参照。他,肥前系陶器陶胎染付,肥前系磁器小広東,広東碗,くらわんか,青磁染付,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,水甕,京・信楽系陶器平碗,灯明皿,備前系陶器灯明皿,源内焼,屋島焼,軟質施釉陶器,軒丸瓦片	Ⅴ期	
SK2104	0.86	(2.00)	(1.50)	0.19	-	(不整形)	-	SD2101に切られる。		ビニール1袋分。第60図参照。他,肥前系陶器花生,肥前系磁器蓋付鉢,紅猪口,京・信楽系陶器色絵丸碗,平碗,施釉陶器蓋,土師質土器皿(中世),焙烙	Ⅴ期	
SK2105	0.85	1.88	(0.92)	0.09	-	(円形)	-	-		少量。第60図参照。他,磁器,備前系陶器,瓦質土器細片	Ⅲ～Ⅴ期	
SK2106	0.92	1.16	1.10	0.06	-	不整形	-	-	-	少量。他,肥前陶磁器細片,京信楽系陶器細片,陶器細片	Ⅴ期	
SD2101	0.89	(11.48)	1.30	0.17	N-92°-E	やや蛇行	船底形	SK2104,SX2105を切る。	第60図参照	コンテナ1/4箱分。第61図参照。他,肥前系磁器細片,京・信楽系陶器碗,備前系陶器灯明皿,丸瓦片	Ⅴ期	
SD2102	0.91	(8.40)	1.12	0.16	N-84°-E	直線	船底形	SX2104に切られる。	-	コンテナ1箱分。第62図参照。他,肥前系陶器陶胎染付,肥前系磁器くらわんか,半球碗,瀬戸・美濃系陶器長の,水甕,京・信楽系陶器色絵碗,土鍋,備前系陶器灯明皿,擂鉢	Ⅴ期	
SX2101	0.98	(8.80)	(1.56)	0.26	N-25°-E	-	船底形	SX2102を切る。	上位:灰白色(2.5Y8/2)細砂+鈍い黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂,中位:淡黄色(2.5Y8/3)細砂,下位:灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細砂+灰白色(2.5Y8/2)細砂	コンテナ1/4箱分。肥前系陶器刷毛目鉢,肥前系磁器紅猪口,土師器質土器細片(中世),動物骨	Ⅴ期	
SX2102	0.98	5.62	(4.83)	0.08	-	不整形	船底形	SK2101,SX2101に切られる。	灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト質極細砂 (粘性有り)	コンテナ2箱分。第63図参照。他,肥前系陶器陶胎染付,銅緑皿,肥前系磁器青磁染付,くらわんか,広東碗,紅猪口,京・信楽系陶器丸碗,土鍋,備前系陶器擂鉢,灯明皿,土師質土器甕,火鉢,施釉陶器,屋島焼,瓦片	Ⅴ期	